
サイなあたし達

戸理 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイなあたし達

【Nコード】

N4151R

【作者名】

戸理 葵

【あらすじ】

真琴は面倒な事が大っ嫌いな高校三年生。なのに特殊な能力のせいで、嫌いな面倒事に巻き込まれそう。おまけに面倒な恋愛事にも巻き込まれそう。賑やかな周囲の人達と一緒に、ゆるい生活が一変していくお話です。

This is my life 1

あなたには救う力がある、なんて言われて、
でもそれはあなたの生活には関係の無い事で、
見ないフリをしていれば平穏な人生を送れるとしたら、

あなたはどうしますか？

物ごころがついたばかりの頃は、こんなおかしな能力なんて一つも
無かった。

父は元より普通の人だし、母にも兄にも能力は出なちからかったので、あ
たしも多分普通だろう、とみんな安心していたのだ。

それが初めて出たのは5歳の時。
残念ながらハッキリと覚えている。

どこかで貰って来たヘリウムガス入りの風船が、家の部屋の天井に浮かんでいた。

そこから垂れる紐は、どうやっても手が届かない。

4つ年上のお兄はジャンプをすれば余裕で手が届く。なのにあたしはどうやっても届かない。

悔しくて悔しくて、得意げな顔をするお兄をみると更に悔しさに拍車がかかり、

ムキになって、渾身の力を込めてジャンプをした。

その瞬間の「真琴っ！」と言う、お兄の叫び声だけは覚えている。

そこから先は、家族の語り草。

お兄の言葉を借りれば、あたしの頭は天井に、「刺さった」らしい。次の瞬間、激しい衝突音と共にあたしは落ちた。床からジャンプをしたら、天井に思いつきり頭を打ったのだ。

そして脳震盪を起こしたあたしは、そのまま床に倒れて気を失った。

動転したお兄は庭いじりをしていた母親の元に駆け込み、

「真琴が死んでしまった！」

と泣いたらしい。

もちろん、あたしは今でも嫌になるほど健在よ？

現在でも我が家の居間の天井には、5歳のあたしが頭を「刺した」跡がくつきりと残っている。

分かり易く言えば、天井の一部が思いつきり凹んでいる。

そして父と母は時々、それを眺めながら、

「あの時の真琴はまだ小さくて可愛かった・・・」

と言つて微笑みながら懐かしむんだけど、それってどっかおかしくない？ おかしいよね？

つて、天井に頭を刺したあたしが言うのもなんだけど。

そんな事を思い出しながら今あたしは、学校の門を見上げている。現在、朝の10時。やっぱり門は閉まっているし。んー、どうしようかな。

学校に行く気分がなくなって呑気に一人で朝マックをしていた、なんて知られたら今更だけど、

「・・・お兄に怒られるなあ」

じゃあ、サボるなって話なんだけど。いい加減なのに中途半端に良いコなあたしだからね。あの激烈な兄貴にまた大騒ぎされるのは、正直、

「ウザいもんなあ」

門を見上げたまま溜息をついた。しょうがない、学校に行くか。

正門を後にして角を曲がると、学校の敷地のフェンスが延々と続く。その隣は細い路地を挟んで、神社。つまりここはね、人目につかないの。そして学校フェンスの内側は、うっそうと茂った林みたいな木々が敷地に植えられている。

ここ、私の専用門なんだ。

まずは鞆を、4メートル以上はあるフェンスの向こう側にエイッと投げた。

そして周囲に人がいない事を確かめると、

私は飛んだ。

高い背面跳びをして宙返りをする格好で、フェンスの上に片膝をついて着地する。

スカートがかなり膨らんだけど、人はいないから気にならない。

あの時は色々と家族を大騒ぎさせた、常人に不可能なこの超跳躍。実はあれ以来、あたしの大好きな特技と化しちゃった。最近では2階のベランダくらいなら、ジャンプで簡単に入れちゃうの。

だってね、飛ぶと、気分がすつきりするんだ。

もちろん、人には見られないように注意しているよ？

（だってコーコーサーの女が棒高跳びでもないのに、7、8メートルもジャンプしてたら誰だってヒクでしょ？ いや、棒高跳びでもヒクだろうけど）

なのに、気持ちの良いジャンプに上手くいったとほくそ笑んだ、まさにその時

「え・・・？」

予期せぬ人の声の下からして、ドキっ！！ と心臓が跳ねた。

焦って声の主を捜すとなんと、茂みの中、つまり学校の敷地内に一人の男子生徒が座っており、こちらを見上げて驚愕していた。手には煙草。

ギックーっ！！ 見られたっ？！ 跳んだ所??!! えっヤバイヤバイヤバイっ

お兄に怒られるっっ!!!!

と思った瞬間、あたしはバランス崩した。キャーっ落ちるうっ！

と思ったんだけど。

落ちたらそこは、フェンスの内側の茂みなんかじゃ、なかった。そもそも屋外でも、なかった。

どこかの教室の中。しかも誰かの膝の上。

「……………」

煙草を持った男がビククリ眼まなこでこちらを見ている、って事だけはさつきと一致しているんだけど。

けれども明らかに違うのは、それが高校生の男子生徒ではなく、

あたしのお兄だって事。

つまりあたしはお兄の膝の上に乗っかっていて、しかも多分ここは、彼の大学の教室内で、
あ、お兄が一人で良かった。

じゃなくて、

ヤッベ。本日最大の、危機かも。

「……じめん」

取り合えず、謝っておこう。上目使いで。可愛らしく。うん、無駄だね。

あたし、宮地真琴18歳高校3年生。
棒無しで8メートルのジャンプが出来るという特技とは別に、実はもう一つ、厄介な能力を抱えています。

それは、動揺すると制御不能のテレポーションをしてしまうという、どうしようもない無駄技です。

あたしはお兄の膝の上に乗りながら机との間に落ち込む形で、至近

距離の彼と目が、バツチリ合ってしまった。煙草の灰がポトッと落ちる。

一生懸命、引きつり笑いをしてみた。あ、でもヤバイ。お兄、既にキレてる。

「・・・」

あ、目が据わってきた。煙草を持つ手が震えている。眉間にしわが寄っている。

これは来るっ。来る来る来るっ。

「・・・真琴・・・お前・・・」

来たっ。

ここは謝罪のオンパレードで相手の口を封じてついでに気も削いでみようっ。

「じっごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ」

「・・・いーかげんにしろっっ!!」

計画失敗。がたつと勢いよく立たれたもんだから、私は激しく見事に床に転がったの痛かったの。

「てめーは何してんだよっ！ 今度は何やらかしたんだっ」

「そんな何にも、ただちよっとピョンって」

「何がちよつとだっ！ テレポなんてお前がパニックってる証拠だろ

「何やらかしたんだって聞いてんだー！」

「だから少しジャンプしただけだって。今日のは普通の人でも出来る飛びで」

「バカかこの野郎っフツーじゃねえんだお前はっ！ しかもビクつく度に毎回オレんどこに来んじゃねーよっ！」

頭のこめかみを両方、手でグリグリされて痛い痛い痛い。

やめてっば、腹パンチするぞこの暴力兄貴っ！

あたし達は揉み合いになった。

あたしが初めてテレポをしてしまったのは、ハイジャンプから約2年後。

人前ハイジャンプ禁止令が出ていたのだけれど（特にお兄の拒否反応っぷりは激しかった。目の前であたしが天井に頭突きをした事が、よっぽど強烈だったらしい）、あの気持ちよさが病み付きになったあたしは隠れて、ピョンピョン跳んでいた。木の上とか。滑り台の上とか。

そんなある日、いつもの通り一人庭先でピョンピョンやっていて自宅の屋根の上に乗った所を、ついに母親に目撃された。

すると彼女は、いっつも優しい人なんだけど、その時もすごく優しくニツコリと笑って、それはそれは楽しそうにあたしに言ったの。

「見いーちゃった、見いちゃった。薫に言っちゃおう。お兄ちゃん、怒るだろうなあ」

その時、あたしの頭に浮かんだもの。

それはあたしが跳ぶ度にあのお兄が見せる、あの騒ぎ、あの怒り、あの泣き、そしてあのお説教。

「そういうことをやってるとなつ真琴っ！ そのうち動物園とかに連れていかれて大きな檻に入れられて、みんなの見世物になって、ピョンピョン跳んでとか言われてっ、一日中っ、ピョンピョンしてなきゃいけないんだぞっ」

とか

「悪い科学者とかに連れていかれて、腹ん中切られてっ、どうやってそんな高く跳べるか調べられるんだぞっ」

とか

「そのうちあんまり高く跳べるようになってっ、宇宙に出ちゃったらどうすんだよっ、どうやって帰ってくるつもりなんだっ」

とかね。

とにかく豊かに妄想を膨らますお兄が面倒臭くって、そんなお兄が激怒することだけは目に見えていて、そして目の前の母親は確実に、それをお兄に告げ口しますって笑顔をしていて、

ヤバいっお兄に怒られるっ（そして面倒臭いっ）

って思ったの。

そしたらね。

あたしは消えたらしい。

後から聞いた話だと、母親は

「あら・・・消えちゃったわ」

と驚き（？）驚いてる？（これって）、たまたま仕事が休みだったお祖母ちゃんおばあちゃんが通りかかり、

「ねえお母さん、真琴が消えちゃったわ」

「・・・おや、まあ。ついに」

で、二人でしばらく佇んだんだって。保護者としての責任はどこにいったの？

一方のあたしは気付いたら小学校に来ていた。座り込んでいた。あまりの急激な場面転換についていけないあたしだったけど、何かの上に座り込んでいる事に気づき、ふと下を見たらそれは、

ええ、お兄でした。当時11歳の。

お兄がうつぶせで潰れていて、あたしはそんな彼のほぼ肩の部分に座っていたの。

何だこれはっ

ってあたしが驚いていたら、向こうから女の子がやって来た。

お兄のクラスの可愛い子。

手には可愛いラッピング。

そんな彼女が唾然として立ちすくんでいる。

あの日は、バレンタイン・デー。

「宮地君・・・」

小さく呟く彼女を見て、幼いあたしも気がついた。このお姉ちゃん、お兄に用事が・・・つまりチョコを渡しに来たんだって。

「お兄ちゃん、ねえ、お兄ちゃんってば」

あたしは自分の下で潰れているお兄を揺さぶった。お兄の上に乗ったままで。

「う・・・」

と言って気付いたお兄は顔を上げて、目の前に立っている彼女を見た。

そしたらその彼女は、唾然の表情が恐怖の表情に変わって、後ずさったのね。

何だろう？ って思ったなら、お兄が今度はうつ伏せのまま振り向いてあたしを見上げた。
そしてあたしも、思いつきり驚愕したの。

だっってお兄の顔面は、ハンパないくらいの血だらけだったんだもん。もう、スプラッタ映画並み。多分あたしがお兄の上に落ちた時、鼻を地面に強打したんだろうね、可哀そうに。

「・・・真琴・・・？」

一方のお兄もあたしを見上げて、負けなくらいに驚愕していた。なのに次の瞬間、何かを察知したかのような目つきになった。さすがは宮地家の息子だわ。顔面血だらけだけど。
ガバツと起き上がり、あたしは軽く吹っ飛ばされ、
そんなあたしをガツと掴んで、身を乗り出す様に近くに迫られ、

正直、逃げたかった。色んな意味で。

「お兄ちゃん、大丈夫・・・？」

「真琴こそ大丈夫か？ どうかに体の何か、落つこととしてきてないか？」

「・・・」

「宮地君？」

「うつせえなっ黙ってるっ！」

今思えば多分ね、お兄はお祖母ちゃんに告げられていたんだろうね。異常なハイジャンプをするあたしがいつの日か、テレポーション

をしてしまう事を。

そして多分、騙されてきたんだろうね。その時あたしが、手だけ足だけ顔だけを、どっかに忘れてくるかもしれないよ、って。

お兄は昔から、異常なほどの心配性かつ恐がりで、22歳になる今でもホラー映画が見れない男だから。

あのお祖母ちゃんが、そんなお兄で遊ばない、ワケが無い。

そう言う訳である日、結局お兄は女の子からチョコは貰えず、貰えたのは翌日以降卒業するまでの、クラスの女子全員からのヒンシユクと総スカンだった、というオチ。(小学5年6年とクラス替え無し
の故)

「だってお兄がいつつもあまりにも怖いんだもんつ。だからついお兄の顔が思い浮かんじやって、そしたらここに飛んできちゃうんだよっ!」

揉み合いになりながら、あたしは叫んだ。

分かっています。責任転嫁です。妹の特権です。そして全く通用しま

せん。益々怒ってます。

「いやーかげんにその精神を鍛えやがれっ！ いい歳してコントロー
ルを身につけろっ！ つかまらずは獣並みの跳躍を人前ではセーブし
るって、いつも言ってるだろがっ！！」
「してるんだってばごめんなさい」

その時、教室のドアがガラッと開いた。やった、天の助けっ。

「なあに大声出して。・・・どうしたの、宮地君。その女の子」

大人っぽい綺麗なお姉さんが私を見てキョトン、とする。

お兄は振りかざした拳を止め、私を横目で見下ろすと、
ゆるゆるとその拳を納めて、無然とした表情で言った。

「・・・俺の妹」

「宮地真琴です。いつも兄がお世話になっております。今日は大学
見学に来ました」

あたしは爽やかににっこりと笑うとペコリとお辞儀をした。

「あ、よろしくお願いします。うわー、宮地君、すごい美人な妹さ
んねえ」

そんなあ、照れます。お姉さんだって美人です。

「こいつの顔に騙されるな」

お兄は今度は脳天をグリグリして来た。痛い痛い痛い。

「何なに、何の騒ぎ？」

次に男の人が顔を出してきた。

「宮地君の妹さんだつて」

「うそつ。すげーかわいいじゃんっ」

「え？誰？」

徐々に人がやってくる。今から授業が始まるらしい。お兄が私を睨んで低い声でボソツと言った。

「お前、あと数分遅れていたら、どうなってたかわかってんのか？」

「・・・ほんと、ごめんなさい」

「謝って済む問題じゃない。今日、家に帰ったら覚悟しろ。ばーちやんの説教だ」

げ。つまり家族会議ってことね。・・・面倒臭い。

「とりあえず、学校に行け」

ぐいっと頭を小突かれた。

私はよろめきながら顔をしかめてお兄を見上げた。

「えー、ここから30分はかかるっ」

「自業自得だばかやるっ」

ああもう容赦ないんだよね、あたしの兄貴は。嫌になっちゃう。さぼろっかな。

「さぼると母さんに言っぞ」

鋭いお兄は私の思考を呼んで先回りをする。私はかなり膨れた。

「・・・チクリ魔」

「んだとこの野郎っ」

「ドメスティックバイオレンスだーっ」

あたしはお兄に負けずに応戦しようとした。

するとお兄は私のセーラー服の胸倉をグイっとなぐり顔を寄せ、低い声で聞いてきた。

「見られてないのか？ 大丈夫か？」

「大丈夫・・・だと思う。ほんと、フェンスの上に飛んだだけだし」

4メートルだけど。逆さ飛びだけど。しかもその後消えたけど。黙っておこう。

「お前は本当に」

「おい宮地、激しいな・・・」

あたし達のやり取りを見て、誰かが引いた声を出した。

するとお兄は少しムツとした様に相手の顔を睨み、それから私の腕

を掴み直すとスタスタと歩きだした。

「俺、ちよつとこいつをガッコに送り届ける」

「は？ 行けるよ一人で」

「現に行けてねーだろ今」

引きずられる様に教室を出るあたし。腕が痛いよお。
すると後ろからさっきの人の声が聞こえてきた。

「そしてすっげー過保護だな」

「仕方ないよ、あんなにかわいいんだもん」

いえいえ皆さん、これが可愛い妹に対する仕打ちですか？酷いんですよこの兄貴。喜怒哀楽が激しくて、最近では機嫌が悪いと、罵詈雑言を吐くんですから。

あたしはズルズルと、教室の外に連れ出されていった。

This is my life 1 (後書き)

新連載です。

こんなデタラメな世界を描くのは初めてですので、試行錯誤をしております。ツメが甘くなる事と思います。ごめんなさい。。。

今まで以上に、暇つぶしとして気楽にお読みいただけると嬉しいです。

どうかお付き合い下さいませ。

戸理 葵

This is my life 2

「お前はさ、動揺するとんでもない所に飛ぶ癖、いい加減にどうにかしろよ。少しは訓練してるのか？」

大学の校内を歩きながら、お兄はすごく嫌そうに眉毛を上げて私を横目で見下ろした。

「デート中とかマジ勘弁だろ。ホント死活問題。頼むからコントロールして」

「・・・がんばりまーす・・・」

さすがにあたしもしよぼんとなり、俯いて答えた。

だってテレポって、あたしの意思とは関係なく突然起こってしまうもので、その飛び先は何故かお兄なんだよね。理由は自分でもよくわからない。でも迷惑をかけているって事だけはわかる。

実際、お兄のデートにニアミスしそうになった事もあるし。あ、あの時の彼女とはどうなったんだろう？

気持ちを落ち着けて、行きたい先をイメージして、テレポテーションをコントロールする感覚を身につけなさい、とお祖母ちゃんは言うのだけど、これがなかなか上手くいかないの。

・・・で、そのうち疲れちゃって、つまなくなっちゃって、練習をやめちゃうんだよね。

だってこれっていつかは消える能力らしいし？ 最近は飛ぶ回数も減っているし？（半年に一回くらい）

そりゃ、アメリカンコミックみたいに颯爽と表れて、困っている人
たちを救って去っていく、みたいなヒロインにも憧れるけどさ。無
理じゃん、実際。あたしより救助犬の方が何百万倍も役立つよ。

と、一人でブツブツと言いつつしていると、お兄が少し驚いたよう
に言った。

「あ、あれヒトミじゃねーか？」

顔を上げると、あたしたちの視線の先には久しぶりに見る長身の幼
馴染が歩いてきた。

制服のパンツに両手を突っ込み、ブレザーの前を開けてネクタイは
ラフに結ばれ、長身に合った長い脚で大股に歩くその姿は、相変わ
らず絵になる。

短髪だけどサラサラの髪が風になびいていた。

「おーい、ヒトミー！」

お兄が声をかけると、ヒトミが振り向いた。切れ長の瞳が軽く見開
かれる。

こちらに近づいてきた。

「薫。と、何で真琴？」

そう言ってあたしを見下ろす。

この見目麗しき幼馴染はあたしと同一年で、お兄の大学の付属高校
に通っている。成績優秀で推薦入学もとくに決まっておおり、時々
大学の教授室に出入りしているって話は聞いていたんだけど、

でも今って、まだお昼前だよ？ 自分の授業はどうしたのよ？

てハイ、人の事は言えません。ごめんなさい。

「ヒトミ、悪いんだけど、真琴を学校まで連れて行ってくんね？」

「何でココにいるんです？ この子」

「……」

「ほら聞かれてんぞ？ 答えてやれよ、真琴」

お兄が意地悪くあたしを見下ろして、肘で突っついてきた。イ、イヤな奴っ。

あたしは冷めた目で見ているヒトミを見上げると、気持ちちっちゃくなって答えた。

「……すみません。また、やっちゃいました」

するとヒトミはあっさり一言。

「懲りないね」

うっ。

コイツはある意味、お兄よりもキツイ性格なのよお。

「……はい」

「どうせまたどっかで跳ねていたところを、誰かに見られたんでしょっ？」

「……はい」

するとお兄が飛び上がった。

「えっ?! お前、見られたのっ? 見られてないっつってただろっ」

「バカじゃないの?」

ヒトミが冷たくあたし達に言い放つ。キッツ。

「それでパニックって、テレポって、薫のどこに来たんだ?」

「・・・はい」

その目、その目やめてえええ。

ヒトミは言葉通りの、綺麗だけどバカにしたような目つきを、あたしからお兄に移すと言った。

「で、なんで自分が送り届けなくちゃいけないんです?」

「ヒトミ、暇だろ? 推薦決まっているんだから、一コマぐらい抜けられるだろっ?」

「薫は何様ですか?」

「頼むよ、俺、必修やべえんだよ。コレ落とすと留年確定なんだ。

頼む、な?」

「別にヒトミがいなくなったって、学校ぐらいちやんと行くよ」

「行かねーよ、お前は。昼近くなって、面倒臭くなって、絶対行かねー。賭けてもいい」

「別にお兄みたいに、落としそんな科目なんて無いもん。いいじゃん、もっ」

「そっという問題じゃねーだろ。ガッコフーもんは行くんだよ」

お兄はあたしに噛み付きかねない勢いで言っ
つたらありゃしない。
保護者つき登校って何なのよっ。

「・・・重度のシスコン兄貴と、学習能力の無い妹か」

あたし達の言い合いを見たヒトミは軽く溜息をつく
と、お兄に右の手の平を差し出した。

「・・・何だよ？」

「いつものヤツ」

「・・・今度は誰のだよ？」

「連絡しますよ。とりあえず二人分で、前から7列目。いい？」

「高えんだよ、クラシックコンサートつづの」

「取るの？取らないの？」

「取りますよっ。後でこいつに請求してやる」

お兄があたしをギツと睨んだ。ウツソ、それこそバツカじゃないの？

「払う訳無いじゃん」

「商談成立。行くよ、真琴」

ヒトミは肩を軽くすくめると踵かかとを返して歩きだした。片手をポツケ
に突っ込み、片手を軽く上げて人差し指をクイクイと動かし、振り
返らずに「早く来い」の合図。

やたらとサマになるけど、あたしは犬かっつーのっ！

そんなあたし達にお兄はすっかり満足した様子で、教室に戻って行く。

あたしは小走りにヒトミの後を追った。

長い脚でスタスタと大股で歩くもんだから、ついて行く方は大変なのよ。

タイミング良く来たバスに当り前の様に、あたしを待たずに乗り込むもんだから、こっちも大慌てで滑り込んだ。ギリギリセーフっ。

いつも通りのあたしを無視したマイペース振りに文句の一つでも言っつてやるうと顔を上げたら、ヒトミと目があつた。

憂いを含んだ綺麗な眼差しで流し眼をし、色っぽくクスリと笑うもんだからドキツとする。

「久し振りだね」

「え？ あ、テレポ？」

「そう。相変わらず、彼のところに飛んで行くんだ？ ブラコンだね」

制服のスラックスに包まれた長い脚を持って余し気味に壁に付けながら、肩を竦めて楽しそうにクスクスと笑う。

そして時々あたしを眺めるその視線は、幼馴染で充分見慣れたハズなのに思わず見とれてしまう程カッコよくて、

ちよつと、そういう表情、やめてよね？ 危ない世界に足を突っ込みそうになるじゃないっ。

「ヒトミはどう、最近？」

「んー、特に面白い事は無いかな？ 親も相変わらず忙しく飛び回ってるし。そっちこそ受験勉強は順調？」

「うん。ばっちりA判定」

「もつと上狙えば？」

「やだよ、面倒臭いもん」

「出た、座右の銘」

呆れた様に言う姿に、あたしは少し唇を突き出して答えた。

「いいじゃん。別に有名大学の病院先生をやりたい訳じゃないもん。やる事なんて、どこでも同じでしょ？」

「欲が無いね。そーゆートコが好きだけど」

苦笑しながらあたしを見下ろす。両手で吊革の上のバーを掴み、ぶら下がる格好。

ていうか、最後の台詞は何？ さらっと言うから。

ヒトミの両親は音楽家で、いつも世界中を飛び回っている。だから一人っ子のヒトミはよく、あたしの家で夕飯を食べていた。家族同然だった。

けれどもいつのまにか、この子はあたしんちに来なくなった。

でもたまにこうやって顔を合わせる時、ヒトミはいつもの笑顔を見せる。

だからあたしは、心配をしない事になっている。

「ヒトミこそ、おじさん達みたいに音楽家になるかと思ってたのに」

吊革に捕まりながらあたしがそう言つと、ヒトミは軽くこっちを睨

んだ。

親指を立てて自分の胸を突つつく。

「知ってるでしょ。音楽が嫌いって事」

「そうだったけ？ ヒトミのピアノ、すごく好きなのにな」

すると再び、憂いを含んだ色っぽい眼差しであたしを覗きこみ、ク
スツと笑った。

「ありがと。真琴がそう言ってくれるだけで充分」

だから幼馴染相手にそんな雰囲気を繰り出すんじゃないっ。そーゆ
ーナチュラルな色気をどこで身に付けたのよっ。

と、あたしが軽く息を詰めて心の中で突っ込んでいると、フツと視
線を反らされた。

何処を見るときもなく、宙を見つめる横顔。

「音楽を愛する為にも、その道には進めないんだ」

その顔は、幼い時によく見せていた表情と同じだった。

我が家において、楽しくて、それでも一人になった時に必ず見せてい
た、あの表情。

音楽はヒトミから、両親と自由を奪っていた。

でも目の前の横顔を見て何故か、切なさよりも懐かしさを感じた。
心が温まる。

だってそれを乗り越えて前を進んでいるヒトミを、あたしは知って
いるもん。

小さい頃から厳しいレッスンを受けてきたヒトミだけど、高校も、大学も、その道を選んでいない。

「ヒトミは昔から、今でも音楽が好きだよ。あなたの歌もピアノも、小さい頃から最高よ?」

あたしはそう言うと、からかいを含んだ眼差しでヒトミの顔を覗き込んだ。

「ただ今は、そんな自分を受け入れられないだけよ」

するとヒトミはニヤツと笑った。

「真琴は何でも知っているんだね」

「そうだよ。だから久し振りにウチにご飯でも食べにおいで?」

「じゃ、ついでに家族会議でも見学に行きますか。ヒサシブリの^み見物で楽しみだなあ」

「・・・あんだ・・・」

そうやって楽しく話を咲かせていると、あつと言う間に学校前についてしまった。チツ。

一気にテンションが下がってバスを降りる。

そんなあたしに構う事無くサツサと前をあるくヒトミは突然、正門手前でピタツと止まった。

あたしは自然と、その背中にぶつかつた。

「てっ……」

顔を上げるとヒトミは片手を上げて、隣の神社に接している学校フエンスを指さしている。

「真琴、あそこの植木近くで落ちそうになつたんでしょ？」

……げ。

「それで薫のところに飛んだんだ？」

そう言つて振り向き、あたしを見てニヤニヤと笑っている。
あたしは、下がつたテンションが地面に穴を開けていくのを感じていた。

何と無様な。この子には今それが……

「……見える？」

「んー、見えるっていうよりも、あの木達が教えてくれる」

おんなじじゃん。見えてんじゃん、それって。

「そしてついでに言うなら、笑われてる」

「……木に？」

「そう。面白かつたらしい」

「……それは良かった」

ふーんだっ。

植物にエンターテイメントを提供出来たなんて、多分一生の思い出になるわよ、あたしだってっ。

てか笑っているのは木じゃなくて、明らかにあんだでしょっ。

拳を口にあてて、片手をお腹にあてて、俯きながら笑いを堪えるんじゃないっ、いっそのこと気持ちよく大声で笑えっ。

って言ったら間違いなく遠慮なく大声で笑われるだろうから、やめておこっ。

この人、面白い事なら何でも大好きだから。

東田ヒトミがあたしの幼馴染であるのには、理由^{わけ}がある。

宮地家も東田家も、「サイ」を定期的に輩出している家なのだ。

この場合の「サイ」とは、あたし達みたいに常人とは少し異なる能力^{ちから}を持つ人間の事。

そしてこの場合の「あたし達」とは、あたしとヒトミ。

ヒトミは、植物と意思疎通(?)らしきものが出来る。植物の気持ち^{ちから}が分かるんだって。なんだ、そりゃ。

それだけなら、そんな人達って結構いそうな気がするんだけど(隣の家のおばあちゃんとか、毎朝お花に話しかけながらお水をあげてるし)、ヒトミにはもう一つ、特技がある。

時々、映像の様なものが見えるらしい。ビジョンが、視覚的に。こちらはあたし同様、ふいに訪れる能力でコントロールは効かないらしいけど、あたしより目立たない能力である事は確実よね、羨ましい。

ちなみにあたしはお祖母ちゃんからの隔世遺伝なのだけれど(お母

さんもお兄もズルイっ)、ヒトミの所はひいお祖母ちゃんのお母さんにまで遡らないとダメならしい。つまりひいお祖母ちゃん以降ヒトミが生まれるまで、東田家はごくまともな人間しかいなかったってコト。それも気の毒だよな、ヒトミが。

「あれ？ 真琴のクラス？」

一通り笑い終えて満足しただろうヒトミが、グラウンドにいる女子集団を見つけた。

「あ、体育だったんだ。やったサボれた、ラッキ」

「・・・かつたるい発言だな、相変わらず」

呆れた様に白い目を向けられた。

「欲が無いのはいいけどさ、いい加減、何か夢中になれるものとか見つけたら？」

「これから、これから」。自分だって学校サボってんじゃん」

「誰のせいだと思ってるんです？」

軽く頭を小突かれた時、クラスの女子が数名、こちらに走ってきた。

「宮ちゃーんっ！ あ、ヒトミくんだーっ！ きゃーっ、彼氏と同
伴登校っ」

「ヒトミくんっ」

ヒトミは今までもちよくちよく、あたしの学校に顔を出していたのよ。

といつてもこの正門までだけど、今日みたいに登校時とか結構よくある下校時とか。

だからあたしの友達とは顔見知りなのよね。

「ねえ、彼氏、学校は？」

でも何度訂正しても、彼氏扱いされるの。面倒臭いから、もうほっとしているけど。

「サボっちゃいました」

「え？ 宮ちゃんの為に？」

「そう言う事に、なるのかな？」

「やーっ、相変わらずラブラブだねーっ」

相変わらず、って何よ？ いつあたし達が、ラブラブしたよ？ そう思つて軽く呆れて、横目でヒトミをうかがつたあたしはギョツとした。

げ、その瞳、企んでるっ。完璧にこの状況を楽しんでいるっ、久しぶりだから面白がつてる、これは来るっ。

「二人して朝からどんなデートをしていたのぉ？」

誰かの黄色い質問に身構える間もなく、ヒトミがあたしの肩に腕をまわしグイッと抱き寄せてきた。

長身を屈めてあたしの顔に頬を寄せ、甘い声で答える。

「それは御想像にお任せします」

途端に上がるキヤーって歓声。ちょっとやり過ぎでしょっあなたはっ！

すると更にヒトミは調子に乗り、甘く煌めく眼差しであたしを覗きこむと

低い声で囁いた。

「じゃね、真琴。サボらず真面目に、授業受けるんだよ？」

そして額にチュツとキス。

一瞬の間をおいて、ギャラリィからは更なる歓声。

・・・このーやーろー。

そして益々調子に乗る奴。

「離れ難いけどね」

そう言っであたしを覗きこむ、間近に迫った切れ長で得意げな眼差しを睨みながら、あたしはドスを効かせて小声で言った。

「あんた・・・あたしで遊ぶの、いい加減やめなさい」

「何で？ タダで送って貰えるとも思ってた？」

ヒトミもクスクスと小声で答えると、少し声をあげて周りにも聞こえる様に言った。

「帰り、迎えに来ようか？」

相変わらずの甘い声。いつまで続けんのよっこの恋人ごっこをっ。と言っ思いを目に込めて、あたしはにっこりと造り笑いをした。

「今日はいいわ」

「そうか、残念。じゃ、また夜に」

ちつとも残念そうに無く肩を竦めると、ヒトミはニコツと笑って軽く手を振った。

「じゃね。みんなもまたね」

そう言つて去つていく後ろ姿は確かにカッコいいけどね。

・・・あんだ、あたしの学校生活をどうしたいのよっ！

「もう、かつこいいっ！ 宮地さんの彼氏はかつこ良すぎるっ！

少女マンガの王子様みたいっ」

「美男美女だよねえ」

「そうだよねえ」

クラスの女子のヒトミファン（あたし公認って事になっている。許可を求められたから・・・）が喜んでいる。

自分達の好きな男が他の女といちゃついでいて、何で喜ぶんだろっ？
これがファン心理？

「・・・ねえ、真琴」

クラスで一番仲のいい唯が近づき、あたしに小声で囁いた。

「ヒトミくんが女の子だって、いつ皆には言うの？」

「面倒臭いから、もう言わない」

「・・・出た、座右の銘・・・」

唯が呆れてあたしを眺めた。

でもだってこれ以上、あの子にあたしの学校生活を掻き回されたくないもの。ヒトミが女の子だ、なんて分かったら、みんなのどんな妄想を掻きたてる事か・・・。

健全よ。あたし達は健全な仲なの。

・・・あの子の中身が健全かどうかまでは、わかんないけどね。

This is my life 3

そんなこんなで運悪くお兄に捕まり（飛び込み？）、幼馴染に遊ばれながら（？）

やっとの思いで（？）真面目に学校に来たあたしは、教室の中で立ちつくした。

だってあたしの席には、男が座っている。

正確には、寝ている。

机の上に突っ伏して、頭から制服のジャケットを被り、身動き一つしない。

「・・・・・・・・」

え？ は？ 席替え？ いやでもこの机、脇にあたしの持ち物ぶら下がってるし。

てか誰この人？ 全然理解出来ないんだけど？ なんてあたしの席で寝ているの？

あたしに用がある人なの？

隣で唯も、口をポカンと開けて驚いて彼を見ている。

あたしは寝ている男を指差し、唯に聞いた。

「唯、知ってる人？」

「知らない。うちのクラス？」

「わかんないよ。顔隠してるんだもん。剥がそ」

「わっ真琴っ」

慌てる唯を無視して、あたしは彼の頭の上に乗っているジャケットを取った。

出てきたのは、線が少し細い、いわゆる美少年の寝顔だった。髪は短髪だけど全体的にゆるくウェーブをかけていて、所々に茶色のメッシュをいれている。

女の子みたいに長い睫毛をしている。

ほーお。いくらうちが校風が自由な進学校とはいえ、男としては中々派手な髪型よね、これって。

最近の流行りなのかな？　かつこいいけど、よく見るヘアスタイルかも。

ところが唯は

「え、かつこいい・・・」

と言って顔を赤くして、絶句してしまった。

へえー、唯ってこういう、いかにもカッコつけてそうなお洒落な男が好きなんだ？　知らなかった。

「知ってる男なの？」

改めてあたしが聞くと、彼女は激しく首を振った。

「知らないよ。見た事ないよ。誰だろう？」

ほほう。見た事ないと？ そんな男が、

「・・・誰でもいいけど、なんで私の席で寝てんのよ」

何だかちよっぴりイラつときて、あたしは口を尖らせた。

だって気持ち悪くない？ いくら顔の良さそうな男とは言え、知らない奴が自分の席で寝ているんだよ？ 上半身を机に覆いかぶせてさ。何よそれ、実は私に惚れてる男だったとか言ったら、なおさらお断りよ気持ちも気色も悪いわよ。机に念でも込められそうよ。

その時、寝ている彼が低い声を上げた。

「んー・・・」

顔をしかめ、ゆっくりと目を開けた。眩しそう。あ、起きた。

ところが彼は顔をわずかに傾け、立っているあたしを机の上から睨み上げると一言放った。

「うるせえな」

・・・何ですって？

沈黙。

「・・・ちよつとあなた」

再び寝の体勢に入ろうとした奴の頭上に、あたしは低い声を落としました。

「人の席で何で寝てるの？」

「ああ？ 空いてたから座ってただよ」

大きめの瞳を不機嫌そうに寄せてクダを巻いて喋るその様子は、ハッキリ言ってヤンキーそのもの。頭メツシユだし。

「空いてないわよ。私の席よ」

「決まってねーだろ、そんなもん」

はあ？

「決まってんのよ、しつかりと」

バカ？ と思わず呟いたあたしの腕を、唯が慌てて引っ張った。机

の上にいる彼は、見た目は美少年でもどうやらかなりアブナイ人種らしい、と気付いたみたい。

彼は片眉をあげてあたしを見上げた。

そして「チツ」と舌打ちをしながら机から体をおこし、椅子の背にもたれかかった。

「はい？」

あり得なくない、その態度？

思わず眉根を寄せて彼を凝視してしまった。

ところが彼はそんなあたしに構うことなくダルそうに立ち上がると、床に置いてあったスポーツバックを掴み歩きだそうとしたの。

あたしの椅子を蹴っ飛ばしてっ！

なっそうは問屋が卸さないわよっ！

「ちょっと待ちなさいよ」

あたしは彼の腕を掴んだ。

振り返った彼が、面倒臭そうにあたしを見下ろした。線が細くて華奢な割には身長がある。あたしより10センチ近くは高いだろう。

てことは180センチ弱？

幼さの残る顔だけど、キリッとした眉の下の綺麗な瞳と整った鼻筋

や顎は、髪を派手にしなくても充分人目を引きそうに見えた。

なのに常識外れたその性格、かなり最悪じゃない？

あたしは瞳に力を込めると、彼の顔を思いつきり睨んで言った。

「何か言う事、あるんじゃないの？」

「あん？」

彼もイラッとした様子であたしを睨む。

あたしは気にせず続けた。

「人の席勝手に占領しておいて、挨拶もせず、舌打ちされる覚えもないんだけど？ 何か言う事、あるんじゃないの？」

「離せよ、ババア」

「・・・はあ？」

しっ、信じらんない信じらんないっ！あり得ないでしょ、何この男っ！

駄目だ、キレた。あたし、完璧にキレた。

あのお兄の妹だから、基本的に沸点低いのよっっ！

あたしは思わず奴の胸倉を掴むと、空いている右手を思いつきり後ろに下げた。

するとそれを察した鋭い唯が抱きつく様にして止めた。

「殴っちゃだめだってばっ！」
ばれたかつ。

「後が大変だよっ。怖いでしょっ！」

「あつたまくんのよっこの男っ！」

「何？ あんた、俺を殴るの？」

彼が、綺麗な顔でせせら笑った。

「スケ番気取りか何か？ バカな女」

「ごめんなさい、おばあちゃんお兄ちゃん。

あたし、穩便に済ませられそうにありません。

あたしは拳に力を入れた。覚悟しやがれっ。

その時、突然この男が眉根を寄せてあたしを見た。

「あれ？ あんた、朝いた奴？」

「はあ？」

「その顔。校舎裏のフェンスに乗ってた奴だろ」

息が、止まった。

時間も、止まったかと思った。

瞬間に思い出した。この髪型、見た事あるはずだ。

あの時、茂みの中で煙草を吸っていた男の子だっ。

うっわ、ヤバいつ、覚えられていたっ！！

「しかもバク宙で」

睫毛の長い大きめの瞳でギロつとあたしを見下ろす。凄味のある表情に、あたしは戦慄してしまった。

・・・マジでヤバい。大変な奴にバレてしまったのかもしれない。

「俺、見たぜ」

鋭い目つきで言葉を続ける。探る様な、追い詰める様な眼差し。あたしは生唾を飲み込んだ。

あの時の彼の、驚愕した顔を思い出した。

今まであたしは、チカラの事を全然深く考えていなかった、何も考えていなかった。

なのにこんな状況になって、こんなに手が震えている。どうしよう。どうしよう！！

目の前の男の子の、容赦無い視線が降り注ぐ。

後悔の様な、死刑宣告を待つかの様な感覚に襲われた。

そして彼は、真剣に、力を込めてあたしに言い放った。

「あの柄。アメリカ国旗のパンツなんて、どんなセンスしてやがんだ？」

・・・はい？

何ですって？

「信じらんねえ感性。うつりそうだから触んなよ」

眉根を寄せて、本気で、真顔で、真正面からあたしに言う。

・・・あんたがあの時、あんなに驚愕していた理由は、そこ？
あんたが今、こんなに真面目に言いたい事は、それ？

ていうか、あたしのパンツを見たっ？

というより、パンツの柄なんて、そんなベタな展開であたしを追い詰めたっ??

・・・こおーのやあーろお・・・!

アメリカ国旗のどこが悪いっ！ 勝負下着にやしてないわよっかわいかったのよっ！

あたしは彼の胸倉を掴んでいる左手を拳そのまま、

ガッ！！

彼の顎下にお見舞いした。

「まことっ！！」

唯が叫ぶのと彼が後ろに倒れるのがほぼ同時。彼の体は隣の机の上に傾き、机と椅子が大きな音を立てて激しくずれた。

「っつてつめーっ！！」

すぐに彼は体勢を立て直した。すさまじい怒りの表情。

「何しやがんだっつこのサル女っ！！」

殴ったのよっバカ男っ！！

と言いつ返そうとして、あたしは思わず怯んでしまった。

うわっ、何？ 怒り狂っている。文字通り、キレている。何だ、この男っ。あ、この場合、先に手を出したのはこのあたしだ？

ちよっぴり、後ずさった。

これは性格のかなりヤバい奴なのかもしれない。だってそもそも、周りの空気を完全に無視して人の席で寝ながらガンを飛ばしている時点で、ネジの切れた奴だと気付けばよかった。

後悔先に立たず？ 後に立たず？ 役に立たず？

何でもいいや、やっちゃったもんは、しょうがない。

教室中が息を飲んでいるのがわかった。そりゃそうでしょう、こんな事って滅多にないもん。みんな、あたしの事ハブらないでね。

「何やってんだ、お前ら」

その時、これ以上ないぐらいのベストタイミングで担任の教師が教室に入ってきた。

思わず、ホッとする。この人の顔を見てホッとするなんて、初めてだと思う。

彼は30歳手前の数学の教師で、それなりにまあ、カッコいい見た目だけどKYの人だ。

「おい、香取。早速問題起こしてんのかー？ しかも相手が宮地だ？ 片付ける、二人とも」

彼はあたし達の戦闘態勢をさほど気にも留めない様子で教壇に立った。さすがKY。ていうかしかもって何？

あたしは担任に真正面から聞いた。かなり膨れて。

「先生、この人、何なんですか？」

「転校生だあ」

担任は手を動かしながらケロツと言う。

それを聞いた、教室中の生徒が呆気にとられた。もちろん、あたしも。

「・・・転校生??」

高校3年生になって? しかもこの進学校に? しかも今、中途半端に5月だよ?

「いるんですか、そんなの」

「いるだろ、目の前に」

事も無げに言う担任に、クラス中がざわめいた。

あたしは呆然とした。すると担任が「早く片付ける」と言うから、とりあえず自分の周りの机やら椅子やらをしぶしぶと整える。

唯が少し不安そうに、それを手伝ってくれた。

「宮地。お前さんこそビックリだろお。重役出勤で偉いなあ。だから転校生に目えつけたのかあ?」

ヤツバ、忘れてた。

「あ・・・いえ・・・今朝はちょっと・・・体調が・・・」

「元気な病人だなあ。血の気が多すぎるから病気になるんじゃない

か？ 血い抜け、血。吸血鬼にでも吸ってもらえ」

・・・何だ、ソレ。

そんなでっかい蚊みたいなのに抜かれるぐらいなら、献血に行くよ。

・・・て、あたしの血、献血していいのかな？

「センサー、マニアックだねえ。次はルーマニアにでも行くの？」

最前列の女子が笑った。

この数学教師は、独身でそこそこ顔が良いのに稼いだお金を殆んど、世界旅行に費やしているとの噂。

この間はエジプトに行ってたんだって。ほら、暴動の起こった所。

「お、いいねえ、マニアだけにルーマニア」

「・・・何か冷えるね、ここ」

下らないオヤジギャグに、優しい女の子達が2、3人笑ってあげている。

すると未だに怒りが頭から消えなさそうな表情の香取、という彼に向かい、担任が手招きをした。

「おい香取。挨拶しろー」

「・・・」

「ほら、こっちに来い」

「・・・」

「これが日本の常識だったの。来い」

むすつとした様にしぶしぶと、彼は教壇に向かった。あたしは少し首をかしげた。

日本の常識？ 何その言い方？

「香取礼れいです」

黒板に書かれた自分の名前を苦々しく見つめながら、香取礼は低い声でボソツと言った。

そのまま、あさつての方向を向いてしまう。あたしは呆れてしまった。

何こいつ。社交性ゼロ？ 礼なんて名前、あんたが最も欠いているものじゃない。

担任はそんな様子を眺め、そして呆れたように促した。

「……よろしく、っていうんだよ」

有無を言わさぬ目つきで、顎を上げて彼に指示をする。

香取礼はイラツと来た様子で、それでもそれ以上その場にいるのがよっぽど嫌だったのか、綺麗な顔を歪ませて一言付け足した。

「……よろしく」

「こいつはイギリスから来たんだ。あつたまいんだぞー。いい男だろ。おい男子、女子を取られんなよ」

わざとらしいくらい明るい声で担任が言った。クラスのみんなはそれを無視して、興味津々で転校生を眺めていた。女の子なんか既に

目がハートマークだよ。

だけどあたしは不機嫌に黙り込んだ。

美形だか帰国子女だか何だか知らないけど、最悪だあいつ。今後一切関わり合いになりたくないわ。

のに。

・・・あ、ダメじゃん、あいつ、あたしのバク宙見たんだった。

どう思ってたんだろ？ 普通、4メートルのフェンスをバク宙で乗っかる人間なんて、いないよね？ テレポも見たんだろっか？

横目でチラッと観察したんだけど、うーん、全然普通のヤンキーに見える。てかもう、ヤンキー以外に見えない。

あたしは溜息をついた。

あーあ。一応、確認しておくか。お祖母ちゃんに報告しておかないとだもんね。嫌だなあ。

今夜は徹底的に怒られるなあ。

そして授業が終わったのランチタイムに、あたしは唯に目配せをして待っててもらつと、香取の席に近づいた。

唯がビビってる。ごめん。

「・・・ちよつと香取」

声をかける前からコイツ、あたしにガン飛ばしてるし。椅子の上で足をエラソーに大きく組んで、両手をポケットに突っ込んで。

「んだよ、サル」

・・・ムカつく。

「自分の煙草は何なのよ？」

「サルよか普通だろ」

「あなたと違ってあたしのは法律違反じゃないわよ」

「サルの法律はないもんな」

席に座ったままギロつとあたしを睨み上げて、ああもうホント、不愉快だったらありやしない。

さっさと会話を終わらせてしまおう。

「・・・あなた、あたしの何を見たの？」

「パンツの柄を詳しく言わせたい訳？俺だつて見たくて見たんじやねーよ、むしろ被害者だろ。おまけに殴られて、慰謝料くれんのかよ？」

・・・目つきといい、行儀といい、台詞といい、タチの悪いヤクザみたい。

イギリスのどんな学校に行ってたんだろ？これでイートン校と

かだったらウケるのに。

「見たのは、それだけ？」

「さつきから何が言いたいんだよ？ パンツに穴でも空いていたとか？ バツカじゃね？」

顔を歪ませて、僅かに笑ったつもりなのかもしれないけど嫌悪感丸出しの、その表情。

「幸いな事に何も見てねーよ。つか、二度と俺の前に顔、見せんな」

無理でしょ、それ。どうやっても。

あんた、あたしより随分後からこのクラスに入ってきたはずだけど、これまた随分態度がビツグよね？

ここまで突き抜けてるとかえって清々しく感じてきた。

「あたしがあの後、何処に行ったか知ってる？」

「はあ？ 何言ってるんだ？ サボリがバレンのビビってるのか。知らねーよ、そんなの」

「・・・本当に？」

「うるせえな。学校抜け出してドコ行ったかなんて、誰が興味持つんだよ、センス最低女に」

・・・学校を抜け出した？

そうか、こいつ、あたしが学校の外へ抜け出したと思ってるんだ。だから、あたしがあの後消えても、何とも思っていないんだ。

・・・よかつたあ、消える瞬間を見られなくて。

・・・じゃあ残るは、バク転の件ね。バク宙でフェンスに乗る女を、どう思っているか。

そこまで考えて、あたしはやめた。

・・・やめよう、こいつ、何も思っていないそう。

バカっぽいもん。

ああ、バカだから自分の最悪な性格も隠せないのね。

見てる分には清々しいけど関わったら悲惨だわね。無視だわ無視。

あたしは心に決めて、その場を去った。

This is my life 4

「真琴はバカですか？」

お夕飯が終わった後、おばあちゃんはソファに座り、いつも通りピョンと背筋を伸ばして綺麗に整った顔であたしを見下ろしていった。いつもはもうちょっと親しみやすいおばあちゃんだけど、もうこういう時は容赦無く恐い。というか限りなく冷たい。

対するあたしはおばあちゃんの真正面の床に、正座をさせられている。

「……ごめんなさい」

「もう大人も同然なのに、どうして未だにきちんと成長できていないかね？」

「……はい」

「もう自分でどうにかしないといけないのに、いつまで周りに迷惑をかけるつもりかね？」

「……ごめんなさい」

あう、逃げ場がない。どんどん追い詰められるよお誰か助けて。

するとそんなあたしの声が聞こえたのか、お母さんが食後のお茶をリビングのガラステーブルに出しながらニコニコと柔らかく言った。

「でもお母さん、真琴もがんばっているのよ？ 練習もするし、受験だってあるし」

「だから出来なくて良い理由にはならないでしょう？ それに私は、

真琴が練習している所は見た事が無いね」

冷たく言い放つおばあちゃんを、お母さんは微笑ましく(?)眺めている。

お母さんはおばあちゃんの実の娘なんだけど、まったく性格を受け継いでいない。

ついでに能力も受け継いでいない。なのに私に来ちゃった、隔世遺伝。

ずるいよね、これって。

「そうか真琴は薫の所に行ったか。久しぶりにやったなあ。薫は何やってたか？ トイレで糞でもしてなかったか？」

お父さんが横から口を挟んだ。さも愉快そう、面白くってしょうがないって顔をしている。というより糞って何よひどすぎる。

お母さんが楽しそうに言った。

「そしたら大変な事になっていたわねえ」

「シヨックでコントロール出来るようになるかもしれないぞ？ だけど一生トラウマにもなるかもな」

「なんだよそれっ俺がなるわ、一生のトラウマにっ」

台所の冷蔵庫を開けながらお兄が叫んだ。ええい、この諸悪の根源、チクリキングめっ！！

お父さんとお母さんが可笑しそうに声をあげて笑った。全くこの人達はいつでもどこでも楽しそうで何がそんなに嬉しいんだか。

「しょうがないわよ、薫くん。あなたがまこちゃんを溺愛しちゃうから、こういうことになったのよ？」

「んな覚えはねえっ」

うーん、確かに幼少のお兄は、必死になってあたしの世話をしてくれたけど。（そしてやや、ウザかったけど）

だって両親は全く危機感の無い人達だし、お祖母ちゃんはとにかくスパルタだし、お兄は人一倍の心配性だったから。

自分でも認めたくないけど、ヒトミにもブラコンの烙印を押されているし。あーあ。

ちなみにおばあちゃんは、私とほぼ同じレベルの能力を10歳前から完璧に制御出来ていたらしい。

「タイミングが悪かったら、あんたは授業真つ最中の大学の教室内にボンッと現れたんだよ。自分の不注意で。そしたらどうやって言い逃れをするつもりだったんだい？」

「・・・素直に、都市伝説になります」

「ざけんな、お前」

いてっ。お兄にはたかれた。

「俺はあと一年は大学に通わなくちゃなんねーのに、お前が勝手に伝説作った後、どうやって校内をうるつきゃいいんだ？」

「後一年なの？二、三年じゃなくて？」

「ばかつつ真琴っ」

「いい加減におしっ！」

うひゃっ。お祖母ちゃんに容赦なく怒られた。

「真琴は、その転校生とやらに、何をどこまで見られたんだい？」

・・・パンツの柄が、アメリカ国旗だ、という所まで見られました。でも脇で可愛く踊っている金髪チアまでは見られていません。

なんて絶対言えないよね、お祖母ちゃんとお兄の前じゃ。嵐このふたりが来る。両親の前でも言えないわ。爆笑が来る。

「バク転してフェンスの上に乗った所を見られました。けど、特に何も言われませんでした」

「嘘だろ？ それ見て何も思わねえ奴なんているのかよ？」

・・・だからパンツの柄が・・・。

「常識外の事が起きたが故に、深く考えない人種もいるんだよ。しばらく様子見だね」

お祖母ちゃんは軽く溜息をついた。

うん、あたしはやっぱり、アメリカ国旗に救われたと思うな。アレが彼の注意を反らしたんだな。

「真琴。あなたはこれから誰か身内以外と訓練をなさい。少し真剣

にしなくてはダメだからね」

おばあちゃんはあたしを睨んで言った。

あたしは再び縮こまって、おずおずと質問した。

「・・・身内以外って？ ヒトミって事？」

「ヒトミもその一人だけだね。実はもう、いくつか知り合いに
あたってはいるんだよ。そろそろ本腰を入れないと、手遅れになる
だろうから」

そこまで言って、やっと出されたお茶に手を出す。

私は心の中でうんざりした。

だってこういう事って、全く全然興味が無いんだもの。何の役にも
立たない能力だし、要は今後、なるべくビクつかない様にして、
変な所にテレポしなきゃいいんでしょ？ 大体今日だって、ほぼ一
年ぶり？ いや、9か月ぶり？ にうっかりしちやっただ事だし、

それに何より、

「・・・だってこれって、ハタチをちょっと超えたらどうせ消える
んでしょ？」

つい、知らず知らずのうちに口を尖がらせて言ってしまった。

あ、ヤバい、真剣味が足りないって怒られるっ

と思って身を縮こませたら、意外な事におばあちゃんはジロツとこ

ちらを睨んだだけで、手にしたお茶をゆっくりと飲んだ。
これは溜めて盛大な小言が来るのかと改めて身構えたら、しばらくして静かな声で、一言だけ言われた。

「お前が喰われなければね」

くわれる？ それはどついうイミ？

私は思わず顔をあげておばあちゃんを見上げちゃったけど、おばあちゃんは威厳ある涼しい顔でお茶をすするだけ。ちよつと。

お兄を見たら缶ビールを片手に、訝しげに少し険しい表情でおばあちゃんを見つめていたので、やっぱりお兄も訳が分からないんだと思う。

お父さんとお母さんは相変わらずほのぼのと楽しそうに、こっちが寒くなるくらい仲良くしていた。

「という事なのよ、ヒトミさん」

その日の夜、あたしとヒトミは携帯で話していた。あ、ヒトミの予言（？）通りだわ。

彼女の楽しそうな声が聞こえてくる。

「へえ。じゃあ、正式に恵美子さんから夕飯でもご招待されるのか

な？」

「かもね。そのうちお祖母ちゃんから連絡が行くかも」

「楽しみだな。でも訓練って、何をどうやるの？」

「知らないよお。だってそもそも、他人が手伝える事でもないですよ？」

「・・・そこまでわかってて、何故こつという事態になる？」

一転、冷たく言い放たれた。

あ、居心地悪い、笑って誤魔化しましょう。

「不思議だよな？」

そう言うと、今度は呆れられた。

「かつたるかつたんだな。つまなくなつてサボってたってトコか」

「その通り！」

「じゃあ私は、単なるお目付け役？ そんなのハッキリ言って、薫一人で充分でしょ？ むしろ薫以上の適任はいないでしょう？」

「その通り！」

「・・・あーあ、わかりましたよ、好きにして。どうせ恵美子さんには敵わないもの」

「その通り！」

「・・・ウチくるかい？」

急に聞こえてくる、甘くて低い声。

「そのと・・・ちょっと、何、その展開？」

「何だ、引つかかないじゃん」

つまんなさそうに彼女が言った。おかしいでしょって。

「ヒトミ、昼間の後始末、どうつけてくれんのよ？」

「何を今更。ほっとけば？」

「そうするけど。と言うより、それしか出来ないけど」

「お疲れさん」

軽く笑っている彼女の声を聞いて、あたしは呆れた。

この子、いつからこんなになっちゃったんだろう？ 少なくとも小学生の頃は普通の女の子だった気がする。・・・いや、普通じゃない、かなりの美少女だった。

ヒトミの学校は女の子でも、制服をスカートでなくパンツに出来る。だから彼女が中学に上がって以来、スカート姿を見た事が無い。

「・・・へんなコ。女子高でもないのに。バレンタインはチョコ、いくつ貰ったの？」

「知らない。数えていない」

「本気なコも結構いるんではよ？」

「さあ？ 本気になられてもこっちも困るね」

「困っちゃえ。ヒトミ自身にも原因があるのよ」

あんたがああの調子で所構わず色気を振りまいていたら、男女問わず、アブナイ道に入る子羊続出よ。

あたしまで道を踏み外したらどうするつもりよ、お願いだから責任だけは取らないで、更に恐ろしい事になる気がするから。

「ふふ。じゃ今度、薫と一緒にウチおいでよ。訓練とやらに付き合
つてあげるよ」

付属の人間は暇だから、こつやつて受験生を気軽に誘う。

ユルイながらも、A判定ながらも、一応毎日勉強はやっているあた
しは、やっぱり色々と面倒臭くなってきた。

訓練とか、受験とか、将来とか、とかとかとか。

「なぜお兄も一緒？」

「私一人じゃ無理。真琴には甘くなるもの」

「じゃ、受験代わって」

「何くれる？」

スーパー頭のいいヒトミなら、きっとあたしの志望大も難なく合格
しちゃうだろう。

でもそれは流石に頼めない、と思うのは、

受験は真面目に頑張つての実力勝負だからとか、替え玉受験なんて
成功出来ないわよとかいう理由じゃなくて、

ヒトミにでっかい借りを作ったら、後が滅茶苦茶恐ろしい。ただ、
それだけ。

「……つづん、やつぱ自分でやる」

「そつ？」

彼女は最後までクスクスと笑っていた。

お祖母ちゃんのお説教以来、あたしはなるべく大人しくしていた。だってなんだか面倒臭い事になりそうなんだもの。

学校も真面目に言っている。授業も、割と真面目に聞いている。テレビの練習なんかより受験勉強の方が、よっぽど将来の役に立ちそうな気がする、を立て前に練習から逃げていた。背に腹は代えられないってヤツ？

第一印象が最悪の香取も、クラスにすんなりと溶け込んでいった。香取の周りには男子が数人、集まるようになっていて。休み時間には彼の明るい声が響く様になった。

「あははっウソだろっ。マジヤバくね？ それって」

・・・けど、うるさいんだけど。

確かにあいつは、頭が相当いいんだと思う。英語は元より、数学も物理も転校早々、学年5番以内を取っていた。

でもね、あんたと違って頭の中身が常識的なあたしは、こうやって昼休みも英単語を覚えなまいけないのよ。タダでさえイライラするのにな。

あたしは勉強道具をまとめると、黙って教室を出て行った。図書室に行こうと廊下を歩いていたら、唯を見つけた。

確か彼女は用事があるからって、さっき教室を抜けて行ったはず。

「あれ？ 唯、どうしたの？ ・・・何かあった？」

あたしは唯に近づいて、見つめた。気のせいではない、なんかヤバそうな顔をしている。

「真琴……ううん、何でも無い……」

「何か変だよ？ どうしたの？ ……唯っ！」

驚愕した。あたしの目の前で唯が倒れたっ。

咄嗟に抱き支える。どうしたのっ？

あたしっ、本当に気を失う人って初めて見たっ。

「山本っ」

近くにいたらしい、担任の加藤が駆け寄ってきた。KY教師だけど、さすがは教師。こういう時はマトモに素早く行動してくれる。

「貧血だろう。とりあえず保健室に連れて行こう。宮地、ついて来てくれるか？」

「はい」

「先生、大丈夫です、私」

「いいから行こう、保健室で横になれ」

「本当に平気です」

「ごちゃごちゃ言わない」

そう言つと加藤はいきなり、唯をお姫様抱っこした。え？ これで保健室まで連れて行くつもり？

……前言撤回。やっぱ、KYかも。

案の定、すれ違う生徒達の驚きと注目と好奇心を集め、保健の先生に驚愕されている。

あたしは唯がかなり、気の毒になった。

「どこか具合が悪いの？」

ベッドに横たわった彼女に、同情を込めて聞いてみる。

唯もそんなあたしの真意を汲み取ったのか、少し苦笑した。

「ちよつと目眩がしただけなの」

「10代で目眩がするなんて駄目よ。しっかり食べて、夜はちゃんと寝なくちゃ」

保健の先生が優しく言うてくれたけど、あたし達3人、誰もKY加藤を見る事が出来ない。

加藤は先程からすごく心配そうに唯を見つめてて、ねえ先生、ちよつとやりすぎだと思いませんか？

「予鈴だ。ねえ、真琴。お願いがあるんだけど」

授業開始5分前の予鈴が響き、唯が思い出したように言った。

「何？」

「私ね、事務室に地理の資料書を取りに行く事になっていて・・・」

「ああ、オツケー、大丈夫。唯はゆっくり寝てて。ノートも取っとくから」

「お前の字、山本は読めるのか？」

ここに来て初めて、加藤が口を開いた。面白そうに、ニヤツと笑っている。

唯が笑った。あたしはやっと、少しホツとした。

「先生よりはマシな字だよ」

加藤の黒板の字や数式もかなり癖のある書き方なので、みんなが結構苦労している。

先生も声をあげて笑い、皆がいつもの調子に戻っていた。

でもあたしはおかげで一つ、仕事を背負ってしまった。

後5分も無いのに、クラスの人数分の資料を取りに行かなくてはいけない。

地理の富山、うるさいんだよなあ。年寄りで掴み所が無くって、すぐにキレルんだ。

という事で、宮地、走りました。廊下を。

はい、常識外の跳躍が出来るくらいですから、脚力がハンパないんです。私、走つてもすごいんです。

授業に関する事ですし、友人の為ですから、祖母も許してくれるでしょう。

予鈴の後で、今度こそ誰も見てないし。

跳ぶぜ跳ぶぜ跳ぶぜ、あ、やっぱ気っ持ちいいーっ。こりややめられないかもっ。

角を曲がったら事務室、ってところでスピードを落とす。ふう、すつきりした。

すると、人の声が聞こえてきた。

「火曜日までには出来るつつうから、こうしてやって来たんだろうが」

何、この喋り方？ 酷くクダを巻いているじゃない？ この進学校に一体どんなヤクザが来ているの？

と思ってビックリして覗いてみたら、香取だった。うっわ、最悪。

「すみません。担当の事務員が病欠を続けているせいで遅れてしまったんです。他にも二人が退職して、一人は新人で・・・」

「知らねーよ、そっちの事情なんて。聞いてねえし」

「届きましたら必ず連絡しますから」

「連絡をよこすぐらいなら、教室まで届けにこいや」

カウンターに肘ごと身を乗り出し、まるで野生動物がやるみたいに威嚇している。

あたしは呆れてしまった。

やっぱりこの人、性格・・・ううん、態度に異常な問題があるわ。学校で、どうしてそんな態度を取らなくちゃいけないのよ？ 子供じゃないでしょう？

礼、って名前が、オツロシイほど似合わなすぎるじゃない。

あたしに気づいた香取が、物凄く嫌そうな顔をした。

「何だよ、サル女。二度と顔見せんなっつただろ」

「・・・どこのヤンキーよ、あんたは」

「はあ？」

「さつきから聞いてたら、それが人に対する、しかも目上に対する口のきき方？」

「目上かどうかなんてカンケーねーよ。テメエの仕事をまっとうしねえ方が悪いんだろ」

その台詞の、言い方も中身も柄が悪い様に、あたしはかなりカチンときた。

「あんた何様？ 自分が仕事を持っていないクセに、よく言うわね？」

「俺は香取だ、それ言うなら香取様だろ、何言ってるんだ」

「・・・バカ??」

「俺がバカなら、この学校は二人を除いて全員バカだ。お前が俺より成績が良いとは思えないけど、そうなのか？」

「げっ、こいつ、この間のテスト、総合で学年3番だったの？ 何て事!!!」

「それに俺が仕事を持っているのかどうかも、カンケーねえだろ。あいつは金貰って仕事してんだ。俺は金を払ってるんだ」

あたしは、今度はポカン・・・と口が開いてしまった。
お金???

「・・・それって授業料の事？」

「学校に払う金の事だよ」

「それ払ってるの、あんたじゃなくて親でしょ?!」

思わず声が大きくなってしまふ。信じられないっ。どんだけ常識が欠けたお坊ちゃまくんなのっ？

ところが香取様は、片眉をあげて綺麗な瞳であたしを見下ろすと、尊大な態度でおっしゃった。

「俺の環境全般に払ってるんだろ？ その俺が、自分の環境の不満を金の支払先に訴えて、何が悪いんだよ。大体、お前が口出す事か？」

あたしは思いつきり、目眩がして来た。唯みたいに倒れそうだわ。そしたら誰がお姫様抱っこしてくれんよ？

目の前で繰り広げられる展開についていけずにおどおどしている事務員さんに抱かれるなんて絶対嫌だし、第一、この香取の前で倒れたら、サルの攪乱かくらんとか言われそうで嫌だわ、今日のパンツはトリコロールっ。

「あたしには関係ないわよっ。だけど耳に入ってきて、イライラするのっ。あんたの言葉通り、あたしも自分の環境にとっても不満だわっ。あんたのせいだっ!」

面倒臭い事なんて大っ嫌いなのに、こいつが絡むと、自ら面倒臭い事に手を出している自分が怖いっ。

だけど分かってているのに止められないっ。

あたしはグイッと身を乗り出して、香取を睨み上げた。

「他人に対する態度をわきまえろっ！ 世の中の力関係は、お金がすべてじゃないのよっ！」

すると彼は、ニヤツと笑った。

「バーカ」

そしてあたしに顔を思いつきり寄せてきた。鼻先5センチも離れていない。

途端にキツイ瞳に睨まれた。

「世の中、金が全てなんだよ。ぬるい日本しか知らねー奴が、分かった様な口きくんじゃねえ」

女の子みたいに長い睫毛が、触れたら届きそうな距離にある。だげど問答無用の強い光を放っている。

あたしはグツと言葉に詰まった。

帰国子女の何がそんなにエライのよっって思ったけど、ひょっとしたら、

あたしが見当もつかない様な大変な経験をして来たのかもしれない
って考えちゃったの。

彼の瞳はそれぐらい、有無を言わさぬモノがあった。

・・・そうかもしれない。けれども。だけれども。

「・・・100歩譲ってお金が全てだとしても、郷に入っては郷に
従えよ、ここは日本だばかやろう」

あたしは、自分が怯みそうになるのをグッと押さえて、相手から視
線を外さずに言った。

彼はあたしを見つめ続けたままだった。表情の変化が読み取れない。

「・・・そりゃそうだ」

急に彼が、屈めていた体を起こした。あたしを見下ろす目が、強い
光から冷めたものに変わっていた。

後ろを振り向き、当り前の様に事務員さんに言った。

「連絡しろ。取りに来る」

なっ、変わって無いじゃない、さっきと何もっ。

「だから敬語を使いなさいって言ってんの」

「敬語つてのは敬う言葉だろ？ ウソつくのか？」

真顔であたしに聞いてくる。

こいつ、やつぱりバカだっ！ あるいは加藤以上のKYだっ！ K
Yってやつぱバカなんだっ！

「礼儀よっ！ イギリスにもあるんでしょっ」

すると彼は軽く肩をすくめた。

「あるぜ。虚栄にガツチガチに固められた世界が」

その時、チャイムが鳴った。

しまったっ！ どうでもいい事に時間を費やしてしまったわっ！
あたしは飛び上がった。

「あ、授業が始まっちゃうっ。おじさんっ地理の資料書取りに来た
のっ」

「お前のそれ、敬語か？」

「いちいちうるさいわねっ」

で結局、お互い再び睨みあう格好となって、事務員さんにいい加減、
止められた。

もう、ダメじゃん。完璧に間に合わないじゃん。

でもいいや。唯は保健室で寝ているし、それは富山の耳にも入って
いるだろうし、

唯に迷惑がかからなければいいや。あたしが遅れたって言えばいい
んだから。

そう思った途端急ぐ気が失せて、あたしはクラスの人数分の資料を

両手に抱えてのんびりと歩き出した。

同じ授業を取る香取と、必然的に一緒に歩いてしまう。
甚だ不本意。無視しよう、無視。

すると急に、横から香取の両手が伸びてきた。

「え？ 何？」

と思つたら、なんと資料を35人分、ヒョイと腕からさらわれた。

「持つよ」

そう言つて、サツサと先を歩いて行く。

あたしは、全く状況が飲み込めなかつた。
な、何事??

「ええ?? 何で??」

「女に重い物、持たせるわけにいかねえだろ」

「ええええ??」

思わず大声が出ちゃったけど、しょうがないでしょ？ だって、何、この展開??
立ち止まったあたしの数メートル先で、香取が振り返った。無表情だ。

「ああ、お前は女じゃなくて、サルか」

「はあああ??」

「にしたつて、俺のメンツの問題なんだよ。いいからサクサク歩け」

そう言うのと再び自分が先にサツサと行っちゃって、あたしは取り残されてしまった。

ど、ど、ど、ど、どという事だろう？　これがあの有名な、ヨーロッパン・レディファーストなんだろうか？

・・・にしたって、何故このタイミングで？
何なの、コイツ？

What's happened with you? 2

唯は地理の授業を休んだだけで教室に戻ってきた。

そう言えば最近、彼女は疲れた顔をしている。きつと真面目に勉強をしているんだろう。

控えめで穏やかで、芯から心優しい唯が、あたしは大好き。

面倒事は大っ嫌いだけど、唯が困っているならなんとしても助けてあげたいと思う。

でも受験勉強ばかりは、助けてあげられないものねえ。

「唯、先は長いんだから、今のうちから根を詰めない方がいいよ？」

その声をかけながら唯の分を板書したルーズリーフを渡したら、彼女は少し微笑んだ。

「本当に、ありがとう」

「読めるといいんだけど」

加藤にはくやしいけど、あたしは本当に悪筆だ。何故かは知らないけれど、クラスでも相当有名なの。

その時、クラスの女子がやってきた。少し恥じらいながら、でも目を輝かせている。

「ねえねえ宮ちゃん、香取君ってどんな人？」

・・・何であたしに聞く？

「どついう意味？」

「ほら、あたし達って彼と話せないじゃん？ だから、どんな人な

のかなーって」

あたし達？

見ると、彼女の後ろに3人の女の子が控えていた。自称、ヒトミフアンの子達だ。成程、あたし達、ね。

「話せばいいじゃん」

「えー、だって怖いもん」

あたしはちよつとビックリした。だって彼は、クラスでかなり上手くやっているハズでは？

「香取君ってさー、女の子とは話さないよねー。ちよつと近寄りがたくつて。でも宮ちゃんとは仲いいじゃん」

そっか。確かにあんな性格じゃ、女の子とヒヨった会話なんて出来そうにないものね・・・てちよつと待って。

「・・・仲が良い？」

聞き間違ったのかな？

「だって地理の授業、二人で仲良く資料持ってきたでしょ？」

「・・・」

「多分、香取君とお話出来ている女子って、宮ちゃんだけだよ。ね

」

そう言って彼女は、後ろにいるお友達に同意を求めた。後ろの子達も、ねー、って言っている。

「ね、だから教えてよ。香取君て背が高く美形でカッコいいのに、
恐いよね？　どんな話をするの？」

「・・・世界経済、かな・・・？」

「え？　何？」

世の中、お金が全てだそうです。

「何でもない。話してないよ、全然。無言だった」

「えー、そっかあ。仲直りしたんだとばかり思っていた。喧嘩する
ほど仲が良いって言うじゃん」

「良くない良くない、さっぱり良くないから」

「そっか。宮ちゃんにはヒトミくんがいるもんね。あんな優しく
カッコいい彼氏がいたら、他に興味なんて湧かないよねー」

「・・・」

唯が笑いを堪えてあたしを見上げる。

あたしは得意の笑顔をした。ここは黙ってやり過ごすに限る。沈黙
は金なりよ。

その日の夕方。薄暗くなった辺りに輝く商店街の光。予備校からの
帰り道。

あたしは耳にはイヤホン、手にはiPodで歩いていた。日課にな
った、英単語の暗記をやっている。

こういう、コツコツとした積み重ね作業は本当に苦手で、だからこ
そ、時間を決めて流れ作業的にやっている。例えばこういった帰り
道。例えばバスの中。

だからその時のあたしは、目も耳も、塞がれていた。
誰にも邪魔をされないハズだった。

なのに、気付いてしまったのだ。
匂いを、感じてしまった。

あたしは何かを感じる時、何でなのかは分からないけれど、匂いで
感じる事が多い。

昔、可愛がっていた近所の犬が死んだ時、学校に居たあたしは匂い
で、それを知った。

そして今、この匂いは、なんだかとてもイヤな匂いがする。
あたしは顔を上げた。

何だろう？ 変な胸騒ぎがする。

落ち着かない気分で周囲を見回すと、正面から歩いてくる一人の中
年女性の姿が、目に入った。

買い物帰りの主婦の様だった。買い物用のエコバックを肩にかけ、
小型犬を腕に抱いている。白い毛並みの小型犬。
犬の顔は、彼女の胸に隠れて見えない。

女性は清潔そうな身なりをしていた。結構な美人。時々、腕の中の

小犬に頬をすりよせている。愛情を込めて。

愛情を？

視線が反らせないあたしは、その女性と目が合ってしまった。

その人の瞳が少し見開かれた理由を、あたしは知らない。

ただ、彼女とすれ違う時その匂いが一段と強くなって、体が震えた。

「あ……？」

女性が立ち止まって、訝しげに口を開いた。

「何ですか？」

あたしの凝視の事を聞いている。本当に清潔そうな、綺麗な普通の
人。

どうしよう、誤魔化さなきゃ。ほら早く。得意でしょ、作り笑い。

なに出来る事は、ごくりと生唾を飲む事だけ。

どうして？ なんだかすごく嫌な感じがする。体中の毛が逆立っ
ている様な感覚がする。

あたしはこの事態が、何なのかがさっぱり分からなかった。

けれども、不快と恐怖が入り混じったこの感覚を、何故だか知って

いる。

どうしてだろう？ どこでだろう？

あたしは喉から声を絞り出した。

「・・・かわいいですね、その犬」

「え？・・・ああ、はい。ありがとうございます」

戸惑いながら女性は、不審そうに私をジロジロと眺めまわした。

あたしは益々、不快な汗をかいてくる。

子犬が僅かに、震えた様に見えた。

「あの・・・抱かせて、くれませんか？」

「え？」

「えっと、私・・・そういう犬を飼ってみたくて・・・だから、あの・・・抱かせて、もらえたら、なんて・・・」

分からない。

恐くて怖くて、一刻も早くそこから逃げ出したかったのに、

何故だか、彼女の腕の中の小犬を、彼女から引き離してあげなくてはいけない気がした。

彼女から、救ってあげなくては。

「でもこの子、ちょっと病気なんです」
「え、・・・そうなんですか？」

納得する。そうだろう。病気の筈だわ。何故だかは知らないけれど。

「じゃあ、病院に連れて行かれるんですね？」

「ええ、まあ」

「よければ私がお連れしましょうか？」

咄嗟に言葉がついて出た。

「うちは獣医なんです」

「え？」

「よろしければお預かりしますよ？」

「・・・」

ごめんね、おばあちゃん。変なモノ、連れて帰るかも。

女性の顔がますます険しくなった。

そしてあたしの鼻は、ますます強い匂いを感じた。

たけど、我慢してその場に踏みとどまる。だってここは人通りの多い往来。

相手だっって見境のない行動は取らないだろう、よくわからないけど。

・・・でも、すごく怖い！
この人、何者なの？！

その時、後ろから人が近づく気配がした。
気付くと同時に、背後からそつと、腕が回される。

ビクツとした。今度は何っ???

男性の、甘く囁く声が耳元で響いた。

「ごめんね。待った？」

・・・は？

え？ どう言う事？

その台詞に驚いて私は後ろを振り向き、そしてますます驚愕した。

だってこの人、すっごい美人な男の人なんだもん。

てか、誰？

目の前に立っている男性は、男なのに美人、という表現がピッタリ。柔らかそうな髪は少し色素が薄い。その下にある長い睫毛と憂いを帯びた瞳は、日本人以外の血が混じっているのではないかと思わせた。事実、瞳がわずかに明るい茶色。シャープな顎に薄い唇。

まるでお人形さんみたい、とか思っちゃった。

その彼が微笑んだ。天使みたいな微笑みになった。

「ごめんね、遅れちゃって。怒った？ だから一人で歩いていたら？」

・・・えっと、あれ？ 誰かと勘違いしていますか？

商店街の人目を引いている事がわかる。道行く人達が彼の美貌と笑顔に釘付け。

目立つわ、この人。すっごく目立つわ。

彼は笑顔を緩めず、さらに手を私の背にあてて軽く押した。

「機嫌を直して？ 行こうか」

「・・・え？」

更に口をポカンと開けた、その時、彼の背後からもう一人の男性が飛び出してきた。

年の頃同じ、多分20代前半。

作り物の様な完璧さを誇る目の前の彼の美しさとは比べ、この男性は
かなりハンサムではあるけど、生命力に満ち溢れた明るさを放つて
いた。

整った顔の甘いマスク。結構背も高くてカッコいい。

その彼が、満面の笑みを浮かべ屈託の無い笑顔で元気に言った。

「へー、これがお前の彼女か。びっじんだなーっ」
「だろ？」

人形のような彼が彼に伝えて、優雅に微笑む。

あたしは啞然とした。はい？ 彼女？ 何の事？

その時、ある事に気づいた。

二人のイケメンの、瞳だけが笑っていない。二人とも、意味有り気
な視線をあたしに送ってくる。

・・・この人達、ひょっとして、あたしをこの場から連れ去ろうと
している？

アイドル君が、目の前の中年女性に笑顔で言った。

「あれ、お話し中でした？ 突然ごめんなさい」

警戒心など抱かせない、明るい笑顔。
小犬を抱いた目の前の女性は、その笑顔に反応して顔を赤くした。
アイドルくんが続ける。

「すみません、失礼してもよろしいですか？」

「え、ああ、はい。通りすがりの者ですから。お構いなく」

すると今度は、人形の様な男性が彼女に緩やかに微笑んだ。
こちらにも完璧なスマイル。先程から天使の様な微笑み。

「そうですか。ありがとうございます。失礼します」

そして彼は、優雅とも言える動作で私を促して歩きだした。
後ろからもう一人の彼が、ハンサムな笑顔と甘い視線を周囲に向けている。

「あ、どうもー」

誰に言ってるの??

そして私達はしばらく歩いた。

・・・こ、恐かった・・・。

どっと疲れが出た。自分がどれだけ緊張していたのかに気づいた。助けてあげれなかった小犬が僅かに心残りだけれど、そんな事を言っ
てられないくらいに恐かった。

一体何が、どうなっているんだろう？

「だめだよ、声をかけちゃ。」

先に口を開いたのは、甘いマスクの彼だった。

「え？」

「君一人じゃ、どうにも出来ないだろ？」

少し苦笑しながら私を見下ろしている。

可愛い顔だな、とか呑気に思った。

「あの？」

「奴らが本性見せたらどうなるか、知ってるの？」

「・・・本性？」

ビククリして、あたしは立ち止ってしまった。

この人達って・・・何を知ってるの??

目を丸くした私を見て男性二人も立ち止まり、可愛い顔の彼は少し困ったようにわざとらしく腰に手をやった。そうして、まるで小さい子に物を言い聞かせるように言う。

「僕らもね、こうやって二人一緒につるんでて、しかもよっぽど頭に来た時しか手を出さないよ？」

「妙な事をするなよ」

美人の彼が口を開いた。

最初に登場した時に見せた天使の笑顔とは打って変わって、鋭い冷気を放っている。瞳が限りなく冷たかった。

「無責任な行動をおこすなよ。人間を襲っていないだけマシだろ？
全員過激化されたら、あんたどうするつもりだ」

「智哉ちむぢ。そんな言い方はないだろ？」

「事実だよ」

智哉と言われた男の容赦無い物言いに、甘いマスクの彼は顔をしかめて諫めたけど、智哉って人はそれをはね付けた。私はそんな二人をマジマジと見つめた。

「あ……」

「何？ さっきから」

智哉さんがジロツとこっちを見る。こわっ。

「いえ、（それはこちらの台詞だつて）・・・何ですか、さっきから？」

「あ、僕達の事？ ごめん、自己紹介がまだだったね」

アイドル君の笑顔。残念ながら、それに見とれている場合じゃないあたし。

「あ、いえ、それだけじゃなくて・・・あのおばさん、何？」

「あんた、分かってて声、かけたんじゃないの？」

智哉さんが呆れた様にあたしを眺めた。
あたしは無言で首を振った。

今度は二人が、揃って驚愕の顔をした。

「マジで？ じゃ、何も考えずに？」

「まさか何も感じてなかったとか？」

同時にあたしに詰め寄ってくる。あたしは少し後ずさった。

「いえ、それは・・・なんか、嫌な感じがするなあ、と」

アイドル君がホツとした様に、胸を撫で下ろすならぬ、肩を落としたり。

「そりゃそうだろう。伝説の宮地恵美子の孫なんだから、失礼な事を言つなよ、智哉」

「そうか？ かなりボーっとした顔だぞ？」

「ウソウソ。とってもかわいいよ」

アイドル君が、あたしに向かってにっこりと笑う。そんな、あなたの方が可愛いです。

じゃなくて。

伝説のお祖母ちゃん？

でもなくって。

「あの女性って一体・・・？」

「君のお祖母ちゃんから、何も聞いていない？」

あたしは再び、無言で首を振った。

「そっかあ。君のお祖母ちゃんって豪胆だなあ」

アイドル君は感心した様にあたしを見つめた。
そして言った。

「アレはね。世間が言う所の、ヴァンパイアみたいなモノだよ」

・・・なに？

何ですか???

What's happened with you? 3

ヴァンパイア?? ヴァンパイアって・・・

「吸血鬼?!」

あたしは思いつきり目を見張った。

「でっかい蚊??」

「・・・」

「あの人、血を吸うんですか??」

「吸うワケないでしょ」

智哉って人が、バカにしたように言う。

あたしは噛みついた。

「でもさつきヴァンパイアってっ!」

「世間で言う所の、だよ。奴らが吸うのは、気。血じゃなくて、気」

慌てた様に言うアイドル君に、あたしはオウム返しをした。

「気い??」

なんですかっそれ?

食べれるの? おいしいの? というより、気って何よ??

「ドラゴンボール? ジョジョ?」

「・・・あんだ、ふざけてんの?」

智哉さんがイラつきだした。

ので、あたしもムツとしてきた。

バカにされた上にイラつかれても、どうしようもないと思わない？

「いきなりヴァンパイアとか言われて、まともに取れって方がふざけてるでしょ？」

「だよねだよねー。ハイハイ、とりあえずどっかでお茶でも飲みながら」

もつと色々言い返したかったのに、間に立ったアイドル君に腕を掴まれて、あたしは近くの喫茶店に連れて行かれた。

その後ろから美形の彼が、溜息をつきながらついてくる。不本意で顔をして。

その扱いに理不尽さを感じるのは、あたしのせいではないと思うのだけ。

「いきなりごめんね。俺は由井白義希ゆいしろう。こいつは水島智哉。俺達はガキの時から腐れ縁で、まあ、君と同じく『家系』って奴を背負っちゃってんだ。同じ人種って事。よろしくね」

アイドル君こと由井白さんは、あたしの向かいの席に座ると明るく笑った。

本当に、相手に警戒心を与えない男性だ。この人に、よろしくね、

とか言われちゃうと、うんいいよ、なんて言いたくなっちゃう。

あたしはフレッシュジュースを飲みながら曖昧に微笑んだ。

「お兄さん達、なんか特技があるの？」

「あるよ、色々と」

由井白さんは軽く笑うと片手で頬杖をつき、机の上のソルト瓶を眺めた。

瓶が、机の上を滑る様に、15センチほど移動した。

・・・そっか。そういう事か。

あたしは顔を上げた。社交辞令で言う。

「すっごい。どんな仕掛けがあるの？」

「さあ？ なんだだろうね？ わかったら教えてくれる？」

瓶を見つめたまま微笑して答える彼は、照明のせいか、瞳に影を落としている様に見えた。

その表情が、彼の背後を物語っているようで、何となく心に残る。あたしは視線を彼の隣に移した。

「そっちのお兄さんは？」

「こいつはお触り魔。触ると色々わかつちゃうの。触られないようにね」

「何だよ、その巧みな誤解の与え方は」

水島さんはジロツと横目で由井白さんを睨んだだけだった。あたしはそれ以上、二人の能力ちからについては聞かなかつた。だって何だか、聞いてもしょうがない様な気がしたから。あたしのチカラも、言っても聞いても持つていても、かなりしょうがない物だもん、ね。

「二人とも何している人？」

「大学生している人。大学3年生。就職活動真つただ中さ」

由井白さんが明るく言つと、隣で水島さんがボソツと言つた。

「家、継げば？」

「お前は、黙つてろ」

・・・笑顔を崩さず顔も向けずに、由井白さんが水島さんに言う。親友だよな？ よくわからないけれど、これがこの人達の日常会話みたい。やり過こつそう。

「あたしは・・・」

「知つてるよ。宮地真琴ちゃん。かわいいね。高三でしょ？ 色々、大変だろう？」

由井白さんは明るく微笑んだ。本当にこの人は、何というか、屈託のない人だ。多分作り物ではない、優しさが滲み出ている。

「君の事はオヤジから聞いていたよ。君のおばあさん、有名人だからね。でも俺達、同じ人種を見たのってコレが初めて」

彼は腕を組むようにしてテーブルにつき、身を乗り出すとニコニコしながらあたしを見た。

あたしも、サイのネットワークがある事や他に能力者がいる事は聞いていたけど、ヒトミ以外で見るのは初めてだな。

「さっきのあのおばさん。あの人、多分もう古いよな。随分色々喰らってきてるぜ、ココで」

由井白さんが視線をテーブルに移した。

相変わらずの微笑だけど、何かを考えている様な雰囲気になっている。

「・・・」

「早いところ始末をつけないと」

「雑魚だろ。ほっとけば」

智哉さんが、鬱陶しそうに眼を細めた。美人な分、凄味が増す。

作り物みたいな美しさだな、って改めて思った。

そんな彼を見て、由井白さんは顔をしかめて片眉を上げた。

「雑魚だったって、ほっといたらつけあがる」

「そんなとき始末したんで充分じゃない？」

「智哉は甘いつつか、寛大すぎんだよ」

「あなたは事がイツトに及ぶと、神経質になりすぎるよね、よっちゃん」

「人前でそれ呼ぶなっ」

由井白さんが顔を真っ赤にして、水島さんに噛みついた。

すごい。面白い。あたしも呼んでみたい。よっちゃん。

あたしはこの対照的な美形コンビから、色々な事を教わった。

この世の中には、俗に言うヴァンパイア、みたいなものがある。我々サイは、彼らをイットと呼んでいる。

ただ、世間が思っているものとはちよつと違う。彼らは血なんて吸わない。

生気を、吸う。人間に限らず、生き物全般の。

殺すほど吸う事も、それほどはない。大抵、生き物の生気を広く浅く、頂戴している。

太陽だって別に平気。ビーチの日焼けレベルが命取りなくらいだつて。

彼らが最も苦手としているのは、悪い気。端的に言えばそれは病人であり、苦手な場所は病院だとか。

悪い気に囲まれると、それだけで彼らも具合が悪くなるらしいから笑っちゃう。人間が食あたりをおこすようなものかしら。

でもたまーに、夕チの悪いのがいるんだつて。

生き物が死ぬまで吸っちゃうの。それを繰り返すの。その餌食が人間だったりすると、もう最悪らしい。

「俺らはそれを、麻薬中毒患者みたいだと勝手に想像している。一度味をしめると、止められないらしいから」

と由井白よっちゃんが言った。

そしてそんな彼らに気づく人間は、実は割といる。大抵、遺伝だつて。

更にその中に、あたしみたいにちよっぴりへんてこな能力をもった人間が定期的に出てくる。これがサイというものなんだけど、なんだかおみくじで大凶を引いた気分だわ。

・・・という事は、例えばあたしの両親やお兄なんかも、イットに気づけるってコト？ 聞いてないよ？

で、目の前のお兄さん達がそついうお仲間らしいんだけど・・・

「お兄さん達は何でここに来たの？ 偶然？」

「偶然に声をかけたナンパに見えるの？」

答えたのは智哉さんの方だった。少しバカにした様な、綺麗で冷たい目を私に近づけると、皮肉っぽく笑った。

あたしに必要以上に顔を近づける。

「それでもいいけど？」

妖しく揺れる彼の瞳は、だけどあたしには何だか無機質に見えた。バカにされているんだろっけど、なんだか怒る気になれない。

あたしは眉根を寄せながら、少し首を傾げた。

「水島さん？ がナンパする様には全然見えない。されてもついて

はいきません」

人工的にすら感じる完璧なまでの美しさだけど、そんなガラス玉みたいな瞳を見つめて、

「こんな、腹黒天使みたいな人」

「すっげえ。見る目ある」

義希さんが大爆笑をした。

「真琴ちゃん、とても美人なのに目が鋭いね」

可愛い瞳に涙を溜めながら、ううん、目じりの涙を指でぬぐいながら言うのですが、そんなに面白かったですか、私の台詞？
それに目が鋭いって何です？目つきが悪いつて事？

「大きなお世話です」

流石に無然として言うと、彼は相変わらず涙を溜めながらも慌てて訂正した。口が笑っているけど。

「ううん。褒めてるんだよ。あんまりにも的を得ているから」

そうしてようやく笑いを引っ込めると、再びテーブルに身を乗り出し、私の顔を覗きこんだ。

「小犬を助けたかったんでしょ？・・・ごめんね、邪魔して」

そしてとても優しい、包み込む様な眼差しを見せた。

「でもそんなに優しいとき、身が持たないよ」

ドキツとした。

そんな自分に、少々ギクツとした。多分顔には出ていない・・・ハズ。

あたしは自分から男の人に好意を持つ事があまりないのだけれど、これには、結構な衝撃を胸に受けた。

何でだろう？ 褒められたからかな？

落ちつけ落ち着け。

「さっきの質問だけど、実は僕達、君を待ち伏せしていたんだ」

彼は私を見つめ続けながら優しく続けた。

あたしは自分の動悸を自分の中で誤魔化しながらも、彼の台詞に少し驚いた。

「待ち伏せ？ 何で？」

「君のおばあさんから俺達の親父に連絡があつたんだよ。孫娘に会ってほしいって」

・・・おばあちゃんが？

「それってまさか・・・」

「うん。孫を鍛えてくれって言われた」

やっぱり！ 例の、身内以外と訓練をなさいつていう、アレね？

ついに来たか！

「でも今日は、とりあえず会うだけでいいんじゃない？」

あたしは由井白さんの笑顔を眺めた。

自身も能力者だったおばあちゃんは、この世界に割と広い人脈を持っている。それは知っているけど。

そのおばあちゃんが彼らに、あたしの訓練をお願いした。と言う事は、多分強い能力ちからを持っているのだろう。

「幸い真琴ちゃんの危機も救えたし？ 無駄ではなかったって事で、ね」

彼はそう言つと、肩をすくめてクスツと笑った。

・・・どうしよう。やっぱり、ドキドキするかも。

彼はあたしにメモを渡した。

「これ、俺のメルアド。いつでも連絡してね。受験勉強で忙しいだろうけど、智哉んちと一緒に練習しようよ。大体の事は聞いている

からさ。手始めに今週末あたりなんてどう？」

「・・・智哉んち・・・？」

「そう。こいつんち。外でやるのもなんだし、自分の家からも離れたいでしょ？」

「・・・はあ・・・」

よっちゃんさんのメアドを貰えたのは嬉しいけど、もれなく訓練がついてくるのかと思うと・・・。

久しぶりのトキメキに弾んでいた心だけど、一気にテンションが下がった。

面倒臭い・・・。

「でも、人様のお手を煩わせる程の事では・・・」

「・・・と言って、孫が逃げない様に掴まえてくれ、と頼まれてる」

「・・・成程・・・」

チツ。先回りされたか。流石はおばあちゃん、わかってらっしゃる。

「・・・でも・・・こんなの訓練して・・・何の役に立つのでしょうね？ おまけに20代半ばで消えるチカラなら、ますます、練習しても、ムダな気が・・・するんですけど」

最後の抵抗を試みたら、由井白さんにつこりと微笑まれた。

「そういう事は、きみのおばあさんに聞いてみてくれる？」

ああ、バツサリ切られた。

「その・・・イトトから逃げる為・・・ですか？」

「さあ？ 僕に聞かれても」

「・・・由井白さんや水島さんは・・・何でこんな面倒臭い事を引き受けたんですか？」

「面白そうだから」

彼の満面の微笑み。

その隣の水島さんの、冷たいまでの美しい視線。

・・・胡散臭うさんくさいすぎる・・・。

一方であたしは、ただ「面白そう」なだけで、面倒臭い厄介事に身を突っ込みたがる人間を知っている。

ヒトミのにやけた顔を思い出した。

「それでは、今週土曜日の3時ごろでも・・・」

諦めたあたしは、溜息をついて言った。

連絡を改めてするのも面倒臭いわ。

「今週土日ね」

由井白よっちゃんがにっこりと言って、何ですって???

土日って言ったなら、週末丸々潰れるじゃない???

「練習一回約2時間。軽い部活だと思えば、ね？」

げ、そんなつ。あたし、高校三年間は帰宅部だよ。

それがなんで今更この時期につ。しかもこんなどうしようもない事をつ。

「・・・はあ・・・」

あたしは得意の作り笑いを浮かべたつもりなんだけど、引きつっているのは自分でも充分感じていた。

ヤダヤダヤダ、やりたくないよーっ。

どうしてこういう事になったんだか。

もちろん、自分の能力を直視して来なかった自分のせいです。

ただ好きでこんな能力を持っている訳でもないし、それに迷惑をかけているのは主にお兄にだけよっ。

いえ、だから許されるって訳じゃない事ぐらいわかっているけど。

誰かに一言、文句を言わねば、気が済まない。

なのに家に帰ると誰もいなくて、そう言えば今日はお母さんは友達と用事があると言っていた。

コンロの上にはカレーのお鍋。

靴があつたので、お兄は部屋にいるハズ。

「お祖母ちゃんは？」

軽くノックをして、返事を待つてドアを開けた。

少しの隙間から覗き込む様な形で顔を出すと、椅子に座って何かをやっていたお兄がこちらに体を向けた。

あたしがお兄の部屋に来るなんて事は滅多にないので、珍しそうな表情をしている。

「おう、お帰り。今日は遅くなるらしいぜ？ 急患が入ったらしい」

「……」

今この瞬間、あたしの八つ当たりの相手がお兄一人に決定しました。

「何だよ？」

「……お兄、でっかい蚊って知ってた？」

「何??？」

お兄が素っ頓狂な顔をした。ポカンと口をあける。

あたしは真正面から八つ当たりをするのも恥ずかしいので、文句を言う内容を、訓練の不平からなんちゃってヴァンパイアへすり替える事にした。

「でっかい蚊。でもその蚊、血は吸わないの」

「花の蜜でも吸うのか？ 聞いた事あるぞ」

すっごい。この人、瞬時に話についてってるよ。どついつ感覚してるの？ あたしが振った話題だけどさ。

「……そーゆーマトモな話でなくて。その蚊、気を吸うんだって」

「……気？」

「そう。人間の姿をした、でっかい蚊。気を吸う、蚊」

一瞬、訝しげに眉根を寄せる。

そして次に、お兄の目は見開かれた。

「……おま……まさか……」

予想通りの反応に、ちょっぴり気分爽快。お兄が単細胞で良かった。

「やっぱ知ってたんだ」

わざと唇を尖らせて、むくれて見せた。

フンっだ。思いっきり慌てちゃえばいいんだっ。困らせてやるっ。

「何で今まで教えてくれなかったの？」

「会ったのか？」

「うん」

「どこで?!」

「駅前の商店街」

「一人でか?!」

「そっだよ?」

「なっ・・・そっいう時は俺を呼べって言ってたろっ?」

は? 何言ってるの、この人? 第一そんな約束したっけ?

「何で? さっぱり意味わかんないんだけど」

あたしが少しイラついて聞き返したら、珍しくもお兄が黙り込んだ。
え? どうしたの? いつもならこういう時、喚わめいてばかりなのに
???

どういう事?

「ばあちゃんは何て言っただ？」

お兄が声を低くして聞いてきた。
似合わないそのシリアスな雰囲気、あたしは少し身構えてしまった。

「まだ何も？ てかお兄は何を知っているの？」

「……」

「またお兄の心配性なの？ さつきから何？」

お兄は再び黙りこむ。だからあたしも黙り込んだ。こうなったら根競べだ。

「……イトトの好物は、お前みたいな奴なんだよ」

やっとお兄は口を開いた。あたしの顔を見もせずに、一言、強めに言い切る。

イトトだって！ やっぱ知ってたんだ。

でもあたしの予想通りだったのに、実際目の前で、あたしの知らない事をお兄が知っていた事実を見ると、なんだか少しショックだった。

だってお兄は、ずっとあたしと目線が一緒なんだと思っていたのに。本当はあたしの数歩先を歩いていた。

そして振り向いて、実はあたしに目線を合わせていた。

そう言われた気がして、あたしは更に不機嫌になる。そんなあたしに気付いているのかいないのか、お兄は言葉が続けた。

「お前みたいな能力者の、気が好物なんだ」

・・・サイの気が好物？

それは初めて聞いた。美形コンビはそんな事、言ってなかったな。・・・でもそんな事言われたってさ。

「・・・お兄がいた所で、どうにかなるの？」

イトトがどの程度の生き物なのかなんて知らないけどさ、お兄が太刀打ち出来るとは思えないんだけど。

「・・・」

「というか、そういう事をどうして今まで、あたしに誰も伝えないワケ？」

「・・・こっちにも色々、事情があるんだよ」

お兄が無然として答えた。逆切れてヤツですか？ それってあたしの持ち技なんだけど？

さっきから全然話が進まないじゃない。

「何それ。あり得くない？」

「お前、それでどうやって乗り切ったんだ？」

「・・・同族さん達が現れたのよ」

あたしは溜息をついた。
自分からお兄に絡んでおいて何だけど、なんだか面倒臭くなってき
た。話、打ち切ろうかな。
けれどもお兄はあたしの言葉を聞いて、少し考え込んだ後、何かに
気づいた様に呟いた。

「・・・ばあちゃんか。そうか」

僅かに、唇を噛む。

「この間の、あれか・・・」

あの時お祖母ちゃんが言っていた『喰われる』って、そういう意味
だったのね。

あの時訝しそうな表情をしていたお兄は、本当は全部解っていたの
ね。

しかもまだまだ、あたしの知らない事を知っていそうな様子。

でももういいや、教えてくれないなら、知らないよ、こっちも。

あたしは完璧にヘソを曲げてしまい、お兄の部屋を去ろうとした。
すると後ろから声をかけられた。

「とりあえず、そういう事で事情はわかったろ？ 明日からは俺と
登下校だ」

はあ？

あたしはイラッと振り向いた。

子供っぽく膨れて、睨み上げてしまつ。

わかっていますよ、これも一種の甘え、だよな。ええ、ブラコンですよ。

「お兄が何の役に立つのさ？」

「文句を言うな」

「別に大丈夫だよ。というかお断りだよ。なんかあつたら、跳ぶか走るかするから。お兄がいたらかえって足手まといだよ」

「そんなんで対処出来るのかよ」

頭にきたので、あたしはかなり失礼な事をお兄に言った。なのにお兄はいつもみたいに怒鳴り返す事無く、こっちの顔を見ながら冷静に言う。

それが更にあたしを腹ただしくさせ、同時に恥ずかしい気持ちにもさせた。

居心地がうんと悪くなったので、今度こそ部屋を出る決意を固める。

「週末、特訓だし。同族のお兄さん方が色々教えてくれるでしょ」

そう言うと、扉をバタンと閉めた。

そしてお兄がアタフタしている所を想像して、ブラコン娘は気を紛らわせる。

ふーんだ。しばらく口、聞いてやんない。ふんっ。

それから数日後の朝。
あたしの隣の席に座って頼杖をつきながら、唯がしみじみとあたしに言った。

「真琴、この頃、随分早く学校にくるねえ」
「うん。まあ、ね」

あたしは一限目の英語の予習をしながら、顔を上げずに言葉を濁した。
突っ込まれると、具合が悪いのよね……。すると唯が、探る様に顔を近づけてきた。

「菊池さんより早く来ていたって聞いたよ？ 何時に来ているの？」
菊池さんとは、新学期以来、クラス一早く登校している女の子。

「・・・7時15分、かな」
「7時!？」

唯がのけ反る。
違っよ、7時15分だよ、7時じゃまだ門は開いていないんだよ。・・・というと、何だか墓穴を掘る気がする。

「でも他にも何人かいたよ？」

言い訳になるのかな？　これって。

うちは進学校だから、結構朝早くから、自習の為に学校にやってくるガリ勉君達が沢山いる。まさか自分がその一員になる日が来ようとは。

しかも日毎に人数が少なくなってきてるんだよね。風邪が流行っているらしくって。あたしにはその気配が全くないんだけど。上手く風邪をひけたら、週末が潰れて嬉しいのにつ。

「・・・へえー。すごい。どうしちゃったの？　志望校、変えるの？」

感心した様に唯に言われた。

「真琴ならさ、頑張ればもっとレベルの高い所にいけるよ。頑張んなよ」

それもまるで我が事のように、嬉しそうに。あたしはちょっとこそばゆい気持ちになった。

「唯ちゃん、今から教師してるねー」

ちよっぴりからかってあげる。唯は小学校の教師になる事が、小さい頃からの夢だったら嬉しいからね。

すると彼女は、少し恥ずかしそうにした。

「だってそうだもん。私、前から、真琴はもったいないなあ、って

思ってたもん。やればもつと出来るのに、って」

「だって面倒臭いんだもん。そんなに頑張らなくたって、そこそこで人生楽しめるじゃない」

「うん。そうだね。人生って楽しいのが一番だよね」

そして唯は、とても可愛い笑顔でにっこりと笑った。

「でもね。その人生で、がむしゃらに頑張るべき時、って何度かあるんだと思うの。それで、その時ちゃんとかむしゃらに頑張った方が、人生って楽しくなると思うの」

彼女は視線を少し空中に移す。

「成功するか失敗するかは、脇に置いてもね」

そして再びあたしを見ると、明るく微笑んだ。

「だから今、思いつきり頑張ったら、その経験って人生をきつと楽しくて豊かな物にすると思うんだ」

その様子は、本当に素直で可愛くて、でも芯が強くて前向きで。

ああっ！ あたし今、この子に思いつきり射抜かれたっ！

「・・・唯ちゃん、生まれつきの先生だね！」

「そんな事ないよ」

「そんな事あるって！ 唯はみんなを指導できるいい先生になれるよ！ だってあたし、すごく納得したもん！」

「・・・え、納得したの？」

ちよっぴり引いてる唯を尻目に、あたしは声高らかに宣言をした。

「よし。唯に免じて、志望校を上げよう！」

「・・・免じてつて、それ、なんだか間違っている気がする」

「そんな事ないよ！ 武田センサーや仲間センサーに触れ合って生徒が前向きになると同じだよ！ 素晴らしい！」

「・・・そこまで言われると、かえって・・・」

「よかつたあ。目的も無く早く学校に来る事に、いい加減限界を感じていたんだ」

「え？ 勉強をする為じゃないの？ じゃあ何でそんなに早く来てるの？」

「・・・」

ヤバつ。口がスベった。

まさか、お兄と顔を会わせたくなくて朝6時に家を出てきている、とは言えない。

どんだけ気合を入れた兄妹喧嘩だっつーの。おかげで引っ込みがつかなくなってきた。

さっさと土下座でもしろよ、ヘタレ兄貴。

「ま、とにかく頑張ろうつと。今日は事務員さんとも仲良くなれたんだ。毎日早く来て偉いね、つて」

「・・・真琴つて、面倒臭がり屋さんだけど、褒められ好きだもんね」

「うん！ あたし、褒められると結構木に登れるんだ！」

あたしは台詞と共に、勢いよく立ちあがった。

「よし！ 善は急げだ。加藤に報告してくる」

「・・・うそ。今？」

「きっかけて言うものは割と簡単に転がっているのよ」

「・・・」

唯の無言が何となく気になるけど、でもすっかり気分が乗っちゃったあたしはイケイケルンルンで職員室へと向かった。

形だけのノックをして、ガラツと扉を開ける。

「加藤センサー」

あれ？ 席にいない。

と思ったら、部屋の向こう側にみんな集まっていたみたいだった。丁度集合がとけたのか、そろそろと散らばっていく。

「・・・センサー？」

あたしがおずおずと声をかけると、加藤が少し驚いた様に顔を上げた。

「おう、宮地」

・・・何だろう、この雰囲気。

「・・・どしたの？ みんな暗くない？」

「・・・ちよつと深刻なんだよ。静かにしろ」

加藤のシリアスな表情。

なんてこった、この人に「空気を読め」みたいに言われちゃったよ。

「……どしたの？」

コソッと囁くと、加藤は軽く溜息をついた。

「……まあ、これから皆には言うから、いいか。」

そう言うと、少しあたしに身を乗り出した。

「実は生徒が一人、亡くなったんだ」

「えっ?! 何で?!」

あたしは驚愕した。

同じ学校の生徒が死んじゃうなんて信じられない!

「……風邪か何かをこじらせたらしい」

加藤の台詞に、二重の衝撃を受けた。

「……それで?! 死ぬの?!」

風邪って言うのは必ず治るものであり、仮病に使う口実に過ぎないものだと思っていた。

「……そりやお前、色々あるだろ……人によって……」

そう言って顔を歪ませた加藤は、本当に心を痛めている様だった。

沈み込んでいる。

数学を受け持っていた生徒だったのだろうか？

「ところで？ 何か用か？」

加藤が気を取り直したように、顔を上げた。

あたしはなんだか、気が引けた。

「うーん、こんな時に言うのもなあ」

「お前が来るなんて、滅多な用事じゃないだろ？ いいから、言え」

いつもの顔つきで促す。いいのかな。・・・いいんだろうな。

ここで押し問答を繰り返り広げるのも、ガラじゃないし。面倒臭いし、ね。

「うん。実は、あたし、志望校変えた」

「・・・はあ？」

加藤の顔が、間抜けに伸びた。結構カッコいいなのに、もったいない。

「志望校を変えることにしたの。だってA判定なんだもん」

「どう言う事だ？」

「今、一生懸命受験勉強をして上を狙うと、今後の人生が楽しい物になるんだって」

「・・・まあ、そりゃそうだが。だからみんな頑張っているんだが。で、どこにするんだ？」

「東都大医学部！！」

「・・・何だつて??!!」

職員室中の注目を浴びた。ちよつとお、静かにしろつて言ったのはセンサーでしょ？ さすが自称他称共にKYね。

「宮地、それ本気か??」

「メツチャ本気。ねえ先生、あたしのランク、どれくらいかなあ、東都大医学部」

「・・・Cじゃないか？ 運が良けりゃBギリギリ。下手すりゃD」

「お、頑張りがいがあるねえ」

「どつという風の吹きまわしだよ?」

「あのね、失敗してもいいんだつて。一生懸命頑張れば、その後の人生が楽しくなるつて」

「それは聞いたし、落ちる事が前提かよ?」

「だつて唯がそう言ったもん」

「・・・山本・・・」

加藤はそう呟くと、片手で両目を覆う仕草をした。ガクツと肩を落として、ボソツと呟く。

「あいつはお前がここまで履き違えるとは、想像もしたらんかつたろうなあ。可哀想に」

可哀想つて、誰が? というより、何で?

「とにかく、この件は時間を設けてじっくりと話し合おう。いいな、宮地?」

気を取り直した加藤が、あたしを強い目で見た。

はあ? なにそれ、個人面談つて事? レベル上げた為に??

「えー、面倒臭い。センセーは、あたしが上を狙う事に反対なのお？」

思いつきり嫌な顔をしたら、加藤も負けずに思いつきり嫌な顔をして来た。子供っぽい奴だなー。

「そういう問題じゃないだろ。そんな勢いで人生決めてどうする？！」

「人生と結婚は勢いで決めるんだよ、センセー」

「実家の隣のおばちゃんと同じ事を俺に言うなっ」

あたしに噛みつくように言うと、加藤は身をまとめてさっさと部屋を出て行く。

あたしは肩をすくめて、教室に戻る事にした。

放課後、個人面談？ いやーなこった。志望校は自分で決めます。

人生だってね。自分で決めるんだいつ。

とにかく今日の下校、どうやって乗り切ろう。お兄と一緒になんて絶対、イヤだ。

ヒトミと一緒に、この際イヤだ。アタリそう。

そこで、振り返ちに会いそう。ああ、イヤだ。

Are you serious? 1 (後書き)

いつも読んで下さり、ありがとうございます。

実はこれは、昨日upするお話でした。が。大きな地震にあってしまいました。

幸い、家族は無事です。家も、耐震処理をしていないタンスが一つ、逆さまに突き刺さった程度です（笑。地震当時いた部屋では、食器が空中を真横に飛び出して行きました）ですが、連絡が取れない友人がまさしく被災地のど真ん中におり、とても心配です。

近所のコンビニは窓ガラスが割れ、商品棚は空っぽです。皆が不安で、錯綜しています。

このような時に、このような荒唐無稽でお気楽なお話を載せる事に抵抗を感じましたが、

テレビで地震のニュースしか流れない中、ほんの少しでも気が紛れれば、と思い直しました。

私自身、少し疲れてきましたので。

被災地の方々にお悔やみ申し上げます。今は少しでも節電をする事しか出来ませんが、

なんとか、国を上げて皆で頑張って行きたいです。

皆さまの暇つぶしに、少しでも役立ちますように……。

戶理
葵

A r e y o u s e r i o u s ? 2

ヤバい、って思った。

初めて、誰かの生キスシーンを目撃してしまった。

しかも、香取。どうしてこうも奴に遭遇するのよ。

二度ある事は三度ある？

三度目の正直？

仏の顔も三度まで？ この場合、誰が仏？

下校時にお兄と顔を合わすのが嫌で、あたしはここ三日ほど毎日、例の秘密の抜け穴ならぬ秘密のフェンスを飛び越えて、こっそり帰っていた。

つまり何が言いたいかって言うと、ここはあたしの縄張りだって言う事。

なのについての間にか、クラスの中のみならずあたしのお気に入りこの場所まで、

奴が大きな顔をして踏み込んでくる。

いつもの様にさり気なく人気のない場所に行き、さり気なく敷地端まで歩き、人目につかずにフェンスまでたどり着き、よし今のうちだソレまずは鞆を投げろっ

と思いつきり腕を振り回しながら小道を曲がったら、

思いっきり、男女のキスシーンに出くわしてしまった。

しかも、あまりの事に、目が反らせない。

一目でわかった香取は、今やトレードマークとなりつつあるメッシユ入りウェーブのキザな髪型。

両手をズボンのポケットに突っ込み、少し顔を俯ける恰好でキスしている。

一方の女の子は、小柄な体をつま先立ちまでして、両手を香取の首にまわして引き寄せ、情熱的にキスをしている。

情けない事に、少しドキドキしてしまった。

二人のコトが終わりそうなタイミングで、我にかえた。

ヤバい、見つかったちゃう。見つかったら、どう弁解しても絶対あたしが悪者になるっ。

咄嗟にダッシュで逃げようとして、寸での所で思いとどまった。というより、気付いたの。

何であたしが逃げなくちゃ、いけないの？　ここは元々、あたしの縄張りよ？

というより、あいつは新参者よ？

なのに人の縄張りを荒らすだけじゃなく、早速女の子を引っかけちゃうなんて、どう言ったら見をしているのよ？

結果中途半端に建物の陰に隠れる形になってしまい、これって一番

タチが悪いパターンかも。

「家に帰らないの、礼？」

女の子の声が聞こえて、ほら立ち聞きしちゃった。あたしのせいじゃないからね。

「何の為にだよ。意味ねえし」

ああもう、話していないで用がすんだらサッサと離れてくれないかな？　そこ、あたしの持ち場なんだけど。予備校に遅れるじゃない。

「ね、じゃあ部屋へ遊びに行ってもいい？」

「それこそ、何の為にだよ？」

「行きたいんだもん。ダメ？」

「気分じゃない」

・・・なんつか、彼女にすら、偉そうなヤツだなあ。さすがは香取様だわ。

その時、何故か、先日会ったアイドル由井白さんの笑顔が思い浮かんだ。

・・・由井白よっちゃんなら、なんて言うんだらう？　あたしが、「部屋に遊びに行ってもいい？」なんて聞いたら・・・。

想像して、あまりの恥ずかしさにドキドキしてきた。

それって、あたしがあの人とキスをしたら、って事に繋がって、

どんだけ変態妄想をしているのよっあたしはっ！！

思わず両手で顔を覆ってしまった。落ちつけ落ち着けっ。
あんまりドキドキしたら、またお兄のトコに飛んじゃうっ。

そんな事したらタイミング的にも最悪だけど、
テレポの理由を聞かれたらばれたら、更に最悪っ！！ 変態がバレるっ！！

ちよつと落ち着いてっ。

ああでも、由井白さんとキスをしたらの妄想が頭から離れない、誰か助けてー。

ここに、テレパシーだか読心が出るサイがいなくて、よかつた。。。

「おい、お前」
「きゃっ」

跳び上がった。振り返るとヤツがいるってなんかのタイトルみたい、いつの間にそんな所に立ってるのよっ！

香取が、今通話を終えました、って感じで折りたたんだ携帯電話を持ちあげたまま、驚いた様にあたしを見ている。
あたしはもう、焦るところじゃないの。ああ、乙女の妄想にハマっている間にこいつに後ろを取られた不覚なりっ！

「か、香取！ 何でここに！」

「それはこっちの台詞だ。何やってんだ、ここで？」

「え？ 何で一人？ 彼女は？」

「彼女？」

彼の大きめの瞳が更に見開かれて、しまったっ！ 口が滑ったっ！

あたしは固まってしまい、そんなあたしを香取は凝視した。

墓穴を掘ったわ、どうしよう。もう、誤魔化せない。墓穴はかあなつて墓穴よ、お墓を自分で掘っちゃう事よ？ 死亡フラグ立てちゃったわ。

やがて香取の目つきが、凄く冷たいモノに変わってきた。ああ、バレたバレた立場が無い。

言い訳をしたくなる……。

「あ、えつと、あの、用事があってここに来たら、たまたま、その……ていうか、何でこんなところでやってんのよっ」

「ヤツてる？」

香取が訝しげに片眉を上げた。

その真意まで問う余裕が、あたしにはない。顔が真っ赤になるのがわかった。

「そ、その……キ、キスをつ……」

「何だ」

少し呆れた様にあたしを見下ろすと、次にはとても意地悪な顔を

てニヤー、と笑った。

「他にいい所があんなら教えろよ」

「……」

「何、突っ立ってんだ？ ……ああ、そうか」

香取はさも面白そうに周りを見回した。何だろう？

「そついや、お前のサルっぷりを見せられたのもここだったな。丁度いい、見せるよ」

「……え？」

「あのフェンスをどうやって乗り越えるのか、割と興味出てきたんだわ、俺。しかも女がやるって、どうよ？ お前、俺らの事見てたんだろ？ じゃ、きっちり返してもらわねえとな」

「……な、何ですって??」

「登ってみろよ、さあ」

香取が、性格の悪そうな笑顔であたしを見下ろしている。

あたしは混乱中の頭が更に混乱してきて、呆然と彼を見上げた。

「どうしたんだよ、サル女」

こ、こいつの目の前でフェンスに飛び乗る？ そんなバカな。何か上手い事を言っただけで切り抜ければいいと思うのに、何を言っているのか、さっぱり思いつかない。

どうしよう、どうしよう。

そしておかしな事に、予備校に遅れちゃいけない、なんてどうでもいい事が頭をよぎっているし。

素直に回れ右をして、お兄に正門で出くわす選択肢もあるっていうのに。

どうしよう、どうしよう……あ、そうだ。

脇にある大きな木を、伝い登って見せればいいんだ。それくらいなら、普通の人レベルだろう。

って、どうやって木に登る？ 枝が結構高い所にあるんだよな。あれに跳びついたらオカシイんだろうな、どうしよう。

あ。

「そうだ！ 香取、あたしの踏み台になって」

「はあ？」

「あたしが高く跳ぶために」

「お前、喧嘩売ってんのか？」

香取の目が吊り上がった。途端に凄味が出る。

けどあたしとしては、キス中の香取より、こっちの方が格段に落ち着くわ。

「だって目的を達成するためには、あんたが手頃な踏み台なんだから」

「絶対お前、俺に喧嘩売ってるだろ」

「いいから、早く、背中貸して」

「気安く触んなよっ」

「彼女と違ってすいませんね、スカートの中、見ないですよ？」

そう言うなり、あたしは彼の背中に軽く左手をポン、とついた。それを支えに、跳ぶ。

次に右手で、一番手近な木の枝を掴み、その上に飛び乗った。

後は簡単。そこからフェンスに、一応両手を使って飛び乗って見せた。

これくらいなら、常人の域でしょう？ 我ながら確かに、サルっぽいけど。

「香取。カバン取って」

フェンスの上のあたしを、口を開けて呆けて見上げている香取に言った。

香取はそれに気付いて、驚いた顔のまま、あたしの鞆を拾った。

「投げるのか？」

「早く。誰かに見られちゃう」

香取が少し顔を歪めて、重い鞆を思いつきり投げる。

あたしはそれを体で受け止めた。衝撃でバランスを崩しかける。あたし、下半身は丈夫だけど、上半身は多分人並みの。

なんとか持ちこたえ、下にいる彼に向ってにっこりと微笑んで見せた。

「ありがと。こんな感じよ。良い子はマネしないでね？」

そして、学校敷地の向こう側に飛び下りる。よし、サッサとこの場を去ろう。

その時、彼がフェンスをガツと掴んだ。その音に振り向く。

目が合った。強い視線。

低い声で、一言。

「カッコイイ」

長い睫毛の綺麗な瞳が挑戦的な光を放ち、あたしを射抜いた。

かなり、ドキッとした。

慌てて、無言で踵を返すと、お隣のお稲荷さんの敷地に走って逃げた。

だって、今のって、何？

さっきから、ドキドキしっぱなしじゃない。早く気持ちを落ち着けないと、マジでテレポっちやうからっ。

結局あたしは、バス停を一つずつ飛ばすほど走ってしまった。

A r e y o u s e r i o u s ? 3

やがて運命の(？)週末が来てしまい、あたしは渋々と、待ち合わせ場所の駅前ロータリーに立っていた。

渋々と・・・でも、心の奥底が僅かに小躍りしている事を、無視は出来ない。

だってさ、もうすぐここに・・・

「どうもー」

派手な真っ青の車が、あたしの目の前に止まった。よくわかんないけど、後ろに羽みたいなのがついているヤツ。

ウインドウを開けて、サングラスをかけた滅茶苦茶カッコいい人が顔を覗かす。

その、派手とも言える登場に、あたしは呆けてしまった。

「・・・由井白さん・・・？」

「そだよー。乗って乗ってー」

ニコツと笑うと、車内で身を乗り出して、助手席のドアを開けてくれた。

あたしは慌てて回り込み、助手席に乗り込んだ。

シートベルトを締めて、隣の由井白さんを見る。

彼はあまりにも似合い過ぎるサングラス越しから、もう一回明るい笑みをあたしに向けて、車を発進させた。

重低音のエンジン音がする。

「どう？ 調子は？」

「・・・まあまあ、です」
「そっか。こっから智哉んちまで、20分ちよつとだから。あ、な
んか聴く？」

由井白さんは運転をしながら片手でステレオをいじりだす。

その、いちいちサマになる姿に横目で見とれながら、あたしは気付
いた。

すごいこれ、今時マニュアル車だ。

しかもなんだか、車内に鉄製のパイプみたいなのが張り巡らされて
いる。

運転席だけ違うシートだし、排気音はさっきから重いし、

何だか色々・・・

「・・・すごいですね、由井白さんの車」

思わず言ってしまった。

小娘のあたしでもこれだけはわかる。マニアが入った車だ。

「これ？ これ、オヤジのなんだ。オヤジ、カーキチでさ、給料殆
んど車に使ってるんだ」

由井白さんは朗らかに笑うんだけど、それだとなんで車内にパイプ
が通っているんだろう？

トリビア的に気になる・・・。

「ね、君の事、名前で呼んでもいい？」

急に言われた。

見ると、彼は何だか楽しそう。運転をしながら、含み笑いをしている。

「あ、はい」

「よろしく、真琴ちゃん。僕の事も好きなように呼んでね」

前方を見たまま、少し流し眼をする感じであたしを見て微笑んだ。それを見て、胸の奥底の小躍りが更に軽やかステップを踏み出したようで、あたしっては現金、恥ずかしい。でも、嬉しい。

イタズラ心もちよっぴり湧いて、

「じゃあ、よっちゃん？」

「それは・・・」

明らかに絶句している。ふふ、面白いつ。

笑いを堪えていると、彼はそんなあたしを横目で眺めてから、クスツと笑った。

「ま、こんなに可愛い子に呼ばれるなら、それも悪くないか。そのかわり、二人きりの時だけね」

気のせいか、彼の声色が少し低めの心地よいハスキーボイスになり、再びドキツとする。

二人きりの時って・・・

それって、女の子を妄想させるに十分な台詞よね。

この人、天然か遊んでいるかのどちらかなんだろっなあ……。

そして彼の言うとおり、20分後。

「着いたよー」

言われて唖然となった。

車は、観音開きの大きな門を通り過ぎ、当り前の様に中に入って行く。

よっちゃんは、勝手知ったるであろう場所に何の迷いもなく車を止め、エンジンを切ると車を降り、

車内でボーっとしているあたしの助手席ドアを開けてくれた。

あたしは促されるままに車を降りた。

顔は、前方の豪邸を見上げたまま、口を間抜けに開けたまま。

「……智哉んち……？」

「そう。智哉んち」

智哉んちって……友達んち、っていうのは……普通、お家ですよ？

つまり、家族の生活が営まれている場所を指すのであって……。

もっと控えめな建物モノを言うんでないかい？

「僕んちに、ようこそ」
「.....」

十何代目のお貴族様よろしく、品のある笑顔で大きな玄関から姿を現した水島さんは、相変わらずの凄い美貌。

服装は普通にカッターシャツを羽織っているだけんだけど、それすら高級に見える。これでユニクロとかだったら親しみが湧くのになあ。

「.....水島さんって、何者なんですか？」

「よっちゃんから説明を受けなかった？ お触り魔だよ」

冷たくあたしに言うんだけど、もうこの人の、あたしに対する喧嘩腰と言うか、悪意と言うか嫌悪感と言うかが混じった、物言いにも視線にも馴れてしまったの。

ので、普通に応戦した。ええ、お気づきの通り、あたしはかなりの勝気です。

「その美貌で、この家に住んで、痴漢やってる人って」

「最後の思いつきりハズしてるよね？ ワザとだよね？」

「サイコメトリーでしょ。知ってますよ、名前くらいなら」

視線だけあさつての方向に反らして言ってやった。

水島さんは無言であたしを見下ろしている。ふーんだ、イラついてるでしょ。仕返しよ。

すると水島さんは、後ろからあたしの肩にポン、と手を置いた。

あたしが振り向く。

水島さんは、無表情でじつとあたしを眺めている。手は、肩に置いたまま。

な、何……。その凄まじい美人顔で見つめられると、何故だか冷や汗が出てくるのよ……。

「例えば君、この数日間、お兄さんと口をきいてないでしょ」

一瞬呆気にとられて、それから事を理解した。

な、この人っ、今あたしをサイコメトったわねっ！！何の断りも無くっ！！

ショックに飛び上がって、彼の手を勢いよく振りほどき、その反動で後ろにあつた部屋の扉を背中で開けてしまった。

バランスを崩しかけて本能的に部屋の中を見て、

「……………って、何でお兄がここにいんのよっ！」

そこにはこの一週間避け続けたムカつく顔が、所在無さ気に立っているじゃないっ！！

お兄は無言でそっぽ向いた。どんだけシスコンだっ！

あたしは再び、水島さんをバツと振り仰いだ。

「全然、サイコメトってないじゃんっ」

「僕、そんな事言ってないよ？」

シレっと言われて、何この人っ。

一本取られた、くやしいうつ。

すると部屋の奥のテラスの扉が開いた。

「この家、庭がすごいね」

そう言って入ってきたのは・・・

「ヒトミ？」

再び呆気を取られる。だってそこにいるのは、見慣れた、どっからみても男にしか見えない彼女なんだもの。

カットソーとストライプのカッターシャツを重ね着して、その上からナチュラルなスヌードを引っかけて、同じ色合いのパンツを履いて、軽く広げた両手をテラスのドア枠にひっかけて。

後ろから太陽の光を浴びていて、そういうのってさ、王子様が登場する時のパターンでしょ？

「あ、真琴。いらっしやい」

当り前にニコツと言われて、あたしも思わず普通に聞いてしまった。

「何でいるの？」

「ご挨拶だね。呼ばれたからだよ」

「・・・ウソ。お祖母ちゃんに聞いたな？」

あたしは徐々に覚醒してきた。面白い事やお祭り大好きなヒトミだもんっ。絶対ここを嗅ぎつけたんだっ。見物しに来たなっあたしが嫌がっている事を知ってて！

「違うよ。薫に泣き付かれたんだってば」

「おい、何だよその言い方っ」

「本当の事でしょう？ 真琴の事が気になるけど、一人じゃみつともなくって行けないから一緒に付いて来てくれ、って言ったのはあなたでしょう？」

「違うっ。俺は万が一の事を考えて、少しでも人数の多い方が」

「おや。そんなに深かったとは」

ヒトミがバカにした様な眼差しをお兄に向けた。ついで、あたしにも向ける。

てか、ついでにバカにするなっ。

「まあまあ。女の子は、みんなで守ってあげる。いい事じゃない？」

よっちゃんが間に入ってきた。

あたしは無言でお兄を睨みつけた。

お兄も無言であたしを睨み返す。

「.....」

よっちゃんが続けて、わざとらしくくらいに明るい声で言った。

「仲のいい兄妹だねー」

水島さんが、冷めた口調で言った。

「仲良く同じレベルだよね」

手の平を下げてヒラヒラさせて、低レベルって事でしょ？ いちいち嫌味な人っ。

「恥ずかしいね。いい加減子供っぽい事はやめなさい」
ヒトミがバカにしたように続けて、何なのこの状況はっ。

「あんたはこっち」

水島さんが戸口に戻り、まるで犬を呼ぶかの様にあたしに向かって人差し指をクイクイツと曲げて見せた。

「え？」

思わず眉間にしわが寄る。何よ、そのあしらい方は。しかし彼は、相変わらず冷めた目で言った。

「聞いたよ？ 兄貴のそこばつかに飛ぶんだって？」

「・・・」

「だから、試しに自分の意思で飛んでごらん。兄貴の所に。行き先自由に決めるのは、それから」

そう言つて部屋を出る。

あたしは突つ立つてしまった。

何が始まるんだろう、これから？ どこかに連れて行かれるの？

ヒョイツと水島さんが顔を出した。

「なにしてんの？ こっちだよ。兄貴から離れなさい。喧嘩中なんでしょ」

そう言われてギクツとなった。いよいよだ。柄にもなく緊張が走る。

思わずお兄に視線を走らせたなら、お兄も不安そうな顔つきであたと水島さんを見比べていた。

やだ、やっぱブラコンだ、あたし……。

「真琴ちゃん」

部屋を出て行こうとしたあたしの腕を、よっちゃんが掴んだ。相変わらず明るく笑っているのに、それに不釣り合いなくらいに手の力が強い。

「いいかい？ いつもやってる通りに。緊張せずに、お兄さんの所に飛ぶんだよ」

目は……多分、初めて会ったあの時よりは笑っている様に見えるから、多分、あれほど大変ではないんだろう。だってそもそも練習だし？

あたしは黙って頷いた。

……でも、大変な練習って何だろう？ 帰宅部の身としては、苦労知らずでさっぱり想像がつかないの。

そもそもこんな訓練なんて、きつとどんな経験も役には立たないの
だろうけどね……。

A r e y o u s e r i o u s ? 4

絵に描いた様な螺旋階段。踊り場には虎の毛皮ラグ。多分本物。そして本当にあるのね、大理石の床。メッチャ固そう。

・・・ここで誰かを突き飛ばしたら、頭打って殺人事件だなあ。場所的には申し分無さそうだなあ。ね、コナン君。

「こつち」

先を歩いていた水島さんが振り返った。

「どつぞ」

扉を開けて、優雅な仕草であたしを部屋の中へと促す。そこはモダンとアジアンとクラシックが入り混じったテイストの、広い部屋だった。なのに統一感があってセンスがよく、あたしは目を見張った。

誰か、この部屋を好きな人がコーディネートしたに違いない。あのチェストとかその壁の絵とか、机の上の陶器の置き者とか、誰かの匂いがするようだわ。この部屋を愛している人。

・・・匂い？

「何か飲み物持ってくるよ。何がいい？」

声をかけられて顔を上げる。水島さんに、人形のような顔で微笑まれた。

「……」

この人は多分、性格が相当捻くれている。だけどそれをカバーするだけの顔と品を持っている。

おまけにこの豪邸と、おかしな能力ちから（チカラに関しちゃ人の事を言えないけど）を持っている。

本当、彼って何者なんだろう？ 胡散臭いよなあ。

あたしは言葉に詰まった。全てに、慣れない。

「……えと……」

「一応お客様だから、遠慮しないで。大抵のリクエストには答えられるよ」

見とれる様な笑みなんだけど、目が全く笑ってないの。

というか、全然興味が無さそう。

つまんなさそう、というより、何も映していない、瞳。

ふいに気づいた。

この人、よっちゃんから離れると途端にかつたるそうだな。

さっきまであたしに絡んでいたのが嘘みたい。

「じゃあ、スイカジュース」

つい、口をついて出た。

いやだつてね、スイカジュースって飲んだ事無くない？ メロンジュースでも良かったんだけど、メロンソーダがこの世にはあるし。

それに、ちよつと彼を驚かしてみたい、そんな衝動に駆られたから。

狙い通り？ 彼のつまんなさそうな瞳が一瞬見開かれた。ビツクリしている。

豪邸育ちでもスイカジュースは珍しいのね、きっと。成功だわ。

・・・でも、美味しいのかな、スイカジュース・・・？ 後悔すべ
き？

「余裕つて訳ね。いいよ」

水島さんが肩を竦めた。

部屋の隅にある小さな木製の丸テーブルの上に、クラシックな電話がある。

それを手に取ると、話し始めた。

・・・内線だ。内線があるんだ、この家、じゃない豪邸。さすがは豪邸。

内線で飲み物を注文するなんて、カラオケルーム以外で見た事無いよ。ほー。

電話を置くと、彼は両手をパンツのポケットにいれて、壁にもたれかけてテラスの方を見やった。

視線の向こうには、見事なお庭。

それをつまらなさそうに見ている。無言で、あたしをチラとも見ない。無視ですか。

でもその美貌に見つめられた方が冷や汗モノだから、存在を無視してくれた方がまだ楽かも。

あたしはあっさりと、彼に絡む事を放棄した。

程なく扉が開いた。

濃いグレーのスーツを来た20代半ばくらいの男性が入ってくる。手にはトレーがあつて、その上には飲み物が二つあつた。グラスとカップ。多分、水島さんが注文したものね。

・・・てことは。

え？ 使用人？ かわいいメイドさんじゃなくて、男の使用人？

使用人が、家の中でスーツを着て働いているの？

あたしはとつても驚いた。

あ、それとも今流行りの執事？・・・執事つて、何？

しかもかなりのイケメンで、何でだろう？ 顔採用？

誰の趣味で？

「ありがとう、新谷」

水島さんは壁にもたれかかったまま、片手でコーヒーカップを上から軽く掴み、柔らかに微笑んだ。

「はい」

執事の彼も、当り前に微笑む。うわ、なんかなんか、倒錯しているぞお。

その倒錯執事さんが、あたしの方にも近づいてきた。

同じく、極上の笑顔を見せてくれた。

「どうぞ」

そう言っ手渡された長細いグラスは、紛う事無きスイカ色。おお、スイカジューズだわ。

お礼を言っ手に取り、一口飲んで見る。おお、まさしくスイカの味だわ。本物のスイカだ。今、まだ6月に入ったばかりなのに、こんなに美味しいスイカをどうやって手に入れていたのかしら？ お金持ちだなあ。

コーヒークップを手にした水島さんは軽く口を付け、それを脇のチエストの上に置いた。

そしてスタスタと部屋を横切ると、今まで自分が見ていたテラス扉に近づき、そのカーテンを全て閉めた。部屋が暗くなる。

彼は一番手近にあった、肘かけ付の一人用のクラシックソファに身を沈めると、足を組んだ。

そしていつもの口調で軽く言った。

「どうぞ」

え？ 何が？

と思ったら、あたしの隣に立っっているイケメン執事さんが言った。

「よろしいのですか？」

「うん。いいよ」

まるで日常会話の様な、当り前の返答をしている。顔も穏やか。何の事かさっぱり分からないあたしは、ただどいつの間にか落ち着かない気持ちになってきた。

あたしの知らない、何かが始まる？

執事さんが振り返った。あたしを見つめる。

吸い込まれる様な、綺麗な目。

真顔で、言った。

「失礼します、お嬢様」

その途端、背筋がゾワッとなった。

背中から首筋にかけて、鳥肌が立った。

部屋の中の空気が、一気に変わった。

匂いも、先ほど僅かに感じたあの匂いで、一気に満たされた。

息を、飲んだ。

「・・・なっ・・・」

あたしは目を見開いた。思わず後ずさる。視線を執事の彼から外せない。外す事が、出来ない。

背筋を何かが高い上がるかのように、痺れと震えが走った。
これはっ……この感覚はっ……

「ちよっ……これっ……」

言葉にすら、ならなかった。

彼はイツトだ！ ヴアンパイアだっ！！

何でっ?! どうしてっ?! さっきまで全然普通だったのにつ!!

目が彼から反らせない。まるで見えない糸に絡み取られてしまった
様な感覚。吸い込まれる様な、不自然な程の黒い瞳があたしを捉え
て離さない。

体まで思う様に動かないのは、シヨツクのあまりに動けないのか、
それとも目の前の彼の能力ちからによるものなのか、それすら分からない。
文字通り、あたしは硬直してしまった。

彼がそつと片手を伸ばしてきた。

あたしの首元に手を添え、指で首筋を撫で上げてきた。

途端に、何とも言えない感覚が体に走った。

「何っ?! やめてっ!!」

振り払おうと手を上げたのに、力が出ない。

それと同時に目眩を感じた。腰から下の力が、急に抜ける。

それを待っていたかのように、彼のもう一方の腕があたしを脇から
抱き抱えた。

体の自由が効かない、目眩がする、なのに自分の瞳が見開かれたままなのが分かる。

あまりの展開の速さについていけない。

彼が、あたしの鎖骨の窪みの辺りに唇を寄せた。

すると途端に、ものすごく甘い感覚があたしを襲った。経験した事の無い甘さが、体全体を包む様な感覚。

彼の唇が触れた部分から、熱がじわじわと広がっていくようだった。

「……やつ……あつ……」

視界が霧に覆われたかの様に感じた。

自分の口からついて出る言葉が、いつの間にか抵抗の色を示していない事を、自分の耳で聞いている。

遠くから水島さんの、冷たい声も聞こえてきた。

「ほら。早くしなよ」

早くしなつて、なんの事だろう？

痺れる頭で考えた。

彼を促しているのだろうか？ 先に進めと？

それともあたしを促しているのだろうか？ ……あたしに何をしろ、と？

何だったのかな？

考えなきゃ。考えなきゃ。

なのに、恐怖が、全く、無い。

彼に、全てを、委ねてしまいたい。

自分が、一気に落ちて行くのがわかった。

誘惑に。

「……あ……」

甘さと心地よさと痺れの中、犯してはいけない罪に入り込んだような妙な罪悪感を感じながら、

あたしは徐々に意識を手放していった。

暗闇に落ちる直前に感じたのは、彼の唇の熱い感触と、

部屋の隅にいる水島さんの、冷たい視線だった。

焦っている。

目が覚めても、やたらと焦っていた。お兄に怒られる。

自分の部屋の中なのに、お兄とヒトミの姿が見える。なにか話している。

ヒトミが振り返った。

「あ、起きたね」

何でヒトミがいるのだろうか？ 外の陽がオレンジなだけけれど、朝か夕方かも分からない。体を起こして、ベッドの上に座る体勢となった。

その時、体の中から込み上げてくるものがあった。文字通り、込み上げてくる。

ヒトミが覗きこんだ。

「どう？ 気分は？」

「・・・気持ち悪い・・・」

「えっ？ 吐くのか？ 吐きたいか？」

お兄がかぶさるように聞いてきた。ウザい、とすら言えない。余裕が無い。

あたしは顔から血の気が引いて行くのがわかった。動いたら出そう。手を口元にすら当てられない。

「・・・うん・・・」

「トイレ、立てるか？」

立てるかっ。と心の中で突っ込むしかない自分がもどかしい。バカ兄貴っ。

隣でヒトミが、冷静に洗面器を出してきた。

「ここに用意してあるから大丈夫。それよりも薫、由美さんに知らせて、何か飲みものを持って来て」

「お、おう」

慌てて出て行く。そんなに慌てないでよ、やめてよ、もう。

ヒトミが優しい表情で、再びあたしを覗き込んだ。そっと背中をさすってくれる。

「大丈夫？　ここに吐きなよ」

お兄が出てっつてくれて安心したのか、ヒトミがあたしのツボを心得てくれているせいか、

あたしはお言葉に甘えて、たっぷりと出してしまった。だって我慢しようったつて、無理。

滅茶苦茶逆流したがっているんだもん。ごめん、ヒトミ。

ヒトミは嫌な顔一つせず、背中をさすり続けてくれた・・・ハズ。嫌な顔されても、見えないんだけどさ。

「まこちゃん」

底抜けに明るい声が近づいてきた。うう、安心するやら脱力するやら。

部屋のドアを開けたお母さんは、あたしの惨状を見て目を見開いた。

「あらまあ。はい、これ代わりの洗面器」

それだけかいつ。

「ありがとうございます、由美さん」

ヒトミが極上の笑顔で微笑む。

お母さんもしっかりと笑った。

「こちらこそ。ヒトミちゃんがいてくれると安心するわ。これ、ホ
ットアップルジュースね」

「ありがとうございます」

「薫くん、あんまり騒いだら駄目よ?」

お母さんはカップをあたしの机の上に置きながら、戸口に立っ
てるお兄を軽く睨んだ。

お兄は年甲斐もなく、少し唇を尖らせるようにして言った。

「騒がないよ」

「散々騒ぎましたものね」

ヒトミの冷たい、チクリ。

お兄が飛び上がった。

「おいっ」

「あらやだ。やっぱり」

お母さんがもう一回目を見開いて、あたしもお兄を見つめてしまっ
た。

そうなんだ、騒いだんだ。どうやって騒いだんだろっ？ どれくらい騒いだんだろっ？ うっついやだよ、こっ恥ずかしい。

お母さんが腰の脇に両手を当てた。

お兄をわざとらしく睨んで言う。

「本当にこの子は、まこちゃんの事になると見境がなくなるんだから。駄目よ、人様に迷惑をかけたなら」

「あっちが仕掛けてきたんだろっ」

「そんな事言わないの。お祖母ちゃんをお願いした方達なんだから。まこちゃんの為にやって下さっているのよ」

「そんなワケあるかっ。あいつら異常だろ。真琴をイットに喰わせようとしたんだぞっ」

あたしは息を飲んでしまった。

そして、あの時の事を、まざまざと思い出してしまった。

あの人。新谷って言う人。あの人から逃げる事が出来なかった。

あの方は、顔色一つ変える事が無かった。眉一つ動かさなかった。

あたしを脅しもしなかった。

傍から見たら、何をしているのなんて他人はさっぱり解らないに違いない。

なのにあの匂いと、あの恐怖。

あれをどう表現すればいいのだろうか。

命を狙われる恐怖とは、少し違う気がする。命、狙われた事ないけど。

きつと殺人者を目の前にしても、あのタイプとは違う恐怖を感じる

のだと思う。

あたしがあの時感じた恐怖は・・・得体の知れないモノに対する恐怖？

例えば、悪霊。

例えば、闇。

例えば、何もかも飲み込んでしまう、逃げる事の出来ない、異空間の悪魔。

得体の知れないものに絡み取られて、自分を壊されて、無くされて、なのに一生出る事の出来ない何処かに閉じ込められるような、そんな恐怖。

今までの自分の大切なものを全部、忘れてしまう様な恐怖。

それと、甘美。

水島さんの、限りなく綺麗で、限りなく冷たい瞳を思い出した。正直、あれが恐怖を増幅させたと言っても、過言じゃないわ。

「大丈夫よ。だってまこちゃん、ここにいないじゃない」

お母さんが、穏やかに微笑んだ。

それを見て、お兄が言葉に詰まった。

「でもっ・・・」

お母さんはあたしを優しく見つめて、頭を撫でてくれた。

そして柔らかい声で言った。

「大丈夫。お祖母ちゃんに間違いはないわよ。その方達の事も信じ
て、ね？」

最後の、ね？ はお兄に向かつて。

お兄は少し悔しそうに、イラつきながら目を反らした。
お母さんはそんなお兄を完璧に無視して、朗らかに言った。

「じゃあ、お腹が減ったら、何が食べたいか教えてねー。ヒトミち
ゃん、お夕飯久しぶりに家で食べていってね」

「はい。ごちそうになります」

「うふ。嬉しいわ。頑張るわ」

鼻歌でも歌いかねないご機嫌さで階段を下りて行く。多分、こうい
う人が一番強いんだよなあ。実は何も考えていなかった、とは思
いたくないわ。一応、あたしの親だし……。

ヒトミがあたしの方に、少しからかう様な眼差しを向けた。

「どう？ 吐いたらスッキリした？ もう一回吐く？」

……面白がられている……。

あたしの嘔吐物を見た後での反応がコレね？ かなり好かれている、
と解釈しておこう。

あたしは自然と、色んな意味で顔をしかめてしまった。

「……うん……大丈夫」

「じゃ、飲んでみる？」

差し出されたホットアップル。りんごはお腹に優しいのです。冷たい物より温かい物なのです。

あたしは黙って受け取った。

半分ほど口を付けたら、体が落ち着いた。

そこで、観察するようにあたしを眺めている二人に、恐る恐る聞いて見た。

「あたし・・・どうなったの？」

するとヒトミが、軽く首を傾けながら腕を組んで言った。

「倒れた。水島智哉が抱きかかえて、部屋に戻ってきたんだ。ビツクリしたよ。イットに襲われたんだって？」

・・・へえ？ 水島さんが抱きかかえてきた？ あたしを？

・・・どの面下げて？

「・・・うん・・・あれは・・・あれ？」

あたしはある事に気がついて、ヒトミを見た。

「ヒトミも知っていたの？ イット？」

「知ってるよ。でも見た事はない」

当り前の様に軽く言われて、更に驚く。思わず言ってしまった。

「え？ そつなの？」

疑問が二つ、同時に湧きおこった。

知ってるの？ いつから？ どうやって？

見た事無いの？ そんなにレアなの？ あたし、既にこの一週間で二人も見えたよ？

「うん。普段は表に出さないらしいよ、イトトの性質。割と私達と共存しているらしい。そもそも生き物の気を吸い過ぎなきゃ、相手の命を奪う事もないらしいし。害が無い、って言ったら語弊があるらしいけど」

何でそこまで知ってるんだ？ って突っ込みが喉まで出かかったのに、初めて聞く事が多すぎて脳内処理がついていけず、とても素直な返事しか出来なかった。

「・・・そうなんだ・・・」

「お前、吸われたのか？」

お兄が深刻な顔をして、あたしに身を乗り出してきた。

お兄はこの一週間、あたしがイトトに喰われるのを心配しての保護者登下校を行使しようとして、あたしは絶対あり得ない程嫌がって超避けまくって、

それが理由で一週間、あたし達は口も聞いていなかったんだから。

なのにイトトに襲われて気絶しちゃって吐いちゃって、バツが悪いっつたりやありゃしない。

あたしは、ちっちゃくちっちゃくなっちゃった。
妹の武器を使います。か細い声で、一言。

「……わかんない……」

「倒れるって事は、何かされたんでしょう？」

うっひょ、ヒトミに容赦なく、冷たく言われた、バツサリと。

うわっ、目まで冷たいよ、凍っちゃうよ。ちよっと水島さんに通じるものがあるわよね？

「その時の事、覚えてる？」

覚えてないとは言わせない、って瞳が言っていますよ、ヒトミさん。
あたしは縮こまって、懸命に思いだした。言い訳、言い訳。

「……ものすごく恐かったのに……途中から……恐怖感が
全く無くなったの……」

「……」

自分が全く抵抗出来なかった、と言う事はあえて言わないこの戦法、
この二人に通じるかしら？

「何の為にそんな事までしたんだよっあいつらはっ」

あ、お兄には通じた。さすが単純バカ。

思わずあたしとヒトミで眺めてしまった。お兄、かなり怒り狂って
おります。怒髪天を衝く、です。

でも嘘は言っていないわよ？　・・・ちよつと不憫だなあ。

ヒトミが軽く溜息をついた。余計な事は言わないって決めたらしい。あたしの脇の椅子に腰かけた状態で再び腕を組んで、足も組んで、立っているお兄を見上げる様にして言った。

「普通に考えれば、真琴を追い詰めて、目の前でテレポーションをさせたかった為」

「何の為に？」

「そりゃ、自分の意思で飛びきつかけを訓練したかったのでしょう。いつも真琴は、無意識に、意図せず、薫の所に飛んでいましたから」

あたしをジロツとみるヒトミ。

あんたの日頃の行いのせいなんだよ、って目で怒られてる、あたしは。

「恐怖感を与えれば、自分の意思で飛ぶとも思っただんじやないですか？」

ええ、その通りです。メツチャ怖かったんですよ。それで気絶しちゃったんです。

うっ、日頃の行いが悪い上に、相手が思っている以上に始末に負えない低レベルなあたしだったのかしら、これって。

じゃあもういいじゃん、訓練なんてやめようよーっ。あたしは始めっから嫌だつて言ってたんだよー。

それを無理やりやらせるからこういふ結果になっちゃんだって、責任転換でもなんでもいいわよっ。

「でもあいつら、何でイツトなんか飼っているんだよっ」

お兄の言葉で、あたしは我に返った。

え？ ちよつと待つて本当だつ。なんで水島さんちにイツトなんかいるの??

イツトつて、サイが好物な、人間を殺しかねない生き物なんでしょ？ それがなんで、あの家で働いているの??

しかも水島さん、あの新谷つて人がイツトつて知ってるっぽかった！ 絶対、そう!!

「・・・」

ヒトミが不機嫌そうに眉根を寄せただけど、お兄はそれに構う事無く、声を荒げ続けた。

「ヤクザはどこまでもヤクザだよな。やる事がとことん黒いぜっ」

え？ 何？

「ヤクザ？」

あたしが驚いて復唱したら、ヒトミが仕方なさそうに溜息をついた。

「水島勲いみお。流三会の会長。水島智哉の父親だよ」

・・・なんと？

「・・・えー？」

ビックリした。聞いた事あるよ、その名前・・・。
だからあの豪邸？　全然日本家屋じゃなかったけど、西洋館だったけど、部屋の趣味も良かったけど、って偏見持ちすぎ？　随分洗練されているヤクザさんだったなあ。

おまけに息子さん、えらい美貌でございますね？　昨今のヤクザは顔まで・・・

「そんな奴らと関わっているばあちゃんの気が知れねえよ。いくらサイの家系だつっても、あまりにも危険だろ。実際こつちの身が危険にさらされたんだからな。真琴、今後一切、あいつらとは関わるなよっ」

あたしがトリップしている間に、お兄は暴走していた。

あたしは顔をしかめた。

だって相手がヤクザかどうかなんて正直ピンと来ないし関係ないけど、

あんなに嫌な目にあわされて、多分かなりバカにした扱いをされて、それでも好んで仲良くしていくおバカさんが何処にいるのよ？　お兄に言われなくても、もう2度とごめんよ。受験勉強だつてあるのよ、あたし。

「・・・」

だけどヒトミは何が気に入らないのか、やっぱり眉根を寄せて椅子に深く沈みこむと、少し不機嫌そうに黙りこんだ。

S o , w h a t ? 2

ヒトミはその夜、我が家に泊っていく事になった。

彼女がウチに泊るなんて多分、10年ぶりぐらい。子供の頃に帰った様でとても嬉しい。

お夕飯前にお風呂に入る習慣のあるあたしは、「ヒトミちゃんもいつしよに入ったら？」と楽しそうに言いだすお母さんに、思いつきりガンを飛ばした。

17にもなつて、友達と一緒に風呂に入るなんて修学旅行でも恥ずかしいのに、この子は「騒がれるのが面倒だから」って理由で、外出先の公共お手洗いはいつも男子トイレに入る様な子なのよっ!! 騒ぐでしよ、そりゃ騒ぐでしよ、あんたが女子トイレに入ってきたら。

そんな人と一緒にお風呂に入れますかつ10年前とは違うんですっ。

ヒトミはそんなあたしを横目でチラ、と見ると、笑いを堪えて「いえ、私は後にします。真琴も今日はゆっくり入りたいでしょうし」なんて言った。

気合を入れるって言ったお母さんの夕飯は、いつもと同じで、つまり豪華だった。

生野菜とチーズをオリジナルのドレッシングで和えた前菜から始まって、煮物、唐揚げ、スナック、ちらし寿司、スイーツ。お父さんとお兄はいつものようにビールで晩酌。

あたしはまだ胃の調子を取り戻せず、油モノなんかは口にできなかつた。

それでも女子って、なんでスイーツは別バラなんだろう？

そしてそのスイーツを、「もう、いっぱいです」って言って微笑み口にしなかったヒトミは、やっぱり女じゃないと思う。甘いものが苦手なのよね、人生、損してるわよね。

あたしの食欲が進まなかったのは、イットに襲われて胃の調子が悪いただけではなかった。

イットに襲わせたのは、明らかに水島さん。それはもう、諦めた、というか受け入れた。

問題は・・・由井白さん。

あの人は多分、水島さんがあたしに何をするのかを知っていた。うん、絶対。

そしてあの人は多分、それに対して否定的では無かった。・・・ううん、むしろ肯定的、それ以上、積極的だった。

だってあたしを送りだす時に笑っていたもん。「落ち着いて、いつも通りにやるんだよ」みたいな事を言って、笑っていたもの。

何でかな。すごく悲しい。とてもとても悲しい。胸が痛い、っていうのは、こういう事を言うのだろうか？

ああいう事を、する人には見えなかった。もっと優しい人だと思っていた。

誰かを攻撃する様な人には見えなかったし、皆に優しいタイプかと思っていた。

・・・そして何より、自分が好かれている、と思っていた。

・・・勘違い、かな？　この場合。

自分で勝手に思い込んで、自分で勝手に裏切られた様な気になって、自分で勝手に傷つくなんて、何だか無駄なエネルギーを消費してるよなあ・・・。

ヒトミはそんなあたしの頭を無言で小突くと、お風呂に入りに行った。

・・・あたしがあんな所であっさり倒れて、よっちゃんさんも呆れているかなあ。

期待はずれだったかもなあ。
みつともなかったなあ。

「情けないねえ」

そう、情けないよね・・・。
で、え？

顔を上げると、げ、お祖母ちゃんっ！

「さんざでかい口を叩いて、適当な事を言って訓練を逃げ回っていただくせに、いざやってみたらあっさり気絶したんだって？」

仕事から帰ってきたお祖母ちゃんが、綺麗な顔して綺麗な姿勢で、すぐく軽蔑した目をしている。

うつ容赦ないよううう。

「真琴は甘いね。甘やかされて育ってきたから、努力は嫌い、つまらない事は嫌い、面倒臭い事は嫌い、呑気で先の事は考えない、なのお調子者で大口をたたく」

「それは育ちじゃなくて性格よ、お母さん」

にっこり笑ってお母さん、自分のせいではないって言っているのよね？ ひどくない？ やっぱお祖母ちゃんの娘だなあ。

それにあたしのその言われ様は何？ ……全部当たってんじゃん。

「まこちゃんは、いざという時にはとてもガンバリ屋さんよ？」

お母さんがにっこり笑った。

「いざっていつだい？」

お祖母ちゃんがジロツとあたしを睨んだ。

お父さんはいつも通り知らんぷりを決め込んで、あーん、怒られるよう。

確かに、いざって言うシチュエーションを作ってくれたらどうにそこで気絶した、という解釈も出来るわよね？ そうか、そういう事か。

「……ねえ、お祖母ちゃん」

あたしは恐る恐る口を開いた。

「・・・あたし、なんで訓練しないといけないの？・・・ですか？
その・・・イットの為？」

するとお祖母ちゃんは、眉間に皺を寄せた。

「あんた今まで、周りにどれだけ迷惑をかけてきたと思ってんだい？」

「・・・テレポ？」

「一生薫におぶさるつもりかい？」

「・・・でも、20代で消えるって・・・」

「だからそれまで、周りに迷惑をかけ続けてもいい、と？ 身内だからいい、と？」

お祖母ちゃんの目が吊り上がった。

「だからあんたは甘やかされてるって事もわからないのでしょうか。」

17歳の大人の感覚かい、それが？ 身内相手なら迷惑かけて、世話になって当たり前で、だから努力は無用だと？」

あたしは言葉に詰まった。

・・・そう言われると・・・立場が無い。

「訓練で能力だけでなく、その根性も叩きなおしておいで。いくら家族でも大人になれば、自分の始末は自分でつける心構えを持ったうえで、家族間での助け合いでしょう。全く本当に情けない」

お祖母ちゃんはやるとなると徹底的に容赦しない性格だから、つまりあたしは徹底的に潰されてる・・・。

そう、あたしは17です。もう、大人です。

確かに、色々と甘えていました。結構なお調子者でした。少しその辺りを改めないと、いい女にはなれませんか。今後、根性を入れ直していきたいと思います。

とりあえず手始めに、生まれて初めてお祖母ちゃんに、

歯向かってみようと思います。

「お祖母ちゃん、何でイットの事を今まであたしに教えてくれなかったの？ お兄もヒトミも知っていたよ。由井白さんも水島さんも知っていて、知らないのはあたしだけだったよ」

するとお祖母ちゃんの顔が、ますます不機嫌になった。

「真琴がきちんと自分の能力と向き合う様なら、話そうと思っていただけよ」

「でもイットって、サイの気が好物なんですよ？ あたしに教えてくれないと、困るじゃない」

「今まで困ったかい？」

そう言われて、あたしはハタ、と考えた。

そう言えば・・・この間が、初めてだった。あの、商店街で。

お祖母ちゃんは恐い顔をして言った。

「一つだけ教えます。イットはサイの気が好物だけど、サイが自分の気をコントロールすれば、そうそう襲われる心配も無いんだよ」

「・・・え？」

「なのに真琴は訓練もせず、サイの気を垂れ流し。二言目には『どうせ消える能力』。そんな事じゃ、イツトの方だって迷惑だろつよ」
「・・・でも、だったらそう言ってくれれば・・・」

あたしが思わず声を大きくしたら、お祖母ちゃんの喝が飛んだ。

「イツトの恐さを知らないお前が聞く耳もつかい？ その適当で他力本願な性格のお前が」

ああもうダメ、潰されました。

下剋上は早すぎました。明智光秀にもなれませんでした、出直して来ます。

あたしが思いっきりうな垂れた時、

「こんばんは、恵美子さん。お邪魔しています」

素晴らしいタイミングでヒトミが割りこんできた。

見るとお風呂から上がったらしく、短髪をタオルでガシガシ拭きながら、寛いだ様子で立っている。さすがは幼馴染、空気を読むのが上手いじゃないっナイスよナイスっ。

手には何故か、お店で貰う手提げのビニールバック。着替えかな？

「すみません、先にお風呂を頂いてしまいました」

「おや、ヒトミ。やっと来たの。久しぶりだねえ」

お祖母ちゃんが嬉しそうに笑った。ヒトミはお祖母ちゃんのお気に入りで、彼女を見るとすぐに「ご機嫌になる。ヒトミ、その調子よ。」

「真琴がいつも迷惑をかけているでしょう?」

「そんな事ありません。いつもだなんて」

・・・それって、たまには迷惑をかけているって聞こえるじゃない。
やめてよねっ変に刺激するのはっ。

「ご両親は元気?」

「はい」

「今日はゆっくりしておいき。今日と言わずいつでも、しばらく」

「ありがとうございます」

「薫くんのスウェットでごめんね、ヒトミちゃん」

お母さんが心配そうに言った。

「綺麗に洗ってある物だけど、イヤでしょ? まこちゃんのお洋服
じゃヒトミちゃんには小さいし、今度、自分のお洋服を何枚かここ
に置いていってね。ね?」

「ありがとうございます」

お兄のスウェットも、両腕をたくしあげているヒトミが着こなすと
何故かお洒落に見える。

・・・あれ?

「そっいえばお兄は? 部屋かな?」

あたしは何気なく言った。

するとヒトミがにつこりと笑った。

お母さんが言った。

「お風呂じゃない？」

お兄は夕飯後すぐにお風呂に入るのが習慣なのよね。

・・・え？ て、まさか・・・？

ヒトミは相変わらず笑顔で、だけど無言で立っている。

そのヒトミの笑顔を見て、あたしとお母さんとお祖母ちゃんが徐々に固まった。

ヒトミは微笑んで、手にしていたビニールバックをお母さんに差出した。

「これ、薫さんの着替え一式と、お風呂場にしまわれていた彼の下着全部です。彼の部屋は内側からカギをかけたので、開錠するツールはしばらく渡さないで下さいね」

・・・それってつまり、しばらくお兄に着替えも下着も渡すな、って事で・・・ひょっとして・・・え・・・まさかあの兄貴・・・

バカだけじゃなくて、超、ドエロだったのっ？？ というか、変態じゃんっ！！

「お兄、入ったのっ？！ ヒトミが入っていたお風呂に、来たのっ？！！」

「来たよ、普通に」

その返事に、あたし達女三人が息を飲んだ。じよ、「冗談でしょ??

「こつちが湯船に浸かっていたら、普通に入ってきて、普通に挨拶されて、普通に体を洗いはじめた」

ぎゃーっ！！ ウソでしょ！！

「そ、それで・・・」

「だからこつちも普通に出て、普通に服を着た後、薫の着替えを全て奪った」

その時、お母さんがふらついた。倒れる寸前、床にぺたっと座り込んでしまった。

お祖母ちゃんは息が止まりすぎて、顔が紫色になっていた。

そんなあたし達をみて、ヒトミは騒ぐでも無く、普通に言った。

「多分薫、今日一日の騒動のせいで心ここにあらず、なんだと思う。私が女だったと改めて気付くのと、自分の着替えが全部無いと気付くのと、どつちが早いかな？」

真顔であたしを見つめる。

そ、そんな事あたしに聞かないでよ・・・多分、着替えが無い事に気づく方が先だと思う。

「・・・そこまでのバカ息子とは・・・」

やっと息が出来たお祖母ちゃんが、やっとの思いで一言呟いた。

Beyond our control・・・どうしようもない

お兄は、その場にいた女性全員から総スカンを受けた。2度目だ、ヤツが女子から無視されるのは。

とにかくお兄は、何にも気付かないお父さんがお風呂に入りに行った午後10時半までの約2時間、ずっとお風呂場にいたらしい。他に行き場が無いからね。出てきた彼はヒトミにひたすら土下座をして、ヒトミは微笑んだまま無言で、あたしの部屋に引っ込んだ。

お母さんはショックを受け過ぎて、お兄の顔をまともに見れないらしい。青い顔をしてひたすら目を合わせない。やたらと炊事に力が入っていた。

お祖母ちゃんも真逆で、ものすごく怖い顔でお兄を睨むと一言、「お前は部屋から出ないか、この家から出て行くか、どっちかにしろ」と言った。極道みたいに怖かった。

そしてブツブツと独り言のように「バカにつける薬は無い、バカは死んでも治らない」と呟いて、自分の部屋に行ってしまった。

「くっそ、こんな目に会うなら、ちょっとでも見たモノ覚えておきやよかった」

「お兄、聞こえているからね、心の声」

実はちゃっかり観察していたムツツリ変態エロオヤジでは無い事を、祈ろう。多分そこまでの面の皮の厚さを持ちあわす様な、度胸や機転が無いと思うから、大丈夫だとは思っただけ。

あたしはベッドに、ヒトミは床に布団を敷いて寝た。
夜、消灯をして数分後に、ヒトミが呟いた。

「真琴さ、明日、行くの？」

「……」

それは先ほどからあたしの頭を悩ませてきた事で、だからあたしは即答できなかった。

出来る事なら、行きたくない。

あの人達の所に、行きたくない。

怖いし、恥ずかしいし、みつともないし、……悲しいし。

「……薫が、夕方、言っていた事」

「……何？」

「イットを飼うなんて、ヤクザな連中だ、って話」

「……」

確かに、あの新谷って言う人が急に牙をむいてきた時、物凄く恐かったのと同時に信じられない思いがした。

身内だと思っていた人が、敵だったと思えてしまったから。

「真琴の訓練話を聞いた時にね、調べたんだよ、流三会の事」

ヒトミが話したのは、水島さんのお家の事。あたしは訝しんだ。

どうしたんだろう？

「あそこは・・・まあ、どこの組とかでも似た様な物なのだろうけど・・・被差別者が構成員の大半を占めるらしいんだ」

「・・・被・差別者？」

「習うでしょう、学校で。・・・部落だよ」

あたしはそれを聞いて、少し息を飲んだ。

全く経験の無いあたしでも、その類の話は読んだ事がある。その人達の歴史が本当に悲しくて、悲惨である事は、読んだ事がある。きっと本当に酷くて辛かったのだらうなあ、と思うので、知っている、なんて言葉は使えない。

それくらいの常識は、あたしにもあるつもり。

「他にも、在日の人達。わかるでしょう、そういう人達が『普通の日本人』から受けてきた仕打ち」

「・・・うん。関東大震災の後の火災に対する、ウワサとかが有名なよね」

「そう。ひどいよね」

そこでヒトミは、しばし黙り込んだ。

「そういう人達の多くは、日本の中の一般社会で行き場・・・生きる場所がなくて、そんな彼らの面倒を見たのが現代のヤクザの元だ、って説。流三会なんかは、その筆頭であるらしい」

「・・・そうなんだ」

「薬物には手を出さない、とか、彼らなりのルールがあるみたいなんだ。あまり詳しく調べなかったから大した事は知らないけど」

暗闇の中、ヒトミがこちらに寝返りを打ったのがわかった。顔を向けると、彼女があたしを見つめている。

「法を犯したり他人を傷つけたりする人達の、肩を持つ気はないよ。それが集団行動となると、尚更だよ。エネルギーが大きくなって、それらが人に与える恐怖心はハンパないと思うから」

「・・・うん」

「でもさ。社会全体から蔑まれ、弾かれ、受け入れてもらえない人達は、どうすれば生きていけるんだろう」

「・・・」

「私達も、そんな被差別者の一員だって気付いている？」

「・・・知ってる」

気付かれない様に、人目につかない様に、隠れて、隠して、用心をして。

それは全部、この社会で生きていく為に必要な事。

「イットも私達も、普通の人達から見たら同じ側に立っている人間・・・生き物なのかもしれないよ」

「・・・」

ヒトミが『人間』を『生き物』と言いなおした事を、理解できる。差別される人達は、心に、人間以下の扱いを受けた様に感じるだろ

うから。

それは学校生活におけるイジメにも言える事だろう。イジメって、差別の原型だと思う。

「イットも私達と同じ様に、目立たず生きて行く事に必死かもね。・
・悪意の無いイットってのが存在するのは知らないけれど、それと悪意のある人間、どっちが恐ろしいんだろうね」

「・・・」

「そういう事で、じゃあおやすみ」

「ヒトミは訓練したの？」

あたしが聞いたら、ヒトミはビックリした様に再びあたしを見た。

「チカラの話？」

「うん。イットはサイの気が好物だけど、それはサイが訓練すればコントロール出来るってお祖母ちゃんが言ってた。ヒトミはまだ一度もイットを見た事が無いんでしょ？ 訓練しているの？」

ヒトミはジッとあたしを見つめた。

あたしは待った。

「・・・気のコントロールになっているかどうかは分からないけれど、練習はしたよ。見ない練習」

「・・・見ない練習？」

「そう。ヴィジョンが突然襲ってきた時に、なるべく早く、見ない様に止める練習」

「うそ。いつの間に？ どうやって？」

「そりゃ、自分の生活を守るためには必死になるでしょう、誰だっ

て」

ヒトミが自嘲気味に苦笑する。

あたしは眉をひそめた。

「どういう意味？」

「見たくないのに突然、襲われるんだよ、その光景に。誰かの感情に引つ張られて、視覚分野でもシンクロしてしまうのかな？ 最初はそれが、物理的にも心理的にも距離の近い誰かの、見ている光景だった。けどそのうち、遠くのものも見える様になってきた」

「・・・例えば、何を？」

「例えば、親の喧嘩。例えば、親の浮気」

あたしは言葉が出なくなってしまった。固まってしまふ。

そんなあたしを見て、ヒトミはクスツと笑った。

「家にいる時は注意していたんじゃない、向こうも。海外にいる親のそういうモノは、幼い頃は見ずに済んだし。・・・つまりはそういう事。背に腹は代えられないでしょう？ 精神衛生上よくないもの」

あたしは胸が詰まる思いがした。知らなかった、彼女のそんな思い。そんな状況。

ヒトミには、必要な時に支えてくれる人がいなかったなんて。

あたしはヒトミの能力が、自分よりよっぽど扱いやすく楽なもの

だと思っていた。

とことん子供で甘かった自分が、心底情けなくなってきた。
あたしは本当に、お兄に、家族に甘えていた。今は周囲全体に甘えている。

なんて事だろう。

あたしは今晚眠れないな、と溜息をついた。
ただどーっただけ解った事がある。

あたしは明日も、水島家に顔を出すのだろう。
あーあ、こんな事って初めてだよ……。諦めよ。

今回、少しデリケートな問題が出てきます。

あえてコメントは控えさせていただきますが、否定を出来ない歴史がタブーとして眠っている事は確かだと思います。

差別は恐ろしく、世界中で今でも蔓延している事です。様々な形で存在しています。

しかしそれを無くすには、綺麗事では済まない、相当の努力と覚悟が必要だと考えます。

まず身近な所から、平らな心で人と付き合いたい、と考える作者です。

こ難しくなりましたね。引き続き、お付き合いを宜しくお願い致します！

Do your best

昨日と同じ待ち合わせ場所に、昨日と同じ時間に行ったら、昨日と同じ派手な青いスポーツカーが既にあつた。

そしてお目当ての人は車の外にいて、ボンネットの上に軽く腰かけている。

周囲を、あたしぐらいの年代の女の子達4人に囲まれていた。何やら、盛り上がっている。

「そう？ バイトなんだ。たまにしかやらないし」

「えー？ でもかつこいいから、友達の間でも人気なんですよお？

うわあ、すごい、どうしよう」

「嬉しいっ！ ね、大学生？」

「うん」

にこにこしながら話している彼は、やっぱり普通の人とちよっぴり違うオーラを放っている。それは彼がサイだからと言っ訳では無さそう。

「……ところで今、これはどういう状況なの？」

「……よっちゃんさん？」

「あ、来た」

彼が振り返って、快活に笑った。うーん、眩しい。

「じゃね、楽しかったよ。バイバーイ」

「バイバーイ」

由井白よっちゃんはサングラスをかけると、女の子達に向かって手を振った。
取り囲んでいた女の子達も割とあっさりと去っていった。・・・あたしを観察する視線が、多少痛いんだけど。

「・・・あの・・・？」

お知り合いですか？　どんなお知り合いですか？　何を話していらんですか？

そう聞きたかったのだけれど、聞ける訳が無い。そんな、みっともない詮索。

彼はそんなあたしの内心には全く気付かない様子で、朗らかに言った。

「ん？　とりあえず乗って。あれ今日、お兄さんは？」

助手席のドアを開けてくれる。

あたしはおずおずと乗り込みながら、言った。

「・・・今日は・・・ちよっと・・・」

色々とお祖母ちゃんの逆鱗に触れたあたし達兄妹は、今日の訓練に際し、「薫は家に待機かつヒトミの半径5メートル以内に立ち入り禁止、真琴は飛ぶまで帰ってくるな」命令が出たのだ。

そしてヒトミは「甘ったれ娘が自立するまで付き添い不要、私と一緒ににお茶しましょ」指令を、丁重かつ巧みにすり抜けて、今、自宅に戻っている。

後から、来るかもしれない。

「ふーん？ よく引つ込んだね、あのお兄さんが。カレシも大変だろ？」

「・・・カレシ・・・」

「あの美形彼氏。智哉といい勝負だよ。かつこいいよねー、珍しくない？ 彼女の兄貴と仲のいい彼氏」

あっけらかんと言われて、微妙。

横目でチラ、と覗うのだけれど、彼はニコニコ笑いなが運転している。言葉通りの意味しか、無いらしい。言葉以上の感情も、無いらしい。

そしてサングラスでの運転姿が、やたらとかつこいい。

「・・・仲、いいですよ。昨日もお風呂、一緒に入っていましたからあの二人」

説明すべき全ての事情をすっ飛ばして、小さな声で呟いた。

するとよっちゃんさんは驚愕したらしく、ギョツとした表情であたしを振り返った。

運転中なので慌てて視線を前方に戻すのだけれど、口は軽く開かれたまま。

しばらくして、呆けた様な感心した様な口調で言った。

「へえ、それはよっぽどだね」

ええ、確かに昨日はよっぽどの事態でした。

そして彼は、まるで日常の挨拶の様に当り前に聞いた。

「どう、真琴ちゃん。具合は回復したかい？」

返答に詰まる。この人の意図する所が見えない。

この人、イットに襲わせるあの訓練スタイルに、何の疑問もないのかしら？

「……」

「気を落とさないでね。最初は皆、ビックリするもんだから」

「……」

「あ、ひょっとして僕の事も怒っている？」

丁度信号待ちで車が止まり、彼は振り返って屈託無く笑った。

「頑張るしかないだろ？ な？」

・・・なんか、心の中に引っかかるものがある。それが何なのか、自分でもよくわからない。

あたしは黙って俯いた。

好意を抱いている相手に対し、何だかよくわからないモヤモヤがあるのって、落ち着かないなあ。解消したい。

「今日は保護者無し？」

開口一番、水島智哉にも同じ事を言われた。あたしはドツと脱力する。

「・・・なんとでも」

「尻尾巻いて逃げてるんだとばかり思っていた」

・・・この人は、どうしても、あたしに嫌味を言いたいらしい。

「・・・そうしたいんですけどね」

あたしは、ジロツと水島さんを睨み上げた。

場所を提供してくれて、お茶まで出してくれている家主に対して、失礼な態度だとは思いますがね。

その家主が、突出して、お空を突き抜けちゃうくらいに態度が悪いものですからね。これくらい、目を瞑って頂かないと。

「思ったよりも負けず嫌いみたいで」

眼力を込めながらそう言うと、水島さんはしばらくあたしを見下ろし、それから少し溜息をついた。

「・・・あなたの勝ち」
「どうも」

水島さんがパンツのポケットから、革製の小銭入れを取り出した。それをよっちゃんが嬉しそうに眺めなる。

水島さんは苦々しげな表情で、小銭入れを開けた。

「まだ、使えるかどうかはわからないだろ」
「賭けとは関係ありません」

ウキウキとお札を受け取るよっちゃんさん。
あたしはポカン、とした。

「・・・賭け？」

よっちゃんはお札をポケットにしまいながら朗らかに言った。

「そう。真琴ちゃんが今日、来るか来ないか。智哉は来ない方に千円、俺は来る方に千円」
「なっ・・・」

そんな事するなっ！ というかそんな事、悪びれずに言うなっあたしにっ！！

「だって君、気が強そうなもの」

彼は明るくそう言いながら、あたしに近づいてきた。
ちよっと、いくら笑っていたって、いくらよっちゃんだって、それ

はカンジ悪くないですか？

って、あたしが身構えたのに、彼は相変わらずあたしの内心を無視して、

「俺、そういうコッて割とタイプ。よろしくね」

そう言つといきなりあたしのほっぺに

チュッ

と音を立ててキスをした。

「頑張れよ」

そう言つて、あたしの頭を勢いよく撫でる。

「な・・・」

そして固まっているあたしを背に、鼻歌でも歌いかねないご機嫌さで去っていった。

・・・今の、何？

「・・・浮いてるよ？」

水島さんに連れられて廊下を歩いている時に、彼に言われた。

ヨーロッパアンスタイルのプチホテルみたいな豪邸の、廊下に敷かれた絨毯は青色。あたしの顔が真っ赤だから、彼の髪が金色だったら信号色ね、て落ち着けあたし。

「はい？」

「地面から。両足が5センチくらい浮き上がっているよ」

振り返った水島智哉の冷たい目。

そんな事であたしの顔色は元には戻りません。益々赤くなりそうです。浮いてるなんてとんでもない、既に離陸しています。

それでも一応プライドがあるので、軽く彼を睨み返して言った。

「・・・舞い上がっているって言いたいんでしょう？ いちいち遠まわしですね」

「そっぴやあんだ、この間義希と会った時も舞い上がってたね」

あっさりとかわされて、しかもハッキリと言い当てられて、あたしは絶句した。

「その前、初めて会った時も」

彼はあたしを見つめながら、すごくつまらなさそうに言った。

「競争率高いよ？ キスは挨拶代わりだし、あの人自身、かなり惚れっぽいから」

あたしは恥ずかしさも手伝って、更に耳まで赤くなるのがわかった。あたし、そんなにバレバレ？ しかもこんな人に？

てか、興味が無さそうな顔をしながら、なんで人の恋心に口を挟むのよっ。

「・・・なんでそんな事あたしに言うんですか？」

「仕事に恋愛持ち込まれると、面倒なんだよね」

「仕事？」

物憂げに、つまりかったるそうに答える彼の予想外の台詞に、あたしはビツクリした。

仕事って言った？

「何それ？」

仕事って言うのは報酬を貰うのが常であって、その行為を継続的に行うものであって・・・

あたしの訓練これが仕事？ この人達、何者？？

そんなあたしを見て、水島智哉が軽蔑した様に言った。

「・・・あなた、俺達が善意で付き合ってるでも思ってたんの？」
その冷たい視線と言い方に、先程とは違った意味での恥ずかしさが、
一気に襲ってきた。

「・・・それはっ・・・」

「それとも義希がこの間言った、『面白そうだから』ってヤツ、本
気で信じてんの？ どんだけ子供？」

「・・・」

「遊びに付き合う程、俺達暇じゃないんだよね。こっちも忙しいん
だけど」

この人は今、あたしの心構えの甘さを突いてきている。そんなの迷
惑だ、と言っている。

あたしは下を向いて、唇を固く結んだ。

昨日から散々だ。お祖母ちゃんにも言われたし、自分でもイヤとい
う程自覚したばかり。

だけど今、知り合って日も浅い赤の他人にここまで冷徹に言われる
と、涙が出そうになる。

惨めで惨めで、恥ずかしくってしょうがない。

思わず口を突いて出たのは、どうしようもないくらい子供っぽい台
詞だった。

「・・・あなたに何かを頼んだ覚えはないわよ」

「だね。頼んできたのはあなたの婆さん」

「じゃあそれだけ子供のあたしに、さっきからどんだけ絡んでるの

よ、この性格最悪男。いいのは顔だけね」
「頭もいいけど？」

まるで絡むように意味の無い事を言うあたしに、ちっとも怯む事無く淡々と答える彼。

あたしはキレそうになった。
思いつきり爆発したいっ。

だけど香取を殴ったあの時みたいに、ここでブチっとキレてバコッと殴ったら、スカツとするだろうけどそれじゃあやっぱり、

この人には、通じない。

あたしは一呼吸置いた。

「子供は子供なりに必死なの。成長するっていうのも大変なんだからね」

深呼吸、ほどではないけど腹式呼吸。

気持ちを落ち着けて腹を決めると、あたしは彼を真正面から見据えた。

そしてキツパリと言った。

「色々迷惑をかけてごめんなさい。甘い所のある子供ですが、頑張りますので宜しくお願い致します」

そう言つて頭を下げる。

顔を上げると、水島さんは度肝を抜かれた様に立ちすくんでいた。

「……………」

あれ？ やりすぎた？ ドン引き？

これもこれでマズイのかしら？ どうしよう、言い訳をすべき？
え？ 何をどうやって？

なのにいつまでもこっちをガン見するもんだから、あたしは居心地
が悪くなってきた。顔を反らす。

「子供は簡単に、こうやって昨日の自分を撤回できるの。それで、
案外諦めは悪いの。だからあたしはここにいんの。いい？ これで」

197

更なる沈黙が続いて、ちよっといつまで黙っているつもり？

チラ・・・と視線を戻すと、彼は既にいつもの調子を取り戻してい
たらしく、いやそれ以上であるらしく、意地の悪い笑みを浮かべて
いた。

・・・な、何よ？

「諦めの悪いコつて、嫌いじゃないよ」

そう言つて腕を組んで、俯きながら近づいてくる。込み上げてくる
笑いを堪えている様子。ああ、バカにされている。

ただど側に来てあたしの顔を覗きこまれた時、あたしは悔しい事に

ドキツとした。

綺麗な瞳が、とても優しかったから。

「まあ、頑張っでごらん」

そう言って楽しそうにクスツと笑うと、体を起こして再び歩き出した。

・・・何だろう、あたしの言動の何かが、彼のツボにハマったらしい。今、目に表情があっただぞ。

あたしは何とも複雑な気持ちになって、後についていった。

この状況って、あたしにとっていいのかな？ 悪いのかな？ それすらわかんないわ。

D o m y b e s t

昨日と同じ部屋に通された。昨日の事がまざまざと思い出される。あたしは緊張と少しの憂鬱が混じって、水島さんを見た。

「・・・あの人、いい人なんですか？」

「は？」

「・・・新谷・・・さん・・・」

水島さんがキョトンとした顔を見せた。

「どういう事？」

「その・・・いい、イットなんですか？」

「いい悪いの定義が分かんないんだけど」

あたしの質問が煩わしい、という雰囲気を出している。

それでもあたしはめげずに続けた。

「・・・あの人に、あんな悪い事させてもいいのかなあ・・・って」

初めは、彼のあまりの豹変とイットに襲われたっていうショックで深くは考えなかったんだけど、

・・・誰かを使って人を襲わせるって、やっぱりあんまりじゃない？

いや、この際、あたしの立場は無視してさ。

彼はせっかく頑張って普通の人を演じているのに、

そんな彼を、化け物扱いをしている。

思いつきり人権を無視していませんか？ あ、この場合、イット権？

水島さんが呆れた様に言った。

「あんだ、そんな綺麗事を言ってる場合？ 世間知らずを自覚したんじゃないの？」

腕を組んで、部屋の壁に寄り掛かった。

「俺達のやり方がお気に召さないならさ、別んどこ当たってよ」
「……」

こういう時に、あたしはイラツとくる。
子供だから、半人前だからという理由で、大人は子供の言う事に耳を貸してくれない時がある。あたし達が状況や身分をわきまえず、理想だけを口にするから、らしい。

しょうがないかな、と思う。だってその通り。あたしはまだ、大人の世話にならないといけない子供だもの。彼らの庇護下にある以上、彼らには逆らえない。その資格がない。

あたしってバカじゃないからね。それがわかつちやうんだよね。それで面倒臭くなって、考える事をやめちゃうの。

だけど、さ。

子供にしか見えない、正しい事だってある。なのに。

「由井白さんは、今、何をやっているんですか？」

あたしは話題を変えた。

水島さんは、それこそかつたるそうに答えた。

「寛いでんじゃない？」

「今、『俺達のやり方』って……」

「……ああ。何であいつがここにきたかつて事？ 新谷を殺した
いからだよ」

普通に言われたものだから、スルーしそうになった。

え？ 今、殺すって言った？

ワントンポ遅れて水島さんを凝視すると、彼は憂いを含んだ綺麗な
顔で、煩わしそうに言った。

「彼が君を本気で喰おうとした時、いつでも殺せるようにね。待っ
てんだよ、君が喰われそうになる瞬間を」

「……殺す……？」

「そ。人間と同じ。簡単に殺れるよ？ ナイフでも銃でも。おまけ
に死体は灰になるから、後始末にも困らない。義希はイツトを、チ
ヤンスさえあれば殺りたくってしょうがないの。君が危なくなっ
たら嬉々として飛んでくるでしょ、あの人」

「な……」

は、話が一気に非日常にぶっ飛んだ……。

いえ、この場が最初から非日常である事は解っていました。……
……そっか。イトトって死んだら灰になるんだ……。そこは映
画と同じなんだ……。

「……でも、この場によつ……由井白さんがいないのは？」
「質問の多い子だねー」

ついに、水島さんがイラついた。これは彼なりに「キレた」ってヤ
ツかもしれないね。あたしをジロツと睨む。

「僕が許さないからだよ、彼を殺す事を。新谷は御覧の通り優秀だ
から」

その時、背後に人影を感じて振り向くと

「新谷さんっ」
「昨日は失礼致しました」

びびびビツクリしたっっ！！ 何にも感じなかったっ！ 何にも匂
わなかったっ！ というか、この部屋の元々の彼の匂いに消されて、
彼が現れた事に気づかなかったっ！ いつの間につっっ！！

あたしは後ずさった。もう単純に、「わっっ！！」って誰かに驚かされ
たに等しい気分。

彼らは、あたしをジツと見つめた。

あたしは思わず、生唾を飲んだ。は、始まる……？

「飛ばないの？」

水島さんが訝しげに聞いた。

「はい？ え？ い、今？」

「じゃなくて。脅かしたのに。ビックリしたら飛ぶんじゃなかったの？」

・・・え？

・・・あ！！

きゃあっ！！

「ほ、ほんとだ！！ あたし、飛んでないっつー！！」

やった、あたし飛んでないっ！ たった今ビビったのに、お兄の所に行っていないっ！！

一気にテンションが上がった。やった、やった！！

「コントロール出来たって事っ？ 成功っ??？」

「そうは見えなかつたけど」

水島さんが眉根を寄せた。納得がいかないらしい。知るかいつそんなのっ。要はむやみやたらに飛ばなきゃいいんだっ。お兄に迷惑をかけないって事でっ！

「たまたまスイッチが入んなかつただけじゃない？ あんたそんなに、動揺する度に兄貴んとこに飛いってんでたの？」

「ええ、まあ、ほぼ」

「そんなんじや子供の頃とか遊べないじゃん。かくれんぼとか、おどかしっこなんて平気でするだろ？」

「ええ、ですからよく神隠しに」

「うわっめんどくさっ」

水島さんが綺麗な顔をしかめた。

あたしはそんな彼を無視した。だってなんと言われようと嬉しいもんっ。

「だから我が家はおどかしっこは禁止でしたよ。だから何？ 家庭の事情！ それよりあたし、ハタチに近づいてきて能力ちからが消えてきているって事かなっ？」

ああっウキウキするっ。

そんなあたしを不審そうに横目で見て、水島さんは言った。

「調子に乗んなよ、うるさいな。まぐれかもしれないだろ？ とにかくやるよ、今から」

「えー」

あたしは口を尖らす。

そしてその間ずっと、新谷さんは動じることなく、無表情に近い微笑みを浮かべている。

・・・この人、何を考えているんだろう？ そもそも、人間と同じ思考回路なんだろうか？

あたしは初めて、彼に話しかけてみた。

「・・・新谷さん、あたしって美味しそうですか？」
「はい、とても」

ためらいなし、ですか。こんな質問に。さすがにビビるでしょ。

「我慢、出来ますか？」

「あなたが男性なら、解ると思いますよ。寸止めを食らう男の気持ち」

「・・・」

「この子今、リアルに想像してるよ」

水島さんが横から口を挟んだ。その通り、想像しましたよ。寸止めって、何？

「・・・」

「しかも限界感している」

「未経験なんで」

男じゃないし。彼氏いない歴17年半だし。しょうがないでしょ。

あたしは新谷さんに向き直った。

「新谷さんからは今、殆んど何も感じませんね。इटトの気も、匂いも殆んど」

「殆んどって、少しは？」

「はい。この部屋と同じ匂いがします。この部屋、新谷さんの作っ

た部屋ですか？」

ここで初めて、新谷さんの笑顔が無くなった。
そして真顔で水島さんを振り返った。

「・・・成程。そうなんですか」

水島さんが肩をすくめる。

「見込みありそう？」

「複雑な心境ですが」

何？ 何の話？ あたしの話？ 本人の前で、何？
新谷さんが、再びあたしに向き直った。

「宮地様。私は今回、あなたには手を触れません。あまり刺激が強
すぎても、訓練にはならないでしょうから」

昨日の様に。

つて事でしょ？ あの無様な結果は、訓練にならなかつたって、意
味でしょ？ うう。

あたしは俯いた。イット相手に、この立場の無さ感は何？

「・・・はい」

「自分の意思でコントロールをする時の感覚を、今日、少しでも感
じて頂ければいいのですが」

指導されちゃってるよ、イットさんから。これってライオンからウサギが、逃げ方を教えて貰っている様なものなんじゃない？
僕、ココで見ているだけだからさ、逃げてご覧？ みたいな。

「頑張りまーす」

あたしがしぶしぶ返事をすると、

「真剣にやれよ？ なんなら新谷に、目の前で食事でもしてもらおう？」

「あ、それは大丈夫。平気。真面目にやります。精一杯頑張ります」

即効辞退した。生き物の気を吸っているイットのおぞましさは商店街で経験済み。怖すぎる。

以来、あたしの不幸な週末が始まった。

毎週土日、たつぷり2時間以上、イケている男性3人の下、ありがたい訓練を続ける事になる。

そしていつまでたっても、あたしはテレポーションをする事が出来なかった。

・・・チカラ、なくなっただんじやない？

。㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

B a d b o y ?

受験勉強と埒のあかない練習とで、あたしのストレスは生まれて初めて、ピークを迎えていた。

何なのよ、これって。これが人生の山あり谷ありってヤツなのね。体育の時間、コート内のバスケの試合を膝を抱えながらの見学中に、あたしは知らず知らず歯噛みをしていた。それを唯に、気付かれた。隣から顔を覗きこまれる。

「真琴、最近大変そう？」

「何が？」

「この頃、何か暗いよ？」

少しビククリした。まさか顔に出ているとは思わず、能天気なあたしが暗い顔？

「・・・そう？ ちょっと色々あって、疲れちゃって」

あたしは苦笑した。

「あたしの志望校アップを阻む奴らがいるのよ」

「・・・どっという意味？」

あの日以来、テレポを出来る気配が無い。

不幸な事に、新谷さんの雰囲気にも馴れてしまった。おかげで私語が増えてしまい、今では彼の嗜好まで知っている。

美しいものとかバランスが取れたものが好きらしい。花でも絵でも、洋服でも空間でも。

きつとイットなんか生まれたいなければ、ヤクザにならずに芸術家になっていたのかも。それが建築家。服のデザイナーも似合いそうだな。

とにかく、週末は無駄なエネルギーを使いまくっているって事！
あたしは溜息をついた。

「唯だつて、最近益々疲れていそうだよ？　大丈夫？　ちゃんと寝ている？」

「うん・・・ちゃんと寝てはいるんだけど・・・なんだか疲れが取れなくて・・・」

「どっかで聞いた事のあるCMみたいな台詞」

二人でクスクスと笑う。

あたしは体育館を見回した。普段以上に人がまばらだ。学校を休んでいる人、体育を見学している人、もろにサボってどっかに行っちゃっている人、そんな感じだからバスケットをプレイしている人は殆んどいない。

学校在職30年との噂の体育教師は、これまたどっかに行ってしまった。授業中に顔を出す事は殆んど無いの、あのおじいちゃん。

「相変わらず風邪が流行っているよねー」
ため息交じりに言ってしまった。あたしも風邪を引いたら、訓練も勉強も、タルい体育も休めるのに。

「結構こじらせている人達も多いよね？　菊池さんとかもっ、一週間ぐらい休んでいるじゃない」

「受験期じゃなくてよかつたよね。男子も結構ヤラれているよ？
今日も3人休んでるじゃん」

「学級閉鎖って、何人からだっけ？」

「さあ？ 10人くらい？ まだまだ足りないな」

「でも、体育を休んでいる人達なら沢山いるね」

「自習にしちゃえばいいのに」

二人してタルタルの会話をしていたら、男子コートから声をかけられた。

「おい、宮地さん」

私？ 呼んだ？

「男子のチームに入ってくれない？」

「・・・は？」

「人数、足りないんだよね。試合するんだけど」

聞き間違えたかと思った。今、何て言った？

なのに目の前の男子は、真顔で立っている。

周囲にいたクラスの女子も、目の前の男子達も、みんながあたしに注目している。

あたしはポカンとした。

「・・・え？ 無理だよ。男子チーム？ 嘘でしょ？」

「香取がさ、宮地さんなら余裕で戦力になるって、すっげえ推して

るんだよ。こつち、怪我人病人続出でさ、頼むよ、入ってよ」

なんつっだつ、それっ！

あたしは頭をこん棒で殴られた様な衝撃を受けた。

冗談じゃないっ！ 何故あたしっ？ 香取が何を言っただつてっ？

あたしは騒ぎ出した。

「じゃ、やんなきゃいいじゃん、試合なんてっ」

「いや、俺と山田、体育の内申、やべえんだよ。ここで真面目に試合をこなしとかなないと、色々大変なんだよ、頼むよ」

「知らないしっ！」

「頼むよ、宮地さーん」

「奢るからー」

「あり得ないっ！」

「つつめてえなあ」

いやーな声が聞こえてきた。

振り返ったら、意地悪な笑みを浮かべた香取が立っていた。

メッシュ入りウェーブの髪の下から、大きめの瞳を細めてニヤニヤしている。

「あたまかす頭数揃えるだけだろ？ 付き合っでやれよ」

・・・てつめえ、香取！

そのバカにした様な笑顔が更にあたしを燃え上がらせた。再びぶん殴ってやるうと思ってしまった時、あるう事が、後ろで女子が盛り上がったしまった。

そして、その声であたしは我に返ったの。だってね、この世で一番怖いのは女の集団だから……。

「いいじゃん、宮ちゃん、バスケすっごい上手なんだから」

「そうだよ、真琴の腕はプロ級だよね」

「入ってあげなよ。やれるって」

「やれないって!」

「中森君と山田君に付き合ってあげるだけじゃん。コートに立ってれば?」

……あり得ない……。

まるでお祭りでも始まるかのように嬉しそうに騒いでいる女子達を見て、あたしは愕然となった。

嘘でしょ?……外堀から埋められていく……。

元凶が、あたしの後ろでクスツと笑った。

「じゃ、お前はこっち」

振り向くと同時に、黄色いゼッケンを投げられた。本能的に受け取ってしまう。

悔しくって睨んでしまった。

「……」

「楽しくやるっぜ」

嫌味なくらい綺麗な立ち姿で、挑戦的に微笑まれた。はめられた、と痛感した。

確かにあたしはバスケットが得意よ？ バレーも、陸上も得意よ。そんなでもって大好きよ。

だからこそ、目立たない様に、目立たない様に、楽しんできたって言うのにつっ！！

そんなあたし達をみんなは面白そうに眺めながら、試合は始まった。あっと言う間にボールは相手チームのゴール下。あたしはそこからこっそり離れた。

ボール来るな、来るな、あ、やった入れたゴールだつ。・・・と言う事はえっ？ うわっこつち来るっ。

止める？ 止めろって？ イヤだよ。

とか思っていたら、あたしの横を普通に走り抜けられた。ホッとする。そだよー。

なのに、そこからボールを奪った香取が、まるでお約束の様にあたしにボールをまわしてきた。

「なっ・・・」

あぁっまた本能的に取っちゃったよっ！ え？ 走るの？

一瞬動揺して、体の向きを変えようとした時、あたしは吹っ飛ばされた。

後ろに突き飛ばされ、思いつきり尻もちをついて倒れてしまった。

「いった・・・」

体を強く打った。ちよつと星がまわったよ。頭も打った？ マジ痛い。

相手チームと接触したらしい。

腕も擦った。見ると、肘から血が滲み出ている。

ボールを奪われていた。当り前だけど。

無意識に、滲み出た血を舌で舐めていた。

そして、頭にきた。

立ち上がる。ボールはその間に再びあたし達チームの手に入っていて、ゴールを決めていた。

・・・ざけんなよ。

こっちにドリブルをしてくるヤツらがいる。もちろん相手チーム。

あたしは頭が冷たくなるような感覚を、どこかで感じていた。

彼らが通り過ぎる瞬間、あたしは腰をわずかに落とした。そしてその懐に入り込んだ。

そのままボールを奪い、何も考えずに走り込む。

「は？」

ゴール下にいる男子二人の間を、大きなドリブルと低い姿勢で擦り

抜ける。それと同時に跳んで、リングにボールを入れた。

ボールが弾む。あたしも着地する。スカツとした。

・・・スカツとした？

慌てて振り向く。皆が固まっていた。

ううん、正しくは、香取を除いて皆が固まっていた。
しまった！！ やっちゃった！！

香取がニヤニヤ笑っている。

男子が度肝を抜かれている。

女子が口をあんぐりと開けている。

ああああ、嘘でしょおお？

「・・・すっげ、なんだ、あれ」

「見たか、あのダンクシュート」

「ウソだろ？ 信じらんねえ」

「あいつの動き、女とは思えない」

「いや、男でもすげえだろ。俺、初めて見た」

・・・ど、どうしよう。誤魔化さなきゃ。とりあえず、笑ってこころ、
お得意のヤツ。

「・・・あ・・・ども・・・えっと・・・ありがと・・・」

駄目だ、みんながあたしをガン見している。

ヤバイヤバイヤバイ、お兄に怒られる、お祖母ちゃんに叱られる、またバカだのアホだの言われてしまっつ。

唯がおずおずと近づいてきた。

「真琴……」

「こ、これ、ちょっと特殊な靴で、その、高く跳べちゃうんだ。すごく動きやすいし……」

笑って足を上げて靴を見せるんだけど、おっとこれは学校指定の体育靴だった。

「……」

唯の見慣れた絶句も、今はひたすら寒く感じる。

あはははー、そんなにビックリしないでよ、バスケしただけじゃん、シュートしただけじゃん、2階まで跳んでないでしょー？

「香取っ」

勢い余ってヤツを振り返り怒鳴った、この諸悪の根源っ！！

「あ？」

「ちよつとこっち来てっ！」

彼の肘下をグイッと掴むと、あたしは力いっぱい引っ張って体育館を出て行った。

後ろを見ずにそのまま進む事、例のフェンス前。

あたしはそこでやっとヤツの腕を離すと、飄々としたその顔に向か

って怒鳴ったのよ、バカヤロウっ!!

「あんたっ！ あたしにつ！ どんだけ恨みがあんのよっ！」

「は？ 俺が悪いってか？」

「悪いでしょっ！ あんたが元凶でしょっ！ ほっといてよっ！」

「ほっとけ？ ちよくちよく俺に絡んできたのはお前だが」

「はあ？ 仕返してワケっ？」

「まっさか」

香取は口元に拳を当てて、喉の奥でクツと笑う。

そして急に、あたしに顔をグツと近づけた。長い睫毛が間近に迫る。

「つまらなさそーにしてっから、楽しませてやったんだよ。サルを隠すのも大変だろ？」

大きな瞳を愉快そうに細めている。

あたしはその物言いと態度に、ついにキレた。

・・・なんだとおおお？

「大きなお世話よっ！」

その可愛らしい作りの憎ったらしい顔の、横っ面をひっぱたこうとして腕を上げたら、

次の瞬間、その腕を乱暴に掴まれてしまった。

そのまま力任せに、フェンスに押し付けらる。痛いっ。

「二度も男を殴ろうとするなんて」

至近距離から、ドスの利いた低い声が聞こえてきた。瞑っていた目を開けたら、香取の強い瞳が、あたしをねじ伏せる様に見つめていた。

「親にどんな教育を受けてんだ？」

その迫力に、情けない事にギクツとなった。なのにその視線から逃げられない。

あ、あんた今、その口で「親の教育」っていったわね？ あんたが言ったわね？ それ、あたしの台詞よっあんたの親の顔が見たいわよっっ！！ この性格礼儀破綻者っ！！

睨み合いが続いた。

しばらくして、香取がニヤツと笑った。

「現実、受け入れたら？」

は？

すると、ふっと腕が緩んだ。そして香取があたしの手を離した。

「ま、いい暇つぶしにはなっただぜ」

何？

香取は踵を返すと、軽く手を上げてひらひらと振りながら去って行く。

あたしはヤツの後姿を呆然と見送った。

何？ という事？ 現実を受け入れるって？

暇つぶしになっただと？ ふっざげんなああっ。

「ああ、そっだ」

ヤツが立ち止まった。再びこちらを振り向く。満足そうな笑みを浮かべて。

「お前、サルっつーよりネコかもな」

「は？」

「ああ、そんな可愛げのあるもんでもねーな。・・・豹とか？」

「何？」

綺麗に、微笑まれた。

「やっぱりかっこいんじゃない？」

そして再び、呆然とするあたし。
奴は悠々と去って行った。

ちょ、何あいつっ。

出会った時の台詞をそのまま返すわ、二度とあたしに顔見せんなっ
！！

あたしは何故だが、よくわからない地団駄を踏んでいた。

My type

その後訓練に費やされる土日は、全然進展が無かった。まったく時間とエネルギーの無駄遣いだと思った。

新谷さんは、会えば会う程いい人すぎた。やがて水島さんは練習場所に姿を現さなくなった。

ホント、何のためにやっているのか目的を見失って来たんだけど。

そんなある日、溜息をつき続けながら客間（だと思っ。豪邸は部屋数が多すぎる）の扉を開けたら、明るい声をかけられた。

「お疲れさん」

「あ、よっちゃん」

顔を上げたらよっちゃんが、ソファの縁に腰をかけて、長い脚を持って余し気味に組みながらこちらを見ていた。

捲りあげたシャツから出ている腕まで長い。男の人らしい、少し陽に焼けた色で、武骨な骨格に血管が少し浮き出ている。

全体的にバランスが取れていて本当にカッコいい。見とれるなんて好きなんだなああたしと再確認。

「ね、たまには息抜きに、どう？ メシなんて」

「・・・マジでっ？ それってデートっ??」

「・・・あ、はい」

ドキマギして、やっこの思いで返事したら、彼がニコツと笑った。

その笑顔がとても眩しい。

で、それとは対照的に、造り物みたいにやたらと美人顔なのに無愛想な悪人が（コイツは悪人だ。絶対そうだ。あたしがそう決めた）彼の隣でつまらなさそうに言った。

「よかったねー。バイバイ」

軽くムツときたけど、無視だ無視。

ちよっぴりお洒落なイタリアンレストランに、あたし達は入った。二人で一つのピザと一つのパスタを分けたりして、ああ、これって完璧にカップルじゃない?? さっきから凄くいい感じなんだけど、誰が何と言おうと、水島智哉が何を言おうと、今のあたしは完璧に椅子ごと床から10センチは舞い上がっているわ。

・・・これでヒトミの事を彼氏だと思ってくれなきゃ、最高なのになあ・・・。

「まあ、気にしない事だよ。スランプっていつかは脱するものだからさ」

向かいに座ったよっちゃん、爽やかな笑顔で言う。そして美味しそうに、ピザを摘む。

そんな様子を眺めながら、あたしは意味も無く俯いて、顔が熱くなってきた。

「というより、あたしもう、チカラが無くなってきていると思うんですよねー」

「どうかなそれは。そういう期待は持たない方がいいよ」

間髪入れずに否定をされた。

その口調に驚いて顔を上げると、よっちゃんが真顔でこちらを見ていた。

「俺がそうだったから」

その口調と表情に戸惑う。

何の事？

「よっちゃんも、チカラが消えると思っていたと言っ事？ だけど今だに持っていると言っ意味？」

でもまだ、大学3年でしょう？ 21歳前後じゃないの？ これから消えるんじゃない？」

あたしは考え込んだ。

よっちゃんは淡々と話を続けた。

「俺や智哉みたいに、中々消えない奴がいるんだよ。俺らは多分、一生持ち続ける。そういう連中ってさ、何やってるか知ってる？」

「……え？」

顔を上げると、彼はあたしを見据えていた。

「裏稼業、てのを持つのが。そこで金を稼ぐの」

何を言われているのか解らず、頭の中がフリーズする。何て言った？ 裏稼業？

そして次に、彼の様子に気づいた。

よっちゃん目が、今まで見た事も無い様な暗い色をしている。ううん、というより何も映していないガラスの様。

あたしは驚いてギクツとなった。

・・・どうしちゃったんだろ？

「イットを狩って、金を貰うんだ」

「・・・え？」

聞き返してからも、理解をするのに時間がかかる。頭の中が真っ白になった。

「イットを狩って、お金を貰う??」

そんな様子のあたしを見て、よっちゃんは面白そうに小さく笑った。

「驚いた？」

・・・意味が分かんない。

一体何が進行しているのか、理解が出来ない。

あたしはしばらく固まり続けた。
そしてやっと、口を開いた。

「……狩るって……」

「あいつら、ほっとくとロクな事にならないからね」

当り前の事のように、まるで常識を語る大人のような口調で彼は答える
と、手にしたグラスの水を飲み干した。
その姿を見ながら、あたしは同じような言葉しか出てこない。

「……どうやって……」

「普通にだよ。普通に殺す。ただ俺達は人より、イットを見分ける
のが得意だろ？ サイ持ちはそれが更に顕著だからね。それを利用して、見つけて、殺^やる。それだけ」

殺^やる。ただそれだけ。

その響きと、彼の無表情な顔に、今度はゾクつときた。
人懐っこいアイドルの様な輝きがそこには、ない。先程からあたし
の目の前にいる人は、今までとは全くの別人だ。

あたしは生唾を飲み込むと、必死で頭を整理した。彼が話している
内容を、まずは理解しないといけない。
えっとえっとえっと、落ち着いて、

あ、そうだ。

「・・・お金を貰うって言いましたよね・・・？誰が払うの？」

あたしが質問をすると、彼は苦笑した。

「イットだよ」

「え？ イット??」

「そう。道を踏み外したイットに迷惑をかけられているのは、俺達だけじゃないって事。そこで相談なんだけど」

たたみかけるように言葉を続け、彼は急にグイッと身を乗り出してきた。

「真琴ちゃん、一緒にやらない？」

何？

「・・・え？」

「俺と智哉と、一緒にやらないか？ こういうのは人数が多い方がいいんだ。チカラの補完を相互に出来るし、個人でやるより危険が少ない。俺達はいくら気を押さえてたって、奴らの好物であることに変わりはないしね」

あたしは唾然とした。今度こそ本当に話についていけない。
あたし、今何を言われているの??

「……あの……」

「身入りはいいし、人助けになるぜ?」

片方の口角を上げ、ニヤツと笑う。整った顔から負のオーラが出ている。

あたしは文字通り、絶句した。

あたし、誘われてる? 何に?

……イットを、狩る?

『狩る』って、何? どういう事?

その時あたしの頭に浮かんだのは、当然の事ながら新谷さんの顔だった。

彼はどう見ても、人にしか見えない。あたし達と同じように考え、思い、笑い、多分悩む。

あたしはイットを二人しか知らない。もう一人はすれ違っただけに過ぎない。

ひょっとしたら彼らは、まるで獣の様に野蠻で恐ろしいものなのかもしれない。新谷さんは例外なのかもしれない。あたしはそれをまだ解っていないだけなのかもしれない。

「だけど、だけど、『狩る』って、何だろう？ そんな事、・・・するの??」

「そんな事、してもいいの??」

胸が、ドキドキしてきた。

イヤな予感がする。

「あたしは今、とんでもない事を聞かされているのかもしれない思った。」

「・・・あたしっ」

気付いた時にはあたしは勢いよく、まるで飛び上がる様に立ち上がっていた。

その様子を、由井白さんは驚いた様に、少しキョトンとした表情で見上げていた。

「??」

「あ、あたし、帰りますっ」

「ちょっと待って」

席を離れようとしたあたしの左手首を、彼が掴んだ。

あたしは理由もなくビクツと震えた。

「最近、あいつらが増えている様な気がするんだ。正確には、人の

気を吸う様な奴らが増えている。多分今までナリをひそめていた筈の連中が、人の味を覚えてきているんだと思う。そうなるやっかいなんだ」

そこまで一気に言うと、彼は座ったまま、あたしの顔を覗きこむように見上げてきた。

そして、意味ありげな視線で言った。

「一度味をしめたら、やめられない。死ぬまで」

その時の彼の瞳は、暗くて、挑発的で、鋭くて、それでいて誘う様な色を秘めていた。

そう、まるでイット。ヴァンパイア。

彼が、怖い。
何、この人。

「考えておいて」

彼はそう言うと急に優しく微笑み、あたしの腕を離れた。

あたしはそれで我に返り、そのまま踵を返すと何も言わずに急いでお店を出て行った。

何だったんだろう、何だったんだろう？ 今のは、何？
今の話は、何？

そこから家まで小走りで30分以上、あたしの頭の中は彼の一つの
台詞が回り続けていた。

一度味をしめたら、やめられない。死ぬまで。

狂気、と言うには大きすぎるのかもしれないのだけれど。
あの台詞は、誰の事を指しているのだろうか？

イット？ それとも、由井白さん？

そんなやもやしたまま気持ちで学校生活を送る事4日目、下校時に
唯一一緒に正門まで歩いていると、見慣れた長身が門の外に寄り掛

かっていた。

「……ヒトミっ」

啞然とする。だって最近、下校時のお迎えなんてなかったから。

「よ」

彼女はニヤツと笑うと、門から身を起こした。サマになるその立ち振る舞い。

何しに来たのだろう？ あたしは首を捻った。

……まさかあたしをからかいら来た、とか？

「どうしたの？」

「業を煮やした恵美子さんに、真琴を拉致る様に頼まれた」

「はい？」

「このまま水島家直行。真琴確保」

「はあ??？」

「ヒトミくん、久しぶり」

「唯ちゃん。久しぶり」

あたしの隣で可愛く微笑む唯に、ヒトミも爽やかに綺麗な笑顔で返す。

この二人は割と仲がいい。あたしを通して知り合った友人でも、ある。だから、自称ヒトミファンクラブにちよつとしたやつかみを受けているの。かわいそう。

て、それよりもお祖母ちゃん！ 今からまた訓練しろってか？ 今

日はまだ平日の木曜日なのに。
一週間で一番かったる日だから、予備校すら入れてないっていうのにー。
いやだいやだ面倒臭いっ!!

「行きたくないっ」

「が通用するだけでも？」

「・・・お祖母ちゃんも、わざわざヒトミに頼むなんて・・・」

あたしが肩を落とし溜息混じりに呟くと、ヒトミは冷たく意地悪な口調で言った。

「それは真琴が信頼されていなくて、薫が単位を落としそうだからなんじゃない？」

「・・・」

「真琴、何かあるの？」

唯が不思議そうに聞いてきた。

「ちよっと・・・部活を・・・」

「え？」

「なんか芸を仕込まれているらしいよ？　ね」

「え？」

「・・・」

このやる、ニヤニヤ笑うな。やっぱあたしで遊びに来たな。

あたしがヒトミを横目で思いつきり睨むと、何かを察した唯は苦笑いを浮かべながら少し後ずさった。

「あ、じゃああたし、ここで・・・」
「あ、うん。バイバイ」

3人ですこり笑い、手を振って別れる。

その顔のまま唯を見送りながら、あたしは口だけ動かして隣のヒトミに言った。

「芸って、あたしは犬か？」

「似たようなものじゃない？ それより猿とか？ あはは」

「・・・それ、やめて」

「どうしたの？ なんか顔に縦じわがあるよ？」

「触れないで」

猿、って言葉であの性格破綻者を思い出した。最悪だ。

一方のヒトミは唯を見送りながら、少し眉根を寄せた。

「彼女、顔色悪いね」

「そうなのよ。うちの高校、風邪が流行っているみたいで。それにしても唯が具合悪いの、長いなあ」

「・・・」

ヒトミは小さく口を尖らせると、周囲をゆっくりと見回した。

そして、正門から高校の敷地を覗き込む。

周りに目を光らせながら、僅かに低い声で言った。

「なんか、感じ悪くない？」

「やっぱり？ 感じる？」

「うーん。ほら、あそこ」

彼女が指をさしたのは、敷地の左側、社会科室や資料室、事務室などがある場所だった。

「木が枯れている」

見ると、校舎脇の小さな植木達の一部が枯れていた。根元からやられていくようで、そこだけ花も葉もつけていない。枝も干からびて見える。

「ほんとだ」

あたしは感心した。

「風邪が流行ると、木が枯れるんだ」

「・・・」

「何？」

「いや。真琴が思うの、それだけ？」

ヒトミが呆れた様にあたしを見下ろす。

あたしは解らずキョトンとした。どういう意味でしょうか？

「うん？ なんか嫌な匂いもする気がするけど。インフルエンザが流行った時も、嘔吐下痢が流行った時も変な匂いがしたよ？ 木が枯れていたかどうかまでは気付かなかったけどさ。病気が流行る時って、なんか独特の匂いがするんだよね」

「・・・ふーん」

「あ、そうだとヒトミ、聞いて。この間よっちゃんから言われたんだけど」

「よっちゃん？」

「由井白さん」

「愉快な呼び名だね」

「でしょ？　なのに全然愉快じゃない事を言われてさ」

「早速振られたの？」

「・・・いちいちチャチャ入れないでよ。それでイットの事なんだけど・・・」

あたしはこの間の日曜日にした会話を、ヒトミに話して聞かせた。

次第にヒトミが、難しそうな顔つきになってきた。片手で軽くこめかみを掴む様な仕草を見せる。何かを考えている仕草だ。

「そういう輩がいるって言うのは、聞いた事がある。けど、彼らだつたとは」

ヒトミは斜めにあたしを見下ろしてきた。

「何だろっね、彼。ちょっと変じゃない？」

その時、正門から長身の男の子が出てきた。

「あ」

あたしは驚いて動きが止まった。
げっ！！ 香取だっ！

あのバスケ騒動以来、何となくしかし完璧にそして一方的に気まづくなり、従って同じ教室内で可能な限り出来るだけ接触も視線も避けてきたのに、目が合うと意味ありげにニヤツと笑ってくる様な気がする、

あの、香取だっ！！

あたし達はモロ、正面からばったりと出くわした。

香取も、女の子みたいに大きな瞳を更に大きく見開いて、フリーズしている。

でも先に口を開いたのは彼の方だった。

「・・・彼氏？」

「え？」

両手をポケットに突っ込み、訝しそうな視線をヒトミに向けている。

いつものあの厭味つたらしい雰囲気はナリをひそめ、なんだかフツツの高校生に見えた。何でかしら？

口、尖がってる？

フツと隣が動いた気配がして、顔を上げた。そうしたらなんと、ヒトミが笑っている！

しかもとても面白そうに！ げっ！！ これはヤバいっ！
とあたしが構える間もなく、ヒトミが香取に声をかけた。

「こんにちは」

「……ども」

「真琴が世話になってます」

やめてやめてやめて、もうそこで口を閉じてっ。お互いに回れ右をして、この場を去ってっ。

でないとなんだか、とつても嫌な予感がするの。

「あんだ、偉いね」

やっぱり口を尖がらせている香取が、なんと自らヒトミに声をかけた。なんなのよっ。

そしてヒトミはとても楽しそうに笑ってるしっ。

「ん？ 何が？」

「この彼女、どうやって飼い馴らしてんの？」

だからあたしは犬かっ！ じゃなくて、この二人にとってはサルか、てそんな事はどうでもよくってっ。

彼女じゃないしっ。……あ、でもこれ、別に香取に弁明する話ではないのが。

でもほら、飼い馴らすってあんまりじゃない？

するとヒトミは、軽く肩をすくめてクスツと笑うと言った。

「だから目を離せなくって。とんで行かない様に、ね」

だからどうしてそういう返答を返すー・・・。

その時、彼の後ろから女の子の声が出た。

「礼？」

顔を出してきた彼女をみて、あたしは少し驚いた。

この子、あの時キスをしていた女の子だ。香取の彼女だ。

あたしはドキマギして少し視線を泳がせてしまうと、香取は何故だか不機嫌そうな顔をして、彼女を残してプイッと歩いて行ってしまった。

・・・何、あれ？

ここんところ、どういう訳か機嫌のいい香取ばかりを見ていたので、久しぶりに見る態度の悪い彼に思わず眉をひそめてしまう。

でも彼女はそんな彼の行動に馴れているらしく、普通に後についていった。あたし達に軽く会釈をしてくれた後に。

・・・感じいいじゃない。あんな無礼な男の彼女にしておくのは、勿体無いわ。

その後ろ姿を、ホツとした様なモヤモヤする様な、なんとも複雑な気持ちで見送っていると、ヒトミが楽しそうに言った。

「かわいいねえ」

・・・何ですって？

「何が？」

振り返ってヒトミを見上げると、ヒトミはニヤニヤ笑いながらまだ、香取の後姿を眺めていた。

「思った事がまんま顔に出るタイプ。堪んないね。ああいうの、好きだな」

・・・何ですってっ？！

「ええっ！アレがヒトミのタイプっ？？」

あたしは大驚愕して、思いつきり大声を出してしまった。

だって驚きすぎて顔から目が飛び出るって、まさにこの事っ！！

けれどもヒトミは軽く言った。

「うん。一緒にいると楽しそ」

「・・・」

・・・信じらんない。絶句。

初めて知った。ヒトミの、男の趣味。

あたしの気持ちは、なんともビュッヨー・・・。

「ヤバくない？ それって」

「どどういう意味？」

「・・・色々な意味・・・」

どろろどろどろ取っても、どっからみても、なんだかかなり、ヤバいと
思う。。。。。

Did my best? 1

水島家のいつも通りの部屋の扉を開けると、いつも通りの由井白さんの笑顔があった。

一点の曇りも、ない。

さっきのあたしの話なんて聞いていなかったかのように、ヒトミが笑顔で言った。

「こんにちは。これ、お届けモノです。確かに引き渡しました」

そのあまりにもしれっとした様子にムカついた。

しかもあたしの事、簡単に引き渡しちゃうし。なにやお。

「・・・裏切り者め」

「あ、何？ 膨れてる？」

「寄るなバカ」

「愛されてんねー」

急に横から由井白さんの、能天気とも言えるぐらいの明るい言葉が差し込まれた。

「かつこいい彼氏、しかも同じサイ持ちで親公認？ 兄貴とも仲良

くて言う事無いね」

「・・・」

あたしとヒトミと、そしてその場にいた水島さんの3人は、思いつきり無言になった。

じっと由井白さんを見つめてしまう。

ニコニコしていた彼はその雰囲気気づいたらしく、少し引き気味に水島さんを見た。

「・・・何だよ？」

「よっちゃん、それ本気で言ってるの？」

「何だよその顔。つか、人前でその呼び方はやめろってんだろ」

「・・・」

「何でそこで黙んだよ。何だよ一体？」

「面白いから言わない」

どうやら水島さんは、ヒトミが女の子だって気付いているらしい。

その水島さんは綺麗な顔を由井白さんからプイッと背け、あたしに向かって小声で、でも真顔で囁いた。

「告る前から振られたってヤツ？」

瞬間、あたしの隣でヒトミがブッと噴き出し、あたしは滅茶苦茶立場が無くなって、もう顔が真っ赤どころではなくなった。

あんたつつ真顔で失礼な事を言わないでよっ真剣に凹むじゃないっ！

「水島智哉っいつペン殴るっ！ ヤクザ殴れたら本望だっ」

「声に出して言うなよ」

うんざりした様に奴が答え、あたしはその横顔を思いつきり睨み上げた。だったらそんな事囁くなってんだっ！

いつもの練習部屋に連れて行かれる時、水島智哉が物憂げにあたしに言った。

「最近新谷と世間話に花、咲かせてんだって？」

あたしはまた彼に嫌味を言われるんだと思い、先手を打つ事にした。

「彼は誰かさんと違って、他人との会話が成り立つんです。相互理解を深めているだけです」

「.....」

彼はそれを聞いても、片眉を上げてあたしを一瞥しただけだった。

部屋には既に新谷さんが、バルコニー際に佇んでいた。

振り返ってあたしを見ると、柔らかく微笑む。

あたしの後ろで、水島さんは黙って扉を閉めて行ってしまった。最近あの人、自分の仕事をサボってない？

あたしが閉まった扉をなんとなく見つめていると、後ろから新谷さんの声がかかった。

「昨日、智哉さまに釘を刺されました」

ん？ 何の話？

この人がコレを言うと、ヴァンパイアに杭を打つ水島智哉を想像してしまうのは、仕方のない事だと思うの。

「今日、宮地さまがテレポーションを成功させないと、私を由井白様に差し出すそうです」

逆光でよく見えないけど、新谷さんはいつも通りの口調で話を続ける。

「そうになると、私事わたくしごとですが、お互いに少し面倒な事になります。ですから大変恐縮ですが、出来れば本日中に成功して頂きければ、と」

そう言っただけで微笑んでいるであろう彼を眩しく見つめて、あたしは考えました。

えっと・・・新谷さんをよっちゃんさんに差し出すって事は・・・よっちゃんさんは新谷さんを狩りたい人で、それを水島さんが容認するって事になって・・・それはあたしの出来が悪いからで・・・。

なんだ、それ。

あたしは話を理解できて、びつくりした。

出来が悪い部下は殺すってか？

それがヤクザの世界？ それともイットを扱う世界？

本当、イット権、完全無視、ね。ひっど、何それ。

そこであたしは気づいた。

今更だけど、新谷さんっていつから、あたしの訓練に対する全責任を負わされちゃっている訳？

「新谷さんはもう、あたしのお目付け役なんですわね。何でかな？」

だって、その・・・」
「イットなのにな？」

新谷さんは肩をすくめてクスツと笑う。

「・・・ええ、まあ」

あたしはバツが悪くなって、視線を空中に泳がせた。
新谷さんは控えめに微笑みながら言った。

「私達イットとあなた方サイは、相互作用があると言われてます。私達はあなた方から気を頂く事が、もっとも効率の良いエネルギー摂取方法であり、大抵の病気や怪我は治癒してしまます。一方あなた方は、そのチカラが最も強く出るのは私達イットの気を身近に感じた時です」

それを聞いて驚いた。それって、あたしの変人なチカラが強く出る時、近くにイットがいるって事?? 何それ。初めて聞いた。
お祖母ちゃんっ、だからどうしてそういう大切な事をあたしに一つも教えてくれてないのっ。

「そして私達の発する気に抵抗が出来るのも、その中で私達を消せるのも、あなた方サイだけなんです」

「え? だって誰でも殺せるって、ナイフとかで」

あ、しまった。

勢いに乗って、何だか失礼な事を口走ってしまった。

慌てて口を押さえたのだけれど、新谷さんは気に留める様子もなく苦笑した。

「ええ、寝込みを襲われでもしましたら、ね」

「・・・うーんと、それはつまり、無防備な状態で無い限り、凡人にはやられないぜ俺達は、て感じ？」

あたしが首を捻っていると、彼は柔らかく続けた。

「智哉さま達はあなたのチカラの大きさを信じていて、それを引き延ばしたいのしょうね」

「・・・引き延ばす？ 何で・・・」

「さあ。そこから先は、私の思考する範囲ではありませんので」

新谷さんにニツコリと微笑まれる。あたしは肩すかしをくらった気になった。

あたしの周囲の意地悪な人達が大事な事を全然教えてくれない中、せつかく色々と聞き出せていたのに。

少し唇をすばめた。よし、ここはもう少し食い下がってみよう。

「・・・あたし、よっちゃん・・・由井白さんに、裏稼業？ に誘われました」

「ハンターですね」

「あたしのチカラを引き延ばしたいって・・・それと関係があるん

ですか？」

「それはご本人にご確認いただきませんか」

「・・・最近、人の気を吸うイットが増えているって」

「今日の宮地さまは、ご研究が熱心ですね」

うっ。あたしの下心なんてバレバレって感じで、新谷さんに笑顔で返された。

それでも優しい新谷さんは、話を続けてくれる。ほんと、いい人。じゃなくて、いいイット？

「今、我々の間で話題になっているものがあります。神の力を秘めていると言われる物で、それを手にした者は絶対的な力を得るそうです。あらゆる欲望を叶え、全てをコントロールする能力。未知の能力さえ手に入れる事が出来ると言われています」

「・・・へ？」

「抽象的すぎますか？ 実は私もそう思います。神話の世界の言い伝えに過ぎないものだと思っていました。ところが最近、それがあるイットの手に渡ったと言う噂が立っています」

「・・・はあ」

突然始まった不思議話に、あたしは啞然とした。新谷さん、どうしちゃったんだろう？

一生懸命、頭の中を整理する。えっとそれって、魔法アイテムをゲットしたイットがいるらしいって事？

神話とかファンタジーって、あんまり好きじゃないのよね、非常識すぎて。もちろん、あたし自身がかなり非常識な存在なのは解っているけど。

「過日のエジプトでの暴動で、博物館から何者かが持ち去ったらしい、それがイットだという噂です。そしてそれを手に入れる為、現実、我々の間で抗争が起きて始めています」

「・・・我々って・・・」

「イット間で、です。そして抗争に勝つためにはより大きな力が必要となる。それを手っ取り早く手に入れる為には、人の気が必要、という訳です」

「・・・それ、本気ですか？」

「少なくとも、彼らは本気です」

なあーんだ、それはあああ。

あたしはひっくり返りそうになった。

そんな話、小娘のあたしが聞いたっておかしいわよ。要はパワーアップアイテムでしょ？ 何よそれ？ それが欲しくて喧嘩するって、小学男子かつつの。ゲームと現実の区別がついてないんじゃないの？

口をあんぐりと開けていると、彼は苦笑しながらも話を続けた。

「そして欲望に目覚めた彼らは、本来の目的から外れて、ひたすら人の気を吸い続ける生き物と化してしまう。実際、そういう者達を私も数多く見てきました」

口調と表情が、急に低く曇る。彼が見せたその暗い瞳に、あたしはギクっとした。

そして彼の話が、単なる空想の世界の話じゃないんだ、とも思った。つまり、どんなにバカな理由でもバカな原因でも、結果として恐ろしい事態を招く事が、現実にはあるんだ、って事。

案外人間って、そんなバカバカしい行動原理で世の中を回しているのかもしれない。

・・・愚かなんだろうな、と思った。

そこであたしはまた気付いた。

「一つ、すごい疑問です。それってみんな、日本の話？　つまりその・・・神様アイテム、今日本にあるの？」

「日本も候補地の一つですよ」

ふーん。候補地だって。じゃ、いくつか他にもあるんだ、イットが狙っている場所が。

そもそも噂だもんね。根拠無しだもんね。

何だろう？　イット達もツイッターとかフェイスブックとかユーチューブとかで情報交換でもしているのかしら？

あたしが思いを巡らしていると、新谷さんが現実を思い出させてくれた。

「とにかく、目先の平和の為に今日は努力しましょう。私も少し気を出させて頂きます。お嬢様の具合が悪くなってしまったら申し訳ありません。先日の様な事がない様に注意しますので、どうか宮地様も、出来る限り試みて下さい」

彼に微笑まれて、あたしは打ちのめされた。ああ、これがあたしの現実だあ……。

しかも今日は、新谷さんの首がかかっているときだ。どうすりゃいいのよ？

彼の顔を見つめながら、苦笑いを浮かべる事しかできない。覚悟を決めて、心の中で溜息をついた。

なのに。

情けなくって悔しくって涙が出てくる。だってちっともうまくいかない。

目の前には、イット全開の新谷さん。

それに向かうあたし。

あんなに邪魔だと思っていた能力なのに、突然出来なくなる事がこんなにもストレスに感じるとは知らなかった。

それだけ、真剣に向き合っているって事なのかもしれない。

だってすっかり仲良くなつた新谷さんは、正直、あたしの周囲にいる普通の人達よりも優しい人に見える。

だからそんな人の為にも、何とか頑張りたいて思ってしまう。それはしょうがない。

でも何より、今、あたしが涙を浮かべてしまっている理由は、別な所にある。

それは新谷さんが、目の前の新谷さんが、あまりにも、怖いって事。「ちよつと気を出す」と言った彼は、とてつもなく恐ろしいオーラを放っていた。言葉では言い表せない、理屈抜きで、本能で感じてしまう怖さ。

手が、足が、瞳が、髪の毛が、全てが恐ろしいモノと化している。造りは変わらない筈なのに、どうしてだろう。

恐怖の塊。今の彼は、それ以外の何物の存在でもない。

この人は、やはりあたしとは人種が違う。あたしは目を反らす事が出来なかった。

捕食者。

夕方6時を回っているのに、陽はまだまだ高い。部屋の中は、あたし達の状況に不似合いな明るさで満ちている。

あんなに居心地の良かったこの部屋は、傍から見ればこの瞬間も快適そのものなのだろうけど、今のあたしには異様な空間でしかなかった。

その部屋の中で、あたし達は無言で睨み合っている。

あたしは逃げる事も出来ず、地面につけた両足を踏ん張る事で精一杯。空中に浮き上がる気配は微塵もない。呼吸が、苦しい。

一度味をしめたら、やめられない。あの台詞を思い出した。

目の前の新谷さん。彼もその味を知っているんだろうか？

あたしは冷や汗をかいて、生唾を飲み込んだ。

この気に触発されてあたしがテレポを成功させる事が、今のあたし達の目標。

お祖母ちゃんが言っていた。精神を集中させて、飛びたい所を強く思い浮かべなさい。

飛びたい所ってどこ？ この部屋の外なら、どこでも！

精神を集中？ あの感覚を思い出せ？ どんな感覚？

あの、内臓が全部、下から浮くような、あの感覚。

飛べ、飛べ、飛べ！

無理だ。暑い。汗をかく。空気が薄い。息が思う様に吸えない。これっていつものパターンだ。

今日も失敗。

そう思った時、新谷さんの瞳が、西日のせいかオレンジ色に輝いた様な気がした。

そしてその瞬間、あたしは目眩がした。

駄目だ。気を失う。

ドサッ。音がした。

自分が倒れ込んだ音を聞くなんて滑稽だな、と思った。

途端に空気が冷たくなり、皮膚がそれを感じて緊張が解けた。同時に息が、急に吸えた。

あたしは全身の力が一気に抜けたけど、肩で激しく呼吸をしている。心地が良い。

全身でその心地よさを味わって、本能で酸素を取り込み続けた。

体が、「助かった」って言っている。

あたしの細胞全部が、ホツとしている。

あ、目蓋を閉じているんだ、と気付いて目を開けた。

目が、合った。

「.....」

状況を理解するのに、お互いかなりの時間を要したのだと思う。だってあたしは、あたしは、あたしは、

香取、礼???!!

この目の前にいる男の子は、香取礼???!!

あ、あ、あ、あたし、か、か、香取礼の上に乗っている???!!

どどど、どどどいっ事っっ？

香取はベッドに仰向けに寝転がっていたらしく、その上に見事にあたしが乗っかっているっっ！！

そして、顔と顔が、目と目が、鼻と鼻が、唇と唇が、あり得ない程至近距離に会って、

あたし達二人は、あり得ない程目を見開いて、お互いを凝視していた。

なんだこれっっ！！

と考えるより早く頭の回路が繋がったあたしは、彼の上から飛び跳ねる様に離れた。

それとほぼ同時に彼も飛び上がる様に身を起こし、ベッドの頭上の縁まで手をつけて後ずさった。

女の子みみたいな長い睫毛と大きな瞳が、これ以上ないっくらいに大きく開かれている。

口が、今まで見た事も無いほどあんぐりと開いている。

一方のあたしは、多分彼と同じような顔つきをしながら彼とは逆にベッドの足もとの方に、これまたお尻と手をつきながら思いつきり後ずさった。

あまりのパニックに頭が整理できないっつ。

初めてお兄の上にテレポった時よりパニックだろう、理解出来ないっつ!!!

あ、あ、あたし・・・香取の所にテレポったの??!!!

ななな何で??!!!

今までお兄以外の所に飛んでったこと、無かつたのに!!!

あたしは腰も抜けてしまったみたい。動けず、多分顔も動かさずに目だけで辺りをキョロキョロと見回した。なんなのよお、なんなのよおつ。

「・・・おい・・・」

香取が、やっとの思いで小さく呟いた。

あたしは返事も出来ずに生唾を飲み込んだ。

お祖母ちゃん、お母さん、お兄ちゃん。（多分お父さんは頼りにな

らないから除外)

あたしはこの場合、どうすればいいんですか？

Did my best? 2

あたし達は言葉も出ずに凝視しあつたまま。
お互い多分息も止まっつていて、時計の秒針の音が耳に痛い。

「・・・お前・・・」

信じられない、という顔つきで香取が声をかけた時。

「礼ー？」

部屋の外から、女の子の声がして来た。
途端にあたし達はビクツと飛び上がった。
えええ、他に誰かいるのっ。

「礼ー？ 起きたのー？」

あの子だ、あの子、香取の彼女だっ。いるんだ、部屋の外にっ。
あたしは顔が一気に青ざめてきた。血の気が引いてくる。どうしようっ。
うっ。

この状況、どう言い逃れをすればいいんだろっ。

「あれ？ まだ寝てる？ 開けてもいいー？」

寝てる人間に開けてもいいか聞いてどうすんだっ。寝てたらどうするんだっ。

じゃなくって、あたしってばどうするんだってばあつ。

その時、香取があたしの上腕をグイッと掴んだ。

ビクツとして顔を上げると、彼は押し殺した低い声で言った。

「こつちこいつ」

「やつ・・・」

彼女の前に引き渡されるんだ、問い詰められるんだ、と身構えたら、彼はあたしを、壁面に備え付けの大きなクローゼットの中に押し込んだ。

で、え？ は？

「ここに隠れてる」

「え？ ちよつと・・・」

「声出すなよ」

言つなり扉を閉められる。真つ暗になった。

「あれ？ 声が聞こえるわよ？ 入ってもいい？」

「電話中なんだよ、勝手に開けるな。向こうにいつてるよ」

「なあんだ。起きてたんなら教えてくれればいいのに。はるな、お腹へつたよう」

「うるせえな、向こうにいつてるってんだろ」

そして部屋の扉が開く音がした。

「なんだ、電話終わってんじゃない。何、話していたの？」

「カンケーねえだろ」

「礼って意外とここで上手くやってるわねえ。友達、多そうね」

「うるせえな」

異常なまでに冷たくてぶっきらぼうな口調の香取と、それを全く意に介さない彼女、はるなちゃん。

これがこのカップルの日常会話だっていうの？

それにしても、どういう事だろう？ あたしは暗闇の中で眉根を寄せた。

香取はあたしを隠してくれるの？ 何で？

・・・自室に他の女がいたらマズイからか。なあるほど。

目の前の非常識体験より、身近な修羅場の方が受け入れ難い訳ね。

そっか、そっか。じゃ、あたし、そんなに焦る事無かったんじゃない。

・・・違うでしょっ。

突然人間が降って湧くなんてあり得ないっ。後で彼にどう言い訳すればいいのっ。

「ねえねえ、もうこんな時間だよ。ご飯食べに行こうよお」

「はあ？ お前、ウチ帰って家のメシ食えよ」

「やだよお、何それ。せっかく礼が起きるの待っていたのにな」

「お前が勝手についてきて上がり込んできただけだろ。今日はもう帰れ。明日も学校だろ。おばさん心配するぜ」

あたしは香取のクローゼットの中で、息を殺してこの会話を聞いている。

うんそうか、香取はもう、彼女のママに挨拶まで済ましているのね。案外、健全なお付き合いなのね。

・・・ああもう、何考えているの、あたし。

今までと違った冷や汗をかいてきた。あたしの顔や体にまとわりつくのは、香取の私服達。香取の、匂いがあたしを囲んでいる。ほら、あたし匂いに敏感だからさ。いやああ。

一人、狭くて暗い空間で頭を抱えて身悶えた。

「・・・なーんか、あやしい」

「はあ？」

「礼が、優しい。うちのお母さんの心配をするなんて、なんかおかしい」

「な、何言ってるんだよ」

「なんか隠してる？」

「な、なんも隠してなーよっ。何言ってるんだよっ」

・・・動揺している。

今度は呆れてしまった。

コイツ、実は思った以上にヘタレ？ こころでビビってびびるすんのよ。

「ふーん。ま、いつか。じゃあ食べに行こうよ」

「行かねっつってんだろ」

「あーあ。・・・じゃあ帰る。・・・あたし、今まで何のためにここで待っていたの？」

「知らねーよ、帰れって初めっから言っただろ」

「だって礼、具合が悪そうだったんだもん。心配だったんだもん」

「んなの寝りゃ治るんだよ」

「治ったの？」

「・・・ぶっ飛んだ」

おい。最後の、なんだそりゃ。

カップルのバカトークに耐えられない。もう、早くここから出たい。いいから香取、さっさと彼女と部屋を出てよ。ご飯食べに行きなよ。

・・・まさか、このベッドをこれから使うとか・・・？

クラッと来た。やめてえええ、神様あああ。

もう、何が何だかわからない。自分の立場を大棚に上げきっているのは百も承知。誰かどうにかしてっ。

暗闇の中で再び頭を抱えた。

相変わらず、バカップルの会話は続く。

「だからもう、お前は帰れ」

「しょうがないなあ。じゃあ、チューして」

・・・何？

あたし、またあれを見させられるの？

いや、今は扉が閉まっている。見なきゃいいだけの話。そう、隙間

からこうやって覗きこまなきゃ……。

思わず扉に片目を近づける、って、あたし、何やってるの。
……自分の変態さに凹んだ。

ああ、あたしここにいたらドンドン落ちて行く気がする……。

「チューしてくれたら、帰る」

「……またかよ。いい加減にしろよ」

香取のため息交じりの声。そして少し拗ねているであろう、可愛い声。

「好きなんだもん。いいでしょお。ずっと好きなんだから」

「……お前、いつまでそんな事言ってたんだ？」

「ねえ、部屋の中に何かあるの？」

ギックウウー！！

暗闇の中で今度は飛び上がった。息も止まった。

「さつきから何か気にしてない？」

「してねーよ、なんもねーよ」

「やっぱあやしいなあ。えっち本でも隠してるんじゃないのお？」

ベッドの下とかにっ

「わっバカお前やめろっ」

わっバカほんとやめてっ。

両手でクローゼットの扉を内側から抑える。その向こう側で、ベッドのシーツをバサツと動かす音が聞こえた。

「あーれ？ おかしいなあ、ないぞお？ 健全な男子高校生なのに」

「ないって言ったろっ。出て行けっ」

「あっ、わかったっ！ クローゼットの中だっ！」

「やめろっ！」

ほんとやめてっ！

香取の本気で焦った声に、あたしの腕にも力が入った。

ああこんな事なら、ベッドの中にエロ本でも隠し持っていてくれればすべてが丸く収まったのにつ。

吐けっ香取っ！ エロ本のありかを彼女に吐くんだっ！

・・・まさか、本当に、ここ？

思わずギョツとして辺りを見回す。やだっ不潔っ一体どれよっ。

外からは、何故か嬉々として最高に盛り上がっている彼女こととはるなちゃんの声が聞こえてきた。

「やっばそうだった！ その中に何か隠してるんだっ！ えっちビデ

オの山とか？ はるな大丈夫だから！ 見せて見せてっ」

「てめー、いくらお前でも殴るぞっ。離れろっ！」

「嘘だよ。礼は殴らないよ、あたしの事は」

ふいに、彼女の声に艶が混じった。

幼く見えていたのに、意外にも色っぽい声を出す。
そう思っていたら、微かに衣擦れの音が聞こえてきた。

・・・これ、多分、・・・キスしている・・・。

あたしは扉を背に、息が止まってしまった。

ビクビクしている。ビクビクしている自分に、ビクビクしている。

実際こんなに近い距離で再びキスをされると、何故だかショックで見る気になれない。

あたしはそのまま、息を押し殺していた。

「だってちっちゃい頃から、あたしの王子様だもん」

「いいから出る」

その声と共に、二人が部屋を出て行く気配がした。部屋の扉が閉められる。

二人の言い合いともつかない会話が、段々と離れて行った。

ちっちゃい頃から、だって。そっかあの二人、幼馴染なのか。

あれ？ でも香取ってイギリスからの転校生だよな？ じゃ、そのイギリスから連れ帰った女の子って事？

どうでもいい事をボーっと考えて、どうでもいい事を考えているんだな、と気付いた。

一気に脱力。ガクツときた。扉に体ごともたれかかり、上を見上げて、口が半開きになっている。でも、誰に見られる訳でもないから、取り繕う必要も、ない。

何やってるんだろ、あたし。早く、ここから出なきゃ。

力が、出ない。でも早く、出なきゃ。

どれくらい、そうしていたのだろう。

その時、外からクローゼットの扉を誰かがノックした。突然の事に飛び上がって振り向く。

「真琴ちゃん」

えっ？ あたしの名前を呼ぶ？
誰？

「おーい、出ておいでー」

その声は明らかに香取のものではなく、でもハッキリと聞き覚えがある。

信じられない思いで、あたしは恐る恐る扉を開けた。

そして案の定、信じられない人が目の前に立っているの、あたしは驚愕した。

「……よっちゃん？」

「どもー。お迎えに来ましたー」

サングラスを軽くずらして明るく微笑むよっちゃんは、当然の顔を
して当り前の様に香取の部屋に立っている（土足で）。

あたしは、開いた口が塞がらなかった。

何で？

Did my best? 3

啞然としたあたしは、呟くように言った。

「……ど、どうしてここに……?」

「これ」

彼はあたしの制服スカートに手を伸ばした。腰の辺り、微妙な所にその手を寄せるので本能的に身構えたら、ポケットの中から何かを取り出された。

それは小さな見慣れない、灰色の四角いプラスチックの塊。

「何これ?」

「GPS発信器。不測の事態に備えて、君につけていたの」

「はっしんきい?」

「でもまさか本当に、兄貴以外の所に飛ぶとは思わなかったなあ。

流石は宮地恵美子、君のお祖母さんだね。何から何まで、彼女の言うとおりになった」

「……あの……」

満足そうにそう言うと、よっちゃんは部屋を見回した。

そんな彼とは対照的に、あたしは何一つ理解出来ず、満足すらしていない。

あたし達二人は同時に口を開いた。

「で、ここは誰んどこ?」

「どっやってここに来たの？」

一瞬二人で顔を見合わせ、よっちゃんは明るくクスツと笑った。そしてあたしの質問に答えてくれた。

「……のだけれど、それは全く答えになっていなかったのよ。」

「もともとね、俺はロケットで智哉は発射台だったの。そこに君のお祖母さんの助言が加わって、新谷のブースターと、東田くんの子ビがついた、って感じかな」

「……何を言っているのかわかんない」

「いいのいいの。ところでここ、誰の所？ 彼は君の何？ 俺、最初ビツクリしたよ。見た事ある制服の女の子が、色男とキスしてるんだもの、真琴ちゃんかと思っちゃった」

香取のキスを思い出した。というか、やっぱりキスしてたんだ、あの二人……。

すっごいモヤモヤするの。けれどもそれが何故なのか自分でもよくわからなくて、なのにテンションが下がってしまった。

少しのイライラが混ざった心で、俯いて答える。

「……同じクラスの人……」

「そっか。そういう事かあ。しかしいいトコ住んでるねー、ここに一人暮らしとは。今夜は真琴ちゃんち、お赤飯炊くなあ」

「……」

上目遣いで、彼を見た。あたしのローテンションを意に介さない

その様子に、ホツとするのか余計にイラツと来ているのか、複雑な気持ちだった。

よっちゃんのいう事、さっぱり意味が分からない。香取が一人暮らしなんて知らなかったし、この部屋がいい所かどうかもわからない。でも道理であるのはるなちゃん、我が物顔でこの家にいると思っただけで我が家が今晚お赤飯を炊くのは、何故？ テレポ成功祝い？

一人でごちゃごちゃと考えていると、彼があたしの肩を軽く抱いた。

「とりあえず、出よっか」
「え？」

驚いて、顔を上げた。

「このまま？」
「うん。後の事は後から考えるとして、早く出よう」
「でも……」
「色々やらなきゃいけない事があるんだ。だからほら、早く」
「彼、どうするんですか？」
「それはとりあえず僕らに任せて」
「……何をするの？」

あたしは思わず身構えてしまい、よっちゃんを睨み上げてしまった。

だって彼は、ただ単純に明るいだけの人じゃない事をあたしは知

っている。

どこか黒い、あるいは危うい所を持ち合わせているのではないかと感じ始めていた矢先だったので、本能的に構えてしまったの。

そんなあたしを見て、彼は不思議そうに言った。

「別に何にもしないよ」

「・・・」

「ほんとだつてば。彼が戻ってくる前に出ようよ」

「・・・」

「まこ・・・わかったよ」

彼は諦めた様に溜息をついた。

そしてわざとらしく嘆いてみせた。

「俺、いつのまにまこちゃんの信用を失ったのかなあ」

「別にそういう訳では・・・」

「とりあえずクラスメイトの彼の、素性とか事情とか性格とか、色々調べてからでないと、こちらとしても動きようが無いだろ？ 洗いざらい何でも喋ってしまうのか。含みを持たせて隠す事がかえつてうまくいくのか。あるいは全くしらばっくれる方がいいのか」

よどみなく説明されて、あたしは言葉を失ってしまった。

それはまあ、そうかもしれないけど・・・

見られちゃった以上、誤魔化しようが、無くない？

「要はどこまで彼を巻き込むかって話。それを今この場で、君がすぐに決められるかい？」

香取を巻き込む。何に？

よっちゃんに聞こうとして、何故か聞けなかった。この人が「巻き込む」と言う言葉を使うと、何故かとても、厄介な事が待ち受けている様な気がしたから。

確かにこの場で即決するには、あたしは色々なモノが不足しているような気がする。

「……いえ……」

あたしが小さく呟くと、彼はニコツと笑った。

ホント、おひさまの様な笑顔。

「ね？　じゃ、とりあえず退散しなきゃ。ささ、出よ出よ」

再び彼に肩を抱かれ、促された方向はバルコニー。

扉を開けて外に出ると、いえ外に出る前から、見える景色はどう考えても……

「……同じ、5階ですね」

数えちゃったよ、下から順番に。

「まこちゃん、飛び降りられる？」

「え？ こっから出るの？ よっちゃんが来た所からは出れないの？」

反射的に聞き返しちゃった。

だってさ、ここは閑静な住宅街に見えるけど、5階のベランダから飛び降りるって、相当に目立つよ？
入った所から出ればいいじゃない。

「僕も君と同じように、ここには降ってわいたから。で、一人じゃ移動出来ない身なの」

「はあ？」

「後で説明するってば。それより君、降りれるのかい？」

有無を言わず急かされて、とりあえずその雰囲気に乗せられた。

「あたしは多分。よっちゃんは？」

「僕はその分野じゃフツートの男だけど、でもどうにかなるよ。じゃ、行こっか」

じゃ、行こっか、て、そんなに簡単な状況なの？

よっちゃんが親指で、右方向を指した。そっちに行つて、と言う事らしい。

左側に香取のバルコニーが続いているから、そちらにリビングでもあるのだろう。

つまり香取に見られない様に、反対側のお隣さんのベランダに忍びこめ、って事ね？ いいのね？ やっちゃんよ？

身を乗り出して隣を覗き込み、誰もいなさそうな事を確認した。

「あ、ちょっと待って」

言われて振り返ると、よっちゃんがガラスの扉越しに、ベランダの鍵に手をかざした。

鍵が、ガラスの向こうで回り、カチャツと閉まった。

脇のロックまで下に動いて閉まる。

傍から見ていてその様子は、まるで意思を持って動いている様だった。

目を見開いてそれを眺めていたら、彼が振り返って笑顔で言った。

「戸締り。これで彼、余計に混乱するだろ？」

「・・・な・・・」

「君の痕跡、有りそで無さそが丁度いいからさ」

悪戯っぽくウィンクをすると彼はその場から離れ、あたしの背中を軽くおした。

「先行って」

あたし達、サイだけど。

登場は華々しいのに、退場する時は地味だなあ。ベランダ乗り越えて、不法侵入ですか。

そう思いながら、あたしはベランダの縁に飛び乗ると素早く、人目につかない様に隣のバルコニーに入り込んだ。よっちゃんも後に続く。

もつと進んで、というジェスチャーを受けて、でもここがマンシヨンの端っこなのにといい角を覗き込んだら、そちら側にも狭いけどバルコニーが各階に一ずつあった。

そっちのほうが目立たないかも、と思い、そちら側の3階のバルコニーにピョンっと飛び移った。流石に一気に地面に飛び降りる気がしなかったの。多分出来るとは思っただけど。

その時上の方から物音がした。

あたしはビビって、咄嗟にそのバルコニーの陰に隠れた。このお家、おつきな植木鉢がいっぱいあって良かった。

息をひそめていると、声が聞こえてきた。

「マジ・・・?」

香取の声だ。

思わず顔を上げて、上の階を見上げてしまった。

すると香取の部屋の隣のバルコニーに隠れているよっちゃんが、あたしに向かって慌てて手を振り回した。どうやら、引っ込めって合図らしい。

再び顔を引っ込めたら、頭上から香取の呟く声が微かに聞こえてきた。上の方の音って、聞きづらいものなのね。

「おい、勘弁しろよ・・・」

バルコニーを掴む音がする。多分、身を乗り出しているのだろう。

「ここ、5階だぜ・・・?」

ああ、ちつとも誤魔化されていないよ？ よっちゃんが念力使ってかけた鍵も、全然意味を成していないよ？

心の中で虚しく突っ込む。香取の気配が無くなるまで、ジツと身を隠し続けていた。これは明日、学校に行ったらとんでもない事になるなあ。行きたくないなあ。

どれくらい経ったのか、香取が部屋の中に戻る音が聞こえた。バルコニーのガラス戸が閉まる。

すぐによっちゃんが、柵を乗り越えて軽々と3階まで伝い降りてきた。それを確認すると、あたしは3階から飛び降りた。その後を彼が、スルスルとヒョイヒョイと下りてくる。

・・・この人、素人なのに身軽なのね。趣味はロッククライミングなんて言いそう。

よっちゃんに連れられて、住宅街の裏路地を小走りに移動した。彼はチラッとあたしを見ると、速度をゆるめずに進みながら言った。

「あの彼、機転が利いてるね。咄嗟に君をクローゼットに隠すなんて、受け入れるの早くない?」

「・・・ああ、それは多分、彼女に要らぬ誤解を与えたくない苦肉

の策だと・・・」

「ふーん、そうかもね。でも、それだけかな？」

何か考えていそうな瞳で、何も考えていなさそうな口調で呟く。
もう、知らんわ。だって分かんない事だらけなんだもん。

急に彼の足が止まった。

「ありがとうございます」

明るく彼が言うので、何の事だろうと周りを見回したら、路肩によつちゃんの車を見つけた。見慣れた目の覚める様な青い車。その脇に男性が立っている。その男性はスーツを着て、年の頃40歳前後？

そのおじさんはあたし達に軽く一礼すると、よつちゃんの車から離れて、道の反対側に止まっていた紺のクラウンに乗り込んだ。音もなく発車していく。あ、あれハイブリッドだ。本当に音がしない！。

よつちゃんを振り返って、よつちゃんの青い車を指して言った。

「何？ どうしてここに車？」

「あれね、智哉んちの関係者」

「ああ・・・智哉んち、ね・・・」

もう騙されないぞ、智哉んち。普通じゃないから、智哉んち。部下がよつちゃんの車を持って来てくれたって事なのね。

つまりあのおじちゃん、スジモノってヤツですね？ 見分けらん

ないなあ。

よっちゃんに促されて助手席に乗り込んだ。座ったら、フツと緊張が解けた。そこで初めて、自分が結構緊張していた事に気づいた。そりゃそうか、当り前よね。人生初の経験だもん。

車が走り出す。右隣をチラッと見ると彼と目があつた。ニコツと微笑まれて、慌てて目を反らした。

・・・現金だな。ドキドキしてるかも。

香取んちは、あたしの家から結構遠い所にあつたらしい。30分くらい車に乗っていた。

その間よっちゃんは、珍しく黙っていた。

音楽だけがひたすら流れる空間で、けれども彼はどこか嬉しそうだった。

あたしの家の前について、彼はあたしを見た。

「じゃ、またね。近いうちに。今日はおつかね」

目が、笑っている。本当に優しそうで嬉しそうで、あたしは胸がドキンとした。

よっちゃんはあたしに手を伸ばしてくる。あたしはますます胸の鼓動が高鳴った。

「本当によく、頑張ったね」

そう言うと、あたしの頭をくしゃくしゃと撫でた。

て、え？ な、撫でられている・・・？

あたしはじつと撫でられていた。真顔で。だけど犬だったら、確実に尻尾が扇風機だった。

「あ、これ。はい」

何かを差し出されて、本能的に手の平を差し出したら、その上に載せられたのは

「……………」

「ご褒美。飴ちゃん」

これは犬で言うところの骨、ですね。ペットショップでよく見かけます。

あたしはその大きな飴ちゃんサイダー味を凝視した。よっちゃんが常に持ち歩いているんだろうか、サイダー味。

・・・似合わない。

「ゆっくりお休み」

包み込む様な笑顔で微笑まれて、あたしは顔が赤くなりつつも、

かなり戸惑っていた。

一緒にイットを狩ろう、って誘った時の狂気まがいの光を潜ませたよっちゃんとは、全然雰囲気が違う。

女の子達に囲まれてアイドルの笑顔を振りまいている彼とも、全然違う。

どれがこの人の本当の顔なのだろう？

手の中の飴が、深く深くあたしの胸の中に入り込み、溶け出していく様な気がした。

そして溶けた飴は取り出せない事も、知っている。

No, way!

玄関を開けて、靴を脱ぐ。ちよつと溜息が出ちゃう。
なにやらリビングが、騒がしい。

「ただい・・・まこちゃんっ」

ビックリしちゃった。だつてお母さんのテンションが高い。狭い家の廊下を小走りでやってきた。

でも何より、顔が興奮してキラキラしている。こんな盛り上がったお母さんは久しぶりに見たぞ。

しかも後ろからぞろぞろ、家族全員集合つてどついつ事？

「どうだった？ どうだった??」

「・・・な、何が・・・?」

「飛んだんでしょ? 薫くん以外の人の所につ」

身乗り出して頬を紅潮させてお目々キラキラって、そうか、娘の成長がそんなに嬉しいのね・・・。

あたしは少し恥ずかしくなった。だつて今まで屁理屈を付けては散々訓練、サボっていたからさ。

お母さん、実はこんなにあたしの事を気にかけてくれていたんだ・・・。ちよつと反省・・・。

「・・・うん、まあ・・・」

「どんな子? かっこいい?」

「ええ？」

予想外の展開に聞き返してしまった。今、かっこいいって聞かれた？

誰の事？ 香取？

家族の後ろから、ヒトミがヒョイツと顔を出した。あ、彼女ウチに来ていたんだ。

「おかえり」

「あ、ただいま」

「彼、どんな反応した？」

「え？ なんでみんな知ってんの？ あたしが男の子のところに行っただって・・・」

「何モンだよ、その香取レイってヤツ」

ヒトミのすぐ隣で、お兄が腕を組んで滅茶苦茶不服そうに言った。あたしはその台詞を聞いて、目がまん丸になってしまった。

「えっ？ 何で名前まで知ってんの？」

「この間、学校の塀に飛び乗った所を見られた男子生徒だろ？」

あたしの目の前、お母さんのすぐ後ろで、お祖母ちゃんがビシッと言う。

あたしは更に面喰った。

「何でそんな事まで・・・っ」

「こっとなったらかえって幸いしたね、同一人物で」

ヒトミにニヤツと笑われて、

「どうしてみんな・・・」

唾然としていると、お祖母ちゃんの後ろ、お兄の前にいたお父さんが腕を組み、仁王立ちをしてすごく真面目な顔で言ったの。

「とにかくお父さんとしては、まずはキッチンと相手の顔を見ないとな。真琴、彼をうちに連れて来なさい」

「はあああ??」

「はい、居間に移動」

ヒトミの鶴の一声で、みんな予定されていたかのように踵を返し、またゾロゾロと居間に戻る。

あたしは開いた口が塞がらなくて、ポカンと玄関に立ちつくした。

「真琴がいつか、薫以外の誰かの所にテレポーションする、って

「というのは、みんなが願っていた事なんだよ」

ソファの端に座ったヒトミが、手すりに肘を乗せて腕を抱きながら、肩をすくめて面白そうに笑っている。

あたしは床に正座している（何となく・・・）。

お祖母ちゃんはその向かいのソファに座り、相変わらず背筋をピンと伸ばしてお茶をすすりながら言った。

「私は解っていたけど。近いうちにこうなるって」

「どうして？」

「知らない？ 真琴、段々、テレポの距離が長くなってきている事に」

「・・・あ」

ヒトミに言われて、思わず小さく呟いた。言われてみると、そうだ。この間お兄の所に飛んだ時も、バスで移動しないといけない程の距離だったし、今日の香取んちは、水島さんの家からは多分、随分離れていると思う。

「回数が少なくなってきたから、気付かなかった」

「それは成長して、飛び上がるほど驚く事が少なくなってきたからだけだよ」

お祖母ちゃんはあたしに眼も向けずに言った。

あたしは基本、ビクツと驚くとテレポーションをしてしまっていた。だから小さい頃は脅かっしこなんて出来なかったし、ホラー映画や怖いドラマなんかも駄目だった。見ると、どこに飛んでいく

か分からないからね。多分お兄の所に行くのだからとは皆思っていたけど、確証は、ないでしょ？

でも、距離が長くなってきたとは……？
あたしはお祖母ちゃんを見た。

「つまりどういう事？」

「つまり貴方の能力は消えないって事」

「……ハタチになっても？」

「ハタチになっても」

「そんなぁ！」

口から自然に、抗議の叫びが出ちゃったよ。だって聞いていた話と違うじゃんっ！ 大人になったら無くなるって、いつも慰めてくれてたじゃんっ！

なのにお祖母ちゃんは、そんなあたしの抗議も叫びも無視して、綺麗にお茶を飲みながら話を続けた。

「そうになると、薫以外の誰かを見つけて貰わないと困る訳なんだよ。私は始め、それがヒトミかと思っていたんだけど」

「何で困るの？ なんでヒトミ？」

「一生のパートナーになるからさ。お前の能力を制御できる可能性のある、一生のパートナー。それが兄貴だなんて、お互い不幸でしょう。嫁に行けないよ？」

あたしはもう、頭の中が？マークでいっぱいになった。

あたしのテレポ先の人物が、あたしの能力を制御できる？ だから一生のパートナー？

それってあたしはこの先一生、誰か「人」の所に飛び続けるの？

それでその人は常に同じ人物なの？

そしてその人があたしの力を制御できるって、どういう事？

色々聞きたい事があるんだけど、あまりにもありすぎるんだけど、ただここはまず、一番気になるこの一言で・・・

「それがヒトミでも、嫁には行けないっつーの！」

「誰もヒトミの所に嫁に行けとはいってないだろ。女同士だから、四六時中一緒にいてもそれ程問題はないでしょう？ それに幼馴染だし、この子なら理屈抜きで、あんたのコントロールの仕方を知っている」

「・・・・・・・・」

お祖母ちゃんにビシっと言われる。

あたしはよくわからなかった筈なのに、わからないなりに納得してしまった。確かにヒトミなら一生側にいられると思うし、彼女ならあたしのコントロール方を知っている。色んな意味で。

「薫はそもそもサイではないから、荷が重いんだよ」

おばあちゃんがそう言うと、ヒトミの隣に座っていたお兄が少し、顔を歪ませた。悔しかったのか、プライドが傷ついた様な表情を滲ませる。

そんなお兄をみて、こつちが膨れてしまった。
だつてさ、いいじゃん。こんなの要らないよ。お兄と交代しても
らいたいって、何度思った事か・・・

・・・おや？

「・・・ちよつと待って」

あたしは目を見開きつつも眉根を寄せて、お祖母ちゃんを見上げた。
た。

「それって、香取がサイだと？」

「それはこれから調べないと。家族歴が無くつたって、突然変異つ
てこともあるだろうからね」

「・・・そしてあたしは、香取を一生のパートナーにする、と？」
「無論」

言葉も呼吸も失い、多分意識も失いかかった時に、ヒトミの面白
そうな、明らかにこの場を楽しんでいる声があたしにトドメを刺し
た。

「嫁入り決定」

酸素を吸うのに、15秒。

「何でっ！！」

吸った酸素を全てこの一言に費やした。いや、費やすでしょ、叫ぶでしょ、何なのよこの展開はっ！

お祖母ちゃんがぐるさそうに、少し顔をしかめてあたしを見ながら言った。

「さっき説明したでしょ。お前が自分で飛んだんだから」

「何で香取っ！！」

「お前が選んだんだよ」

「あたし選んでないっ！！」

もうね、何がどうなっているのか分からないんだけど、今この話を全力で阻止しなければ恐ろしい事態になると、あたしの本能が訴えているのっ！！

だからあたしは立ち上がって、力いっぱい声の許す限り、騒いで騒いで騒ぎまくった。

ヒトミが「おお、見事だ」と呟きながら嬉しそうにあたしを見上げているし、お兄は弱冠引き気味になりながら、憐みを込めてあたしを眺めている。お父さんは新聞を片手にテレビのリモコンに手を伸ばしかけて、お祖母ちゃんのお茶のお代わりを注いでいたお母さんにたしなめられていた。

もう、何なのよう、みんなっ！！

するとお祖母ちゃんが、何でも無い事のように一言、とんでもない事を言い放った。

「お前の、カラダが選んだんだよ」

「・・・カラダく??！」

「そう。カラダが、相性のいい相手を選んだのさ」

「ばあちゃん、刺激が強すぎる」

お兄が片手を上げて、お祖母ちゃんを制した。

「こいつ、倒れそう」

お願い、倒れさせて。

「とにかくくつ。そういう訳で。お母さんは未来のまこちゃんの旦那さんを見たいの。お願い見せてっ」
「嫌っ」

「お父さんも見たい。いくらカラダの相性が良くなったってな、甲斐性の無い奴の所には嫁には出せん」

「嫌っっ」

「私も見たいね。美形なら期待できるからね」

「絶対、嫌っっ」

「俺も見たいな。晴れてお役御免となった、救いの神だもんな」

「無理してますねえ」

「嫌だつてっば!」

あたしは倒れた床から立ち上がると、思いっきり仁王立ちになつて、うるさいギャラリーを恫喝した。

「みんなあいつの性格を知らないのよっ! 最悪なんだからっ! いくら顔が良くつたつて頭が良くつたつて運動神経が良くつたつて、性格が悪くて彼女がいるヤツの所なんか嫁になんか行きたくないっ! 好きでもない人と結婚なんかしたくないっつてばっ!」

言いたい事を言つて、事実を一気に述べてそこでやっと息が吸えて、ハーハーと肩を上下させていたら、

お母さんが片手の手の平を口元にあて、目を丸くして言った。

「あらまあ、まこちゃんつたら」

・・・あらまあ、あたしつたら? ・・・何ですか?

「あなた、好きな人がいるのね?」

驚いた様に言われて・・・ゲ。マジ？　そこ突っ込む？

「それで香取くんは、顔も頭も運動神経もいいんだ？」

ヒトミにニヤニヤと言われて、あんたは口を閉じてろっ！

「なのに性格が悪くて彼女がいるのか」

お父さんは腕を組んで目を閉じて感心した様に頷いて、何の役にも立たないのにチャチャだけ入れられないでよっ！

「なんだよそれっ。嫌味な奴だな。どーしてそんなヤツを選んだんだよ、お前」

お兄がものすごくイラついた様にあたしを睨みつけてくるんだけど、あたしのせいじゃないしっ。いや、あたしのせいだろうけど、そんなの知らないしっ。てか本気でコメントしてるのお兄だけだしっおかしいしっ。

お祖母ちゃんは我関せず、マイペースを崩さずに、でも更にとんでもない事を言った。

「まあ、諦めなさい。その香取くんとやらを彼女と別れさせて、自分好みに育て上げるか、その思い人とカラダびとの相性を合わせるか、しかないでしょう」

クラッ。視界暗転。

・・香取を、自分好みに、育て上げるだあ〜??
思い人と、カラダの相性を、合わせるだあ〜??

「・・・どつちも無理っ。てか、カラダの相性を連発しないでええっ」

「あ、逃げた」

あたしは脱兎のごとく、リビングから飛び出した。

「逃げる時は、走るんだ」

「テレポしないって？ 無理ですよ」

お父さんの間抜けな一言とヒトミの慇懃無礼な突っ込みに、

「聞こえてるーっっ」

泣きながらあたしは自室に飛び込んだ。泣くでしょ泣くでしょ、
うら若き17の乙女がこんな仕打ちを受けたならっっ。

みんな大っ嫌いだーっ！！

あつたまくる、あつたまくる、あつたまくるっ。

ノックノック。

「真琴ー」

無視。

ノックノック。

「真琴ー。入るよー。・・・何やってるの?」

ヒトミがあたしの部屋の入り口で立ちつくした。見りゃわかるでしよ。

彼女は部屋に入ってきて、腕を組みながら、あたしを上から覗きこんだ。

「・・・ふーん。勉強。そうくるの」

あたしは机にかじりついて英単語を筆記しながら、無視。

「人間、ストレスが溜まると叫ぶか走るか、って聞いた事があるけど、英単語の暗記は聞いた事が無かったな」

「あたしは受験生ですからねっ。受験勉強をするんですっ。受験生が受験勉強をして何が悪いのっ。本来こんな下らない事に時間を費やしている暇はないんでからっ。飛ぶエネルギーがあるなら勉強っ。叫ぶ暇があるなら勉強っ。走る元気があるなら勉強っ。無駄な体力

は使わず全て勉強つ。一体これのどこがおかしいのっ」
「わかったわかったわかったから」

ヒトミは軽く両手を上げて後ずさった。

「建設的だね。真琴にしては、非常に前向きな現実逃避だ」

「わかったなら邪魔しないで。なんと言われようと気になりません」

「はいはい。東都大医学部、一直線」

彼女はそう言うつと肩をすくめてあたしのベッドに腰をかけた。長い脚を組んで、ベッドの上に置いてあつた雑誌を読み始める。

学校帰りそのままなので、彼女の恰好は紺のブレザーにパンツ。襟元とネクタイを緩めて、寛いだ様子で雑誌をめくるその姿は男そのもので、なのに読んでいる雑誌が女の子雑誌。そぐわない。

「真琴が飛んだ後、すごかったよー。あ、これかわいいな」

「mold, mold, mold……すごいって何が？」

「まるで予定されていたかのように、あの3人が動いた。mold
って何？」

「形作る。あの3人つて、水島・由井白・新谷？」

「そうそう。真琴の追っかけ方法を、事前に組んでたんだね。今日は私もその中に入れられてた」

ヒトミはページをめくりながら、話を続ける。「あ、これもかわいい。何だ、コレ」とかブツブツ言っている。

「水島智哉。あれ、凄いね。サイコメトリーだけじゃなくつて、モノを飛ばせるらしい。物質の瞬間移動つてやつ。そんな事が出来る

人間なんて、そうそういないよ」

「ここにいまーす」

「あなたは特別。だから皆、真琴に手をかけてるんでしょっ？」

そう言われて、あたしは顔を上げた。ワンテンポ遅れて、彼女も顔を上げる。

目が、あった。

「やっぱそうなんだ」

「何を今更。宮地家は昔からサイのトップ。代々女が後を継ぐ、女王様家系でありませんか」

「.....」

「いいよ、そんな思いつきり顔をしかめなくても。悪かったから、引き続き現実逃避に戻って下さい」

言われてあたしは、素直に単語の続きをやる。だって嫌なんだもん、そういう事を考えるのって。

ずっと目を反らし続けてきた事だから、さ。

「水島智哉のアレは、滅多に出来るワザではないらしいのだけど、相手が由井白義希の場合は別みたい。彼は、水島が飛ばせる唯一の人間、らしいよ、新谷さんが言うには」

二人の女の子が可愛いコーディネートで絡んでいる写真を、ヒトミは面白そうに眺めながら、言う。

あたしは、ヒトミの「かわいい」って台詞は女目線では無いかもしれないぞ、とか思いながら、同時に心の中で香取の部屋での出来事を思い出した。

ああ、それで納得。よっちゃんが言ってた『僕はロケットで智哉が発射台』って台詞は、そういう意味ね。

「でも今日のはちょっと違った。その飛ばしを、水島智哉は新谷さんの部屋で、新谷さんと一緒にやったんだ。二人で難しい顔をしながらね。だからいつも以上に強く、チカラが出たらしい。新谷って人もすごいね。イットの気って、あんななんだ」

「ヒトミ、初めて？」

「うん」

ヒトミが上目遣いでこっちを見た。そして皮肉っぽく、ニヤツと笑った。

「嫌悪感と陶醉感、両方が入り混じった様な感覚に襲われるね」

嫌悪感と陶醉感、か。上手い事言うなあ。

あたしは椅子ごとヒトミの方を向いた。

「で、ヒトミは何をやらされたの？」

「その部屋に通された瞬間に、もう真琴が香取くん相手に固まっている姿が目飛び込んできたよ。だってあの部屋、真琴と新谷さんの気でいっぱいなんだもの。気分が悪くなるくらいに」

彼女はわざとらしく眉根を寄せて、手を目の前で揺らして見せた。気分が悪くなるとは、失礼ね。

そしてヒトミは雑誌を脇に置くと腕も組んで、その時の状況を思いつくような表情を見せた。

「既に由井白義希は、ネットを使って真琴の場所を割り出していた。水島智哉はこっちに近づくと、『君のビジョンを頂戴?』って言うてココに額をくっつけてきた」

そう言っただけで彼女は自分の額を突っついた。あたしはそれを見て想像した。それって、おでこゴツツンかな？

・・・絵になるかも。見たかったな。またやってくれないかな？なんて言ったら激しくこの二人に軽蔑されそう。

「それでその後は、由井白義希が消えました。めでたしめでたし」

ヒトミは立ち上がると、あたしに近づいてきた。

「今回の彼らのこの動き、どうも恵美子さんの指示らしいよ？あの人達の話しっぷりが、そんな感じだった。soarとflutter、これ類義語だよ。私も、いきなり、しかもあんなにハッキリとビジョンが見えたのって初めてだし。恵美子さん、何を企んでいるのかな？」

「あのはあちゃんは何にも企んでいなかった試しは、無い。この二つ、どういう意味？」

「だよ。このままじゃ、終わらないって事だね」

そう言って、ヒトミは悪戯っぽく笑った。座っているあたしに顔を近づけてくる。

目の前で、いかにもって感じにからかわれた。

「真琴の興入れも決まった事だし？　ますます楽しくなりそう」

「推薦決定の暇なあんたのオモチャにするな」

「教えてあげるよ、この単語。二つとも、『高く飛ぶ』ってイミ。

真琴が覚える、必須単語だね」

「flutterは羽ばたくってイミだから。パタパター」とか言っただけにしている、余裕綽々のヒトミを、あたしは悔しさを込めて見上げた。こっのやるっ、一度蹴っ飛ばしてやるうかな。

至近距離にあるヒトミのおでこを人差し指で軽く押して、あたしは彼女を睨み上げた。

「タイプじゃなかったの？　香取」

「すっごくタイプ。何？　気になる？」

「全然。．．．いや、むしろとても？　ヒトミの好みがあの手だったか、っていう衝撃よ。あたしの嫁入りを面白がっている場合なの？」

「面白いね。今後の二人から目が離せませんって感じ。色々と楽しめそう」

あたしは口を開きかけて、そして諦めた。駄目だ、今のこの子には何を言っても無駄だ。楽しいかどうかを第一に考える女だもん。しかもタチの悪い事にヒマときている。

あたしは机に向き直ると、再び英単語と格闘を始めた。ヒトミも鼻歌を歌いながらあたしのベッドに戻った。

最近、彼女はあたしの部屋に泊る事が多い。それに幼馴染と言う事もあって、側にいても全く違和感が無い。おかげでうっかり集中してしまい、気付けば軽く一時間が経っていた。

振り向くと彼女は小説を読み耽っていた。傍らには流し読みをしたであろう漫画が、雑に積み上がっている。寛いでるなー。

「今日は泊ってくるの？」

「んー、今日は久しぶりに親が帰ってくるんだ。だから家に帰るよ」

意外にも彼女が一瞬苦笑いを見せた。じゃ、なんでそんなにのんびりしてるんだらう？

そう思った時、再びあたしの部屋をノックする音がした。

でも部屋は開いている。二人して振り向くとお兄いた。珍しく眉を下げて、

困った様な怒った様な顔で立っている。

何だそれ、21の男が、口を尖がらせないでよ、って思った。

お兄の表情があんまりにも珍しかったので、あたしとヒトミはマジマジと見入ってしまった、お兄もその間ずっと、戸口に無言で立ち続けていた。

先に口を開いたのはヒトミだった。

「何ですか、その顔」

「生まれつきだ」

「何拗ねてるの？ 気持ち悪い」

「気持ち悪い言うな」

お兄がギツとこつちを睨む。だってホントに気持ち悪いんだもん。あたしが口をすぼめていると、お兄は腕を組んで聞いてきた。

「飯食べないのか？」

「メシ？」

「ヒトミが呼びに来たる」

なにい？

今度はヒトミを見ると、彼女は視線を上に見せるとぼけてみせた。

「おっと」

何がおっとじゃ。あたしは手にしていた消しゴムを投げつけた。彼女はそれをヒョイツとよけながら、白々しく言った。

「一に勉強二に勉強と言ったものですから。波に乗っている所を邪魔しちゃ悪いかなー、と」

「このーやーる。じゃ、ヒトミも食べてないの」

「ん。でもそろそろ帰るよ」

「えー。お母さん、がっかりするよ」

「悪いかな？ 由美さんに聞いてみる」

そう言っただけでベッドから立ち上がったヒトミは部屋を出て行くとして、そこに立ちっぱなしのお兄とモロにかち合った。

至近距離に立って、お互い無言になる。ヒトミもビックリして、珍しく目が丸くなっていた。

あたしはそんなお兄の様子に、ポカンと口が開いてしまった。

「どうしたの？」

「……」

「私に用？」

ヒトミも驚いた様に、不思議そうに聞く。

するとじれったいこの兄貴は、やっとまともに口を開いた。えっらい歯切れが悪いんだけど。

「……いや……これ。頼まれていたモノ」

「あ、どうも」

手渡されたのは、2枚のコンサートチケットだった。そう言えば

この間、ヒトミがお兄にねだっていたものだ。クラシックコンサートのチケットは高いって、お兄がばやいていたもの。ヒトミはそれを受け取ると、チケットとお兄の顔を交互に見比べ、怪訝そうな顔をした。

「どうしたんです？ コレで何かありました？」
「別に。送ってってやるよ」

お兄はプイっとそっぽを向きながら即座に言う。
初めは何の事か分からずキョトンとしたヒトミは、それが彼女を車で送り届ける、と言う意味だと気付くと、
顎を引いて眉根を寄せて、胸の前で軽く手を振った。

「いいですよ」
「こんな時間に女を一人で帰らせねえだろ。曲がりなりにも女子高生なんだから」
「それに気づかず風呂場に侵入しましたけどね」
「土下座したろっ。本気でなんも覚えてねえんだから、勘弁してくれよ」
「薫と二人なんて会話に困ります。一人で帰る方が気が楽」
「はつきりモノを言うヤツだなー。じゃ、真琴も来い」
「うーす」
「それぐらいならタクシーで帰りますよ。お金下さい」
「またねだるのかよ」

お兄が顔をしかめる。

あたしとヒトミは寄り添って、可愛く下から妹目線でお兄を見上

げた（ヒトミはかなり、膝を曲げてた）。

「お兄ちゃん」

お兄はギョツとした表情になり、次に溜息をつきながら肩を落とした。

しぶしぶとポケットから、千円札を取り出す。

「……ほら」

「ありがとうございます」

ヒトミは両手を合わせて頭を下げて、うやうやしく受け取った。そしてそれを人差し指と中指に挟むと、軽く上げながらウィンクをした。

「じゃ、今度こそ退散します。またね。兄妹水入らずでごゆっくり」

そう言っつて颯爽と退場した。鞆を持っていないから、玄関あたりに置きっぱなしなんだろうな。

彼女の姿が消えた後、何とはなしにお兄を見たら、部屋の戸口をポーッと眺めている。

やがてボソツと呟いた。

「……あいつ、俺の事、嫌いなのかな？」

「はい？」

とんでもなく、しかも柄にもない事を言うもんだから、あたしは大声を出してしまい、本気で引いてしまった。

「ど、どうしちゃったの？ お兄？」

「だってあいつ、俺には敬語っつーか丁寧語で話すだろ」

「そんなの昔っからじゃない。ああ見えてあの子、人見知りをするタイプだから、年上相手にタメ語を使えないだけでしょ」

「年上ったって、幼馴染だろ」

「・・・でも子供ん時のお兄も、かなりの我儘で怖かったよ？ 周りに怒鳴り散らしてばっかだったじゃん」

「そうか？」

「そうだよ。ヒトミ、けっこうビビってたんだから」

するとお兄はふーっと、物憂げな溜息をついた。物憂げな、よ？物憂げなっ。

「・・・そうか。あの頃のヒトミは、まだ可愛かったもんなあ。女の子らしくて」

「どうしたのお兄？ 何かあるの？」

鳥肌が立つとはこの事。ビンビンに立つちゃって、チクチク刺さっちゃうよ。

体中がハリネズミになった気分、あたしはビクビクとお兄を見上げた。一体この男に何が起こったのよ？！

「……これ、あいつの鞆から落ちていたんだ」

いかにも不本意、という感じでお兄がポケットから紙の束を取り出した。

それはさっきヒトミにあげたものと同じ姿かたちをしていて、コンサートチケットである事が一目で見てとれる。

お兄はそれをあたしに渡すと、口をすぼめて言った。

「ウチにきて、鞆を開けた時にでも落ちたんだろっな。あいつガサツだから、落とした事にも気付かないでやんの」

「……これ、使っていないじゃん。過ぎてるじゃん」

「そうなんだよ。これも、全部」

あたしはそれらを食い入るように見つめてしまった。ざっと20枚近くはありそうなチケットが全て、未使用だ。しかも日付はとくに過ぎている。中には二年近く前のものまである。

「……わ。ホントだ」

これをいっぺんに落としても気付かない、ヒトミのガサツさにも呆れたけど、これだけのものを、しかももう使い道のないものを毎日鞆に入れて持ち歩いていた、という状況にも驚いた。

仮に適当に鞆に突っ込んでそのまま忘れてしまった、というパターンだとしても、これほど量が溜まってしまったら、さすがに邪魔になっ捨てないかしら？

どういう事なのだろう？

「ヒトミ、いつも二枚一組で俺にねだるだろ？ いつも誰と一緒に行ってんだろって思ってたんだ。ところが、どうやら多分、誰とも行っていない。あいつ、一度も行っていないのかもしれない」

困った様に、そして少し悔しそうな表情でお兄が言う。

あたしは何か引つかかるものを感じて、考え込んでしまった。すると一瞬、あたし達の間には深刻な雰囲気があった。そしてあたしはちよっぴり焦った。

だって彼女はあたしの大事な幼馴染。あんまり、恥ずかしい思いもさせたくない。

これは、ヒトミが隠したかった事に違いない。

「……………」

「何だろう？」

「お兄に嫌がらせとか？」

「……………マジ？」

「ばーか」

あえて軽い感じでお兄を受け流すと、そのまま彼を部屋に置いて出て行った。夕ご飯の前には、お風呂でしょ。

取り残されたお兄は「なんだよお」と呟きながら、あたしの部屋を出た。

我が家の比較的大きな湯船にゆっくりとつかりながら、あたしは思考を巡らせた。

ヒトミは、ポーカーフェイスだけどとても優しい。他人に対するきめ細やかな思いやりに溢れている。

さっきの夕飯だって、あたしを氣遣って声をかけなかったんだってわかつているもの。あたしが相当テンパっていたから、余計な事を言わず（言ってた様な気もするけど）でも空気の様にずっと、あたしの側にいたんだと思う。

そんなヒトミが隠し持っていた（？）あのチケット。何だろう？単に忘れていただけなのか。それとも肌身離さず持ち歩いていたのか。だとしたら、すぐにでも氣付いて、取りに返ってくるかもしれない。

そこであたしは、突然氣付いた。

本当に、急に氣が付いた。

いつつもそう。こういうひらめきって、何の脈絡もなく襲ってくる。例えば、テストを提出した途端に正解に氣付くように。

あのチケット。全部、ヒトミの親が所属する交響楽団のものだ。

ヒトミの両親は、お父さんがある交響楽団の専属チェロ奏者、お母さんがいくつかを掛け持ちしているバイオリニストで、あまり家にいる事はない。よく海外の演奏会に出場している。

あのチケットの束は、少なくともあたしが見た限りでは、そんな

彼女の両親が所属している楽団のものだった。でも何で？ 彼女の両親が出演しているとは限らない。

今日もチケットを貰ったヒトミ。そして家に帰って行った。日付はいつものものだったのだろうか？ 数日中に行われるのだろうか？

何の事情があったんだろう？

そこであたしは再びひらめいた。あのコンサートチケットは、日付が近いものが多かった。つまり12月1日と2日、あるいは7月20日のマチネとソワレ。

あのチケット達、全部、彼女の親が出ているものじゃないのかしら？

急に全部が繋がる様な気がして来た。

音楽が嫌いだと公言しながら、クラシックコンサートチケットを手にするヒトミ。

そしてそれに一度も足を運ばないヒトミ。
なのにそれを捨てられないヒトミ。

今日は親がいるから、と帰宅するヒトミ。

彼女は未だに、両親を憎んでいる。小さい頃から手をかけて貰えず、音楽のスパルタ教育だけを施した親を。

そして両親を憎む自分に、苦しんでいる。だって憎む以上に、求めているから、親を。

そして多分、そんな自分に、ハッキリとは、気付いていない。

きっとあの子は生まれて17年、ずっと物わがりの良いい子なのだろうな、と思った。

あたしみたいに、親の目の前でギャーギャー泣き喚いた事なんて一度もないだろう。

あたしは湯船に、頭のとっぺんまで潜りこんだ。

それでも朝はやってくる。

靴箱前で、担任の加藤に会った。

さすがに無視する訳には、いかない。

「はよーじざーいまーす・・・」

「おーう。どうしたんだ、宮地。元気無いな？」

加藤がかつたるそうに言った。

「どうやら向かう方向が同じらしいので、しょうがないから話を続ける。」

いつも以上にかつたるそうな加藤に言った。

「せんせーこそ。疲れた顔してるよ」

「最近、心労が多くてなあ。こつ見えて苦労してんだあ」

「ふーん」

「他人事だな、心労のタネめ」

「自分で手一杯」

「だから俺が心労してんだよ。お前は自分が大変だと、他人の事が目に入らなくなるんだから」

「朝から重い説教しないでよ」

あたしは担任相手に、思いつき顔をしかめた。

だって昨日の一連の騒ぎその他諸々が、それなりにあたしの心に

押し掛かっているんだもん。これからあたしは教室で、殺人的に常識ハズレな性格最悪男相手に、サバイバルゲームを繰り広げなくてはならないんだから。ああ、こんな時にお話しみたいに都合よく、記憶を消してくれるサイなんかが身近にいれば良かったのに。

そのまま別方向に進もうかという時、加藤が振り返ってあたしに言った。

「あ、そうだ、放課後、進路指導な。数学教員室に來い」

「えー、何の指導？ あたしの心は決まってるのに」

「あんな簡単に将来決めんなよ。お前、勢いで結婚するタイプだろ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「長っ」

勢いで決めてないわよっ。勢いで決められそうなのよっ。必死で抵抗してんだから、無駄に近い事を言わないでよっ！

仁王立ちでガンを飛ばしているあたしをその場に残して、加藤は職員室に去って行った。

うっ今から最悪な一日が始まる。

散々、「学校に行きたくないっ」と駄々をこねたのに、あっさりとお祖母ちゃんに蹴っ飛ばされた。お母さんには「未来の旦那様と仲良くやるのよ？」とにつこり念を押され、お父さんには「だから早く家に連れて来なさい」みたいな事を言われた。お兄には「いきなり連れて来るなよ。俺、家にいたくねえからな」と文句を言われた。だからみんな嫌いだっばっ！

今朝は、唯から学校を休むメールを貰った。体調が悪いらしいの。あたしも体調が悪くなりたかったの、絶対調なこの体力を誰かどうにかしてっ。

「かつとりちゃん、どうしたのー？」

「香取！。今日は朝からどうしたんだよ？」

「.....」

香取は、無言。

ついでに言うなら、あたしも、無言。

「すっげこえーよ、香取」

「.....」

せ、背中が寒い.....。

いや、寒いを通り越して痛い。冷たすぎて、痛い。液体窒素並みに、温度が低い。

こんなバカな事を考えていないと、この場をやっていられない。

朝登校した香取は、あるう事が、あたしの後ろの席の男子森くんをその席から追い出し、信じられない事にそこに座り込み、授業を受け続けているのよっー限目からっ。

しかも絶対確かに確実にっ。見ているのは黒板でも先生でもなくあたしの背中っ。すぐ目の前に座っているあたしの背中をずーっとかん見しているのよっこんなサイでなくってもわかるわよっ。

その上休み時間になると腕を組んで、おみ足は机の上に乗っけら

れて、ずーっとずーっと！ あたしの背中を見続けているのよお
。。。。

こんな状態だから当然クラス中の注目の的になり、最初は遠巻きに見守っていたクラスメイトも三限目が終わる頃にはあたし達に近づいてきた。でも女の子は怖がって、誰一人として近づいてくれない。唯が休みなのが痛いよお、あたしってこんなに友達少なかったんだ。

高校三年間を帰宅部として過ごした身としては、他のクラスに大した友人もおらず、それを理由に休み時間に香取から逃げる事も出来なかった。毎時間トイレに立つたらどんだけ尿意を持ってる女なんだと思われそうに変にプライドが働くし、だからあたしって何なのよって感じ。。。。

「ねえ、宮地さん。香取に目えつけられるような事、なんかしたの？」

「。。。。」

「おい香取。ちょっと外、出ようぜ？」

「。。。。」

「どうしちゃったの？ 二人とも」

中森くんが途方に暮れた様に、あたし達二人を交互に見た。

香取は相変わらず目を吊り上げてあたしを睨みつけている事間違いない。あたしはもう、自分の席でひたすら小さくなって座っている。冷や汗タラタラで、やっている数学の問題も解けやしない。次の授業で当てられるのに、友達少ないあたしは絶対誰も助けてくれないよお。

「こっちおいでよ」

優しい山田くんが見るに見かねて、あたしに声をかけてくれた。シャープペンシルを持っているあたしの右手首をそっと掴む。どこかに連れて行ってくれるのかと思い、あたしは少し驚いて顔を上げた。

すつきりとした男の子らしい顎と小さな目。人の良さそうな山田くんが、あたしを見て僅かに微笑んだ。あたし、感動。

な、なんて優しい……。そうよね、香取の態度はあまりにも鬼畜よね？ 誰も助けしてくれないから同情してくれたんだ。そんなにいい人だったなんて知らなかったよ、今まで気付かずごめんねえ。

「触んなよ」

その時、香取のドスの利いた低い声が後ろから聞こえた。

実際、香取が今日、口を開いたのはこれが初めて。今まで誰が何を言ってもずーっと、無言だった。

あたしと山田くんと、側にいた中森くんとその周囲にいたクラスの子全員が、ビックリして香取の方を見た。

今、香取、触んなよ、って言った？

でも触られているの、あたしなだけけど？

山田くんが聞き返した。

「・・・え？」

「触んな。そいつは俺の女だ」

教室内にいた約35人全員が、シーン、となった。

言い換えます。全員が、絶句しました。

「・・・ええっ?!」

コレ言ったの、あたしだけじゃないから。山田くんと中森くんと、あと数人のギャラリイも叫んでいたわ。その中には女子も混じっていたと思うの。でも一番あたしがおっきい声だったと思うの。だってしょうがないと思うのっ。

あたしは振り返ると同時に立ちあがって、香取に向かって叫んだ。今、なんてったっ???

「あたしがっ! いつあなたの女になったのよっ!」

「今日から。俺が決めた」

「・・・なあんですってええ?」

この歳なのに、動機息切れ目眩が同時に襲ってきた。くっそ、それなのに踏ん張れちゃうあたしの両足っ。本当に丈夫なんだからっ。混乱とあまりのショックに、喚いていいのやら殴っていいのやら

それとも倒れ込んでいいのやら迷っていると、この天上天下唯我独尊男は、尊大な態度で、むしろ喧嘩でも売る様な口調であたしに言った。

「これからじっくりと調べてやる。お前がどんなヤツなのか」
「・・・な・・・な・・・な・・・」

周りの男子からは「おおっ」と言う感嘆の声が湧きおこり、中森くんはヒュウッと口笛を吹いた。

山田くんは呆気にとられて、口が開きっぱなしだった。

あたしは香取が言わんとしている真意がバツチリと伝わってしまった。さつきまで真っ赤だった顔が一気に青ざめて行くのを感じていた。

ゴクつと生唾を飲み、知らず知らずに体が後ろに引いてしまう。よっちゃん、香取、全然誤魔化されていないよ？ ベランダの鍵をかけて行くなんて小細工、ちつとも通用していないよ？ というより完璧にスルーされてるよ？

「え、遠慮します・・・」
「遠慮すんなよ」

香取は両足を机から降ろして立ち上がった。腕を組んだままあたしに近づき、至近距離で見下ろされる。

目が、ちつとも笑っていない。

・・・怖い。怖すぎる。追い詰められてる、あたし。どうすればいいの？

香取が、僅かに口角を上げた。
腕を組んだまま顔を傾け、唇をあたしの耳元にまで寄せてきた。
そして小声で、囁かれた。

「俺のベッドまで忍び込んできたんだぜ？　どんだ俺を好きなんだよ、って話だろ」

教室のど真ん中で無駄に雰囲気のある事をやられて思いっきり注目の的なんだけど、あたしはそんな事は気にしていられず、今度は再び真っ赤になって即座に否定した。

「ごっごっ 誤解誤解」

「ほお」

香取の冷たい、キツイ視線が再び降ってきた。

「それじゃあどこをどう誤解してるのか、じっくり説明してもらおうか」

「え……と……」

「いかにもなんか隠しちゃってますって顔。秘密を抱えていますって態度。いい加減ムカつくんだよな」

「お前、何の話？」

「うっせえ」

話が見えずに思わず口を挟んだであろう山田くんを、香取は目も見ずに黙らせた。

あたしは机と香取の間に挟まれて、これ以上距離は取れないってくらいに体を反らせて、冷や汗まみれで言った。

「でも、だってほら、彼女がかわいそうだよ？　ね？　はるなちゃん？」

・・・あ、やべ。

墓穴掘ったつ。あたしが昨日香取の部屋にいたって、自白しちゃったつ！　だって彼女の名前つ。オーマイガツ。

なのに予想外にも、香取はそこには突っ込まず、眉間に皺を寄せ、て妙な所を突っ込んできた。

「あ？　何であいつが可哀想なんだよ？　あいつはただの従妹だ」
「ええ？」

思わずあたしも目が丸くなっちゃう。

そして、言わなくてもいい一言を、またもや口にしてしまった。

「だってキスしてんじゃない」

香取の目が見開かれ、周囲の目が点になった。

あたしはワテンポ遅れて、自分が大失言をしてしまった事に気付いたの。言葉って取り消せないのね。

「おおっ」

今度こそ教室内は盛り上がった。だって未来の話より、今までの既成事実よね？ 不確かな話より、既にやっちゃってる話の方が興味そそるでしょ？

「お前、そんなとこ宮地さんに見られてたの？ つか、どこでやってたの？」

「あれか？ あの可愛い子！ 香取はるな。あれってお前のいとか」

「一年で一番可愛い子だよな」

「いいなー、可愛い妹系彼女で従妹いとこ。すげーうらやましいっ」

「うっせえー！」

香取は周囲相手にブチ切れた。あああああ、ついにやっちゃまたああああ。

「てめえっ。サルっ。ちよっこっちこいやっ」

香取にむんずと腕を掴まされると、引つ張られる様に教室を引きずり出される。そんなか弱いあたしに成す術はございません。そうよ、全部あたしが悪いのよ。

もうすぐ次の授業が始まるけどね。数学だけどね。きつと戻る気無いんだよね？ 二人で仲良くサボっちゃうんだよね？ そんでま

た加藤に叱られるんだわ。寒い小言を言われるんだわ。

諦めて引きずられるあたしの耳元に、クラスメイトの囁きが飛び込んできた。

「おお。三角関係だ」

「宮ちゃん彼氏いるから。四角関係だよ」

違うから。それ、一個も合っていないから。

「……今のあいつに連れ込まれるのって、危険じゃないか？」

「でも宮地さんも強そうだから」

ああ、それは合ってるね。全部合ってるね。ヤツは危険だけど、あたしは確かに強いわね。

あたしははずると、例の場所まで連れて行かれた。

My girl 2

例の場所とは、あのフェンス前。あたし達が2度も出くわした場所です。

彼がそこ目指してあたしを引つ張っているのは明白なんだけど、その間のご立腹の凄まじい事！

怒髪天を衝いて穴を開けちゃうぞ、お湯も沸かせちゃうぞ、ってぐらいの勢いで、廊下でもどこでも、すれ違う人達みんなをオーラと目つきで蹴散らして、かつ盛大な注目を集めていた。

あんた、恥ずかしくないの？

って、いつものあたしなら言えるんだけど……。

「てめえっ余計な事をペラペラペラ喋りやがってっ！俺がこんなにお前の事、口づぐんでやってんじゃねえかっ」

「う、ごめん……」

「突然現れたり飛んだり跳ねたり人の部屋に侵入したり、獣並みにサルだつて事まで黙ってやってるってのに、テメーが何かしでかす度に見たくもねえ悪趣味な柄を見せられてる、俺の身にもなってるっ！」

「す、すみません、というかやつば見えてたんだパンツ……」

「何なんだよお前はっ」

「でも、ただの従妹いとこにキスする方もおかしいと思う」

「それはっ」

香取が真っ赤になって、突然立ち止まった。引つ張られていたあ

たしは、前につんのめりそうになる。

あたし達は校舎裏に出ていて、初夏の太陽が頭上に明るく降り注いでいた。

なのにその下で、あまり健全とはいえない話をするあたし達。

「・・・ち、小さい頃に、親同志にけしかけられて、物ごころつく前からさせられてたんだよ・・・。あれは、その名残っつーか・・・」

「そ、そうは見えなかつたけど・・・」

あたしはフツに驚いてしまった。あれが名残のキス？ というか、そういう事を幼少の頃より面白がってさせちゃっ親って、どうなの？ もしその後に関手の子供が不細工に育っちゃったらどうするのよ？ て、そこじゃないか。

先程の勢いはどこへやら、一瞬でも香取が怯んだその際に、あたしはチャンスとばかりにたたみかけるように言った。

「はるなちゃんは今でも本気でしよう？ そんな子にキスしちゃってんだから、あんたは充分、あの子の彼氏よ。あたし、そんな面倒な事に巻き込まれたくないから、今すぐ教室に戻って『俺の女』宣言、解除してきて」

「じゃ、お前、自分の事を俺に説明してみろよ」
「嫌」

「なら、昨日の事を弁明してみろよ。何だよ、あれは」
「嫌」

「じゃ、俺が自力で調べるしかないだろ。他人の弱みを言いふらす

なんて好きじゃねえからな。弱みつつーもんは言いふらさずに握っとくもんだ」

「……………まさか……………」

腕を組んで真面目腐って言うのに言ってる台詞が恐ろしくって、あたしが言葉を失って香取を凝視していると、彼は一転、不敵な笑みを浮かべてあたしに言った。

「これからはなーんでも、俺の言う事、聞いてもらうぜ」

あたしは絶句！ ついでに後ずさる！ 金魚みたいに、口がパクパクとなった。

さっきから何なのよっこの男の思考回路はっ！ 喧嘩売ってるのかと思えば、まるで天下を取った見たいな態度に出てっ。しまいは言う事を聞けだ？ テレポ見てパニックってくれた方がまだマシってもんよ、バカ扱いができるじゃないっ。

「あ、あんたっ、あの状況を目の当たり^まにしてっ、受け入れられるなんておかしくないっ？」

「おかしいのはお前。言えた立場か？」

「そうだけどっ。じゃなくて、嫌だ嫌だっ香取の下僕なんて絶対嫌だっ！」

「じゃ、やっぱり今日から俺の彼女な。宜しく。可愛がってやるから」

「やっぱりって何だーっ！ 状況変わってないし、なんでそうなる

「のよーっ！」

「付き合ってるとなりや、四六時中一緒にいてもおかしくないだろ」

「四六時中一緒になんかいたくないっ！」

「尋常じゃねえ事が身に降りかかったんだ、お前が何者か調べないと気が済まねえんだよ。まず手始めに、そのハタ迷惑な下着の柄をどうにかしないと。俺が新しいのを買ってやる」

「……何？」

いつのまにやらパニックってるのはあたしで、思いつきり立場が逆転している気がするんだけど、

とりあえず、我に帰りました。今、なんてった？

下着買っつて言った？ 下着って、パンツの事？

顔面蒼白で香取を見上げてしまった。

香取は本当に、嫌そうな顔をしていた。

「星条旗だかトリコロールだか日の丸だか知らねーけどよ。ハッキリ言っただけなんだわ。センス悪いってのは一種の暴力だな」

「……しつかり見てんじやんよっあたしのパンツの柄、全部っ！」

「側にいると移りそうで嫌だから、俺が変えてやる。とりあえず、今持ってる下着は全部捨てる」

「ちよっと！ やつこの思いで揃えた人のコレクションに何言ってるのっ！」

「あんな最悪なもんを身に着けてる女を連れて歩けるか。どこまで俺に迷惑かけんだよ」

「……どっつっただけっ俺様なんだーっ！」

これだけ吠えても気付かれない。校舎裏って、ステキ。
あたしは思いつきり喚きまくった。

「嫌だーっ!! こんなヤツの所にお嫁に行きたくなーっ!!」
「……………嫁?」
「……………あ」

香取の大きな瞳が見開かれる。

あたしは一瞬にして声が出なくなってしまう、動揺のあまり、まるでコントの様にピクリとも動けなくなった。

しまった。さ、さ、最悪だ……本人の目の前で、こんなヤツの前で、け、け、結婚話を出してしまった……………。

とっつても痛い沈黙が、あたし達の間流れる。

……………今すぐ、今すぐ消え去りたいっ。こんな時こそそのテレポテーションでしょ? 跡形もなく、きれいさっぱりこいつの前から姿を消したいっどっか遠くに逃げたいよおお……………。

すると香取の、気の抜けた様な声が降ってきた。

「俺、そこまで行ってねーぞ。なんでサルを娶らにゃなんねーんだ」
「……………娶るってあんた……………」

本能的に突っ込みを入れそうになり、あたしはハッと気が付いた。そうだった！

とつてもかわいい、乙女的な回避方法を思いついたっ！！コレでいこう！ よしいこう！！

勢いよく顔を上げると、お兄に誤魔化しをかける時の様な妹視線を繰り出して（つまりあれです、ブリブリです）上目遣いで言った。

「あたしっ。昔から、将来を思い描ける人とでないとお付き合い出来ないの」

「何？」

香取がイラッと片眉を上げる。

「つまり結婚をお約束した人じゃないと付き合えな「黙れバカ」

・・・信じらんない。かぶせたよ。くったよ、あたしの台詞。黙れバカだつて。

本気でコイツン所にだけは、嫁に行きたくない。いつか絶対、後ろから刺しそう。昼ドラサスペンスまっしぐらよ。お祖母ちゃん、こんなヤツ、あたし好みになんて育ちません。

あたしが何か言い返そうとしたその時、校舎の陰から人声が近づいてくるのを、二人して感じた。

本能的に口を閉じると、その声はつきりと近づいてくる。ヤバい。咄嗟に身構えた。授業をサボっているのもヤバいし、こ

こがバレルのもヤバいし、香取と二人つきりている事を見られるのもヤバい。これはまあ、クラス中が知っている事だろうけど。

その時、香取に腕を掴まれて、文字通り茂みの中に連れ込まれた。急な事だったのでバランスを崩してしまった。

「うわっと……」

慌てて腕を振り回したのだけど、努力の甲斐も虚しく倒れ込んでしまう。香取を巻き込んで、二人で尻もちをついてしまった。

「いつてえ……」

至近距離で、女の子みたいに長い睫毛があたしの鼻先をかすつた。香取の上に乗つかる様に倒れてしまったらしい。この体制、何度目よ。

「お前、運動神経いいのか悪いのか、どっちだよ……」

香取は茂みと灌木かんぼくの中に沈み込み、あっちこつちを擦ってしまつた様で、あたしはそれに守られる様に無傷だった。

顔だけはいい、彼の美少年振りを間近でしみじみと眺めてしまつた。たつぷりストレスを貰ってるんだもの、多少の観賞は許されるわよね？ この男、黙っていいやいいのよ。

その時顔をしかめていた香取と目が合い、あたしは慌てて反らした。

人の声がどんどん近づいてくる。

隠れてそうっとな覗いてみると、体格のいい男子生徒と、うだつの
上がらなさそうな線の細い男性の二人がやってきた。

男子生徒の方は見た事がないけど、男性の方には見覚えがある。と思つて、自然と目を見開いて覗き見（？）をしていたら、あたしの後ろで香取がボソツと呟いた。

「あいつ、こんな所で何をやってるんだろ？」

「え？ 知り合い？」

「ちげーよ。事務員だろ？ お前、覚えてないのか？」

言われて、僅かな時間差の後、あたしは思い当たった。そっか、あの人、この間新しく入った事務員さんだ。だってこの間、資料を取りに行く時に見た。あの時、初めて見た顔だったもん。

あたしは少し驚いて振り返り、間近にある香取の顔を眺めた。

「よく覚えてんね」

「俺が文句付けたら、異常にビビってたから」

真顔であたしに答える。信じらんない、誰かれ構わず絡んでいるの？ チンピラと変わらないじゃん。

本気で引いた時、向こうでその人達の話し声が聞こえてきた。

体格のいい男子生徒の方は、体育会系に見える。そう言えばウチの高校にはラグビー部があった。でも誰なのだろう？ 顔が見えない。

だってその彼は、体格に似合わず顔を真っ青にして、とても苦しそうに歩いている。俯き、体を折り曲げるようにして、よろめくよ

うに進んでいる。時折立ち止まり、吐くんじやないか、と思ってしまった。

彼に付き添っている事務員さんは、彼の背中をさすりながら、歩調を合わせて進んでいる。話し声はその事務員さんから発せられるものだった。なんか、しきりと労わっているみたい。

でもなんでここに来るの？ ここに来たって、何も無いよ？ 茂みとフェンス以外。

そう思っていたら、男子生徒がついに、地面に膝をついてしまった。

事務員さんが、彼の前に回って、同じように膝をついた。

その瞬間、あたしは胃の中身が逆流するかのような感覚に襲われた。

今朝、朝食を食べて以来何も口にしていなくて、もうお昼近く。だから本当は胃から逆流するものは何もなく、代わりに胃液が口の中に広がる様な気がした。

ごくつと生唾を飲み込む。

覚えのある匂いが、鼻をついた。

この感覚、何回目？

彼はイットだ！！！

本能的な恐怖が襲ってきた。喉が詰まって息が出来ない。何で？ どうして学校にイットがいるの？！ あたしの頭はパニックになった。

その間にもあたしの目の前で事務員さんは、俯いている男子生徒の肩に片手を乗せ、もう片方の手を彼の顎にやった。そつと上を向かせる。男子生徒の目蓋は閉じられたまま。

イットの目は、濁っているのに輝いていた。

うだつが上がらない風体に見えた事務員は今や、あたしの眼には狂気に満ちた殺人者にしか映らなかった。

実際、イットが人を殺す所を見た事はない。人が死ぬほど気を吸うなんて稀だ、とも聞いている。

なのにこの恐怖感は、どうだろう。
背筋が凍る？ 鳥肌が立つ？ 冷たい空気に覆われる？
そんなものじゃない。

「かつ香取……っ」

あたしはやつとの思いで声を絞り出した。

「何だよ？」

後ずさったあたしの背中、香取の胸にあたった。震えが止まらない。

香取は、あたしの両肩を脇から掴むような体勢になった。そこで初めて、あたしの震えに気付いたらしい。すごく、驚いた声を出した。

「どうしたんだよ、お前？」

「あ、あの人っ……」

「あいつがどうした？」

そうしている間にも、事務員からの恐ろしい気がピンピンに伝わってくる。喉が詰まっているのに、吐きそうなのはこのあたし。逃げ出したいのに、恐ろしすぎて足が動かない。

あの子、殺される。あの人、殺す気だ。

ちよっと軽く味見、なんて雰囲気じゃ、ない。

あの、凍った液体の様な、腐った泥水の様な匂い。まわりつく様な、この感覚。

逃げたい！ 逃げたい！！

あたしは体の向きを変えると、両手で頭を抱え、香取に胸に顔をうずめた。

「どうしよう、誰か助けて！」

「……怖いっ……怖いっ」

「おい、ちょっと……何だ、アレ？」

香取の声のトーンが変わった。

咄嗟に顔を上げて彼を見ると、呆然としたように彼らの方を眺めている。

慌てて後ろを振り返ったあたしは、初めて、イットが人の気を吸っている所を見てしまった。

傍からはキスをしているようにしか映らない。だけど良く見ると、僅かに唇を離している。

男子生徒は体全体が、まるでおもちゃの様にガタガタと震えている。その目は見開かれて、もう、ホラー映画通りの表情をしている。なのにイットの方は、恍惚とした表情を浮かべて気を吸い続けている。その瞳は瞳孔がまるで点の様に小さくなり、オレンジ色に光っていた。

僅かに離れた唇から何が吸われているのか、そこまでは見えなかった。

何故なら、光も色も、何もなかったから。

この時の彼らから発せられる気配に音があるとしたら、ゴウゴウという表現がピッタリだと思う。だってあたしは本当に、この空気と

恐怖に圧倒されて、何の音も聞こえなかった。

「……………ヤダっ……………」

あたしは再び香取の胸の中に、顔をうずめてしまった。

香取は多分、本能的なのだと思う。あたしの肩をグツと力強く抱きしめた。

けれども彼の体もあたしと同じくらい、硬直していた。

First Incident 2

「いやあっ」

あたしは知らないうちに涙を流していた。だって、目の前で人が殺される！

なにあたしは、何も出来ない。恐ろし過ぎて、足さえ動かせない。側にいる人に縋りつく事で精一杯。

しかも、出来る事なら逃げ出したいって思っている！！

涙でぐちゃぐちゃになりながら震えていると、あたしの肩を抱く香取の手に、更に力がこもった。

同時に、低い声が頭上から降ってきた。

「……ちょっと待ってる」

「え？」

あたしが顔を上げるとほぼ同時に、香取はあたしから手を離れた。そしてなんと、彼らに近づいていったの！

あたしが声も出せずに驚愕していると、香取は歩きながら彼らに声をかけた。

「おい、あんた」

イトトの体がビクッと揺れたかと思うと、次の瞬間には全てが収まっていた。

男子生徒は音を立てて、地面に倒れた。その顔はこちらからは見えなけれど、大きな太い手は真っ白になっている。

イトトが振り返ったら、目はもう普通の黒目だった。というより、向こうもとっても驚いていた。

目を大きく見開いて、口も、多分気を吸うためではなく、大きく開かれていた。

「え？」

「何やってんだよ、こんな所で」

「・・・・・・・・・・」

きつと、イトトが気を吸っている最中に、こうやって声をかける人間って少ない、いや、いないんじゃないかな？ だってあの人の驚きようって、半端じゃないよ？

かくいうあたしも、相当驚いています。だって、怖くないの？！

「どういう経緯いきほじなのかは知らないけど、・・・少なくとも、学校でやる行為じゃないよな？」

「・・・・・・・・・・」

何だか妙に的がズレている様な台詞を言いながら、香取は臆する事無く、イトトに近づいていく。

最初はポカン……としていたイツトも、開かれた目と口を段々に閉じ、徐々に瞳に怒りと苛立ちの色を見せ始めた。

……ヤバいつ。

あたしは焦った。あの人、香取を攻撃するかもしれない。

なのに香取は、気付いていないのか歩みを止めない。

再び、口を開いた。

「しかも彼、倒れてるんじゃないの？」

「香取っ！ 逃げてっ！」

あたしは思わず大声を出してしまった。というより、やっと声が出た！

二人が同時に振り向いて、同時に驚いた表情を見せた。

でも、香取は訝しげでもあり、イツトの方は初めてあたしを見て衝撃を受けた様子。

香取が間抜けに言った。

「はあ？」

「早くっ離れてよっ香取っっ」

「………へえ」

イツトが、ニヤリ、と笑った。

あたしを見て、笑った。

ニヤリ、と。

「この学校には、サイがいるんだ？」

あたしは自分の心臓が、凍りついたのを感じた。

心のどこかで思う。

蛇に睨まれて呑み込まれるウサギって、こっぴつ感覚なんだろうな。

今まで呑み込まれた事なんて無いのに、本能で、知っているんだ。

相手がどれほど恐ろしいか、って。

イットの好物は、サイの、気。イットを負かす事が出来るのも、サイ。

あたし、出ちゃっているんだ。サイとしての力を、本当にコントロール出来ていないんだ。

目の前のイットは、あたしから目を反らさずに立ち上がった。

もう、地面に倒れている男子生徒に、目もくれない。

そのまま、歩きだした。こっちに来る！！

「じゃあ、このままにはしておけないな」

「おい、あんた」

あたしに近づくとイトトを、香取が驚いたように声をかけた。
なのにイトトは香取を無視して、その前を通り過ぎる。香取が更に、啞然とした。

イトトがあたしを見つめ続ける。あたしは、早くも目眩を感じてきた。

どうしよう、目を反らせないっ。

最早後ずさりも出来ないあたしは、まるで木偶の坊のように立ちすくむだけ。

ズンズンとイトトが近づいてくる。その後ろを香取が、慌てて追いかけてその肩を乱暴に掴んだ。

「何やってんだよ？」

「離せ」

「っつっ」

イトトが香取を振り払った瞬間、まるで巨大な静電気が起こったようなバチツという音がした。香取は、弾かれた様に手を離れた。そのままの体勢で、信じられない様な表情でイトトを見つめている。

そしてイトトはお構いなしに、あたしに向かって歩いてくる。あたしは金縛りにあっているみたいだった。

彼の瞳がオレンジ色に光りはじめる。怖い。怖い。引きずりこまれる。

この瞳の暗闇に、まとわりつく様な冷たく濁った、呼吸も出来ない恐怖に引きずりこまれるっ。

「止まれって」

香取が再び、イトトの腕を掴んだ。

香取は眉間に皺を寄せ、先程より顔つきが険しくなっている。思いつきりイトトを引っ張り戻した。

その瞬間、イトトが勢いよく振り向き、腕を掴んでいる香取の首を掴んだ。

そしてそれを強引に捻じり上げる。

「え？」

香取は手首を捻じり上げられているのに、予想外の事が起きている為か、ポカン、とした。

そのまま手首を掴まれ、ジッとイトトの瞳を見つめている。

「.....」

香取を睨んだイトトの瞳が、一層オレンジに輝いた。

あたしが息を飲んでいると、イトトはそのまま香取に近づいてい

く。顔がどんどん、近づいていく。

なのに香取は呆気に取られた様に、イットの瞳を見つめている。

「香取っ！！」

あたしは叫んだ。だってイットが、香取を喰おうとしている！！
香取がそれに捕まって、まるで催眠にかかったかのように動けないでいる！！

イットが顔を近づけて、香取の唇の手前で、わずかに顔を傾けた。

First Incident 3

立ちすくんだ香取の唇ギリギリに、イットの唇が近づいた。触れるか触れないかの距離。

ヤラレル。ナントカシナクチャ。

あたしは体中の毛が、逆立つかのような感覚を覚えた。それが、イットの気からもたらされたものなのか、あたしの中から沸き起こったのかはわからない。

息が止まった。何かが、あたしの体の中で弾けた、気がした。

頭で考えるよりも、体が動く。あたしは飛び出そうとしていた。その時、香取の拳こぶしが上がった。

「気色悪い事すんじゃないやねえよっ!!」
「え?」

目を疑った。

だって………香取が、イットを殴った。

………殴った??

滅茶苦茶綺麗に決まったストレートパンチは、線の細い華奢なイラストを吹き飛ばすには十分な威力だった。

て、動けんの???

殴られた彼は、見事に飛ばされて、ひっくり返った。うっそでしよ???!!

あたしは大驚愕して、口がパクパクと動くだけだった。え? え? 殴るだけでいいの?? それだけでやっつけられちゃうの、イラストって???

こう、派手なサイのアクションとか、秘密アイテムとか、そういうのは必要無いの???

香取を凝視していると、香取は怒りのあまり顔を真っ赤にして、肩で息を言った。

「何っだっあいつっ!! あんな気色悪いホモ、見た事ねえ!」
「.....え?」

ホモ? ホモだつて???

香取はあたしにズンズン近づくと、あたしの腕をむんずと引つ掴んだ。

そして有無を言わずあたしを引きずって歩きだしたの。

「おい、行くぞっ」

「ちよっと」

「あーっ、鳥肌立つっ！ このままここにいるとぶっ殺しそうだっ。あの目つき、いくらなんでもあいつは異常だっ、くっそっ。おっと、こいつ」

怒り狂って喚いていたのに、急に立ち止まった。だからあたしは、前につんのめりそうになる。さっきもやったわ、コレ。

香取は忌々しそうに、あたし達の足元に倒れている男子生徒に視線を落とした。

「自業自得とは言え、ここにほっとく訳にかねえよな。こんな所で二人でヨロシクやられたら、今後俺、ここに近づく気にもなれねえ。おい、起きろ」

そう言って、靴で軽く、男子生徒を蹴っ飛ばす。あたしの腕を掴んだまま。下唇をわずかに突き出して。

あたしは本当に、心底、……………呆れてしまった。

「……………あんだ、本当に、……………この状況の感想が、それ……………」

「あ？ 何言ってるんだよ？ お前だって見たる？ あの気持ち悪いホモがこいつを襲う所。しかしお前があんなにホモアレルギーだとは知らなかった。人間を差別するのはよくねーぞ」

あたしのあの恐怖の震えを、ホモアレルギーだと??

何よ、それ！！ というよりあんた、あの凄まじい恐怖オーラを、何にも感じてない訳？

それより何より、何であんた動けるのよ??

あたしは呆然と驚愕が入り混じった気持ちで、香取の顔を見上げた。だけど次の瞬間、ムツとした。

だって癩に障るんだもんっ、眉根を寄せた香取が、いかにも常識人って顔つきで、あたしに人間差別の話をするからっ。

「・・・な、ちょ、あんたがそれ言う??」

「こいつ、起きねーな。ちっ、保健室まで連れて行くか。このデカイやつを」

あたしの突っかかりを、香取は普通にスルーした。やっとあたしから手を離し、屈んで、倒れている男子生徒を覗き込む。

あたしは香取から手を離してもらったものの、あのイットがいつ目を覚ますかとビクビクしていた。振り返ったけれど、彼は地面にのびたままだった。

・・・ねえ、確か、イットに目を付けられたら、それに対抗出来るのって、サイだけじゃなかったっけ？ 新谷さんがそう言っ
てなかったっけ？

あたしはマジマジと香取を見下ろした。

・・・じゃ、やっぱ、香取がサイ、と考えるのが妥当？
お祖母ちゃんも、それを調べないと、って言っていたし。

だけど今までの状況じゃ、あたし達ってまるつきり立場が逆み
たい。だって、サイのあたしは金縛りみたいに一步も動けなかつたの
に、何だかよくわからない香取は、イットの金縛りなんてまるつき
り無視して殴ったんだよ？ しかも恐怖を感じた様子、無し。

呆然としながら脳内のパニックを処理していると、香取が下から
声をかけてきた。

「おい、手を貸せ」

「え？ ええ？」

「ほら、さっさとしろ」

倒れている彼を抱き起こし、香取がその脇下に肩を入れた。

あたしは慌てて反対側に屈み、同じように脇下に首を入れたのだ
けど・・・うっ・・・。

「よいしょ・・・っと。おい、しっかり支えろよっ」

「はあ？ 無理でしょ、重っ。何これっ」

「くっそ、お前、怪力は使えねーのかよっ」
「あたしを何だと思ってるのよっ」

身長が180センチ以上、体重は確実に三桁を超えているであろう意識の無い男を、華奢なあたし達ふたりで支えられる訳が無い。香取ってまだまだ成長期、って体つきをしてるもん。高三なのにさ、細すぎて体型が幼いの。顔もどっちかと言うと女顔だから、黙っていればますます幼く見えるんだと思う。

……態度と腕力が大きい事は、認める。あのパンチは凄かったわ。

とにかく、あたし達二人がうんうん唸っても、この巨体は中々動かない。やっとの思いで立ち上がったのだけれど、これで保健室に連れて行くこうなんて到底無理な様な気がして来た。

だからあたしはイライラしてきて、肩から彼の腕を外した。その勢いでバランスが崩れ、香取が一人で彼を支える格好となる。というより、巨体に埋もれちゃってます。

「おいっ。ちゃんと担げよっ」

あたしは無視して、ポケットから携帯を取り出した。あれ？ 着信がある？ 後で見なくちゃ。

脇では香取が「何やってんだよ、手を出せ、サルっ」とか喚いているから、尚更シカト。

「……………あ？　もしもし？　私、3年E組の宮地真琴です。今、第二理科室の裏にいますけど、男子生徒が倒れているんです。・
・はい、具合が悪いみたいで。だけどあたし達じゃ、ちょっと重
すぎまして」

ポカン、と口を開け始めた香取を尻目に、あたしは要件を済まし
た。これでよし。大人が後二人は来るでしょ。

携帯を畳むとポケットに滑らしながら、あたしは香取に冷ややか
な視線を送った。

男子生徒を再び地面に寝かせた香取は、すっかり拗ねて、また下
唇がちよつと出ている。目は全然違う空中をわざとらしく泳いでい
て……………何よ、無駄に可愛いじゃない。

意外な反応に、あたしは少し戸惑いながら言った。

「バカとなんとかは使い様」

「俺はハサミか」

「ねえ、あの時、本当に何も感じなかったの？」

「ああ？」

「事務員が彼を襲ってた時」

「だから何言ってたんだよ。めっちゃ気色悪かったじゃねえか。目も
イッチャてるし、あいつら、クスリでもやってんのか？」

「……………いい」

あたしは溜息をついて、手をひらひらと振った。

なんだか凄く疲れがでてきた。香取のこのズレた感覚は、何だろ
う？　俺様で天然？　どこまで人を疲れさす男なのよ。

……まあ、これが、普通の反応なのかもしれないな。あたしは無意識に髪をいじりながら、考えた。だって、気を吸うヴァンパイアなんて、誰が信じるの？ あたしだって、自分がサイでこの目でイットを見ていなければ、絶対何にも、信じないものね。

その時、ポケットに入れた携帯が震えた。そうだ、着信があったんだった。

急いで取り出すと、ヒトミからだった。

「ヒトミ？」

あたしが電話に出ると、香取がこっちを見てわずかに顔を歪めた。

352

『真琴？ 大丈夫？』

「え？ 何で？ 何回も電話くれた？」

『うん。だってとんでもないもの見たから。平気なの？』

見た？ 少し間を置いてから、あたしは理解した。ああ、そういう事ね。凄いな、ヒトミって。

「平気。なんというか……とりあえず、平気」

『今からそつち行くから』

「え？ いいよ。今は落ち着いているし」

『無理だよ。真琴が電話に出ないから、恵美子さんに連絡しちゃっ

た

「げ」

「おい」

香取が急に、あたしに声をかけてきた。少し強めの、鋭い声。見ると、彼は険しい表情をして、あたしの後ろを指さした。

「あいつがいねえ」

振り返ると、イットは消えていた。しまった、やられたっ。

あたしは息を飲んで絶句してしまった。電話の向こうで『どうしたの?』とヒトミが尋ねる。

「……逃げられました」

イットが消えた場所を眺めながら、あたしは呆然と呟いた。

そしてふつと気付いて後ろを振り返ると、香取が凄く訝しそうに、眉根を寄せて、あたしを見つめていた。

「逃げられた」。なんでその台詞を、電話の相手に話すんだよ? お前、なんか知ってるのか? お前達、なんか繋がってるのか? ヒトミってあいつだろ?

表情から、香取の考えている事が口口に伝わってきて（サイじゃなくってもね）、あたしは気まずく視線を反らした。

A n d n e x t 1

「お前ら二人揃って俺の授業をサボるとは、いい根性だな。どういう事だ？」

数学教員室で、担任加藤は椅子に座って、大股開きで、腕を組んで、あたし達を睨み上げた。

あたしと香取は、黙って突っ立ってる。あたしはこっそり、溜息をついた。

あーあ、この歳でこんな叱られ方をするとは、情けない……。今まで、上手に誤魔化しながらサボれて来たのに。

「・・・・・・・・・・」

「数学では、確かにクラスストップの二人だけだな。成績が良けりゃ、なんでも許される訳じゃないんだぞ特に香取」

「・・・・・・・・・・」

香取の傍若無人振りは、確かに目に余るものがある。あたしと違って、興味の無い授業は堂々とサボったり、或いは授業を無視して一人で違う教科を勉強していたり、教師への態度が全くなってなかったり、散々なものね。

あたしは、ほら、そーゆーのはコソコソ隠れてやるタイプだから。

香取は不機嫌に黙り込んで、そっぱを向いている。わかりやすいなあ、ある意味、素直だわ。

加藤はそんなあたし達をしばらく眺めると、溜息をついて、苦々しげに言った。

「似た者同士がくつつきやがって。いつから付き合ってたんだ？」

その台詞にあたし達は、一瞬固まった。
そして同時に口を開いた。

「似た者同士って何だよつ俺はこんなサルじゃねえつ」

「付き合っていないわよっこいつ完璧な人権無視なんだからっ」

「うるさいっつ」

三人同時に大声を出したものだから、教員室中の注目を浴び、他の先生や数人の生徒が目を丸くしてこっちを見た。

「今度やったら内申落とす。罰として、微積の問題集38から52まで解いて、明日朝一で提出しろ」

「うっそ、無理だよそんなの」

「だから罰なんだろうが」

あたしの抗議を一蹴して、加藤はジロツと香取を睨んだ。

「香取は違つぞ。古文の岩田先生のところに行って来い」

「え？ 何でだよ？」

「数学じゃあ、お前の罰にはならないからだよ」

加藤の台詞を聞いて、あたしは内心、ちよつと感心した。香取つてよつぽど数学が得意なんだ？ あたしも得意だけど、彼とあたしの間には、よつぽど大きな溝があるらしい。微積のあの問題集が罰にならないなんて、凄すぎる。

「宮地はこのまま進路指導と行きたいところだけど、昼のゴタゴタで先生達も落ち着かないからな。日を改める。覚悟しろ」

加藤の台詞に、あたしは暗くなった。

4時間目の授業中のあの事件は、学校中を大騒ぎさせたからだ。昼休みを経て、急ぎよ、全生徒下校となった。

あたし達の証言で、あの事務員は警察に届けられた。事件性がある、と判断されたみたい。現在、搜索中だ。

男子生徒は、目を覚まさない。呼吸と脈が弱いらしい。救急車で運ばれた。

原因不明の昏睡状態。本人の容体とあたし達の証言から、様々な症状が推理され、処置を受けているけど、

誰も、本当の事はわかっていないと思う。わかった所で、特別、打つ手があるわけでもないらしい。それは以前、ヒトミから聞いた事がある。

事態は、あたしが思っていた以上に、深刻だった。

「・・・・・・・・あの子、大丈夫かな？」

あたしが小さく呟くと、隣の香取が無言の一瞥をくれた。そして、先生に聞いた。

「あの事務員って何？」

「・・・・・・・・最近、事務部の入れ替わりが激しいんだ。急に複数の人達がやめてしまったらしく、その補充員の一人だったらしい。身元は確かなハズだったんだ」

入れ替わりの激しい事務部。それは、何を意味するんだろう？

あのイトトが、全部喰っちゃったんだろうか？

それとも、新しい事務員がみんな、イトトなんだろうか？

そもそもなんで、この学校にいたがるんだろうか？

「何を根拠に『確か』なんて言ってるんだか。頼もしい学校だな」

香取が冷たく言う。加藤は一瞬苦しそうな表情を見せ、黙り込んだ。
だ。

そしてあたしを見ると、真剣な目つきで言った。

「宮地。誰かお家の方に、迎えに来てもらいなさい」

「え？ 何で？」

「顔を見られたんだろ？ 女の子が危ないじゃないか。俺が連絡を入れるから、一人で帰らない方がいい」

「あ……もう、連絡は入ってます」

「じゃ、誰か来るのか？」

「あ……えっと……」

「いーよ、せんせ」

香取が会話を遮る。

少し口をすぼめながら、視線は誰とも合わせず、ぶっきらぼうに言った。

「俺が送ってく。それでいいだろ？」

「……まあ、いいか。香取も気をつけるよ」

「あいつ殴ったの、俺だぜ？」

片眉を上げて、ちよつと迷惑そうに先生を見た後、香取はプイッと教員室を出て行った。

呆気に取られてそれを見ていると、加藤に「お前も帰れ」と促されて、あたしは慌てて部屋を出た。

すると廊下の壁にもたれかかる様にして、ポケットに両手を突っ込んだ香取が立っていた。

あたしを見て、ゆらつと体を起こす。

顔を斜めに傾け、あたしを上から見下ろす様な態度で、かつたる

そうに言った。

「お前、ここで待ってる。ちょっと行ってくる」

「いいよ、無理しなくても。大丈夫だから」

「無駄だよ」

予想外の即答。

あたしが少し眼を見張ると、香取は一瞬、黙り込んだ。
また、少し口が尖がってる。

「別に、担任に言われたからじゃ、ない」

視線を下げて、低い声で呟く。

長い睫毛が、綺麗な影を落としていた。
その瞳が、ふっとあたしを見つめた。

「あんなの見て、一人で帰せるか」

あたしはドキツとした。

あんなのって……イットの事？

それとも……あたしが香取に縋りついて、泣いてしまった事？

マズイものを思い出してしまった、と思い、あたしが唇を軽く噛んだ時、

香取はいつもの表情に戻り、ニヤツと笑った。

「いくら、サルでもな」

それすら、以前と違って見える。
以前と違って、聞こえる。

「礼？」

飛び上がるほど、驚いた。振り向くと、香取の彼女、はるなちゃんがいる。

あたしは心臓がバクバクして、我に返った。な、何、あたし今、軽くトリップしてなかった？

はるなちゃんは、大きな目で香取をじっと見ながら、近づいてくる。

「なんか、騒ぎに巻き込まれた渦中の人が、礼って聞いたんだけど、香取がムツと黙り込んだ。」

「・・・」

「大丈夫？」

「・・・俺、教師に呼ばれてるから」

「そう。待ってるよ」

「予定もあんだよ、帰ってる」

「・・・・・・・・ふーん・・・・・・・・」

いるよねえ、彼女や奥さんにはどうしても頭が上がらない男^{ひと}。とにかくもう、逆らえない男^{ひと}。

二人の間にどんな歴史があるのかは知らないけれど、香取ははるなちゃんには、とことん弱いらしい。言葉も態度も悪いけど、結局は言いなりになっている気がする。

そんな二人を眺めていたら、はるなちゃんがこっちを振り向いた。ギクツとなる、あたし。何でだ？

「礼のクラスの先輩ですか？ 前もお会いしましたよね？」

「あー・・・・・・・・はい」

「こんにちは。私、香取はるなです。礼の従妹です。宜しくお願ひします」

知ってます。幼少より、香取とキスしちゃってる事も、知ってます。

『彼女です』と言わないのは、分をわきまえた奥ゆかしさからなのかしら？

「あ、こちらこそ。宮地真琴です」

「宮地先輩、あの時、礼と一緒にいたんですってね？」

心配そうに、可愛い瞳で見つめられた。

「……ちょっと待て？ 雲行きが怪しくなってきたぞ？」

女の勘がアラーム出してるよ？

「怖かったでしょ？ 大丈夫でしたか？」

「あ……まあ」

「礼は昔から喧嘩っ早くて、正義感も強くて、弱い人は誰でも守っちゃうようなところがあるんですよ。私もよく、守ってもらいました。いつも一緒にいるせいかな？ 多分一番「おい、黙れよ」

ついに我慢が出来なくなつた香取が、はるなちゃんの台詞を遮つた。あたしは後ずさる。なんかヤバいぞ？ ヤバいぞ？ だけどはるなちゃんは動じず、肩をすくめてクスツと笑つた。

「あ、ごめん。喋りすぎちゃつた？」

「……」
「うふふ。なんだかんだ言つて、礼つていつつ私に甘いから、ついでに」

そう言つて、甘えるように香取を見つめる。あたしがいなかったら多分、ここで香取の腕に、自分の腕を絡ませてしなだれかかるん

だわ。

あたしは更に後ずさった。逃げ出すタイミングは、今しかない。

「では、私はここで」

「あ、お前」

香取が咄嗟に、あたしを引き留めようとした。

「冗談でしょ？ あんた達の面倒事に巻き込まないでほしいわ。はるなちゃん、かわいいだけの子じゃないわよ。」

そりゃそうか。こんな性格最悪男を長年相手に出来ている時点で、ハンパないテクニックと根性を持っているに違いない。

あたしはお得意の、造り微笑みをして言った。

「香取くん、岩田先生の所に行くんでしょ？ じゃあまた来週」

あたしが踵を返すのと、香取が何かを言いかけるのが同時。あたしはそれを無視して、小走りにその場を後にした。

教室に戻って鞆を取って、サツサと退散をしよう。逃げる逃げる。

世の中で一番怖いのは、イットよりも、女の子かも知れないもん。

なのに心のどこかが何となくモヤモヤしていて、これって何だろ
う？

教室を去ろうとしたら、ポケットの携帯が震えた。

見ると、ヒトミから。あ、やっぱり迎えに来ちゃったか。

あたしが返事をするより前に、ヒトミの声が聞こえてきた。

『今、どこ？』

あたしは努めて、呑気で明るい声を出した。

「向かってまーす。大変だったよ」

『あ、そうだ。義希さん、来るよ』

義希さん？

一瞬、誰の事か分からなかった。あ、よっちゃんか。
て、あの人も来るの？

「何で？」

『自分で聞いてみれば？』

興味なさそうな、だけどころと面白そうな声色で、ヒトミが言った。

あたしは眉根を寄せた。あの人は、いわゆるヴァンパイアハンターだから……やっぱ、それ関係だよな？

思わず黙りこくった。嫌な予感がする。学校で、どんな騒ぎを起

「こされるんだらう？
てもう、起こってるか。」

ヒトミは、気にせず会話を続ける。

『どんな奴だった？ 本物のイット』
「…………おぞましかった。正直、あんまり思い出したくないな」

『…………だらうね。こつちにも充分伝わってきたから、相当だったんだらうな』

「……………なんでここにいたんだろ？」
『……………真琴のせい？』

真面目な声で言われた。からかわれている訳では、無いらしい。

あたしは、あの時の光景を思い出しながら言った。

「あたしも始め、そう思った。でも違うみたい。だって初めてあたしを見た時、あの人、『この学校にはサイがいるんだ？』みたいな事を言っていたもの。予想外みたいだった」

言い終わると、校門が見えるのが同時。

鞆を片手に、校門にもたれかかって電話をしているヒトミが見えた。向こうもあたしに気付いて、軽く手を上げる。

あたしは彼女に近づいて行った。

「ねえ、ヒトミ」

「何？」

前から言ってみたかった事を、口に出す。

「今度、あたしと一緒に、コンサート、行く？」

「コンサート？ 何の？」

突然の話題転換に、ヒトミがキョトンとする。

あたしは彼女の表情を観察しながら、ゆっくりと、慎重に言った。

「……お兄が渡した、クラシックチケット。ヒトミのおじさんかおばさんが、出ているんでしょ？」

キョトンとしたヒトミの目が徐々に見開かれ、やがて気まずそうに視線を反らした。

下唇を軽く噛み、しばらく黙りこくった後、片手で口を覆って呟いた。

「……まいったな」

「ヒトミ、東でチケットを鞆から落としていたよ？ 気付いてないんでしょ？」

ヒトミは苦笑して、あたしを見た。

「真琴んちに落ちてなきゃいい、と思っていたんだけど。それじゃ、薫は……」

「ヒトミに嫌われているから、チケットを無視されていると思ってる」

「……うん……」

「誤解、解く？」

「……自分で、どうにかするわ」

「……だね」

軽く舌打ちをしながら首を振って苦笑いを続けるヒトミに、あたしは、努めて気軽に言った。

「いいんじゃない？好きなものは好き。嫌いなものは嫌い。欲しけりゃ、買う。行きたくなければ、行かない。無理しなくていいと思っよ？だってヒトミは、悪い事は何もしていない」

すると、ヒトミの苦笑いが消えた。

真顔で黙り込む。

表情からは感情が読めないのです、あたしはちよつと焦った。
なんかヤバい事、言った？

「……悪い事を何もしていないから……好きな事をして
いるから……」

切れ長の瞳を揺らして、彼女は低く呟いた。

「心が休まるとは、限らない」

その深刻な表情にあたしは驚いて、心の中で身構えてしまった。だってヒトミが、自分の心を打ち明けようとしている。そんな事、滅多に無い。

彼女は顔を上げると、遠くに視線を向けながら、気だるそうに言った。

「克服しなくちゃいけない、という脅迫観念は、いつもついて回るんだ。克服を諦めようとしても、ついて回るんだ。自分がコントロール出来る感情とは、次元が違うんだよ」

憂いを含んだ眼差しが、流し眼の様にこちらに向けられた。そして、あたしのちよっと驚いた表情を見て、クスツと笑った。

その時、後ろから声をかけられた。

「まこちゃん」

この声は！

そう思っと思わず、嬉々として振り返ってしまったら、

「よっちゃん！・・・と水島智哉」

「何、そのテンションの差」

相変わらずのお人形さんの様な綺麗な顔が、不服そうに眉根を寄せた。あったり前でしょ、あなたの顔を見ると自然とテンション下がるのよ。

よっちゃんは、素早く校内の敷地に目を走らせている。目が、鋭く光ってる。口元が、抑えきれない様にわずかに上がっている。

体全体から、彼が興奮している様子が伝わってきた。パツと見、すぐくカツコいいのだけれど、あたしは別の意味でドキつとした。

多分、イットを狩れると思っ喜んでるんだ。

やっぱ、怖い。

「ここがそう？ どこにいたの、ヤツは？」

「あ、えつと彼は元々はこの学校の新任事務員で・・・すごい荷物ですね」

改めて彼を見る。

Tシャツにジーンズ、腰にチエツクのシャツを巻いて、大振りのアクセサリーを首や手首に無造作につけて、その姿は抜群の体型にマッチして、とても素敵なのだけれど、

肩に、長くて黒い袋をぶら下げている。手には、キャスターの付いた、大きな布製の荷物を引いている。

ちなみに水島さんも、全く同じものをぶら下げている。

「うん。剣道やってんの」

「剣道？」

「中、入ってもいい？ 一応チェックを入れておきたいんだ。一緒に来てくれるかい？」

あたしの質問にはまるつきり興味が無いらしく、それどころじゃないらしく、よっちゃんはあたしを見ずに校門を通ろうとした。

あたしは咄嗟に引き留めてしまった。

「あ……でも、部外者は」

「部外者じゃないでしょ？ 君の保護者代理」

初めてこつちを見て、ニヤツと笑う。あ、やっと見てくれた。

「本物の保護者代理が、来ますよ」

水島さんが、親指で向こうの方を指した。見ると、お兄が小走りになってくる。

うわあお。全員集合だわ。なんて仰々しい……。

「真琴。大丈夫か？」

「うん、まあ。そもそもあたしが狙われた訳じゃないんだし……」

「こつも皆に集まられると、何だか恥ずかしくなってきた、あたしは柄にも無く俯いてしまった。

するとお兄は眉間に皺を寄せ、よっちゃんと水島さんを睨みつけた。

水島さんが、飄々と肩をすくめた。

「見るからに嫌そうな顔してるよ、この人」

「しょうがないだろ。まこちゃんを初日にあんな目に合わせたの、俺達なんだから」

よっちゃんは事も無げにかわした。今の彼には、周りの事なんてどうでもいいみたい。さっきから一つの事しか目に入っていない様子だもの。

「じゃ、行こうか。案内してよ、真琴ちゃん」

彼はあたしを見てニコツと笑うと、軽快に中に入って行った。

水島さんもその後を、当り前の様について行く。

「あ、はい……」

チラツとヒトミとお兄を横目で見ると、ヒトミは「しょうがないんじゃない？」と言う様に肩をすくめた。お兄は懨然とした表情で、それでもお祖母ちゃんに何か言われてきたのか、渋々と彼らに従う。

だからあたしも、後に続いたの。

昨日といい今日といい、なんだか嵐が吹き荒れている気分になっていた。

A n d n e x t 2

集団で歩いていると、すごく目立つ。あたし以外はみんな背が高い。しかもよつちゃんと水島さんは大荷物だし。

下校途中の生徒も結構いて、みんながこちらを興味深そうに見つめていた。

いつもならここで、よつちゃんと水島さんのアイドルスマイルが振る舞われるのだろうけど、今日は全くそんな気配は無い。

校舎の近くまで来た時、水島さんの歩みが止まった。

「義希」

呼ばれたよつちゃんだけじゃなくて、皆が振り返る。水島さんは校舎脇の、枯れている灌木を指さした。

「見るよ、これ」

「・・・完璧にやられてるな」

「しっかりとね」

それは昨日今日とヒトミが気にしていた場所で、灌木が3つ4つ、根元から枯れている。校舎の左側、社会科室や資料室、事務室などがある場所だった

よつちゃんは屈んで、それを手でボキボキと無造作に折りながら、顔も上げずにあたしに聞いた。

「これ、いつから？」

あたしはヒトミと顔を見合わせた。二人で首をかしげる。

「さあ？」

「昨日見た時は、既に枯れていたよね？」

「他には？」

よっちゃんがあたしに尋ねた。あたしはオウム返しをした。

「他？」

「枯れている植物とか、死んでいる動物とか、なんでも」

枯れている植物？ 死んでいる動物？

あたしはしばらく、考え込んでしまった。植物が枯れているかどうかなんて、気にした事もなかったよ。大体、どこに何が植えられているかも気にした事がないってのに。しかもこんなに広い学校の敷地なんだよ？ 把握しろなんて無理無理。緑化委員会に聞けばいいんじゃない？ て、うちにあったかな緑化委員会。

でも、動物の死体とくれば……そうそう、無いはず。ウチの高校に、飼育小屋なんてないし。

そこであたしは、思い当たった。

「そういえば、猫の死体があった、っていうのは、聞いた事がある」「いつ？」

「えー……一カ月くらい前かな？」

「後は？」

猫死体遺棄事件をもっと突っ込んで聞かれるかと思ったのに、あっさりと次に進まれた。ありゃ。

よっちゃんの真剣な眼差し。

それに少しでも答えようとする、乙女なあたし。

「……最近、体調の悪い人が多い、って事ぐらいかな……
？ あ、風邪で死んだ生徒もいる」

すっごいビツクなネタを忘れていたわ！ そうよ、亡くなった生徒がいたんだった。しかもつい、この間。

そしてあたしは、先ほどのおぞましい光景を思い出してしまった。
気を吸うイット。

全身を震わせて、血の気を無くす男子生徒。

それが、見た事も無い、亡くなった生徒の姿と重なる。

あたしは息を飲んで、目を見開き、よっちゃんを見た。

「……て、え？ まさか……それ、も……全部……
？」

よっちゃんはあたしが眼中にない様子で、枯れた灌木を見つめな

がら立ちあがって言った。

「枯れている木が少ない。そいつは、学校こいに来た時点で、既に人を喰っていた。元々、植物なんかでやり過ぎすつもりはなかったんだ。多分、多数の生徒の気を浅く吸おうとしたが、コントロールが効かなくなっただらうな」

「或いは思ったよりもチャンスが少なく、不特定多数の生徒に手を出せなかったとか」

水島さんが言う。

よっちゃんが水島さんに言った。

「事務員、総入れ替えって言ってたよな？ あいつ一人だけか？」

事務員総入れ替え？ そんな話、もう仕入れているなんて。どこで聞いたのだろう？

あいつ一人だけ、とは、イットが彼一人だけか、と言う意味だとわかった。

水島さんが、何かを考えるように少し眼を細める。

よっちゃんが振り返って、あたしを見た。

「どこ？」

事務室の事ね？

「ここの。一階東棟」

あたしは枯れた灌木の上にある窓を指さした。

5人で慌ただしく校舎入口に向かったら、まさしく、そこから出てくる香取とぼったり出くわした。あ、一人。はるなちゃんは帰ったんだ。

出くわした驚きよりも、先にはるなちゃん存在をあたしは確認してしまった。怯えているなあ。

香取はあたしを見て、他の4人を見て、目と口を丸くした。

「何だよ、この派手な集団は？」

「あー……知り合い？」

「何で疑問形？」

香取が皆を交互に見る。

既に入口に入り、土足のまま上がろうとしていたよっちゃんが、香取の声を聞いて振り向いた。

そして何故か嬉しそうに、笑った。

「あ、香取くん」

「え？」

香取は更に、ポカーンとした。

「何で俺の名前、知ってんの？」

「え？ 何でかな？」

よっちゃんは少し肩をすくめて、嬉しそうに微笑む。この場合、笑いを堪えているのかも知れない。

それはね、あなたと彼女のキスシーンを見ているからですよ、とは誰も言えないもの……。

水島智哉がよっちゃんの肩越しにヒョコつと顔を出し、香取を上から下まで、素早く目を走らせた。

「ふーん、結構いい男じゃん。まだまだ子供だけど」

「はあ？」

「よかつたね、お兄さん」

「……………」

水島さんに言われて、お兄は思いつきり不機嫌な顔で水島さんを睨み返す。そんな二人を見て、あたしはハラハラドキドキ。間違っても嫁入り話やカラダの相性、ここで持ち出さないでよっ。

よっちゃんは荷物を床に置いて、剣道の竹刀袋だけを肩から下げて、香取にニコニコと近づいて行った。

「君だろ？ 彼を殴ったのは」

「誰、あんた？」

もう既に、いつもの攻撃的な香取に戻っている。ジロツとよっちゃんを睨み上げたのだけれど、よっちゃんは全く気にせず、とても機嫌良く答えた。

「僕達、御覧の通り、まこちゃん親衛隊。只今現場を調査中。君も来る？」

な、恥ずかしい事言わないでよっ親衛隊だなんてっ。

ドキッとするけど、・・・実は嬉しい？ ええ嬉しいですよ、こんな事でも舞い上がれるんです、青春中ですから。

「何であんたらがそんな事すんだよ？ あの変態と知り合いなのか？」

「全然。人の話を聞いている？ 僕らはまこちゃんの知り合い」

ジツと睨み続ける香取を、よっちゃんは面白そうに眺める。

それから、そっと彼に近づき、低い声で囁いた。

「だけど、ヤツの素性は知っている」

香取の眉間に皺が寄った。

よっちゃんは顔を離すと、白々しいぐらい澄ました顔で言った。

「君は初めて？ 何も知らない？」

香取は動く事無く、よつちゃんをジッと見た。そして順番にあたし達を見て、最後にあたしを見た。

あたしは何だか耐えられなくなり、視線を外してしまった。
やがて香取は、口を開いた。

「フツーの人間なんで」

フツー、という所を強調して言う。あたしは一瞬、胸が痛んだ。
あたしは普通じゃない、と言われた感じがしたから。

「フツー、ねえ」

よつちゃんは口角を僅かに上げながら、軽く頷くようにして香取を見やると、そのまま踵を返して再び入口に入って行った。

その後から水島さんが、香取に向かい「来いよ」とでも言う様に顎で指した。

香取は二人の後姿を眺めて、それから彼らの後に続くこととする。

あたしはビツクリして、香取に駆け寄った。

「え？ 来るの？」

「乗りかかった船だろ。さっきも警察に色々聞かれたぞ？」

「え？ いるの、警察？」

「お前も声かけられんじゃない？ ウザいから覚悟しろよ」

そうなんだ……。

つい香取と二人で並んで、再び校舎に戻ってきてしまった。

先にながっているよつちゃん達は、荷物を置いてきているのに何故か竹刀は、袋に入れた状態で持ち歩いている。値段が高いのかな？

その後ろ姿を見ていると、隣で香取が、小さな声で言った。

「お前、あいつの事、好きなんだ？」

一瞬、目が点になるあたし。

次の瞬間何を言われたのかわかって、そして誰の事を言われたのかも分かって、あたしは飛び上がってしまった。

「なっ……」

「バレバレ。俺の前だと、態度違い過ぎ」

香取は呆れた様にあたしを横目で見下ろすと、サッサと自分だけ靴を履き替えて上がってしまった。

あ、あ、あり得ない……。

ただ奴に弱みを握られるんだ、あたしは……。

ショックと恥ずかしさで、靴箱にもたれかかってしまった。

その横を、ヒトミが不思議そうに通り過ぎる。
必然的に香取の隣に並ぶ格好となり、香取と目が合い、
彼女はニコッと笑って言った。

「どうも」

すると香取が無愛想に、ヒトミに言った。

「あんたら、本当に付き合ってるの？」

「え？」

「こいつからあんたの名前、一度も出た事がないんだけど」

最初はポカンとしていたヒトミは、すぐにニヤツとした。ヤバ、
またあの子のスイッチ入ったよつ。

「……ふーん。それって、ライバル宣言？」

「バカっっ」

ハリセンがあったら頭を殴りたい気分です、あたしは彼女の腕をひ
つぱりたい。

だけどヒトミはあたしをまるつきり、無視！

「悪いけどこっちは、真琴の事はぜんぶ知ってるからね。何から
何まで。多分君が、喉から手が出るほど知りたい事まで」

「いいかげんにしろっ」

今度こそ、頭を叩いた。素手で。

それから香取に向き直ると、一呼吸間を置いてから、彼に告げた。

「あたし。ヒトミとは付き合っていないから」

ああ、やった！ この高校に入って、初めて言えた！

「やっぱね」

香取は、さもありません、という顔をして頷くと、小馬鹿にした様な表情を浮かべてあたしに言った。

「何お前？ 俺に弁解しちやってんの？」

……あんたに弁解？？

「……は？ バツカじゃないの？」

あたしが眉根を寄せて香取を見ると、彼はかったるそうに言った。

「知らねえよ、俺は。関係ねえから。ただお前が事情を明かさない事には「男じゃないから」

態度と台詞にイラついたあたしは、香取の言葉を遮って言う。

香取は一瞬固まって、間拔けな声を出した。

「……は？」

「男じゃないの、ヒトミは」

「……………何??」

驚愕の表情。隣にいるヒトミを、呆然と見つめる。

それを見てヒトミが、呆れた様な、皮肉っぽい苦笑を浮かべて言った。

「女だよ、悪かったな」

「……………ウソだろ?? マジかよっ!」

「マジマジ。なんなら今からトイレで見せ合いつこする?」

「だからいい加減にしなさいっ」

あたしは二人の間に割って入った。香取は「信じられない」と言う様子でヒトミを凝視している。

それから、そろそろ、とあたしに視線を移した。

そしてまた、そろそろ、とヒトミに視線を戻す。

そして再び、そろそろ、とあたしに視線を……………。

「……………」「違うからね」

「俺、何も言ってるぞ」

「あたし達、そんなんじゃないからね。ハッキリと、付き合ってもいなければ手もつないでいないからね」

「でも時々、こうやってじゃれ合ってるよーん」

ヒトミがあたしの肩の上に乗っかってきて、わざとらしくほっぺ

たにキス！

「だから何なのよあんたはさっきからっ！！」

目を丸くしている香取の前で、あたしは思いっきりヒトミをどついた。

けれども彼女は平気なもので、再びあたしの首に腕を回すとグイッと引き寄せ、耳元で囁いてきた。

「言ったじゃん、楽しめそうって」

「当事者の許可無く楽しむなっ！」

どんな状況でも、こんな状況でも楽しむあんた、流石だわ、見なおしたわよ。

だからあたしを巻き込まないでっ。というより、いい加減あたしで遊ぶな、ほっといてっ。

A n d n e x t 3

そんなあたし達高校生のじゃれあいをよそに、大学生組3人はサッサと先へ行ってしまった。

あたしはヒトミの腕を振り払うと、小走りにその後を追う。

頭の中で、弱冠の疑問が浮かんでいた。お兄の歩みが、よっちゃん達二人と同じだからだ。

仏頂面をして明らかに不服そうなのに、行動のタイミングが何故だか一緒。なんとなく奇妙に感じた。

事務室に着くと、既によっちゃんは扉をあけて中を覗いていた。

「こんにちは」

あたしも顔を出すと、中には顔馴染みの事務のおじちゃんがいた。50歳前後のおじちゃん。いつも優しいの。あたしが早朝登校している時も、えらいねって褒めてくれたの。

そのおじちゃんが、不思議そうにあたし達を見ている。

よっちゃんが言った。

「お一人だけですか？」

「・・・どちら様でしょう？」

「失礼しました」

よっちゃんは軽く頭を下げると、ジーンズの後ろポケットから財布の様なものを取り出した。

その中から彼が出したものを見て、あたしはビックリした。だっ

て名刺なんだもん。

よっちゃんが名刺を持っているなんて、思いもよらなかった。大学生って、そんなものを持つのか？

だけど、それを貰ったおじちゃんが訝しそうに読み上げるその名前に、あたしは更に驚いた。

「……科学警察研究所……？」

……何???

よっちゃんが微笑んで言った。

「警察庁の付属機関です。お問い合わせ下さっても、結構です」

けいさつちよう?

て、何?

「特殊犯罪捜査研究室、ですか」
「言葉の通りです」

おじちゃんとよっちゃんが、名刺を間に挟んで会話を続ける。
あたしは何の事だか分からず、水島さんやお兄を見た。だけど二人とも真面目くさった顔をして、よっちゃん達を見ていて、ピクリとも動かない。

あたしは振り返ってヒトミと香取を見た。

香取はあたしと目が合って、「俺に聞くなよ」とでも言う様に眉根を寄せた。

一方のヒトミは、少し口を開けて「へー」と呟いた。目が、何かを知っているような色をしている。

「しかしもう、警察の事情聴取は済んでいますよ？」

「僕達は、ちょっと違うんです。ほら、見た目もこんなですし。済みません。警察と違って、法的強制力もありません。ですから、ご協力を頂ける範囲で結構なんです」

「……………そうですか」

おじちゃんは、納得したようなしないような顔をして、僅かに頷いた。

あたしは事情が分からないなりに、何となくおじちゃんの気持ち可以理解できる気がした。だってさ、よっちゃんも水島さんもカッコいいけどさ、

なんかチャライもん。

警察を語るには、あまりにもイメージがかけ離れ過ぎているもん。詐欺っぽいもん。

それでも何となく納得しかかるのは、よっちゃん的笑顔と態度が好感度抜群だからなのだろうな、と思った。

「普段、ここで働いているのは何人ですか？」

今度は水島さんが、麗しの笑顔で訊いた。
おじちゃんは頭を掻きながら、済まなそうに答えた。

「本来なら5人なのですが、最近退職者が相次ぎまして。中々補充もきかず……病欠の者もいるものですから、現在は3人でまわしております。……新人を相手に人手不足で落ち着かない中、こんな事件が起きてしまって……」
「お察し致します。彼の席はどれですか？」

水島さんはそう言って、おじちゃんの背中にそつと手を当て促す。
おじちゃんは彼を案内するように答えた。
「こちらです」

よっちゃんも後に続く。
あたしは彼らの後姿を見ながら、ついに顔をしかめてしまった。
だって実はこの部屋に入った時から、決定的なモノを感じているの。

お兄があたしの表情に気付き、心配そうに小声で囁いた。

「どうした？」
「……臭い」

そう。何とも説明のし難い、だけど覚えのあるこの匂い。クラスが風邪で学級閉鎖になる時とか、こういう匂いが薄く、した。ただどこの部屋のこの匂いは、強烈だ。

お兄が片眉を上げた。

「この部屋がか？」

「うん」

「それって……」

お兄は何かを言いかけてヒトミに視線を移し、そして再び心配そうな顔をした。

「ヒトミもか」

「……ん。なんかヤな感じ」

ヒトミも眉根を寄せて、部屋の壁に背中をもたれかかり腕を組んだ。

お兄は少し不安そうな顔をしながら室内眺めまわし、言った。

「感じるのか？」

「うん。真琴ほどじゃないでしょうけど」

お兄は、不審なモノが無いか探る様に落ち着かなく、視線を動かす。

自分が何も感じていない事が不安なんだろうな、と思った。お兄は所謂普通の人間だから。ただ、時々人よりちよっと、気配を感じやすいだけだから。

その時ヒトミが、思い出したように突然言った。

「あ、そだ。私、薫の事嫌いじゃないですよ」
「はっ？」

いきなりの発言に、お兄は面喰った表情で振り返った。
目を見開き、固まっている。

と思ったら次の瞬間、顔が真っ赤になった。……わ
かりやすいわ。

「な、何言っただ、お前っ」

「ん？ 誤解していたら悪いなあ、と思っ」

「ご、誤解？」

「チケツトの事、謝ります。もう、頼みません」

「……え？」

動揺が一転、再びお兄が固まった。

どこか追い詰められた様な顔をして、ヒトミを凝視する。

だけどヒトミはいつも通りの軽い表情を崩さず、前方を見つめた
まま言葉を続けた。

「いつか、行けるようになったら」

そう言って、お兄に視線を移す。

そしてニコっと、微笑んだ。

「一緒に行きましょう。その時は、チケット、お願いします」

お兄はヒトミを凝視する。

そして次には、再び顔が赤くなった。

あたしは驚き半分、呆れ半分で二人を眺めた。ヒトミ、何やってんのよ？ ターゲットのおもちゃを、あたしからお兄に移したな？ 上げて下げてまた上げるって、どんなテクニクよ、天性のタラシだわこの子。

ヒトミのお風呂場に入ってしまった事、そして覚えていない事を、これからお兄は色んな意味で後悔するに違いない……。

ヒトミとお兄のいちやつき(?)にあたしが呆れている時、部屋の向こうではよっちゃんとおじちゃんが話を続けていた。

「病欠の方の容体は？」

「……芳しくは無いようですね。自宅で療養しています」

「退職者の方達の理由は、何で？」

「実は……」

おじちゃんは言い辛そうに、言葉を濁した。

「体調を崩した者もいますし、その……失踪者も……」
「警察への届け出は？」

「家族がしています」

「それら一連の時期は、重なっていますか？」

よつちゃんの質問に、おじちゃんは沈んだ表情を見せた。

「……はい。今学期が始まってから、です」

おじちゃんの言葉を、あたしは頭の中で反芻する。

全ては4月以降に起きた出来事、って事ね？ 体調不良も、失踪も、……生徒の病死も、全て。

その時、一人で部屋の中を歩きまわっていた水島さんが、おじちゃんに聞いた。

「もう一人の事務員の方は？」

「職員室に行っております。事情聴取の為に。そろそろ戻る頃だと思えますが」

「そうですね。ちなみにその方の席は、どちらで？」

「……ここですが……」

おじちゃんが指を指した机に、水島さんが近づく。いつもは冷めた目つきの彼が、それなりに真剣な面持ちで、その机の上にある雑貨とか文房具を手にし始めた。

あたしはそれを見ていて、急に気が付いた。

水島さん、さっきからサイコメトリーをしているんだ。

だって今までずっと一人で、部屋の机を一つずつ触っていた。部屋に入る時はさり気なく、おじちゃんの背中を触っていた。

おお、すごいでサイコメトラー。その自然な動き、お触り魔と言
う名を冠するにふさわしいわ。

あたしが心の中で毒づいている間にも、おじちゃん達の会話は続
く。

「あなたは、体調を崩した事はないのですか？」

「ええ、幸いに。なんとかは風邪をひかないってヤツですかね？」

おじちゃんが苦笑したその時、ガラツと部屋のドアが開いた。

「あ、おかえりなさい」

おじちゃんが声をかける。みると女性が立っていた。ショートカ
ットで、30歳過ぎくらいの女性。顔立ちは綺麗めだけど、あまり
流行とは言えない様なスカートを穿いていて、おしゃれには興味が
無いみたい。

水島さんが極上の笑顔で微笑んだ。

「こんにちは。突然済みません。お疲れの所、申し訳ございませんが、お話をお聞かせ願えませんか？」

彼の笑顔にドギマギしたのか、彼女は少し後ずさり気味になった。そうだよ。水島さんの微笑みて、女性にはハンパないものね。顔だけなら天使だもん。

「……あなたは……？」

「警察庁の付属機関勤務の、水島と申します」

そう言つて微笑み、右手を差し出す。

彼女も躊躇ためらいがちに、でもつられて手を差し出した。

水島さんが彼女の手を握る。一瞬、彼は目を細めた。そして2、3秒後、形のいい口角が上がった。

「ピン」

射抜くような彼の眼。

女性はハツとした様な表情を見せ、咄嗟に手を引っ込めようとした。

だけどその手を水島さんは力を込めてグッと握りしめ、

ニヤツと笑いながらも視線は彼女から外さず、
そのまま手も離そうとはしなかった。

あたしが息を飲んで見守っているその時、
何故だかお兄が動いた。おじちゃんの肩をそつと抱く。

「済みません、校長室を案内していただけませんか？」

「はい？」

「さ、早く」

あたしが驚いてお兄を見ると、お兄はおじちゃんを急かす様に事務室を出て行った。何で？

それをよっちゃんが、鋭い視線で一瞥した。

一方の水島さんは、相変わらずの挑戦的な表情で彼女の手を握り続ける。

女の人の顔は、恐怖の色を浮かべていた。

「あなた達……!!」

そして喉の奥から絞り出すように、詰まった声をあげた。

「ハンターなのね?!」

あたしはギクツとした。こんなに怖がるイットを初めて見た。一体何が起きるんだろう？

あたしは水島さんとよっちゃんを見つめた。

この人達は、何者なのだろう？

彼女は今度こそ、勢いよく彼の手を振りほどいた。

「私は人を喰ったりしていないわっ」

「でも猫を殺つたのは、あんただよね？」

バカにした様な口調で水島さんが言う。

女の人は、狂ったように叫んだ。

「だから何っ？ それは何っ？ 生徒には手を出していないっ」

その時、よっちゃんがゆらつと動いた。

「時間の問題だろ」

鋭い目つき。笑っていない。

彼は彼女に向かって歩きながら、低い声で言った。

「放っておくと、ロクな事になんねーんだ、お前達は」

そして手にしていた竹刀の袋をストン、と床に落とした。

そこから出たものは・・・木刀？

だけどよっちゃんはそれに手をかけ、更に中身を取り出して、それは・・・・・・・・

本物の、剣！　　というか、日本刀！

け、剣道じゃないじゃんっ銃刀法違反だっ！

あたしとヒトミと香取は、息を飲んだ。

よっちゃんは日本刀を彼女に向けると、少しずつじりじりと、彼女との間を詰めて行く。

その間も彼は、彼女から視線を外す事は無かった。

「お前が答えるべき事は、二つ。一つは、昼間のヤツはどこへ逃げたのか。もう一つは、何故この学校に人食いイットが集まるのか？」
「あたしは喰っていない！」
「答えるよ」

容赦無い言葉の響き。冷たい殺気。

彼のあまりの豹変に、あたしは驚いて声も出なかった。

この人は本気だ。きっと躊躇いも無くあの刃を振り下ろす事が出来る。
来る。

今、彼の目の前にいる女性は、彼にとっては人格を持たない、「モノ」なんだ。

「見たくないなら、この部屋出た方がいいよ」

水島さんの冷静な声が聞こえた。いつの間にかあたし達の側に立っている。

あたし達3人はギクツとなって、我に返った。

「え？」

「忘れられなくなる様な事が、始まるかもしれないから」

水島さんは、じつとよつちゃん達を見つめながら言った。

彼の言わんとする事がハッキリと伝わり、あたしは生唾を飲み込む。

すると一瞬の間後、ヒトミがハッキリと言った。

「真琴、出よう」

あたしは驚いて、彼女の方を振り向いた。

「ヒトミ」

「世の中には、見なくていいものや、知らなくていい事があるんだ。だから行くよ、真琴」

「じゃ、ついでに校内のチェックもしてくれる？ 他に不審なモノはないか」

まるでコンビニについての買い物でも頼む様な口調で、水島さんが言う。

あたしはヒトミの、少し思いつめた顔を見て、そして水島さんを見て、

最後に、女性に刃物を向けているよつちゃんを見た。

あの人は、普段はいつも周囲に笑顔を振りまいていた。
なのにこの変わり様な、何？

イツトとはいえ、どこから見ても普通の女性。そんな彼女を躊躇
いもなく、刀で脅すなんて。

「狩る」という言葉を使える彼は、どこまでやるのだろうか？

見なくてはいけない、と思った。

彼をもっとよく知りたい。知らないと、彼を理解する事が出来な
い。

知らないと、彼から逃げる事も出来ない。

「……」

「真琴？」

ヒトミが確かめるように、僅かにあたしの顔を覗きこんだ。
あたしは視線を床に落とし、一言呟いた。

「……ヒトミは、行ってて」

「真琴」

「あたしは、ここにいる」

ヒトミが小さく、息を飲んだ。

その傍らで、水島さんが軽く溜息をついて言った。

「健気だねえ」

その冷めた口調、バカだねえ、と言われている様に聞こえた。あたしを上から見下ろして、冷たい眼差しで言う。

「後悔、するかもよ？」

あたしは言い返す事が出来ず、グツと言葉に詰まった。

そんなあたしをしばらく眺めた後、ヒトミは無言で部屋を出て行った。

心優しいヒトミは、自分の心の守り方を知っている。これでいいんだ。

403

彼女が扉を閉めた時、水島さんが香取に言った。

「香取くん、だっけ？ あの子のガードに行ってくれない？」

「俺が？」

香取は驚いたように声をあげる。

水島さんは当り前の様に言った。

「危ないでしょ、一人じゃ」

「.....」

「君のお姫様は大丈夫だから。ほら、行って」

香取は難しい顔をして黙り込んだ後、低い声で水島さんに言った。

「……何が起こっているのか、いつになったら教えて貰えるんすかね？」

水島さんは香取を少し眺めた後、よっちゃんに視線を移して言った。

「義希に聞けば？ 世の中には知らなくてもいい事があるって、彼女の意見。僕も賛成だし」

「もう充分、巻き込まれてるんすけど。俺をここまで引っ張ってきたのは、あんた達だろ」

ねじ込む様な強引な口調と目つきで、香取が水島さんに言う。

水島さんは「僕じゃないけど」と呟いて、肩をすくめた。

「じゃ、そのうち」

「またかよ。ここまで来て、誰も説明しねーのな」

香取は不服そうに、だけど諦めた様な表情になった。

そして斜めにあたしを見下ろし、呆れ半分憐み半分の瞳を見せた。

「お前もバカなヤツ。あんなに怖がってたくせに。……そんなにあいつが好きか」

「……」

あたしは眼だけで香取を見上げたけど、睨む事は出来ず、無言で視線を外した。

香取はあたしを見つめながらゆっくりと息を吸い、口をすぼめ、

ちょっと不機嫌な顔つきをした。
そしてそのままゆっくりと、部屋を出て行った。

部屋の中には、よっちゃんと水島さん、彼女とあたしの4人だけとなった。

向こうでは緊迫した状態が続いている。

「村本の居所なんて知らないわよっ」

「ヤツはいつから人の気を吸っている？」

「知らない。私がここに来た時はもう、既にあの状態だった」

「生徒は全員、ヤツの仕業か？」

よっちゃんにそれを聞かれた彼女は、一瞬その瞳を曇らせた。

「・・・多分。そうだと思う。早朝とかよく、校内の見回りに出てたから」

そこには、僅かな後悔とも悲しみともつかない色が出ている。

人の気を吸う、という行為は、彼らにとっても罪悪感を伴うものなのかもしれない、と思ってしまうた。

人の心を持ったイトトであれば、という条件付きなのだけど。

「事務員達の体調不良も、村本一人が原因か？」

「知らないわよっ」

「お前はなんでここにいる？」

するとまたもや、彼女の勢いが削がれた。

言葉に詰まり、そして俯き、やがて小さな声で言った。

「……グリフィンが、ここにあるって……」

「グリフィン？」

よっちゃんが聞き返して、あたしも心の中で聞き返して。グリフィン？ なんだっけ？ どうかで訊いた事があるよ？

水島さんがよっちゃんに言った。

「昨日、新谷が言っていたあれじゃない？」

「……獅子鷲か？」

「それ」

二人で心当たりがあるみたいで納得している。

でもあたしはまだ納得していない。獅子鷲なんて聞いた事無いもん。それよりグリフィンの方が聞いた事あるんだもん。なんだっけ？ なんかのゲームに出てきたんだっけ？ それとも映画？ 本じゃないよな、自慢じゃないけどあたし本読まないから。

「私は、ただ、知り合いに聞いて、もし本当にそうなら、・・・
滅多に無いチャンスだと」

「誰だ、その知り合いって言うのは？」

「この辺りじゃ、有名な噂よ」

「その噂の出所（まじら）を聞いてるんだよ」

「噂の根拠なんて、いちいち確かめていたらキリが無いわよ」

調子が戻ってきたのか開き直ったのか、女の人の口調が強くなってきた。見た目が地味なこの女性は、元来気が強いのもかもしれない。

「日本人考古学者が、エジプトの博物館からグリフィンを持ち去った。有名な話よ、あなた達も知っているでしょ？」

「・・・」

いいえ、知りません。

じゃなくて、知ってる!!

あたしは飛び上がった。思い出した!

新谷さんがそんな話をしてくれた! エジプトがどうの、魔法アイテムがどうの、それを巡るイットの仁義なき戦い!

そっか、そのグリフィンって、あの魔法アイテムの事だったんだ!

「それが今どこにあるかって、大学の研究所や博物館、他にも色々

な学校が噂されているけど、ここは単にその一つ。・・・聞いたの、新月の夜にこの敷地内にいたイツトが、何かの気を受けて力を得た、って」

新月の夜？

何かの気？

力を得た？

流石のあたしも嘩然として、眉間に皺が寄ってしまった。

何この人。急にウソくさい話をし始めたよ。

よっちゃんはじつと彼女を睨んだ後、急にプイッと向きを変えた。そして日本刀を鞘におさめ、無造作に袋を掴むと無言で事務室を出て行ってしまった。

どうやら彼も、あたしと同じものを感じたらしい。でっち上げバレバレの呆れた話にイラついたのか、それとも諦めたのかなんだわ。

あたしはちよつとホツとした。いくらイツト相手でも、事が穏便にすんで良かった。

ところがこの女性は、あたし達が彼女の話信じずしかも軽くバカにしている事を感じたのか、ムキになって言葉を続けた。

「そういう噂なの。念力が強くなったただか、人間を操れるようになったただか、気を吸わずに病気が治ったただか、そんな感じの話が毎回

っているのよ。みんな言ってるのよ」

「それ、確か？」

水島さんが静かに聞く。

「知らないって言ってるでしょ？ だから確かめたくって」

「確かめてどうするの？」

冷たい口調の奥に蔑むような響きがあつて、水島さんの顔は綺麗な人形のように無表情だった。

それを聞いた彼女は、カッとしたように彼にくっつかかった。

「力を手に入れようとして何が悪いの？ 幸せになるうとして何が悪いの？ あなた達だって昔から、聖地奪還とか、仏舎利とか、やってる事は同じじゃないっ。要はパワーと幸運を得ようとして、戦争までしているんでしょ？」

聖地奪還とか仏舎利とか。

突然そんな事を言われて、あたしは面喰った。あたし達が何をしたって？

ワンテンポ遅れて、彼女の言葉の意味がわかった。

あなた達、って、人間の歴史の事だ。人間の戦争の歴史に、宗教が絡んでいるって言いたいんだ。

つまり彼らの魔法アイテムも、人間の宗教アイテム（？）と変わらないでしょ、इटトも人間もやっている事は同じよ、って言いた

いのね？

水島さんは首を傾げた。

冷たい視線で彼女を見下ろしている。

「僕には関係無い」

次の瞬間、その瞳が鋭く光った。

そして彼女を脅す様な、凄味のある低い声で言った。

「あんたにも関係無い」

あたしも彼女もギクツとなった。

だって水島さんも、さっきのよっちゃんぐらい、すごく怖い。

この人も相手に容赦をしない、冷たい心を持ち合わせているみたい。

彼女と水島さんは、無言で睨み合った。追い詰められていく彼女の動揺が見てとれる。

その時水島さんが、ふっと緊張を緩めた。

「逃げるなら今だよ。戻って来るな」

え？ と彼女が眼を見張る。
あたしも驚いて彼を見た。

水島さんは彼女を見下ろすと、
何を考えているのか読み取れない、無表情な顔で言った。

「どうしたんだよ。・・・行けば？」

彼女は驚きながらも、ジリジリと後ずさる。

それを水島さんは黙って見つめる。

そして一瞬の後、^{のち}彼女は勢いよく踵を返すと、身一つで飛び出して行った。

それを無言で見送る水島さん。

そんな彼を見つめるあたし。

あたしの気持ちは安堵が半分、拍子抜けが半分だった。

まさかこんなにあっさり逃がすとは思わなかった。

でも考えてみれば、出会った時からこの人は、イットに多少は同情的だったような気がする。

新谷さんの事だって雇っているし、しかも自分のお家で働かせているものね。

暴走気味のよっちゃんを、こつやって背後で支えてバランスを取っているのかもしれないな。

そんな事を考えていると、水島さんがこちらを振り向いた。

「お嬢さん」

・・・お嬢さん？

て、あたしの事？

「義希を捜して来てくれない？ 彼女の事、話さないと。僕はこの部屋を調べないとならないし」

「……………」

「何？ 腰でも抜けてるの？」

いつもの嫌みたっぷり、皮肉屋に戻ってる。

小馬鹿にしたようにあたしの事をみる水島さんを、あたしはジトつと見つめた。

お嬢さん、て何よ？

「名前」

「はい？」

「あたしの名前」

「……………」

「名前を呼ぶのは、人間関係の基本でしょ」

こういうの、揚げ足取りっていうのかもしれないけど、態度をどうのと言っても余計にバカにされそうな気がするだけだし、

とりあえずそんな態度でも、いつもの彼なので安心しちゃうのも事実だし、

でもそんな事を悟られるのも嫌だし、けどその態度にはムカつくし。

水島さんはポカン、と口を開けてあたしを見た。

綺麗だけどすかした顔に、表情が出る瞬間だ。実はこの瞬間にあ

たしは結構ハマっていたりする。ふふ。

優越感、てやつ？

「……案外、マイペースな子だねー」

呆れた様に彼は言うと、次にはニヤツと笑われた。

「真琴。行っておいで」

わざとらしいくらい優しい言い方。しっとり心地よい声色。

これって、やっぱ……

「……バカにされてる？」

「あしらわれてる」

笑顔一転、冷たい視線で見下ろされた。

くっそ、小娘は足元にも及ばないってか。次に期待してろってんだ。

あたしは小さく舌をべっと出すと、その部屋を後にした。

だけどさ、捜すつたつてどこを捜せばいいのよ、こんな広い学校の中で。

「……………携帯で呼べばいいじゃんよー」

あたしはブツブツ文句を言いながら歩いてた。まったく自分が年上だと思つてさ、あたしはパシリかつつーの。これだからお坊ちゃまは、人使いが荒いんだから。

ハタ、と歩みが止まった。

「そか。あたしがそれをすればいいんだ」

バカだ、あたし。すっかり忘れていた。電話をすればいいんだ。色々非常識な事が起こりすぎて、常識的な日常生活を忘れていたわ。

あたしはポケットから携帯を取り出した。操作して、耳にあてる。程無くして聞こえてきたのは、「ただいま、お客様のおかげになった電話番号は、電源が切られているか、電波の届かない所にいる為つながりません」……………。

「そして電源を切つてるお客様……………」

あたしは溜息をついて電話を閉じた。だって校内で電波の届かない所なんて無いもん。

なんで切つちやつたのかな、電源。あの女性イットが期待はずれだったから、拗ねちやつたのかな？

その時、体中がゾクつとなった。
全身で感じる、恐怖。

コレで何度目っ？ 反射的に振り返った。イットが近くにいるっ。

あたしの十数メートル先に、事務室でのあの女性が立っていた。
こちらを見ている。瞳の色は、既にオレンジに光り輝いていた。

「……………なっ……………」

逃げたんじゃなかったの？ 水島さんに情けをかけて貰ったんじ
やなかったの？ なんであたしを襲おうとするのよっ。

あたしが恐怖でパニックになりかかるその瞬間、

彼女の後ろに、人影が現れた。

よっちゃんだ。

そう気付いた時には、彼はもう、手にしている日本刀を彼女の首
に振り下ろしていた。

とても綺麗な、フォームだった。

そして彼女は、血飛沫ちしぶけをあげる事も悲鳴なげきもあげる事無く、
よっちゃんの振り下ろす日本刀のスピードに合わせるように、
サラサラと消えて行った。

後には、彼女が身に着けていた全ての物が、黒っぽい粉にまみれて落ちていた。

よっちゃんはそれを冷たく見下ろすと、吐き捨てるように言った。

「バケモノの言う事を誰が信じるんだよ、バーカ」

そしてあたしを見ると、
いつもの優しい眼とは全然違う、激しさを秘めた瞳でニヤリと笑った。

「ごういう時はね。ためらい無く彼の所にテレポっちゃいな。それか」

言いながら、あたしに近づく。
あたしは彼から視線を反らせず、動く事も出来なかった。まるで
イットの金縛りがまだ、解けていないみたい。

彼はあたしの頬に手を伸ばすと、親指でするつと撫でながら、

とても暗い目つきで笑った。

「俺と一緒にハンターをやる。大歓迎だよ」

この人、人を斬った。

なんの躊躇ためらいも無しに。しかも後ろから。

あたしは呆然と彼を見上げた。

背後から、女の人を斬った……！

「ワークした？」

突然、あたしの後ろから声が出た。水島さんの声だ。

よっちゃんは顔をあげて彼を見ると、ニヤツとして言った。

「大成功」

「悪どい奴だなー」

水島さんは刀の袋を片手に、もう片方の手をポケットに突っ込んで、気だるそうにやって来た。

そしてあたしの目の前、よっちゃんの隣に並ぶと、彼女の黒ずんだ服が落ちている所を見やって少し顔をしかめた。

「誘わなきゃ、彼女、やってなかったかもよ？」
「誘われて踏み留まられなかったコイツが悪いんだろ。大体、獅子鷲を追い回している時点で深みにハマってんだよ」

一気に吐き捨てるように話すよっちゃん。
水島さんはそんな彼を、黙って見つめた。

「一度味をしめたらやめられない。放っておいたらつけあんだよ、こいつらは」

「……いい加減、神経質過ぎるのはやめたら？ まだ彼女の事、何も調べてなかっただろ？」
「調べたろ！ 吐いただろ！ 実際事件が起きて、死人も出てるじゃないか！」

よっちゃんが急に声を荒げた。
あたしはビックリしたのだけれど、水島さんは全く気にしていない様子で静かに言った。

「彼女がした事とは限らなかったでしょ」
「知らねーよ。お前と違って見えてねえんだから。どうだったんだよ」

よっちゃんは膨れるように水島さんを睨みつける。
水島さんはしばらくじっと彼を見て、やがて軽く溜息をついた。

「だから調べる前に、よっちゃんがやっっちゃったんだろ？・・・
まあ、人の気を吸っていたか、という点じゃ、限りなくクロっぽか
っただけだ」

「じゃ、文句言っな」

彼はそう吐き捨てるのと踵を返し、大股で勢いよく歩いて去って行
ってしまった。

「・・・・・・・・」

あたしがその後ろ姿を呆然と見つめていると、背後から水島さん
の静かな声があった。

「だから言ったでしょ？ 後悔しても知らないよって」
「・・・・・・・・」

振り向いて、彼を見つめる。

すると水島さんは、少し肩をすくめて言った。

「まあこの場合、あんたはおとりに使われたから、どうやっても見
ちゃったか」

「おとり？」

「そ。一人でフラフラ歩いて、サイの気垂れ流し」

興味が無さそうに周囲を眺めて、水島さんはあたしに視線を戻した。

「僕らの計画。香取クンと一緒にじゃ、セーブされちゃうかもしれないでしょ？」

「……何の話？」

「詳しい話は、落ち着いた時にでもしてあげるよ」

そう言った後、彼はふっと、あの女性の服の塊に視線を向けた。そして静かで、暗くて低い声で、
少し辛そうに瞳を細めながら言った。

そう、この人は、よっちゃんが絡んだ時にだけ表情が出るんだ。

「あいつは、イトトに事が絡むと性格が豹変するんだ。気付いてい
ると思うけど。……狂うんだよ」

彼女の服を見つめたまま、遠い目をして言葉を続ける。

淡々とした口調の中に、よっちゃんを思いやった切なさが見え隠
れしていた。

「誰を犠牲にしても、仮に自分が犠牲になっても、多分彼は何も気
にしない。イトトを狩る、ただそれだけ。普段の彼の、心配りとか
配慮とか思いやりは、完全に隠れてしまうんだ」

「……何で？」

あたしの言葉に水島さんは振り向いた。
そして柔らかな、苦笑いを浮かべた。

「……………何でだろうね。今は、言えない。少なくとも僕からは」

初めて見る水島さんの本当の感情を、あたしは複雑な気持で眺めた。

そして離れた所の、彼女の黒ずんだ服を見つめた。

よっちゃんが、狂っていた記しき。

「悪かったね」

「苦しいでしょうね」

水島さんとあたしが、同時に口を開いた。
そして彼が聞き返した。

「え？」

「狂ってしまつと。後で苦しいでしょうね」

あたしがそう言つと、彼はしばらく黙りこんだ。

「……………どうかな？」

「自分じゃどうしようもない感情がある、って友達も言っていたし。それがマイナスの感情なら……辛いですね」

嬉々としてイットを狩るよっちゃん。その裏には、ヒトミが持て余していたような、コントロールできない苦しい感情があるんだろうか？

水島さんは、少し確かめる様な口調であたしに言った。

「でも君も怖かったろ？」

「死ぬほど」

あたしは灰まみれの服を見つめ続ける。オレンジ色に変化するイットの瞳。あれが怖くない訳が無い。

けれども心は、先程から違うものを見つめ続けていた。

「でも苦しくはない。……悲しいけど」

水島さんがあたしを見ているのがわかる。

あたしは自分の中で、まだ自覚も出来ていない何かを、強く強く覚悟した。

「あたしはまだ、狂ってないから」

これから起きる何かに、巻き込まれる覚悟。

その時あたしは、逃げずに踏みとどまれるだろうか？

今まで、面倒臭い事は必ず避けてきたあたしが、
初めて真正面から向き合った覚悟だった。

Run down 3

「智哉さん？」

「あ、ヒトミくん、丁度よかった。お嬢がトイレで吐いている」「えっ？」

そう。あたしは今、トイレで吐いています。便器に顔、突っ込んでます。

何故なら今日、2度もイットに襲われかかったからです。そして殺人現場ならぬ、殺イット現場を見てしまったからです。

て、お嬢言うなや、水島智哉っ。まるであんたんちの関係者みたいな響きじゃない、あたしはヤクザじゃないやいつ。

トイレの外での会話が聞こえてきてすぐ、ヒトミが中に入ってきた。

「大丈夫、真琴？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

て言うかさ、みんな何かを忘れていない？

ヒトミは中身は女の子だけれど、見た目はモロに男なんだよ？

そんな彼女が女子トイレに入れるって事は、よっちゃんでも水島さんでも、外でオタオタしているお兄でも中に入れるって事なんじゃない？

裏を返せば、いやこれが現実なんだけど、
彼女が女子トイレにいと周りが驚いて、そっちの後始末の方が
大変なのですよ……？

と、気持ち悪さと戦いながら顔もあげずにヒトミを迎え入れると、
ヒトミはあたしの背中を軽くさすりながら、低めの声で聞いてき
た。

「彼女に襲われた？」

「……」

「義希さん、助けてくれなかったの？」

「……くれた、よ」

トイレットペーパーを取って、とジエスチャーをする。

ヒトミは紙を取ってくれろと、それをあたしに手渡しながら言っ
た。

「当ててあげる。おとりにされたんでしょ？」

「……」

思わず眼を見開いて彼女を見上げる。彼女は腕を組んで言った。

「想像つくって。煽あおって誘って、現場押えて、狩る。人間のふりを
崩さなかったもんな、彼女。そんな彼女の食指を動かすには、真琴
は格好の道具だものね。どうせあの部屋にいる時から、真琴の事を
喰いたくって堪らなかつたんじゃないの？」

「……」

「で、どうするの、これから？」

あたしは無言で、便器に視線を戻した。次の波がくるかもしれない。

でも、中々来ない。少し落ち着いたらしい。

口を拭いて、トイレを流した。

口をすすぎたい。洗面台へ歩いた。

水を口に含むと、後ろでヒトミが言った。

「彼、度胸座ってるね」

「？」

「礼だよ」

レイ？

「香取礼」

ヒトミがそう言って、あたしは驚いて顔をあげて鏡越しに彼女を見つめ、

「ごっくん。あ、飲んじゃったよ。」

レイ、って香取の事を？ い、いつの間に、どんだけ仲良くなったのよ、何で礼って。

そういや二人で学校見回りパトロールをしていたんだ。そういやヒトミは香取が好みのタイプだったんだ。

あたしの頭の中はなんだか混乱して、ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。
。。。。。

「私にね、『何が起こってるんだ』って聞いてきたんだ。だから答えた。『君の見たまんま。彼らはああやって、人を殺す事がある』。そうしたら彼はしばらく黙って、それから言ったんだよ。『あいつは、どこまで足を突っ込んでいるんだ?』って」

鏡の向こうのヒトミは、腕を組んだまま、少し含み笑いをして話す。

あたしは聞いていて、何だかドキドキしてきた。な、何でだろう?

「『あいつって真琴の事?』って聞いたら、彼はムツとしちゃってね。だから『君は関わりたいの?』って聞いたんだ。そうしたら礼は黙りこくって……。何て言ったと思う?」

試す様にあたしを見るヒトミ。

あたしはゴクつと息を飲んだ。

な、なんなの? ちょっと、溜めないでよつ。

「あいつを置いて一人じゃ逃げられねえ。お前みたいに、って言われた」

ヒトミはクスツと笑った。
「ただどあたしは、呼吸が止まってしまった。」

勢い良く振り返り、ヒトミを見て言った。

「別にヒトミは逃げた訳じゃ」

「わかってる」

彼女はあたしの台詞を遮ると、穏やかな口調で言った。

「私達は友人だから。恋人や夫婦の様に、常に同じ行動を取る必要は、無い。別々の行動をする事で生まれる利点、というのもあるだろうし」

「利点、て」

「でもそれが、友情を長続きさせるコツでしょ？」

そう言ってあたしを見つめる。

そして真顔で、低い声で、囁くように言った。

「置いていって、ごめんね」

「やめてよ」

あたしは顔をしかめて、嫌そうな表情を彼女に見せた。

だってあたしは本気で、彼女に置いて行かれたなんて思っていない。そういう選択肢だっただけだと思っっている。無理に合わせず、ただどそれを責めもしない事が、お互いを尊重し合う事だと思うから。

トトミは満足そうに微笑むと、からかう様な目つきをして言った。「でもおかげで礼の男気も聞けたし。よかったじゃない、早速愛されちゃってる？」

そう言われて、あたしは香取の事を思い出した。そして何故だか、とてもやるせない気分になった。

「……香取は、多分、何でも背負い込んじゃうタイプなんだと思う」

「ああ、成程。確かにああ見えて、情が深そうだよな、彼」

うっかり彼の目の前で怯えて泣いてしまい、それが彼を縛り付けているのではないか？

申し訳無く感じているのか、あたしは少し辛い気持になってしまった。

はるなちゃんはずるずると続いているのも。ねだられるままにキスしてしまうのも。

彼女の思いを背負いこんでしまって、それで切れずにいるのかも。男としてはどうかと思うけど、ね。

でもだから、あんな風にぶっきらぼうで他人に不快を与える言動で、周りの人を寄せ付けない様にしているのかもしれない。だって一旦彼の身近に来る事を許してしまうと、彼はもう、その人の全てを背負いこんでしまうだろうから。

そしてそれを手放せなくなっでしまい、結果それが彼を苦しめる事になるだろうから。

黙りこくつてしまったあたしを、わざとなのか、ヒトミは無視して話を続けた。

「それにしても肝が太いというか、悪く言えば自分が気にかけている事以外は何でもアリ、関係無い、ってタイプで、見事だね。驚いた」

「何が？」

「だって義希さんが目の前で人に日本刀を突き付けてるんだよ？それなのに騒がず、誰かに告げる事も無く、私に聞いてくるのは真琴の事だけ。もし私達がアブナイ犯罪集団とかだったら、どうするんだろうね。女性を刺して逃げたとしたら」

うん。それは言えるかも。確かに香取の器の大きさは、尋常じゃ無い。

「あたしがテレポで突然現れても、クローゼットに押し込んだからなあ……」

あたしはしみじみと呟いた。

最初は彼を、単なる鈍感バカだと思っていた。

次にはやつぱり、オウンルールが世界基準、の俺様なんだと呆れていた。

そして昨日は、目先のトラブル回避の為に大きな事でも無視出来ちゃう、究極の事無かれ主義なのかも疑ったのだけれども。

「どうやらそれは、違っらしい。」

香取は「何故？ どうして？」と原因や過去を追求するよりも、現実の対処と未来への対応を優先させるタイプであるみたい。

「彼が過去の原因を知りたがる時はきつと、それを踏まえないと未来が読めない時だけなのだろう。」

あたしが一人で、頭の中で理屈っぽく考えていると、

ヒトミは納得した様に頷いて言った。

「倫理観だけじゃなく、常識まで欠如しているのか」

きつと。

「これが感性で動くタイプのヒトミ。理系人間のあたしとは思考回路が違う。」

ヒトミは楽しそうに、からかいの眼差しであたしを見た。

「礼の行動基準はすべて、真琴中心って事なんだね」

「……な……」

「惚れられたもんだねえ。これは益々面白くなってきた」

「だから彼は別にあたしが好きな訳じゃ」

「好き好き絶対、だーい好き」

あたしは自分でもわかる程に顔を真っ赤にしながら、言葉通り面白そうなかつ意地悪な表情のヒトミの頭を叩こうとした。

その時、廊下から大きな物音がした。

ビククリして、二人とも動きが止まる。

その後、バタバタと足音が遠ざかっていった。

あたし達は慌てて女子トイレから出た。

すると少し離れた廊下に、水島さんが座り込んでいる。何かに突き飛ばされて倒れた様な姿勢だった。

更に離れたところで、香取が振り返る様に彼を見ている。

水島さんの口から、僅かに血が出ていた。

「どうしたんですか？」

少し緊迫した様子でヒトミが尋ねると

「……見てわかんない？」

水島さんが不服そうにあたし達を見上げた。口の端の血を親指でぬぐい、「てっ」とか言ってる。

「……殴られたの？」

あたしが驚いて言うと、彼はジロツとあたしを睨み上げた。ちょっと、こわっ。

「……」

「誰に？」

水島さんが不機嫌に黙り込んだので、今度はヒトミが聞く。彼は香取の方を見やると、苦々しく言った。

「その元氣印に」

あたしとヒトミが同時に顔を上げて香取を見る。

そこに突っ立ってた香取は、少し驚いて声をあげた。

「なっ、俺じゃねえよ」

じゃ、誰なのよ、と聞こうとして、あたしは香取の背後、廊下の向こう側から姿を現した人物を眼にして、一瞬固まった。

お兄だ。

……しかも、怒^{いか}ってる。

……まさか……。

「あーあ。やつちやった」

ヒトミが呆れた様に呟いた。お兄はずんずんこっちに近づいてくる。つり目ハンサムのお兄の目が、更につり上がっている。

「あいつがいねえ。真琴っ。帰るぞっ」

そう言うと、お兄はあたしの上腕をグッと掴んだ。その勢いに、あたしはバランスを崩す。

「お兄」

「ちょっと薰。あんまり乱暴に扱つと、また吐きますよ」
「タクシー呼んでんだよ。家に帰って、寝ろ」

ヒトミに、返事にならない様な返答をする。彼女はそんなお兄の様子に、呆れつつも言葉を続けた。

「鞆は？ 今日には週末だから、色々と持って帰るものが・・・」
「許せねえっ」

お兄が振り返る。更に目が吊り上がってて、あ、キレてる。

「こいつの学校から穩便にイットを排除するためだ、とか言ってる前に俺に話を持ちかけやがって。俺に事務長を連れ出させたのは、真琴から引き離す為だったんだっ」

お兄が怒鳴っている先は、水島さん。
彼は冷ややかな視線をお兄に投げると、ゆっくりと立ちあがった。
こっちもちよつと、怒ってる。

うーん、察するに、あたしが吐いた事情を知ったお兄がついにキレて、水島さんを殴った後よっちゃんも殴ろうと飛び出して、捜しに行った、てトコかな？

そしてそれを、傍で見ていた香取が呆気に取られていた、と。

日頃から沸点の低い我が兄貴は、その熱い怒りを思う存分、水島

さんに向けていた。

で、水島さんは、相手が熱くなればなる程冷たくなるタイプ。冷え冷え〜。

「こいつら2度も真琴をハメやがってっ。俺ら舐めてんだろっふざけんなっつけあがってんじゃねえよっ」

「こっちは命張ってゴキブリ退治してんだぜ？」

「んな事知るかっばかやろっっ」

そこまで言われる筋合いは無い、とばかりにギロっとお兄を睨んだ水島さんをお兄が更に怒鳴り返したその時、

「……………どうしたの？」

素晴らしいタイミングでよっちゃんが登場した。お兄の後ろに。

お兄はクルッと振り向いて、ズンズンとよっちゃんに近づく。

よっちゃんは目を見開いて、ポカンとしている。

「あ、ちよっとお兄っ……………!」

あたしは慌てて止めようとした。けど、時、既に遅し。

思わず目を瞑る。派手な物音がして目蓋を開いた時には、よっちゃんも廊下の壁に倒れ込んでいた。ちよっつと、柔道の黒帯が人を殴るなんてまずくない？ 確かに相手は日本刀所持者だけどさ、て、うわっあたし達ってなんて物騒な集団なの。

そしてああ、あたしの周囲の人間が誰かを殴るのを見るの、今日

2回目だわ。本当に何て日。

「……っわー。いってー」

……なのは何でか、よっちゃん笑ってるし。

すごく楽しそう。というか、嬉しそう。え？ この人おかしくな
った？

よっちゃんは殴られた頬に手をやって、壁にもたれてわはははは
って豪快に笑ってる。

あたしやヒトミは弱冠引いちゃったんだけど、お兄はそんな彼の
態度に益々腹が立ったみたい。

まるで軍隊の司令官の様に上から目線で、ヒトミに怒鳴った。

「ヒトミっ。荷物持ってこいっ」

「………わかりました。後から行きますよ」

ヒトミはお兄の性格を知り尽くしているので、こういう時は何を
言ってもしょうがない、とばかりに溜息をつく。後から行く、とは
放っておく、と言う事であり、それはつまりあたしは身捨てられた
っ。

と思った瞬間、お兄に担がれた。

担がれたんだよ、担がれたっ。米俵担ぐみたいにつ。丸太担ぐみ
たいに、ヒョイツて。

「わーっちょっとお兄っ降ろしてっうわっ降ろしてっ」

「あはははー。さすがは過保護者ー」

よっちゃん、今度はあたし達を見て笑ってるっ。この人、なんかのスイッチが入っちゃったみたい、やっぱ変だよっ。

「お兄さーん。また後でねー」

よっちゃんは楽しそうに、爽やかにあたし達に手を振った。とってもお兄は後ろ姿を見せて既に歩いてる。

あたしはもう死ぬほど恥ずかしい気分で、お兄に担がれたままチラ・・・と皆を見るしかなかった。

皆は和気あいあい(?)とお話をしていた。

「それにしても彼氏、お兄さんに信頼されてるねー」

と楽しそうによっちゃんが言っつて、

「付き合いい長いですから」

とヒトミが微笑んで、

「え？ こいつ・・・」

と香取が口を挟もうとして、

「おっと。面白いから黙ってて」

と水島さんが真顔で制した。

「(こいつら・・・)」

あたしの気持ちを代弁するかのような表情で、香取が呆れて3人を眺めていた。

・ ・ ・
それでは皆様、
また来週！
・ ・ ・
。

Run down 3 (後書き)

お読み下さり、ありがとうございます。感謝感激、です。

あと一話で、第3章は終了です。次章で色々な決着をつけ、このお話が終わるかなと考えております。

登場人物が多くて、捕捉すべき点多々あるかと思えます。早くも番外編を検討中です。

もし、他のキャラクターでそう言ったりクエストがありましたら、是非お知らせくださいませ。

。。。このお話が、どうか皆さまのお暇つぶしに役立ちますように。。。

戸理 葵

L e a v e m e o r s a v e m e

家の玄関を開けたらお祖母ちゃんが立っていて、目の前にドスン、と私のポストンバックを落とされた。

中身がパンパンに詰まっていそう。

あたしは玄関のたたきで、靴も脱げずに見入ってしまった。

「……何これ？」

「お前の着替え」

「……何で？」

「これからあなたは、水島さんの所で暮らさない」

「……は「はあっ??」」

あたしが驚愕の大声を出そうとしたら、後ろからお兄がかぶせてきた。声、でかつ！

というより、今、水島さんの所で暮らさない、って言った？！

それって、あのヤクザの水島さん家？

厭味ったらしい美形真っ黒天使の、水島智哉の家??

「どづいう事だよ」「どづいう事よっ」

二人してお祖母ちゃんに噛みついたら、お祖母ちゃんはいつになく、すごくシリアスな顔つきで言った。

「狙われたんだろ、イットに。一人、逃げてるんだって？」

ギクツとなる。

・・・そ、それが、何？

「『それ』は戻ってくるよ。お前の所に。私たちでは、真琴を守れない」

「・・・・・・・・」

あたしはショックを受けて、血の気が引いた。

「私も流石にこの歳では、ロクな力は使えないからね。水島さんのところのご主人、水島勲さんは古くからの友人なの。既に頼んであります。・・・この家で真琴を守る人間は、もう誰もいなくなつたんだよ」

頭の中がショートする。

真つ暗闇な海の中に一人、放り投げられた様な気がした。

あたしが顔をこわばらせて突っ立っていると、玄関の上に立っているお祖母ちゃんがふつと笑顔を見せた。

そしてあたしを見下ろして、優しく話しかけた。

「カラダの相性、ていう話を昨日したね？ 覚えているだろ？」

「・・・・・・・・ん」

「私達は・・・私と、真琴は、好き勝手にテレポーションが出来る訳ではない。よほどの能力を持った者がよほどの訓練を積みば

話は別だろうけど、そういう者は滅多にいない。だから私達は、まるで磁石に引かれる様に、自分と相性の合う人間の所に飛んで行くんだよ」

慈しむ様な眼差しで、あたしを見つめて話を続ける。

「自分の周囲で、出会った人間の中で、一番相性のいい相手にね。それが今まで、真琴の場合は薫だった。そして薫は多少の能力があるらしく、真琴の能力を吸い上げてくれていたんだ」

「……吸い上げる？」

「言葉が悪いかね？ 中和する、と言った方がいいかも。そういう体質の人間がいるのよ。これはサイとはちょっと違うのだけれど、本人にあまり自覚が無い。薫といれば、真琴のサイとしての気は中和されていた。今まで、薫の目の前でどこかに消えた事なければ、イツトに襲われた事もなかったろ？」

あたしは思わず後ろに立っているお兄を見上げた。

お兄はちよつと困った様な顔をして、あたしを見た。

そうか。だからお兄は今まで必要以上に、あたしに付きまとうていたんだ。何か口実をつけては、登下校についてきていたんだ。

「でも成長に従って、私達の願いに反して真琴の気は強くなり、薫

じゃ手に負えなくなつた。いやむしろ、もっと相性の合う人間に出会つたという事かね。香取くんの所に飛んで行つた、と言うのは、そういう事なんだよ」

私達の願いに反して。

通常は、小さい頃に能力がでる子供は成長と共にそれが消えて行く。小学校に上がる頃には無くなつていく。

一方、思春期に出してしまう人もいる。それでもやっぱり、20歳前に消えてしまう事が多い。

あたしはこれを心の励みに、過ごしてきた。

だけど昨日と今日、それをハッキリと否定された。

あたしは悲しい気持ちでお祖母ちゃんを見上げた。

お祖母ちゃんは優しく、あたしの頭を一撫でした。

「つまり香取くんといれば、お前の気は中和されて、イットにも気付かれずに済むんだ。かといつて、流石に香取くんと一緒に住みなさい、とは今は言えない。それならば、せめて今回の件が落ち着くまで、真琴は安全な所にいた方がいい、と言う訳さ。おまけにここにいれば、訓練だつて出来る。そうすれば、ガーディアン・・・香取くん無しでも暮らしていける。わかつたかい？」

訓練すれば。他人に頼らず、迷惑をかけずに過ごしていける。

自分の力を自分で消す事が出来れば。

・・・香取と関わる、事も無い。

テレポーションだけでもぶつ飛びなのに、まさかイットの事に

まで巻き込んでしまおうとは思っていなかったもので、あたしの中には、彼に対する罪悪感がかなりあった。

あれ？でも。

「・・・最初に香取と出会った時は、あたし、香取の目の前から消えたよ？」

「なんだろうねえ。だから私も最初は気付かなかったよ。初回は充分に彼に近づいていなかったからとか、或いはその後毎日会う様になつて、お互い触発でもされたのか」

「何、そのテキスト感」

「生き物の体は解らない事だらけなのです。医者を目指すなら、肝に銘じておきなさい」

ちっ。腕利き獣医がエラソーに。

その時後ろで、お兄が低い声で言った。

「でも、あいつんちにはイットがいるんだぜ？」

「新谷さんだろ？ 彼なら大丈夫」

「なんでそんな事言えんだよ」

「知り合いだからよ」

「知り合い？ うっそ、何の？」

あたしは思わず喰いついた。あの綺麗な紳士的イットお兄さんとお祖母ちゃんか？？ 知り合い？

お祖母ちゃんは煩わしそうに、顔をしかめて言った。

「昔の知り合い」

「昔って言ったって、あの人せいぜい27、8じゃない。どうやって知り合ったの？」

「いいでしょう、どうだって」

お祖母ちゃんはプイッと顔を背ける。・・・心なしか、赤い。

あたしはお兄と顔を見合わせた。

珍しい。お祖母ちゃんが焦ってる。躊躇ってる。

これは、見逃せる訳が無いわ。

「良くないー。どういう知り合いか聞かないと、安心できないー」

「だよなあ。孫娘をイットと同じ屋根の下で住ませようとするんだ、それ相当の根拠が無いと無理だろう、ばあちゃん」

「怖い怖い、とっても落ち着かなーい。ノイローゼになるー」

「あーあ。教えてやるだけで安心するのに」

あたし達が玄関先で次から次へと言葉をぶつけていくと、

お祖母ちゃんは絶句して、それから思いつきり嫌な顔をして、

それからなんと、なんと、

はにかんだ！！ げっ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・昔付き合っていた男」

これ、聞かされたら、誰でも時が止まるよね？
心臓が止まって無いだけ、マジだよな？

「・・・何？ お祖母ちゃん、何？」
「・・・は？」

あたしとお兄は愕然とハモった。
お祖母ちゃんは開き直ったのか、真面目な顔をして頷いた。

「人生には色々ある」
「・・・いや、ありすぎんだろ、何言ってるんだよ？」
「イットは年を取らない」

お祖母ちゃんの発言に、あたし達は再び固まった。

「いや、正確には、死ぬまで老けない」

「・・・えーと、それは、だから、どう解釈すれば・・・」

「・・・つまり、あの人、いくつなの？」
「さあ？ 私よりちょっと上くらいだから、60半ばじゃないのか
しら？」

「ひえっ」「マジかよっ」

「私は戦後の生まれよ」

「お祖母ちゃんの事じゃないっ」

お祖母ちゃんの歳なんてどうでもいいのよっ60だろうと70だ
ろうとっ！

それより新谷さん、70歳近いの？？ 嘘でしょ嘘でしょギヤ
っ！

ちよっといいな、とか内心思っちゃっていたのに、ほらあたしっ
て、紳士的な優しい雰囲気の人に弱いから。

それがいやああ。お祖母ちゃんの元力レだなんてえええ。

・・・血は争えない、ってやつ？・・・さむい・・・。

「そいつの寿命っていつまでなんだ？」

「彼は人を吸わないから。人間とのハーフだし。人と同じだよ、8
0くらいじゃないの？ 私も後10年かねえ」

「・・・・・・・・」

どうしてそう、自分に話を戻すかな？

年寄りって、やたらと自分の話をしたがるよね。

「そっだ、真琴。訓練は必要だけれども、あまり力を使い過ぎるん
じゃないよ？ 早死にするからね」

いきなり言われて絶句した。

「でもお祖母ちゃん、生きてるじゃん」

「私はサイじゃ無かったら、100歳は生きられたと思うよ」

だろうね。めっちゃ健康そうだし、心もめっちゃ太いもんね。

その時、玄関ベルが鳴った。

あたしとお兄は顔を見合わせる。なんか嫌な予感がする。そつとドアをあげると、

そこにはよっちゃんの鮮やかな笑顔があった。

「よっ。お出迎え」

言葉を失うあたし達の後ろで、お祖母ちゃんが玄関に座り、三つ指を突いて、

深々とお辞儀をした。

かくしてあたしは、水島家に居候をする事になった。

そう、新谷さんも一緒のみならず、よっちゃん事、由井白義希さんも一緒に。

自称、あたしのボディガードとして。

あたしはよっちゃんの屈託のない笑顔に釘づけになる。まさか、

彼と一つ屋根の下で暮らす事になるとは思わなかった。
早いとこ、あの村本イットが捕まらない限り、

あたしは浪人確定だわ……。

Leave me or save me (後書き)

予定通り、第3章終了です。次章で決着を付けます。お読みただいて、ありがとうございます！

次章では恋愛小説らしく(?) (ちょっといちゃいちゃさせようか) と思っております。

来週より投稿再開いたします。

皆さま、素敵な連休をお過ごしくださいませ。

戸理 葵

悪魔の館に住まいを移して早2週間。

肝心の事務員イトが出て来ない。あの人が捕まれば万事解決、あたしはお家に帰れるのに。

水島家は住めば住む程居心地が悪くって、あたしってば家族に恵まれていたんだなあ、って改めて感じちゃった。まあ、一人暮らしの下宿だ、って思えば割り切れるのだろうけど、家主の水島智哉はいちいち突っかかる様な嫌味を言う奴だし、アテにしていたよつちやんは顔を合わせる事なんて殆んど無くて一体どんな生活を送っているんだって感じだし、出される食事は毎回豪華で量が多くて食べるのも残すのも辛いし、そもそも朝は誰も起こしてくれないから最初の1週間は毎日遅刻したし、家を追い出されて以来家族からは何の連絡も無いしで、

ちつくしようつ、ムカつくつ！！

「いてえ！」

鞆を扉の向こうに投げたら、そこから既に馴染みとなった声が聞こえた。だから、無視。

跳んで片手をついてフェンスの上に飛び乗る。座り込んでいる奴が頭を押さえて俯いている間に、スカートを手で押さえて飛び下りた。

ここは、いつもの学校裏。

あたしはもう、香取の目の前では遠慮なく跳ねまくっている。

あたしが着地すると同時に、香取は勢いよく顔をあげて言った。

「お前ワザとだろ、かすつたぞ！」

「ワザとなんて人聞きの悪い」

香取を見下ろして冷たく言う。

すると香取が眉根を寄せてあたしを睨んだ。

「……ワザとなら確実に当ててる、とか思ってねえか？」

「えっ！ 何で？ 香取、やっぱサイっ??」

「てめえこのやろう。立派な凶器だろ、これは」

「それよりスカートの中、見てないでしょうね？」

「毎朝毎朝同じ質問すんなよ。見てねーよ、つかそんな心配なら見せんよ。被害届出すぞ」

そう。あの日以来、あたし達は毎朝ここで会う。約束した訳でも、申し合わせた訳でもない。

ただ遅刻初日（つまり水島家から登校した初日）、正門が閉まっていたのでいつもの場所から跳び入ったら、香取がそこに座っていたのだ。あたし達が初めて会った時と同じように。授業をサボってただ煙草を吸ってはおらず、本を読みながら、だけど。

ビックリするあたしを尻目に、香取は当然の様に立ちあがるとあたしと一緒に教室へ向かった。

そして先生にこつてりと叱られた。二人して。
それはもう、教室中の注目を浴びた。

それ以来毎日、何故なのか、彼は遅刻するあたしをここで待ち続けていた。そして先生に叱られて、皆に注目される。すっかり周囲公認の仲にされてしまった。

そして流石に遅刻を避け始めたあたしは、なんとなく毎朝、正門ではなくこのフェンスにやってくる。

そして相変わらず、彼はここにいる。なんでもないような顔をして、ここに座って本を読んでいる。（彼は漫画が嫌いならしい。あたしなら漫画しか読まないのに）

「あの、さ。無理してあたしに付き合わなくても……」

あたしは立ったまま、口をもごもごさせて言った。

すると香取は、イヤに真顔で、あたしの事をジッと見上げている。

「な、何よ」

「俺さ。その台詞、聞き飽きた。もうちょっと他に言い方は無い訳？」

「て、じゃあ……」

余計なお世話？

そう言おうとしたあたしは、座っている香取の隣あるビニール袋に目が釘付けになってしまった。

「……何だよ」

「いえ別に」

「……何だよって」

「……」

「食いたいのか？」

「くれるのっ？」

「お前、また飯食ってきてないの？」

「毎朝コンビニ食を学校で食べる人に、呆れられたくないわね」

「そいつにタカろうかってヤツが、デカイ口をきくなよ。あの屋敷で朝飯出るんだろ？」

「だって起きれないんだもん……」

「親にべつたりの生活を送ってるからそうなるんだ、ほら」

「あっツナマヨっ」

あたしは香取のコンビニ袋の中からツナマヨおにぎりを取り出すと、彼の隣に座り込み、もどかしく包装を剥いてかぶりついた。うまいっ。

「おいしー。香取ー。飲み物はどー？」

「……つけあがんなよ？」

「あ、ミルクティー発見」

「あ、お前っそれ俺のっ」

「あー、おいしい。落ち着いたー。でも、顔に似合わず相変わらずの甘党ー」

「おにぎりにミルクティーなんてどんな食い合わせしてんだよっ。ほんとにあらゆる意味でセンス皆無の女だなっ」

「……」

あたしは思わず香取を見つめてしまった。

だってさ、おにぎりにミルクティーの組み合わせを買っていたのは香取だよ？ それをかすめ取ったあたしにセンスの悪さを責めるとはどういう事よ？

コンビニの袋の中には、食べ終わったサンドイッチの包装が入っている。香取の朝ご飯。香取は毎朝ここでサンドイッチを食べている。一人暮らしで、炊事が面倒臭いのだろう。朝はご飯よりパン派。でもあたしはご飯派。

だからこのおにぎり、朝ご飯を食べ損ねているあたしの為に買ってくれたんだ、と考えるのは調子に乗りすぎているかしら？

でもお兄さん、だったらついでにお茶も買ってよ。

「……今度は何だよ？」

結構すっかり屋さんの彼は、自分が何を言ってしまったのか気付かず、じっと見つめるあたしに再び眉根を寄せる。

あたしは黙ってミルクティーをグビツと飲んでから、言った。

「……香取ってさ。言ってた割には何も訊かないのね
何を？」

「……」
「……訊いて欲しいのか？」

「……」
「じゃ、訊かね」

香取はつまんなさそうに答えると、あたしがここに来るまで読んでいたであろう本に目を落とした。英語の分厚い専門書に見えて、すっごいムカつく。

長い足をラフに投げ出してその本を読む彼を、あたしはおにぎりを食べながら隣で、見るともなく観察をしていた。何が書いてあるのかなあ、あの本は。あそこにある図は化学式なのかな？

女の子みみたいな長い睫毛に整った鼻筋の美少年振りだが、彼の華奢さを強調している。だけど長身なので成長途中って感じで、メッシュの入ったウエーブが、髭がっている反抗期のコみたい。実際ヤンキーみたいなの喋りと態度だし。

だけどあたしと二人の今、彼は英文の本を黙って読んでいる。このギャップって、何だろう？

しばらくして香取が、本から目を離さずに呟いた。

「そもそも俺にはカンケーねーし、大体事情はわかったし」

「え？ わかったの？」

「ん。訳わかんなくってめんどくせーって事が。要は殴ればいいんだろ？ あいつが来たら」

なんだそりゃ。まあ、確かにそうだけど。あたしは少し呆れてしまった。

香取がよつちゃん達から何を聞いたのか、あたしは知らない。どうせ聞いてもロクに教えてくれないだろうから、あたしは彼らに何も尋ねていない。

でも香取がある程度、今の状況を受け入れているのは分かる。

あたしは肩をすくめて、含み笑いをした。

「ふふ。それがですね、もうその必要は無くなったのかもしれないのです。あたし、あの人にもう見つからないかも」
「は？」

香取が本から目を離し、驚いたようにあたしを見る。
あたしは得意になって言った。

「しんた・・・コーチにね。練習の成果が出て、あたしはもう随分気を押さ・・・随分身を隠す、じゃない潜める事が上手になったって言われたの。だからこれからは、気をつければ一人で行動しても大丈夫って」

「・・・ばかか、お前」

「何だと？」

「事情を知らない部外者の俺でもわかるぞ。お前、ばかだろ」

「ごめんなさい。蹴り入れていいですか？」

「お前がこの学校に生息しているのはバれてんだぞ？ あいつがここに舞い戻ったら一発だろうが。どうやって学校で身を潜めて隠すんだよばーか」

「・・・おおっ」

あたしは思わず感嘆の声をあげてしまった。

気付かなかったわ、新谷さんに褒められた事と実質卒業宣言をされた事が嬉しすぎて、大事な事を忘れていた。あたしは素性が割れ

ているんだった。だから家でも学校でもガードが付いているんだた。

そう、学校までは、水島さん家の運転手さんが車で送ってくれている……水島智哉付きで……。ヤツは後部座席で、あたしの隣で、腕を組んで寝ているだけ。ウザいし気まずい。早く掴まれ村本イット。

「信じらんね。よくそれで世の中渡ってこれたな、つか生きてこれたな、文字通り。俺のいない時にあいつに見つかったらどうすんだよ?」

呆れた様にあたしに言う香取に、あたしは再び口をもごもごさせながら言った。

「……それなんだけど……」

今更何だけど、それも香取相手に頼むのはすごく悔しいのだけれどそれも今更で……。

あたしは上目遣いで香取を見た。

「香取の所に、逃げてもいい?」

香取は無表情であたしを眺めると、再び本に視線を落としながら言った。

「殴ればいいんだろ？」

言葉まで無表情。あたしは肩身が狭くなった。

「……やっぱり巻き込んでいる。ごめんね」

「勘違いすんなよ。巻き込まれてるんじゃない、足を突っ込んでるんだ、俺が」

そう言ってページをめくる。あたしは何か言おうとしたけど、諦めて、美味しくおにぎりを食べきる事に専念した。

しばらくすると、香取が顔をあげた。そしてあたしのミルクティーをあたしの手から奪った。

て、そか。元は香取のミルクティーか。

香取はその残りをぐびぐびと飲み干す。

「あつ。あたしの残りーっ」

「もつすぐ予鈴だ。行くぞ」

そう言って本を閉じると立ちあがった。渡されたのはカラのペットボトル。おいーらっ！

「ごみは自分で始末しなさいって親に教わらなかったのっ？」

「側を離れんなよ」

「え？」

驚いて固まると、その間に香取は自分の荷物を持ってさっさと行ってしまった。

いや、自分の荷物だけではない。あたしの鞆まで持って行ってる。つまりあたしの手にあるのは、コンビニのゴミ袋だけ。

「宮地真琴!」

遠くで彼が振り返って、あたしを呼ぶ。

あたしは飛び上がって、慌てて駆けて行った。

「やっぱりね、人生経験が豊富って感じがするの。まだ全然若いけど、色々物を知ってるし。相談しても頼りになるんだよ」

移動教室からの帰り、唯と一緒に廊下を歩いていた。

唯は日に日に元気になっていった。今楽しそうに話をしているのは、彼女の塾の先生。美人教師らしい。

あの事件以来、これはあたし以外誰も気付いていない事だろうけど、学校での風邪の流行は急速に収まって行った。今となっては、

そもそも風邪であったかどうかも疑わしい。あの事務員二人が、学校の生徒達の不調に関わっていた事は確かだと思う。

「だけど、確かめようが、無い。」

「気を吸われた人間は、具合が悪くなる。だけどその間の記憶がないのだから。」

そして多くの気を吸われた人は、その後の人生で慢性的な疾患を背負ってしまう場合が多いらしい。多くのケースが免疫系統に不具合が出る、って水島さんが言っていた。アレルギーの一種かしら、とあたしは考えているのだけれど、実際はもっと深刻であるらしい。吸われた気の代わりに、イットの気だかエネルギーだかをわずかに貰ってしまうのかも知れない、と教えられた。

「だから唯も、今まで具合が悪かった原因が風邪かイットか、なんて分からない。」

「けれどもあたしは、唯が今後、そういう原因不明の体調不良を訴えないか、と心配している。彼女の具合が悪かった期間が、わりと長かったような気がするから。それがもし、知らない所でイットに気を吸われていたのだとすれば、どうしよう？」

「相談って、例えばどんな事を相談するの？」

「申し訳無い事に、唯の話をおたしは適当に受け流した。あたしの心配をよそに、唯はとても元気そうに見える。」

「そう言えば、学校にいる時にあたし達が行動を別にする事なんて、殆んど無かった。」

「じゃあやっぱり、唯の体調不良はただの風邪だったのかも知れない。だいたいこのだけだ。」

「進路相談に決まっているじゃない」

そう答えた唯の顔が、何故か少し赤い。え？ 何で？

「加藤と話して決着済みなんじゃないの？」

あたしがそう言つと、何故か益々赤くなる唯。ええ？ 何で何で？

軽く受け流せなくなった。この反応は、何？

「あ、わかったー。恋話とか相談しちゃってんじゃないのー？」

テキトーに言ったら、もっと赤くなった。ちよつと、マジで？

あたしは今や正面から向き直つて、唯に食いついた。だって順序が違つてしょ？

「え？ え？ そういう事、あたしに相談しないで塾講にする？
それはひどいでしょーっ。どうしてよっ」

「だって真琴って何だか激しそうだし、色々とズレていそうだし・
・・」

「えっ？ 全つ然意味わかんないっ。何だか激しそうも色々ズレて
いそうも、さっぱり意味がわかんないっ」

「だからほら、色々と・・・」

あたしと唯が廊下で騒いでいると（というか、あたしが廊下で騒いでいると）後ろに何かがぶつかった。

あたしは前につんのめる。唯が咄嗟に支えてくれた。

「あ、ごめんなさい」

その声に振り向くと、可愛い一年女子が立っていた。

そう、この子は……

「はるなちゃん」

「大丈夫ですか？ 汚れちゃいましたね」

困ったように眉根を寄せる。その表情、確かにどこことなく香取に似ている様な気がする。

彼女が手に持っているのは塗料。ジャージを着ている。隣を見ると、美術室。きっと美術の授業が終わったのだろう、と思った。

何でぶつかられたのかは分からないけど、多分、美術室の前で騒いでいたあたしが悪いのだろう。邪魔になっちゃったんだ、わざとじゃないよね。

見るとあたしの制服のスカートの後ろ側には、赤い塗料がべったりとついてしまって血糊みたい。あたしは申し訳ない気分で苦笑した。

「……あー、大丈夫だよ洗えば」でもこれ、洗っても落ちないんですよね」

台詞の途中で遮られる。気のせい？

目の前のはるなちゃんは相変わらず、すごく困った顔をしている。

「どうしよう、礼に怒られちゃう。弁償しないとダメですよね？」
「弁償なんて、そんな」
「とりあえず、あたしの制服を代わりに着て下さい。帰り、困りますものね？ 後からお届けします。あ、礼に渡しておこうかな？ それなら確実ですものね。宮地さんは礼にべったりですから」
「……………」

次から次へとまくしたてる。あたしと唯は目を丸くした。

……………前言撤回。気のせいじゃないかも。

「私の服じゃ、着づらい？ 特に礼の前では」
「……………はるなちゃん……………」

あたしは言うべき言葉も無く、スカートから塗料を滴らせたまま、いつの間にか射る様にあたしを睨んでいる彼女を見つめた。

彼女は真っ直ぐにあたしを見ている。唯の存在はまったく眼中にないらしい。

長い睫毛の大きい瞳は、やっぱり香取と似ていると思った。

「礼は将来、私と結婚するんです。双方の親が合意しています。私のパパが会社を経営していて、礼は将来その後を継ぐんです。イギリスに留学していたのだから、そういう英才教育の一環だし。だから宮地さんはただの遊びです。イギリスでだって、礼はそういう女の子が山ほどいたんだから」

「・・・・・・・・」

「だから私達の迷惑になる様な事はやめて下さい。例えば、今あなたがしている様に礼を変な事に引つ張り込むとか。彼の将来に傷がつきます」

「・・・・・・・・」

「あの人から離れて。礼の事を分かっているのも釣り合うのも、
・・・将来の相手になるのも、私だけなのよ？」

キツイ眼差しで毅然と言い放つあたり、イチイチ香取とダブって腹立つなあ、もう。

あたしは溜息をついた。

だけどなんだか同情しちゃう。海外での女遊び(?)を容認している様な台詞を吐きながら、香取に近づくなとあたしに言うし。宮地さんは遊びです、ってじゃあほっときゃいいじゃんかよ、イギリス女達の時みたいに。

それに香取の将来に傷がつく、って何がどうなるのかさっぱりわからないし。

それに香取の事を分かっているのも私だけ云々、って、あたしそんな事この子に主張した覚えもないし。

そもそもあたし、香取と付き合ってないし。

それに香取様がイギリスで女性達となさっていたようなお遊び？もあたし達してないし。

つまり、目に届く範囲にいる香取が、自分から離れて行くのが耐えられないのね。イギリスにいたら見えなかったから我慢できたのね。そもそも香取が、彼女にくっついてたのかどうかも分からないけど。あ、別に今はあたしとくっついてる訳じゃないけど。

なんてうだうだ言うのも……

「……………面倒臭い……………」

再び溜息をつきながらあたしはそう呟いた。
隣で唯が不安そうにあたしの手首を掴んだ。見ると、すごく心配している。香取の時の様に、殴るとでも思っているのかしら？ 流石に女の子相手にそれはしないよ。

「何？」

はるちゃんが少しイラツとしたように聞き返してきた。
だからあたしは彼女に向かってハッキリと言った。

「そういう事、全部香取に言えば？」

「言う必要無いわよ。本人は全部知っているもの」

「じゃ、香取の好きなようにやるんじゃない？ 18になる男を掴まえて、周りがどうこう出来ないでしょ？」

あたしはあの男と付き合っではいません、とか、あなた嫉妬しますね？ とか、そんな事は言いません。

それは彼と彼女の事情でしょ？

すると彼女は少し驚いたようにあたしを見て、次にせせら笑った。

「……………何にも知らないのね」

何を言っているのだろうか？ とは正直思ったけど、知らないか知っているかすら、興味が無い。あたし、今自分の状況にいつぱいっばいなの。これ以上余計な事を背負い込みたくないの。

あたしは彼女に背を向けると、唯の手を引つ張った。

「行こう、唯」

「礼は今年16歳よ。私と同年」

後ろからはるなちゃんの声が飛ぶ。

あたしはしばらく歩いて、それから立ち止まった。

正確には、固まった。

今、なんて言った？

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？」

振り返って、思いつきりたためて、やっと出た言葉が、コレ。

その間、ずっと待っていてくれたはるなちゃん。やっぱり可愛いかも。

「だから先輩、おばさんなの」

けれども可愛くない台詞を勝ち誇ったように言われて、
たしは全然堪えなかつた。
だってあまりにビックリして！

あいつ、年下っ？

というより、なんで16歳が高校3年生のクラスにいるのよっ！！

そんな事、あり得ないでしょっ！！

あたしは一気に教室まで舞い戻った。スカートからは血糊を飛び散らせて。

途中まで唯の手を掴んでいたはずなんだけど、いつの間にかあの子は消えていた。

「香取礼っ」

入口に立つのと同時にあたしは香取を見つけて、大声を出した。帰り支度をしていた彼は（ちなみにあのまま、あたしの後ろの席に居座っている）、顔を上げてあたしを見ると、怪訝そうに片眉を吊り上げた。

「あん？」

「あんたっ、よっぽど俺様だとは思っていたけどまさか日本の教育基本法を無視する程だとは思わなかったわっ。煙草はふかすし頼まれたっただけでキスしてるし人のパンツの柄まで見ているし、やりたい放題、香取王国かっ。なんでこんな奴を受け入れてんのよっ日本とこの学校はっ」

「……宮地さん、何言ってるの？」

「日本が、何だっ？」

「どうしたの、宮地さん？ それにその服」

香取と比較的仲のいい男子達が、あたしの形相を見て少しビビりながら声をかけてきた。

(女の子達は、遠巻きに見ている。あたしと香取がつるみ始めてから、あたしはクラスの女子からあまり話しかけられなくなった。何だか、色々が目立ち過ぎたらしいの……)

あたしはその時そんな彼らが眼中に無く、香取を指さすと大きな声で叫んだ。

「何で16歳でこのクラスにいるっ？」

「えっ？」

「16歳？」

「誰が？ 香取ちゃんが？」

山田くんとか中森くんとかが、ポカン、とする。

そんな彼らの中心で、香取がブチっと切れた。

「…………おーまーえー…………」

つかつかとあたしに歩み寄ってきたかと思うと、次には顎を、ほっぺごと片手で掴まれた。

「それをここでデカイ声で言うか？」

「…………あ…………」

「この口。この口は上にある脳味噌の管理下には無いのか？ それとも脳味噌そのものに管理能力が無いのか？ まさか遠い宇宙と交信しているとか言わねーよな、あ？ 同じ失態を何度もするんじゃないよ」

「い、いひゃいひゃいひゃいひゃい」

「ちつくしょう、俺ばかりマジで被害を受けてんじゃねーかよ。報復するか、見返り受けるかしねえと気が済まねえ」

「しゅ、しゅみましえん」

しまった、またついつつかり彼のプライベートな事を公おおやけにしてしまった。

あたしは、久々に見る香取の切れた眼光に、以前も経験した様な間の悪さを感じた。ああ、あたしのパンツの柄をばらされる日も近いかも。

その時、後ろで荒い息遣いが聞こえてきた。

「……真琴……速すぎる……」

唯の、息も絶え絶えな声。あれ、あたし唯を置いていつちゃってんだ。

……マズイ。ワールドレコード塗る変える様な走りをしていませんように。

香取はあたしのギリッと睨み上げて摘み上げて、その後の唯を見て周囲を見ると、軽く溜息をついた。

そしてあたしを手放すと、観念したかのように口を開いた。

「……俺の学籍は一年B組だよ。レベルに合わせた科目だけこの三年クラスで授業を受けている、という名目なんだ」

それを聞いたあたし達クラスの連中は、皆一様に驚いた。

「ええ？ そんな事出来るの？」

「出来る所を選んだら、この学校になつたんだよ」

「すげえ・・・」

「それである成績かよ・・・」

「そういうの、スキップって言うんだっけ？ イギリスでもそうだったの？」

「まあ。元々イギリスは就学年齢も早いし」

「・・・へえ。それはまた」

「え？ じゃあ、今年度卒業すんの？ 大学は？」

「多分イギリスの大学に行くと思う。来年秋から」

次から次へと矢継ぎ早に質問が飛び交う。それを香取は淡々と答えていった。

すると山田くんが首を傾げて言った。

「すつげ。あれ？ でもそれじゃ何でわざわざ今年だけ日本に戻ってきたの？ しかも転校生だし。そのままイギリスにいればよかつたじゃん」

それを聞いた香取の表情が、僅かだけ尖がったものになった。

「・・・くつそオヤジの命令だよ。有無を言わず。何でか知るか」

「・・・ふーん」

皆は分かった様な分からない様な顔をして、香取を眺める。
そんな中、あたしは開いた口が……ますます開いてしまった
！！

お父さんのせいで、強制的にココに転校？？

しかも二学年も下なのに、むりやりこのクラス？？

そんな彼の所に、あたしがテレポで飛んでっちゃった？？

あり得ない。ぜーったいっ、あり得ないっ！ 偶然である、ワケ
が無いっ！

しかも香取、イットに睨まれても平気で動けるし、やっぱコイツ
はサイだ！ 絶対そうだ！！

そんでもって、あたしのお祖母ちゃんが、絶対どつかで絡んでい
るに違いないっ！！ あのお腹が真っ黒お祖母ちゃんっ！

あたしが一人で驚愕している最中、クラスのみんなは別な意味で、
興味津々、香取を眺めていた。

香取は転校初日から、色んな意味で異色で異端で、周りから浮い
ていた。それが益々際立つ事になったんだもの。最近は、クラスの
男子と溶け込む場面も多かったのだけれどね。転校生だし、外見と
いい言動といい、浮いていた事に変わりはない。

香取は何でも無い様に、再び机に戻ると帰り支度を始めた。

それをクラスメイトの視線が追う。
何だか痛々しいな、とつい思ってしまった。
その時、中森君の呑気な声が飛んだ。

「いいじゃん。俺なんて二浪だよ？」

「……え？」

驚いたように香取が振り返る。

周りにいた女子の一人が、ビックリした様に声をあげた。

「……うそっ」

「ほんとほんと。オヤジが絶対、この高校以外は許さねーつつつてさ。自分の母校だし、俺の地元じゃ高校のネームバリューが大学より勝るのよ。オヤジも兄貴達も親戚連中もみんな、この高校出身つてワケ。で、出来の悪い俺は入学するのに二年もかかったの」

中森くんはふざけた様に顔をしかめると、片手をあげて蠅を追いかけるように、軽く振った。

そして香取の肩に腕をかけるとグイッと引き寄せ、ニヤツと笑って悪戯っぽく言った。

「お互い、親父にや苦労するよな？」

この一言で、教室内の空気agaraと変わった。香取はすうっと、クラスに受け入れられた。

それは傍で見ている気持ちはいいくらい、鮮やかなものだった。

中森くんは、異端視されていた香取を自分の側に引つ張り入れ、そして自分達の問題を「父親と息子の関係」と言う、一般的なものにすり替えたんだから。

自分の状況の変化に戸惑いながらも、満更でもなさそうにクラスメイトに言葉を返す香取。あたしはそんな彼と、彼を救った4つ年上の兄貴分を眺めて感心した。

いつもいい加減そうな中森くんが、そんなに男気溢れる人だとは思わなかったわ。かなり、感動したかも。

「良かったね」

ちよつとした隙に香取に小声で声をかけると、香取は怪訝そうに言った。

「何が？」

「なんでも」

「何だよ」

「わかってるくせに。いい人達だよね。あたしも含めて」

「……てめえのせいだろ……」

小声でドスを聞かせてあたしを睨みつける彼。

でも見慣れているから、無視。

「あ、ところでお父さんって何者？ どんな仕事をしている人なの？ 香取の身内に尋常じゃない人っていたんじゃないの？ うちのお祖母ちゃんってそっちの世界にやたらと顔が広がってさ、絶対なんか仕組まれてるんじゃないかと……あ、でも面倒臭いからなる

べく首を突っ込まない方がいいか……」

ギツとあたしを睨みつけていた香取は、更に何かを言おうと口を開いた。

そしてあたしのスカートの血糊を発見した。

「……お前、どうしちゃったの、その服？」

げ。見つかった。ていうか忘れてた。

「……あー……これは……」

「香取くんの、可愛い従妹ちゃんが」

唯がいつの間にか隣にいて会話に入り込む。両手を横に振りながら、「ドバーっ」と言った。

それを聞いた香取は、驚いたように唯とあたしの血糊とを交互に見やり、それからチラツとあたしを見ると、何故か唯に向かって尋ねた。

「ウソだろ？」

「そう思う？」

少し怒った口調で唯が言う。

香取は溜息をついて、あっさりと言った。

「まあ、確かに山本はウソ、つかなさそう」

「私が？ そう見えるの？ 騙されているかもよ？」
「そうなの？ 俺、騙されてるの？ ……で、お前はまた、何だよ？」

香取がウザったそうに、片眉を上げてあたしを横目で見下ろす。
あたしはマジマジと香取を見つめていた。

「……香取が……めっちゃ素直……」

「喧嘩売ってんだよな？ 今度こそ、俺に売ってるな？」

「女の子とまともに会話をしている所、初めて見た」

「サルの分際で自分の失言は棚に上げて「ちよつと」

再び、唯に会話を遮られた。

唯は、今度はあたしと香取の二人を軽く睨んで言った。

「こつやっぴあなた達は、話がいつもずれて行くのね？」

そう言つと、あたしのスカートの後ろを指す。

あたしと香取は、二人して「あ」と呟いた。

「……それ、落ちねえかも。ごめん」

「別に香取が謝る事じゃ」

「あいつって激しいしキツイけど、本当は悪い奴じゃないんだ」

あたしと唯、ゆらつと後ろにのけ反つちやっぴた。

うつわ典型的な台詞。いやどう考えても悪い奴でしょ。落ちない塗料をあたしにかけたの、これ、わざとだよ？ 激しくてキツくて、

悪意だらけじゃんか。

そう心の中で突っ込みつつ、思いやりに溢れた憤み深いあたしは、ニツコリと微笑んで言っただげだ。

「ストレートなコって、嫌いじゃないよ？ 裏でねちねちされるよりよっぽどマシ」

「いや、あいつは裏でネチネチもするぞ？」

は？

香取は腕を組んで、真顔で続けた。

「例えばこれからサイトにお前の悪口を軽く書き込むとか、学校で妙な噂を軽く流すとか、お前の私物を軽く壊すとか隠すとかその他諸々、あいつならやりかねない」

「……え？」

「だから俺は面倒で、あいつには逆らわずに生きてきたんだ。はるなに目をつけられたんなら、お前これから覚悟しろ」

あたしは啞然とした。

隣で唯が、ポカンとした。

「な、ちょっと誰のせいだと思ってんのよっ」

「だから最初に謝ってんだろ」

「謝って済むかっ！ 身内ならなんとかしろっ」

「なんともなんねえ。身内だからわかる」

「香取っ！！」

信じらんないこいつっ！ 元はと言えばあんたがまいた種でしょ
っなんであたしが被害を受けるのよっ。

「……あれ？ これが因果応報ってヤツ？ 香取に災難を与え
過ぎた、報いなの？」

「あ、おかえり……随分面白い恰好をしているね」

「……」

ダボダボの緑のジャージを来て帰ったあたしを、水島さんがマジ
マジを眺めた。

しかも男ものだから、裾を思いつきり折ってるし。なのにウエス
トはピッタリなのがムカつくし。

ああ、体育をサボるんじゃ無かった。真面目にジャージを持って
くればこんな目には……。

「『香取』……いつから？」

「真顔で聞くな」

「旦那はもう帰ったの？」

彼は玄関を覗う仕草を見せた。香取は毎日、あたしをこの屋敷前

まで送ってくる。多分水島さん達と何らかの取り決めをしているんだろう、と思っっているあたしは、何も聞いていない。だって今のあたしは、一人であるイットに対抗出来る力なんて無いもん。

あたしは香取のジャージを着ているのが恥ずかしくて、急いで自分の部屋に戻ろうとした。

その時、近くの部屋から人の気配がした。

そこは衣装室（この家には衣装室がある。クローゼットじゃなくて、部屋が丸々服で埋まっているから、あたしは衣装室って呼んでいる）。でも家主はあたしの隣にいる。水島さんの両親はここには住んでいない。

という事は……。

「あれ？　もしかしてよっちゃんがいる？」

「うん。今から出かけるけど」

期待に満ちて恐る恐る覗くと、部屋の中でよっちゃんが立っていて、何やら引き出しを引っかきまわしていた。

細いストライプの入った、黒いスーツを来ている。男らしい背中与長身が、良く映える。

髪は普段と違って、整髪料で後ろに流している。

漂う雰囲気、似合い過ぎて大人。

彼があたしに気付いて、振り返った。

久しぶりに見る顔は、笑顔で明るくってあったかくて、やっぱり最高だな、とか思った。

「あ、まこちゃん。お帰り。そして久しぶり」

「久しぶりですー。うわ、かっこいい。どうしたんですか、その格好？」

「バイト先で買い取ったんだ。これからパーティーに行くんだ」

バイト先？ 買い取り？ パーティ？？

「えーっと……バイト先って、あの、警察庁がどうのって……」

「あー、そっちじゃない、雑誌の方。智哉、これ借りるぞ」

よっちゃんは、手にしていたタイピンを掲げた。

あたしは「どうぞお」と返事をする水島さんを振り返って、聞いた。

「何言ってるんですか、彼？」

「義希は雑誌のモデルもしてんの。知らなかった？」

うそっ！ ほんとにつ！ 知らなかったっ！

あたし、モデルって初めて見たっ！

よっちゃんは引き出しをまだ掻き回しながら、クスクスと楽しそうに笑って言った。

「面白いね、まこちゃん。警察庁でスーツなんて、買えないでしょ」

「……警察庁が日本刀振り回してるなんて知ったら、何でもアリかな、と」

「お、言うねえ」

ヒュウ、と口笛を吹いて、よっちゃんは茶化す。ニコニコしている。

屈託のない彼は、あの日に見た怖い人と同一人物とは思えない。

「じゃ、モデル仲間のパーティですか？」

「んー、当たらずとも遠からず、ってところかな。彼女に誘われたんだ。彼女の友達のお父さんが、ある大使館に勤めているらしくって、その流れ」

・・・何ですか？

この場合、突っ込むのは、「彼女」なのか「大使館パーティ」なのか。

「おい、彼女直々のお出迎えらしいぞ」

「わかった。な、智哉、これも借りてい？」

「しっかり返せよ、それ、ブルガリだから」

「さすがオレ、お目が高い」

よっちゃんは手にしたカフスリングを袖に付けながら、軽やかに部屋を出てきた。

そしてあたしを見てニコツと笑うと、肩に手を置き、

ほっぺたにチュッ

と音を立ててキスをした。

そしてあたしの頭をくしゃつと撫でた。

「じゃあね、まこちゃん。いい子にしてるんだよ」

そしてそのまま軽やかに去って行った。

……これ、固まるわよ。やっぱり動けなくなるわよ。で、でも水島智哉のからかいの恰好の餌食になるのも癪だわ。

あたしは振り返る事無く、そのままロボットの様に歩きはじめた。その時、外で声が聞こえる。

そしたらつい見ちゃうのって、人情だよな？

開けつぱなしの玄関から見たのは、お迎えであろうシルバーのピカピカな車のそばで、素敵なドレスを来た素敵なお姉さんとしてとりとキスをする、よっちゃんだった。

あんなキス、するんだ。

彼女となら、するんだ。

「シヨックなら見なきゃいいのに」

狙った様に最悪なタイミングで、後ろから声をかけられる。あたしは振り返りもせず、ただと思いつき膨れて言った。

「大きなお世話」

「優しいでしょ？」

「あの人、大人っぽい」

「実際大人だろ？ よっちゃんって年上好きだから」

「クラブじゃなくて、大使館でパーティ。何だか別世界」

思わず呟く。本音を交えて。

水島智哉はつまらなさそうに言った。

「あいつ、上流階級と知り合うチャンスは逃さないの。それがモットーだから。イットと出会えるって信じてんの」

振り向くと、彼は腕を組んで壁に寄り掛かって、無表情にこっちを見ていた。

「……出会ってどうするの？」

「もちろん斬り殺す。それが夢なんだって」

「何で？」

すると彼は、一瞬間を置いた。

「そこに原因を求めてるんだよ」

「何の原因？」

「色んな原因じゃない？」

そう言って肩を竦めると、水島さんは冷たい視線をあたしに向けた。

「僕としては、そろそろいい加減にしろって言いたくなるんだけどね」

何の事？ あたしの事？ それともよっちゃん？

それとも全く別の事？

あたしは探る様に彼を見つめた。

イットが多数、社会の上層部に食い込んでいる、と言う事は、あの事件の後に水島さん達から聞いた。

だからイットが絡んだ事件は表面化しない。もみ消される。

よっちゃん達の警察庁云々とは、御上公認のイット暗殺隊だって教えられた。

『007みたい』と言ったら、

『そんなカツコいいものじゃない。ていのいい厄介払いだよ。適当な部署名を与えられただけで、顔を出した事もなければ同僚を見た事もない。実際、警察庁に科学捜査研究所って言うのはあるらしいけど、名前を貸してる連中もいい迷惑だろうな』

と、よっちゃんは皮肉っぽく言っていた。

『俺達に大義面分を与えている奴らは、人間とイットが結託したお偉いさん。自分に不都合な下っ端は、仲間でも殺せる連中なんだ、あいつらは』

そう言う彼は、侮蔑とも憎しみとも言える色を瞳に浮かべていた。

「行きたい？」

急に目の前の水島さんに言われて、あたしは驚いた。
彼は薄く笑っている。

「どこに？」

「あのパーティ」

「ええ？」

ビツクリして大声で聞き返してしまった。今、あのパーティって
言った??

「実は僕も招待を受けているんだよね、親父の代わりに。でもどの
女を連れていくかで揉めるのも嫌だし、面倒臭いから放っていたん
だけ」

そう言うつと腕を組んだまま、ダサイ学校指定の男物ジャージを来
た青虫の様なあたしを、上から下まで何度も眺め回す。

ちょ、待って……どういう事……?

「まずはその体型に合うドレスを、調達しないと」

弱冠眉間に皺が寄っていますけど、お兄さん、それはどういう意味？

彼の難しそうな表情に、あたしは冷や汗が垂れ始めた。

あたし、パーティに連れて行かれるの？ あの大使館パーティ？
ド、ドレスを着て???

い、いいのかな？ あたしなんか行ったら、場違いじゃないかな？
だって目の前のこの人、相当考え込んでいるよ？

でもあたしは図々しくも、いいです行きません遠慮します、が言えなかつた。

だってシンデレラだって、パーティでの王子が、見たかったじゃない。

A t t h e p a r t y

金持ちって言うのは、本当に電話一本で何でも済ませるらしい。水島智哉が手配したドレスは、どれもこれも、ハッキリ言っておたしに抜群に似合っていた。

あたしはその中で、水色で裾がバルーンのワンピースを、着せられた。

そう、あたしが選んだんじゃないの。これ、この人に着せられたの。

「あんだ、タツパあるからね。いわゆるモデル体型だし、和服より洋服タイプだよな。ま、胸が無いのが男としては物足りないけど」

黒いベンツの後部座席で、高級そうなスーツを着た水島さんが、珍しく満足そうに言う。

隣であたしはむくれ顔になった。着せ替え人形なんて、趣味じゃない。

「・・・その口うるさい。そもそもあなたを満足させる筋合い、無いし」

「7、8頭身でハッキリした目鼻立ち、ってサイの特徴なんだよ」

「無視かい」

「イトにも抜群の体型と整った顔立ちが多いって、知ってた？」

あたしの様子なんか気にもせず、水島さんは饒舌に話を続ける。なんなのよ、もう。

横目で彼を見たら、目が合った。

「そ。僕ら、似てるらしいよ。辿ればご先祖様が、同じかも」
「人間、もとはみんなサル。みんなおんなじ」
「……僕らが、人間だと思うの？」

意味ありげな視線を、あたしに向ける。
あたしは全く深く考えずに、正面を向いて言い切った。

「卵産まないし、二足歩行だし、地球に住んでて言葉を喋って火を
取り扱う身内がいれば、人間でしょ」
「……ウザ」
「あなた様ほどでは」

すまして応えると、しばしの沈黙が訪れた。
隣を見たら、彼は声を押し殺して、俯いて……笑っていた。

「何で笑うの？」
「別に」

珍しい。この人もこんなに笑う事があるんだ。
呆気にとられていると、彼はまだ笑いを収めきれない表情で、
あたしを見て言った。

「打たれれば打たれる程強くなる、雑草みたいな子だね」

……雑草と言われて、喜ぶ女の子なんて、いない。だからこれは多分、バカにされている。

だけど、あたしの頬を包む彼の左手と、その頬の上を優しく撫でる彼の親指は、一体何なんだろう？

あたしは驚いて、黙ったまま、彼を見つめた。

彼の眼差しは、驚くほどに、優しい。

ああ、これはサイコメトリーだ。あたしは今、心を読まれているんだ。そう思う事にしよう。うん、納得。

心地の良い、彼の掌を頬に感じながら、あたしはされるがままだった。

……でも何でメトられてるの？ わからん。

「それを言うなら、踏まれれば踏まれる程、でしょ」

彼を見つめたまま、あたしは真顔で言った。だってどういふ表情をすればいいのか、わかんないんだもん。

「理屈っぽいヤツ」

彼は手を引つ込めると、面白そうにクツと笑った。

どれくらい放っておかれたのだろう。

心地よいソファの上で居心地の悪い時間を過ごしていると、やっと水島さんが戻ってきた。

シャンパン片手に。飄々と。

この人……。

「大丈夫？」

「全然」

嫌味を込めて即答してやった。

こんな「18歳未満お断り」みたいな大人の社交場（エッチな意味では無い）で、小娘が一人残されて1時間、平気なワケないですよ。なにが「大丈夫？」よ、白々しいっ。

みんなおじさん達で、すごく馴れた雰囲気でも和やかに忙しく、談笑、なんかしっちゃってるのよ？

それで時々こつちを見て、怪訝そうな顔か邪魔そうな顔か、バカにした様な顔をするんだからあ。

「だろうね。こつち」

「……」

なのに彼はあたしの嫌味なんか痒くもない様子で、あたしを別の場所へと促した。

そこは、先ほどのおじさん達ばかりのビジネスっぽい部屋では無く、艶やかな女性が多く、明るくて華やかな空間だった。

うー、助かったー。あんな男性ばかりのビジネスの社交場、場

違いもいいトコだったもの。

あたしは彼を見上げて言った。

「ねえ、水島さん。あたしバカだから今頃気付いたんだけど」

「何？」

「ここにあたしを連れてきたのは、よっちゃんが口実でも何でも無くて、単に自分が仕事をしたいだけなんじゃない？」

「当然でしょ。えっ？」

彼は驚いたように目を見開いて、あたしを見下ろした。

「今更？」

むう。

「・・・だからバカだったじゃん」

「最初に言ったでしょ、俺。他の女を連れてくるのが面倒臭いって」

彼は綺麗な瞳を見開いて、一人称が「俺」に変わる程驚いてる（？）

そしてしばらくあたしを眺め、やがてその驚きの表情を収めると、少し意地悪く笑った。

「何？ 僕に相手して欲しい？」

「全然違う。あたしはここで何をしたいのか教えて欲しい」

「好きな事をしていれば？ 例えば義希をストーカーするとか」
「殺す。いつか刺す」

「冗談だよ。普通にしていればいいだろ」
「その普通がわからない」

あたしは庶民の高校3年生よ？ 大使館パーティの普通なんて知るか？。

「じゃあ、そこで壁の花になっててごらんよ。スケベなオヤジが寄ってくるかも知れないぜ？」

「じゃあ、後のその提案、ちっとも解決策になってなくて喧嘩を売られているとしか思えない」

「まあまあ。その寄ってきた奴がイットかどうか見分ける、てのはどう？」

「.....」

あたしは無言で彼を睨んだ。

彼は相変わらず、意地悪な天使の頬笑み、をしている。

「新谷のお墨付きだろ？ 試してみようぜ？ 本当にイットに君の事が、バレないかどうか」

「ばれたらどうするの？」

「そりゃあ、いつものパターンでしょ？ 誘って煽って、喰われる寸前で、狩る」

「.....」

「これも冗談だよ。こっちでマークするの。相手世界の主要人物は、すこしでも多く押さえておくに限るだろ」

あたしは視線を彼から反らすと、パーティーで賑わっている大人達を眺めた。

「……本当に、この中にいるのかなあ」

「さあね。それを調べる為に来たんだけど、今日は不作かも」

「ああ、握手」

お父さんの代理なのか知らないけど、水島さんが偉そうな人達と沢山、握手しまくっていたのを思い出した。ああやって、相手の心を読んでいたんだ。

あたしはクンクン、と部屋の空気を嗅いでみた。

「あたしは何にも匂わないけど」

「そりゃあ、上流階級の奴らは年季も入っているから。気配を消すのだって上手いの」

「人間を襲う人とは限らないじゃん」

すると彼は、綺麗過ぎる整った瞳で、あたしを見た。

「君はイット共存派？」

「……なあに、それ？」

「……よくわかんないけど、そんな単純な話？ 何でも一括りぐく

にするのは、無理があると思う。人間にだって悪人は沢山いるし、
イツトにも・・・いい人はいるかもしれない」

そういいながらあたしの頭をかすめたのは、もちろん・・・

「新谷みたいなの？」

「・・・」

水島さんに先を読まれて、あたしは黙り込む。また、子供は何も
わかってない、って言われるのかと思った。

世界はそんな綺麗事じゃない、とか、新谷の事を何も知らないね、
とか。

だけど彼は、真顔であたしを見つめ続ける。

「・・・何よ？」

その、作り物みたいに凄まじい美人顔に見つめられると、居心地
が悪くなるんだってば。

「・・・いや」

彼は尚もしばらくあたしを見つめた後、顔を反らして、ボソツと
呟いた。

「育成ゲームにハマる奴の気持ち、わかった様な気がする・・・」

「何？」

「あ、よっちゃん」

水島さんが急に声をあげる。
彼につられて、顔をあげた方向を見ると、そこはテラスから庭へと続いている場所だった。

「……いる。よっちゃん。
むう。やっぱかつこいい。
隣の彼女も、完璧すぎる。」

あたしの頭上で、水島さんが微かに笑う気配がした。

「僕がよっちゃんの彼女の面倒、ちょっと見ててやるよ」

「え？」

「行きたいんでしょう？ ほら」

軽く背中を押される。

あたしは、そんな事を言い出す水島さんが信じられなくて、彼を振り返った。

するとあたしの目の前で、水島さんが大きく目を見開いた。
あたしの背後にあるものを見ている。

「ちょっと待て」

鋭い言葉と共にグイッと腕を引っ張られた。あたしはバランスを崩す。うおっと。

行けと言ったり待てと言ったり、何なのよっ。

文句を言おうと顔を上げたら、彼はあたしの頭越しに、前方を凝視していた。

「……サキ……？」

その尋常で無い様子に、あたしも咄嗟に後ろを振り返る。
でもそこには大勢の人がいて、彼が、一体誰の事を言っているのかわからない。

「……ウソだろ？　なんであいつがここにいるんだよ……」

水島さんは、まるでうわ言のように呟いている。
あたしはそんな彼を見上げて、凄く不安になった。
な、何？　どうしたの？

すると彼が、弾かれた様に全身をこわばらせた。

「マズイ、あいつ……」

彼の視線を追って、再び後ろを振り返る。
そこには、水島さんと同じ表情で立ちつくしている、よっちゃん
がいた。

よっちゃんの視線の先を辿り、あたしはやっとその人を見つけた。見つけた途端、今度は視線を外せなくなった。

彼女は、ものすごく美しい女性だった。

赤いマーメイドドレス。背中が大きく開いている。豊かな黒髪を、緩やかにまとめあげている。

くつきりした目鼻立ちに、見事なまでの八頭身。

体全体から、女性の色気と、柔らかさと冷たさが醸し出されている。

こんなに綺麗な人、なんで今まで気付かなかったのだろうか？

そんな女性が、少し驚いたように、よっちゃんを見つめていた。

そして次に、艶やかに微笑んだ。

次の瞬間、庭の暗闇に、彼女は身を翻した。

「え？」

ビックリした。もう、いない。

でももっとビックリしたのは、よっちゃんも同時にいなくなっていた事だった。

彼女が消えるのと、彼が追いかけるのが同時だった。素早いっ。

あたしが驚いていると、水島さんも駆け出した。あたしも慌てて、

その後を追う。走るのは得意よ？

裏庭と呼ぶべきなのか。高いコンクリートの塀の前で、よつちゃんは立っていた。

「義希」

水島さんが声をかける。

よつちゃんは塀を見つめたまま、言った。

「……逃げられた」

しばらくそうやってじっとしている。

あたし達二人が様子をうかがっていると、やがて彼が、怒りを含んだ目つきで水島さんを睨んだ。

「お前、知ってたか？ あいつがここに来るの」

「いや知らない。僕も今そこで、初めて見た」

「何でここにいんだよ？ 何でここにいるんだ？ つか何で日本にいるんだよっあいつがっ」

よつちゃんがキレる。我慢がならない、という様子で足元の灌木を蹴り上げる。

水島さんは彼を見据えて、落ち着いて言った。

「新谷を使って調べよう。いつからこっちに戻ってきたのか、何が目的なのか」

「ちっくしょっ！！」

彼が体を折り曲げるようにして怒鳴った瞬間、周囲の木や草が

パンっ

と音を立てて、裂けた。

あたしは驚いて、体がビクッと飛び跳ねた。見ると目の前の塀も、一部に僅かな亀裂が走ってる。

よっちゃんは踵を返すと、激しい勢いであたし達の間を通り抜け、去って行った。

怒りのあまり、彼の念力が飛び散った後。

それを見ながら、水島さんは僅かに溜息をついた。

後にあたしは、水島さんの口により、由井白義希さんの事情を知る事になる。

「彼女の名前は、沙希。フルネームは知らない。よく変わるから。ご覧の通り、イットだよ。・・・魔性の女、ってヤツでね。男をとっかえひっかえ、彼氏や旦那達は、そうだな、致死率9割ってと

ころかな。彼女は、喰う為に人を殺す女じゃない。当時は、楽しむ為に、殺していた。今は、目的の為に殺すみたい。僕達とは違うボスに雇われているらしいから。・・・生存率、1割。彼女と付き合って唯一生き残った男が、義希だよ」

K i s s

あれから一週間近く、よっちゃんとは顔を合わせなかった。

避けていた訳では無く、彼が家にいないの。多分。

必死で、「沙希」を捜しているのだろうな、と思った。

彼女は、誰かに雇われているイットであるらしい。そしてその誰かは、水島さん達を雇っている組織と同じくらい、権力を持っているらしい。

彼女はその権力の下、趣味と仕事を兼ねてなのか、やりたい放題であるらしい。

……やりたい放題、って、どういう状態なのだろう。うっ、知るのが怖い気がするわ……。

こんなに身の周りが落ち着かないって言うのに、学校ではテストがやってくる。

あたしはテスト勉強で、毎晩2、3時まで起きていた。

そんな、ある晩。

喉が渴いて、小腹が減った。なんかつるつとしたものが食べたい。コンビニに行きたいな、と思った。昔なら行ってる。真夜中でも脚力に自信があったから。

でも今それをしたら、怒られるよな。かといって、他人の冷蔵庫は漁りたくないわ……。

葛藤をしながら部屋を出て階段を下りる。

広いプライベートリビングの前を通る時、ふと、人影に気付いた。

夜中の1時をまわっているから、部屋の電気はついていない。今にも雨が降りそうでじめじめとして、空には星一つ、無い。

そんな暗闇の中、開け放たれたテラスの先に、

よっちゃんが、腰を降ろしていた。

空を見上げている。

あ、久しぶりだ。

そう思っつて、ちょっと胸が躍っつてしまった。

でもこの人、何を見ているんだらう。空、真っ暗だよ？

声をかけようか、しばらく迷った。

でも、やっぱり誘惑(?)には勝てない。だつて一人で座つているんだよ？ 誰にも邪魔されずにお話出来る、チャンスじゃん。

「よっちゃん」

なるべく明るく、けれど夜中なので小さな声で呼んだ。

よっちゃんは振り返つて、少し驚いた顔をした。

「……まこちゃん」

「何しているんですか？」

微笑みながら、あたしは彼に近づく。

よっちゃんはあたしを見て、眩しそうに目を細め、優しい笑顔を見せてくれた。

「……………んー…何だろ？」

「当ててみましょうか？」

あたしは彼の隣に立った。よっちゃんは、座ってあたしを見上げている。

「願掛けでしょ」

「願掛け？」

「そ。あーした天氣に、なーあれ、って」

あたしは空を指さして、クスクス笑った。

「月も出ていない空をじっと眺めているなんて、それしかないでしょ？」

「……………そつかあ。ここのところ、雨続きだもんなあ」

「朝早くは降っていない事が多いですよ？ 誰かさんが不規則な生活をしているから気付かないだけで」

「ちよつと副業に力を入れ過ぎちゃって」

「日本刀の方？」

「服の方…と言いたいけれど、そっちは今週行けていないなあ」

彼は再び、後ろ手について体ごと、真っ暗な空を見上げた。

「梅雨は気が滅入るよね」

優しく微笑んでいるハズなのに、疲れが滲み出ているせいか、見
ていて何だか切ない。

あたしはドキドキしながらも、目の前の彼が急に子供の様に頼り
なく見えて、

抱きしめてあげたらどうなるだろう、

とってしまった。

自分に、こんな母性本能があるなんて、ビックリ。

「でも空って、曇っていても、雨が降っていても、その上はいつ
も晴れているんですよ」

白々しいくらいに明るい声で言うと、よっちゃんはキョトン、と
した顔であたしを見上げた。

その可愛らしい表情に、あたしはますますヤラれてしまう。

「どんなに雲で覆われていても、その上はいつも太陽が照らしてい
る。人間ってそれを頭では知っていても、毎日の生活の中では忘れ
ちやうんですって」

ほんと、まん丸お目々、という形容がぴったりの驚きよう。笑っちゃう。

「なんてコレ、うちのお父さんの受け売りですけど。お父さん、若い頃登山が趣味だったんです。それで、富士山を登って感動した話をする時、必ず言うのが今の話」

「・・・そうか」

徐々に瞳が細められ、彼は再び笑顔を見せると、下を向いてボソッと言った。

「俺の役に立たないこの能力ちから、せめて雲を晴らすだけのモノを持っていたればよかったのにな」

彼は「流石に空までは届かねえな」と言って、小さく笑っている。

あたしは苦しくなって、思わず眉根を寄せてしまった。

そんなあたしを見た彼は、少し苦笑するとゆっくりと立ちあがった。

そして正面を向いた。

すると、目の前がふわっと白くなった。

あたしはビツクリして目を凝らした。だって気のせいかと思ったんだもん。

よく見ると、それは小さな白い花びら達だった。庭一面に咲いていた、雛菊の様な小さな花達の花びらが沢山、ふわふわと中に浮いている。

「……………きれい……………」

あたしが思わず呟くと、その花びら達がまるで花吹雪の様に、綺麗に弧を描いて回り始めた。そう、まるで新体操のリボンの様に。

「家主に怒られそうだけどな。綺麗に咲いている花を台無しにするんだから……………けどよくこうやって、小さい頃に智哉と遊んだよ」

よつちゃんは正面を向いたまま、穏やかに笑う。

「沙希も、好きだった」

こんな時、経験未熟な小娘は、どうすればいいか分からない。

気の利いた大人なら、どうやって彼の心を救えるんだろう？

「雲、晴らせますよ」

あたしは、話題を自分ネタに戻した。よっちゃんの元カノの名前を無視して。

だって自分の土俵に戻らないと、あたし、何にも出来ないんだもん。

彼を励ますには、あんまりにも自分の引き出しが、足りないんだもん。

「皆、誰かの雲を晴らせますよ。そういう気持ちを持っていれば、絶対。あたし達って、そうやってお互い頑張って生きて行けばいいと思う。そうすればきっと、お互いがお互いの太陽になれるんだと思う」

一生懸命言っつて、頭の中で作った咄嗟の理屈を口にして、気付くと、目の前の人は、本当に穏やかに、あたしを見て微笑んでいた。

「……うっ、」しょうがないな」って感じなのかしら？

「……って、クサ過ぎますね」

「お互い、照らし合って？」

「しかも、眩しすぎますね」

今頃、自分が言った事に恥ずかしさが襲ってきた。ああっ、あたしってば、カッコ悪いっ。

もっと大人な事を言わなきゃっ。もっと、十代が粹がってますなんて思われない様な、落ち着いた大人な台詞をっ。

よっちゃんは手を伸ばして、あたしの頭をポンポン、と撫でた。

「いい子だね。確かに君は、太陽になれる」

「最近地球温暖化ですからね、太陽って言っても中々それもウザイですよね」

違う違う、そうじゃなくってっ。

「大丈夫。あつたかいから」

頭を撫でていた手が、そのまま置かれる。頭の上で静止する。見上げると、また切なそうな顔をしている。

ドキン、とする。

「……寒いのか？」

すると彼はあたしから手を離し、庭を向いて、自嘲気味に苦笑した。

「俺に出来る事と言ったら、生きている花を惨めな姿にする事ぐら

い

「でも綺麗だし！ それにおしべとめしべは残しているし！」

ああ、だから違う違う違うっっ、そうじゃないんだってば、あたしの口っっ！

よっちゃんは度肝を抜かれた様に啞然として、あたしをしばらく見つめた後、慌てて口を片手で押えたんだけど、明らかにその口から「ぶっ」と噴き出した音が漏れていた。

「・・・・・・・・最っ高・・・・・・・・」

一生懸命笑いを噛み殺そうとしているんだけど、いや多分それを諦めて、声を出さずに笑おうとしているんだろうけど、

もう、肩を震わせて体全体で笑っているし、多分この人、窒息しそう。息継ぎ出来なくて。

やっと顔をあげた彼は、笑い過ぎて目じりに涙が溜まっていた。

あたしは膨れて彼を見る。そこまで笑うかね？ 大人の楽しさ、あたしにはわかんないわっ。

彼はやっと笑いを納めながら、とても優しい瞳で、あたしを見つめた。

優しく、すごく綺麗な瞳。綺麗な睫毛。目が、反らせない。

彼の右手が、そつとあたしの頬に触れた。あたしはとんでもなくドキドキしていた。

心臓が口から飛び出るって表現が、ピッタリなくらい。

柔らかそうな前髪の下から見える綺麗な瞳は、優しく、悲しげで、温かくて、

そしてあたしに今まで見せた事の無い、大人の色っぽさを出していた。

それが、更にあたしの顔を熱くする。ど、どうしよう。

いつの間にか、彼の顔から笑いが消えた。両手で頬を包まれる。

真剣な表情。こんな真顔も、初めて見た。ものすごい引力がある。あたしの視線が、絡め取られて、引き寄せられる。

彼の後ろで、白い花びらが鮮やかに舞っている。まるで映画のようだ。

徐々に、彼の顔が近づいてくる。その顔がゆっくりと傾く。

あたしはそれを、瞬き一つせずに見つめていた。

鼻と鼻が触れるくらいの距離まで来て、彼が低く囁いた。

「逃げないの？」

「……」

どうやって？

無理。逃げられる訳が無い。

ヤバイ。この人が、こんなに甘いなんて。

「もう、遅いよ」

彼の口角が、僅かに上がった。

ゆっくりとそっと、あたしの唇に彼の唇が触れた。柔らかく、そつと。

そして一瞬で離れた。

あたしはビックリして彼を見た。

すると彼はニコツと、とても爽やかに可愛く笑った。アイドルスマイルってヤツ？

あたしが呆気にとられていると、また軽く、唇に触れた。さつきよりは少し長く。そして離れる。

ニコツと笑って、もう一度口づける。次は、上と下の唇を同時に食はまれた。ゆっくりと、離れる。

再びあたしを見て微笑むけど、その眼差しはさつきよりずっと、深く暗くて、そして誘う様なものだった。

鼓動が、大きく跳び上がる。

「ごめん。やっぱ止められねえ」

次の瞬間、あたしは強く抱きしめられて、右手で顎を摘まれ上を向かされ、その上から覆いかぶさるようにキスをされた。

それは先程までのキスとは打って変わって、とても激しいものだった。

彼の舌が、あたしの口内を掻き回す。舌を絡め取られる。上の唇を食まれたかと思うと、下の唇を含まれる。

あたしが今まで経験した事の無い、動きをする。それだけでもう、立っていらなくなる。

目眩がする。力が抜ける。体の中を何かが貫く様な感覚がある。

あたしは、彼の服の脇を掴むのが精いっぱいだった。

彼は角度を変え、何度も何度も、深く深く口づけてきた。

どれくらいそうしていたのか、わからない。

あたしはファーストキスなのに、自分でも驚くくらいしつかりと彼に応えてしまっていた。

つまりその、可愛く、されるがまま、って感じじゃなくて……。

唇が離れた時には、あたしの頭は朦朧としていた。
ヤバ。遊んでいる女だとか思われたらどうしよう？ あ、でもい
かにも「初めてです」って感じも重いのかしら？ じゃあ中庸がい
いのね、ってこの場合の中庸って何？

クラクラする頭でおバカな事を一生懸命考えていると、あたしを
見つめている彼と目が合った。

と思った次の瞬間、あたしは再び彼に抱きしめられた。彼の香り
に包まれる。

好きだな、この香り。

とか頭の片隅で呑気に思っていたら、彼の切なげな声が降ってき
た。

「…………ごめん。マジで、ごめん」

あたしは心が一気に冷えて行くのを感じた。

わかってるよ。あなたがあたしに、罪悪感を感じるだろうって事
ぐらい。

だけど今、このタイミングでそれを言うなんて、ズルイし、ヒド
くない？

「・・・いいの。大丈夫」

あたしは思わず苦笑した。

あたしに謝れちゃう彼に。この状況に。苦笑出来ちゃう自分に。

確かにあたしは、この人が好きだ。

だけど。

ファーストキスって、もっと特別なものかと思っていた。

S a c r e d o r s e c u l a r (神話か噂か) 1 (前書き)

タイトルの意味は直訳すると、聖なるもの、或いは世俗的な？
受験生の方、一対で覚えるといいらしいですよ(笑)

「男の人ってさ、どうして好きでもない女の子と、キスできるの？」

机に肘をついてあたしが呟いたら、隣にいた香取が飲んでいたコーヒーを吹いた。

「汚いな」

ヒトミが顔をしかめて香取を睨み、自分の制服のズボンについた液体を拭く。

テストが終わったあたし達・・・あたしと香取と唯と、そして何故かヒトミは(暇なんだって)、マックでお茶をしていた。

「好きな人がいても、目の前に可愛い女の子がいると、ふらふらうつてなっちゃうの？」

「真琴さ。今日のテスト、よっぽど出来なかったの？」

「朝からずーっと、こんな調子なの」

唯が心配そうに、ヒトミに言う。

ヒトミは無言で、香取を見た。

「・・・何で俺を見んだよ」

「別に」

澄ましてキャラメルマキアートを飲むヒトミ。あたしはついに机に突っ伏す。

あたしの左隣にいる唯が、彼女の正面にいる香取に言った。

「真琴の疑問に答えられるの、香取くんだけじゃない？」

「男だし」

ヒトミはそう言うと、彼女の左隣にいる香取に身を乗り出して、からかいの眼差しで言った。

「今でも、噂の従妹ちゃんとキス、してるの？」

「してねーよっ、つか、何でんなことお前が知ってたんだよ」

「え？ 誰か知らない人でもいるの？」

「いない」

唯が真顔で首を振る。香取が悔しそうに舌打ちをした。ジロツとあたしを睨む。

あたしのせいだ、って言いたいんだろうけど、構っていられないの、今。

ヒトミは容赦なく、口の端を上げながら香取に迫る。

「何で彼女との付き合い、やめちゃったのさ？」

「……テメーと仲良く、打ち明け話なんてするか」

「ふーん。真琴のせい？」

彼女は小声で囁くけど、聞こえてるから。香取とはるなちゃんが別れたの、なんであたしのせいなのよ。

……多分、あたしのせいなんだろうけど。わかってるけど。

色々大変だからでしょ？
でもあたし、頼んだ覚え、ないし。

だから机に突っ伏したまま、あたしは顔を上げなかった。

「なんなら、協力してあげてもいいけど？」

「……何か企んでいます、って目をして言うな。お前、自分が
楽しみたいだけだろ？」

「チツ。ケチ」

「ああ？」

ヒトミと香取のヒソヒソ話。仲、いいなー、この二人。ヒトミが
香取で遊んでいるだけかもしれないけど、気が合いそう。

その時、唯の携帯が鳴った。

「あ、親からだ。ちょっとごめん」

唯が席を外すから、顔を上げて手を振る。

そうしたら、あたしの向かいに座っていたヒトミも立ちあがった。

「どこ行くの？」

「トイレ」

ヒトミの後姿を見送る。

……かつこいいんだよね、彼女。美しい、というか。男子用制
服が本当によく似合っていて、あの子、どっちのトイレに行くんだ
ろう？ ちゃんと男用に入るのかな。

かったるくつて、もう一回溜息をついた。
だって昨夜は、結局1時間も寝れなかった。勉強だってはかどら
なかった。

香取が、腕を組んであたしを見た。なんだか不機嫌そう。

「そんな盛大に溜息つくか」

「幸せたっぷり逃げてますー」

「……なんかあつたか？」

「……キスした」

何で彼に言ったのか、わからない。発作的に言ってしまった。

一番言いたくない相手だと思っていたのに……一番、知ら
れたくない相手？ 疲れている時に、余計な嫌味やからかいは聞き
たくないもん。

なのに何で。

「……ふーん」

あっさりした返事。感情が籠もっていない。

表情までは知らない。だって顔を見てないから。

でも予想に反して突っ込まれなかったので、あたしはつい、ポロ
っと続けてしまった。

「ファーストキスだった」

「ふーん」

「すごい大人のキスだった」

「へー」

「でもあの人、彼女いるんだよね」

「・・・そうか」

彼の、感情の籠もらない相槌は続く。あたしは昨夜の事を思い出していた。

キスしている時はすごい嬉しかったし、結構頑張っちゃったんだけど。終わったら、切ないというか、虚しいというか・・・

「あんたがはるなちゃんにやっていた事って、やっぱりサイテー」

「・・・もう、しねえよ」

その時の返事だけ、低くて、とても不機嫌そうなものだった。散々みんなにいじられちゃっている件だものね、あたしのせいだ。

よっちゃん。

あたし、あの人が好きなんだけど。あの人を抱えているもの、知りたいし。悲しい事、少しでも減らしてあげたいし。あの子の笑顔、好きだし。心があったかくなるし。彼女とキスしているのを見たら、やっぱり胸がグツとなったし・・・だけだ。

「・・・だけど、・・・涙が出ない・・・」

「は？」

「うっん」

「やめろ」

「え？」

「時間の無駄」

急に言われて、あたしは何の事だか分からなかった。顔を上げて香取を見る。

彼は腕を組んで、椅子に深く腰掛け長い脚を通路に投げ出し、とても態度悪く座っていた。

そしてあたしを睨んでいた。女の子みたいなパツチリお目目を、鋭く吊り上げていた。

見慣れてる表情ではあるんだけど・・・。

「何が？」

「そつやってウダウダ考える事。時間の無駄だろ。答えの出る話か？」

「・・・答えって・・・」

「女つてのは解決策の無い事をグダグダと、かと思えば単純な話をゴチャゴチャと考えて」

「・・・あたしの時間をどう使おうと、あたしの勝手じゃない？」

「じゃあ人目の触れない所でやれよ。いかにも構ってくれって、周

りを巻き込むなよ。すっげムカつく」

「は？ 何それ」

いきなり感情をぶつけられたあたしはびっくりして、そしてかなり気分を害した。

つまりこっちも、すぐくムカついたって事。

香取は機嫌の悪さを顔に丸出しにして、顔を背けている。

「……帰る」

あたしは床に置いてあった鞆を持って、立ちあがった。

香取はチツと舌打ちをすると、座ったまま、あたしの顔を見ずに、あたしの腕をグイッと掴んだ。

「一人で帰す訳にはいかねえだろ」

あたしはカツときて、胸の中からは怒りと言つよりもイラつきが込み上げて来た。

それでも冷静を保とうと努力しながら、香取を思いつきり睨むと、低い声で言った。

「じゃあ、なんでいきなりキレんのよ。友達だと思って話しただけじゃない」

「……だから意見言ってやったろ。それをお前が、自分の勝手だ、みたいに拒否つたんじゃねえか」

香取も美少年な顔を歪ませながら、あたしとは全然違う方向を睨んで言う。それでも掴んだ腕は離さない。

あたしは益々頭に来てしまった。

「『言つてやった』？『拒否つた』？ その態度、偉そうにどこまで自己中の俺様なの？」

「自己中か？ 散々お前に合わせてやってんだろ？」

「『合わせてやってる』？ 世話してやってるって事？ だからあたしをバカにしてもいいって？ 冗談でしょ、そんなのお断りよ」

「どこがバカにしてんだよっ」

「してるじゃないっ。一方的に怒りだして、上から目線で批判してるじゃないっ」

「何だよ、俺は自分が思つた事も言えねーのかよっ。イチイチ突っかけて来るのはそつちだろっ」

「そつちが先にキレたからじゃないっ」

「お前だつてキレてんじゃねーかっ」

もう、お互いがお互いの事しか見えていない状況。
そこに横から、冷静な声が入った。

「ちょっとお二人さん」

ハツとして二人して振り返ると、そこにはヒトミと唯が立っ

た。

ヒトミは冷めた目つきで、唯は心配そうな表情で、そして後ろのお客様達はビビり半分、興味半分で、

あたし達を見ていた。

「面白いけど、流石にここじゃあ、マズいんじゃない？ 迷惑の代名詞だよ？」

「あんな事、こんな所でやらないですよ？」

「あんな事って？」

ヒトミがきよとん、と唯を見下ろす。

唯は背伸びをして、手を口に添えてヒトミに耳打ちをした。聞かなくっても分かる、あたしが初日に香取をぶん殴った件だ。

ヒトミは少し眼を見開き、そして彼女を見ると、今度はあたし達を見て、面白そうにヒュウっと口笛を鳴らした。

「やるね。見たかった」

「帰るっ」

あたしは怒りに任せて、鞆を振り回す様に勢いよく踵を返した。

2、3歩歩いた所で、後ろから唯に声をかけられた。

「ちょっと！ 真琴、なんか落としたりよっ」

反射的に振り向いてしまい、未だ怒り途中の香取と目が合って更に頭に来ただけで、床に落ちているものを見て気が反れた。

それは、真っ青な色をした、手の平よりちょっと大きいくらいの、

重そうな置物だった。

何だか、動物の形をしているっぽい。

「……何それ？」

「何それ、つて、真琴の鞆から落ちたよ？」

「あたしの？ 知らないよ？」

「え？ でもさつき、真琴の鞆から……」

「鞆、開いてるよ」

ヒトミに指を指されて、みると確かにあたしの鞆が開いている。

と言う事は、やっぱりコレは、あたしの鞆から落ちたものなのだろう。

あたしは近寄って、それを拾った。

それは真つ青な、石で出来ている様な物だった。石の彫り物？

動物の形に見えたのは、なんだか肉食動物の様な鋭い目つきをした4本足の生き物で、だけど背中から羽が生えている。

ヒトミが覗きこんで、あたしに言った。

「何、これ？」

「……えー……？」

そんな事、あたしに聞かれても……。

「土産物？」

「つて真琴が聞くの？ 何で土産物？ 誰から？」

「さあ。さっぱり。それっばいから？ 誰かの、間違えて鞆に入れちゃったのかなあ？」

「明日、学校で聞いてみれば？」

ヒトミに言われて、成程、その通り。

そうしよう、と思って軽い気持ちで鞆に放り込もうとしたら、唯が口を開いた。

「これ、グリフィンって言うんだよね」

「へ？ そうなの？」

「うん。ほら、よく映画とか、マンガとかで出てるじゃない？」

そうなんだ？

あたしが感心して眺めまわすと、ヒトミが唯に言った。

「ふーん。唯ちゃん、漫画なんて読むんだ？」

「あ、うん、時々ね」

唯がちよつと照れたように言って、そうか、唯も漫画なんて読むんだ、なんて……

「……………うぁーっ!!」

あたしは思わず、ものすごく大きい声で叫んでしまった。

そして再び、店内のお客さんの注目を浴びてしまった。ただし今度は好奇心の目ではなく、「うるせえな、静かにしろよ」的な視線だったけど。

だけどあたし、すっごい事を思い当たってしまったっ!!

ヒトミが眉根を寄せる。

「何？」

「グリフィン？　グリフィン？　これがグリフィン？　別名、獅子
驚ってやつ？」

「さ、さあ？　別名までは……でも、多分」

あたしの興奮っぷりに、唯は少し後ずさった。
そしておずおずと、控えめに説明してくれた。

「ライオンに、鷲の翼が生えているものでしょ？　中世の、想像上
の動物じゃない？　ユニコーンみたいな」

「……どうしたの、真琴？」

ヒトミが、斜めの角度からあたしの顔を覗き込む。訝しげな表情
をしている。

あたしは、口をパクパクとさせた。

グリフィンって、あの時、女のイットがよっちゃんに話していた、
アレだ！

うちの学校にある、って噂の、魔法アイテムだっ。パワーアップ
アイテムだっ。

あの、持つてると念力が使えるだけ、怪我が治るだけ、なんかそんな事を言っていた、

いかにもウソっぽい作り話に聞こえた、アレだっ！！

あたしは、ゾクつとした。背筋が寒くなった。

だって誰が、これをあたしの鞆に入れたの？

あたしの身近な所にいる、誰かだ。・・・それしかないじゃない。

・・・信じられない！

よっちゃんが、後ろから彼女を斬り殺すビジョンを、思いだした。

あたし、またアレを経験しなくちゃいけないの・・・？

ゴクつと生唾を飲み込んだ。寒いし、足が震える。

でもとにかく今は、自分の身を守らないといけない。

あたしは、見えない誰かに狙われている。村本イット以外の誰かに。

学校内の、誰かに・・・！

「・・・あ、あたし、やっぱり帰った方がいいみたい・・・」

「・・・」

「あ、あのさ。ヒトミは唯を、送ってくれる・・・？」

だって、唯は四六時中一緒にいる、あたしの親友。しかも今、この場に立ち会ってしまった。

何かあったら、大変な事になる。

「わかった。じゃ、後でね」

ヒトミは理由も聞かずに頷いた。そして唯の肩に手を回した。唯は訳の分からない顔をしながら、不安そうにあたしをみている。ヒトミがニコツと微笑むと、彼女を連れ出して行った。

呆然とするあたし。

ふっと香取と目があつた。真顔だ。

途端に、ついさっきの大喧嘩を思い出した。

ヤバい。気まずい。

……だけど、あたし今、一人で帰るのは危険だ……。

「……………あの……………」

本当に、情けなくなつた。

あたしこそ、自分の意見なんてエラソーに言える立場じゃないんだ。こんなに人に頼らなくては、今は生きて行けない。

「連れて帰ればいいんだろ？」

香取はむすつとしながら、それでも当り前の様に言った。
「……やっぱりそう言われてるんだ……」。

あたしは恥ずかしさと悔しさと、僅かな申し訳無さとで、顔が上げられなくなった。

「ん……」

「じゃ帰るぞ」

踵を返すと、後ろも振り返らずにスタスタと歩いて行く。
あたしは一瞬間を置いてしまい、慌てて後を追いかけた。

でもその後ろ姿を見ているうちに、さっきの大喧嘩を思い出してしまい、ふつふつと怒りが再燃してきた。

イラつくムカつくイラつくムカつく、すごく悔しいっ。

なんでこんなにイラつくんだ、こいつの尊大な態度も最悪な言動も、今に始まった事じゃないのにつ。

なんでこんなに頭に来るのよっ。

あたし達は微妙な距離を取りながら、話す事無く歩く。

あれ？ あたし今、なんだか胸の中が切なくなるような事を考えていたんだよな。何だっけ？ なんか憂鬱な事を考えていたハズ。

ほら、喧嘩する前……グリフィンが飛び出てくる前……
あ、あれだ。キスだ。

自分で啞然としてしまった。ポカンと口が開く。あんな大事が飛ぶなんて。

香取の事、ムカつきすぎて忘れてたじゃん、一瞬。

それとも、グリフィンがあつた事がショックすぎて？

……あたしって、何？

マックでの騒ぎから小一時間後。

「何か感じる?」

テーブルの上に置かれた獅子鷲を、至近距離まで顔を近づけて睨んでいると、ヒトミに訊かれた。

あたしはそれを睨んだまま答える。

「いやさっぱり。ヒトミは?」

「うん。色々」

ここは水島屋敷。無駄に広い食堂には、あたしとヒトミと、水島さんとよっちゃん、そして香取がいる。

ヒトミがこの置物から何か感じる、というものだから、あたしは食いついた。

「うそつ。どんなつ?」

「凄い綺麗だなー、とか、金粉が付いているなー、とか、ほしいなー、とか」

・・・は?

水島さんも頷いた。

「」利益もありそうだしね」

「ああ、やつぱり？ 有り難そうですね」

「仰々しいもんね」

「おいこら」

「ちよつとお！」

あたしとよつちゃんが二人同時に、声をあげた。

あたしは膨れて、ヒトミと水島さんを睨む。

「ふざけてるんでしょ？」

水島さんの隣でよつちゃんが、そくだそくだ、とばかりに真顔で頷く。

だけどヒトミは、ケロッとして言った。

「真琴の方が無関心過ぎない？ 全然興味ないんですよ、美術品として」

「・・・ええく・・・？」

美術品としてー？

あたしは思ってもいなかった事を言われて、マジマジとそれを眺めた。

うーん。ミニチュア狒犬に羽が生えているようにしか見えない。

こんな犬よりは、

「スーピーの方が可愛い」

「ヌーピーって・・・」

「ティちゃんよりスヌー ー派」

青い置物を観察しながらよつちゃんに伝えると、真面目に考えたかったであろう彼が頭を抱えた。

その時、部屋の扉が開いた。

新谷さんだった。

「確認が取れました。エジプトのカイロ博物館から紛失したもので、ほぼ間違いない様です」

「レプリカでもなくて？」

「金粉の位置まで、寸分一致しています」

「ふーん、そう」

水島さんが腕を組んで、置物を見下ろす。

あたしは、こんどは新谷さんに食いついた。

「ね、ね、新谷さんは何か感じる？」

グリフィンを指さして尋ねる。

だって噂のパワーアップアイテムだよ？ やっぱちょっぴりワクワクするじゃん。どんな魔法が飛び出すのか、イットの血が半分の新谷さんならきつと何か・・・

「ええ、美しいですよね」

「・・・そうじゃなくって」

「これが紀元前3千年も前の物かと思うと、畏敬の念を抱きます。彫りの一つ一つに、神や自然に対する畏怖が表れている。人類の芸術能力、美意識とは本能に組み込まれたもので、だからこそ私達の胸に訴えてくるのでしょう」

そうだった。この人は芸術感覚に優れ、綺麗な物、美しいもの、バランスのとれたものが好きだった。

方向違いの答えをされて、あたしは肩をガクツと落とした。そして少し拗ねるように、彼を上目遣いで見て言った。

「質問チェンジ。これを持ってると、パワーアップする？」
「いいえ全然」

ニツコリと微笑まれる。

あたしは今度こそ、テーブルに顔をうずめたくなった。つまんないつ。

「ウソじゃんウソじゃんつ。神話も噂も、全つ然ウソじゃんつ」

誰よ、何でも出来るようになるなんて言ったのはつ。

「問題は、これを誰が彼女の鞆に入れたか」
よっちゃんが考え深げに言った。

「そしてこれをどうするか、だな」

シーン、となった。

あたしは置物を指さして、年上組に言った。

「こんなの持ってたら、変な噂が立って、イットがうよつよ集まってきたやうやう」

「……今までエジプトの博物館にあって、誰も盗らなかったのか？」

「ここについてからずっと口を閉ざしていた香取が、口を開いた。それを新谷さんが、事務的に答えた。

「そもそも博物館の手に渡ったのが、1970年代です。それ以前は、出土されて以来、コレクター達が所有していました。博物館が買い取ってからは、強盗にあった記録はありません」

「へー。あんなにイット皆が欲しがっているのに」

素朴な疑問。だってそうでしょ？ 無法者集団が狙ってるんだよ？

「嚴重な警備、が表向き。博物館を管理している権力者がイットであり、敵にまわしたくない、というのが裏事情です」

「え？ その権力者イット、パワーアップしたの？ これで？」

「……さつきから、真琴の言うパワーアップって何？」

ヒトミに呆れた様に訊かれて、

「怪我が治るんでしょ？ 念力使えるんでしょ？ 何でも願いが叶うんでしょ？ 空、飛べちゃうかもよ？」

「……あんだじゃあるまいし」

水島さんがダルそうに溜息をついた。あたしが何よ、そんな事出来ないわよ、空を飛ぶのとテレポは違うのよっ。

「見ての通り、古代の素晴らしい彫刻です。使用されている石もラピスラズリで、最高級品です。歴史的にも大変価値があります」
「……つまりただの石？」

あたしが恐る恐る訊くと、新谷さんは再びニツコリと微笑んだ。とつても魅惑的な笑顔だった。

あー、やっぱり！ うー、密かに期待していたものが崩れたっ！
もー、やる気なくしたっ！ ワクワクを返せっ。

「つまり、これは元あった所に戻せばいいんじゃないかね？」

あたしが思いつきり膨れたら、壁にもたれて腕を組んでいた香取が、再び口を開いた。彼っついでいっつでも、現実を対処しようとするよね。どんな状況でも。あたしがテレポっても。イットに襲われても。

あたしは、彼の、幼さが少し残る綺麗な顔を改めて見つめた。偉いよなあ。少しは動じなよ。

「それは無理だろ。あの国の現状を見てみれば、自国の美術品を保存するどころじゃない」

「じゃ、似たような所に移せばいいんじゃないかね？」

香取はよっちゃんに向かって言った。

「俺、イギリスしか知らねーから他言えないけど、例えば大英博物館とか？ あそこならエジプトの品物、当然の顔して受け取るぜ？」

一同、ポカン、となった。

よっちゃんが、ハンサムな顔で啞然と、香取を見つめる。

「大英博物館……」

なんて突拍子もない事を、と言うかと思っただら、その隣で水島さんが呟いた。

「……いいかも」

彼は少し眉根を寄せて、納得した様に頷く。え？ 納得してんの？ よっちゃんも空中に視線を移しながら、考えるように言った。

「ああ、いいかもな」

「警備も万全」

「保管も最高」

「あそこなら、確か上に……」

「だよな。聞いた事がある」

「じゃ、僕は親父に聞いてみる」

「俺はオフィスに」

そう言って二人は、新谷さんを連れて慌ただしく部屋を出て行っ

ちゃったのよつ。

後に残されたあたしは、ひたすら啞然とするしかなかった。

「なんなのこの人達……話が大きすぎる……」

こんな日本の片隅で、大英博物館の話が出るとは。そもそも何故イギリスに？ フツーに日本のどっかに預ければいいだけでは？

話についていけないあたしが呆れかえっていると、ヒトミが面白そうに、ニヤツと笑いながら言った。

「警察庁にヤクザなんて、CIAとマフィアが手を組んでいる様なものだからね。怖いもの無しかもよ」

……なんだそれ？ つまり、無法者はどっちなんだ、って話？

541

しばらくしてヒトミと香取が水島さんに呼ばれ、入れ替わりによつちちゃんが入ってきた。

いつもよりちよっぴり真面目そうな顔をしている。こつこつこの、仕事の顔って言うのかな？

「君は、引き続き香取くんといった方がいい。誰がやったかなんて、学校を調べる方が手間がかかるだろうし。イットを素手で殴れる人間なんて、貴重だよ。おまけに彼は君と相性まで「わーっ！！ わっかりましたーっ」

大声で遮った。か、香取にもし聞こえたらどうすんのよっ！ オ
ッソロシイ事になるじゃないっ！

よっちゃんは、アタフタしているあたしを見て、綺麗な瞳でクス
ッと笑った。

「逃走中の事務員、忘れるなよ？ あれだけ生徒の気を吸っていれ
ば、もう見境がなくなっている」

そう言つと一転、強い光であたしを見据えて言った。

「必ず、君を喰いに来る」

あたしはドキッとした。この場合、彼に見つめられたからドキッ
としたのだとも思うけど、それだけじゃ、ない。

よっちゃんが言い切るなら、本当にあの人は、あたしに会いに戻
ってくるのだろう。

「あたし、どうすればいいんですか？ 身を隠しながら逃げるだけ
？」

「うーん、特にこれと言つてな。あいつらは多少の怪我でも、人間
の気を吸っちゃえばその場で治せちゃうし。香取クンみたいに殴れ
ないなら、逃げるしかないよ」

よっちゃんは空気を和らげるかのように、苦笑した。あたしはそ
んな彼を見つめながら思う。

逃げてばかり。

でも、あたしには彼を殺す勇氣なんて、ない。
よっちゃんはそれを分かってくれている。

……けれども、あれって、勇氣って言うの？

「……でもいつも、逃げるのですら、ままならなくて……」

再び浮かんだ疑問を振り払う様に、あたしは軽く頭を振った。
すると彼は甘いマスクをあたしに近づけ、真顔で、あたしの顔を覗き込んだ。

そして言い聞かせるように、話した。

「目だよ。目を見ちゃダメ。ヤバいと思ったら、振り返るな」

「……」

誰の目？ あなたの目？ 見ちゃったよ、もう。ほんと、ヤバい。
いやになる。昨日と同じで、反らせない。あたしはこの目が、堪
らなく好き。

だけどわかつちゃった。今あなたの目には、真っ直ぐな光以外、
何も無い。昨日の様な、色が無い。

昨日の様には、あたしを見ていない。

うつん、昨日だって、あたしを見ていない。

「わかった？」

「……はい」

「すぐに俺達が助けに行くから」

「……はい」

「よし」

満足した様によっちゃんがあたしの頭を撫でて、それからハツとした様に手を止めた。

彼の空気が変わった事が、分かった。

「真琴ちゃん」

先ほどとは違った意味で、シリアスな声。あたしはギクツとなった。

「……あのさ、昨日の事なんだけど……」

「いって、言ったです」

あたしは身を強張らせまいと注意しながら、彼を見上げた。

うまく、笑えているだろうか。

「ほんとに、多分。よ……由井白さんが思うほどは、気にしていません」

あんな事、何でも無かったんだよ、ってカッコつけただけかもしれない。

それとも、彼の重荷になりたくないから、かもしれない。

名前を呼ばずに名字で呼んだのは、あたしのささやかな、抵抗。

それに本当に、あたしはそんなに、気にしていない。

あんな事があっても、あたしはどこも変わっていない。昨日も今日も、そして明日も多分、同じ。

あたしは、同じ。

「俺、君の事は……すごく大事な妹だ」

「……兄貴が増えると、ウザいな」

「……だな」

よっちゃんは苦笑して、それから一瞬、あたしを切ない眼差しで見つめた。

「ほんと、ごめん」

そういうと、部屋を出て行った。

妹の、ワケが無い。

妹を、あんな危険には曝さないだろうし。利用したりなんか、しない。

でも彼は、そんな事すら気付いてないんだ。

「おい」

「え？」

いつの間にか、戸口に香取がもたれかかってこつちを見ていた。あたしはギクツとなる。い、いつから見ていたんだろう？ 焦るじゃない。

「笑ってんなよ」

「え？」

「泣きそうなんだろ。俺にはそう見えるけど」

不機嫌そうな香取の表情。言われたあたしは、頭が真っ白になった。

「……さ、最悪……振られる所、人に見られた……」

「……な……」

「不器用な能天気が馴れない事すんな」

容赦無くバツサリと言われる。

あたしは恥ずかしさのあまり、顔に血が上ってくるのが分かった。

「馴れない事って、」
「自分を隠す事」

間があいた。彼の言葉を理解するのに、時間を要する。
次の瞬間、顔に上った血が頭にまで行った。

あたしの事、知らないくせにつ！

「こんなあたしが自分を出せる訳ないじゃん。親友の唯にも打ち明けられない、こんな力。自分なんて、物ごころついた時から隠しているよ」

「知ってる」

間髪いれずに香取に言われた。
射るようにつめられて、あたしは胸まで射られたようになった。
一瞬、本当に分かってきている様な気になってしまった。

でも、この人は知らない。

秘密を抱え続けて友達と接する事が、どんなに苦しいか。

本当の自分を洗いざらい話せる友人を作れない事が、どんなに辛いか。

いつも上辺だけの付き合いで、相手の顔色うかがって自分を出せない事が、どんなに悲しいか。

それでもあたしは、やって来なくちゃならなかった。頑張らなく

ちやいけなかった。

それを、軽々しく、自分を隠すな、なんて言うなっ！

怒りのあまり、目が潤んできた。

すると香取は、そんなあたしの声が聞こえたかの様に、フツと表情を和らげ、

今まで見た事もない様な、優しい眼差しと微笑みを、あたしに向けた。

「でも俺には、最初っから怒鳴りまくって出しまくってたろ？」

グツときた。

「それは……」

確かにそうだけど。出会った時から、彼には本気全開だったけど。言われてみれば、そうだけど。

だけどそれは。

ぼろ、っと、ついに涙が零れた。

ヤバい。あたしは香取を睨みつけた。

「泣いてない」

「泣いてないな」

ヤツは真顔で答える。

すると後から後から、涙が頬を伝って来た。

恥ずかしいけど、恥ずかしすぎて、拭えない。

「・・・泣いてないっ」

「うん。泣いてない」

彼は少し首を傾げながらあたしに近づき、そっと、あたしの頭を抱いた。

撫でるでもなく、抱きしめるでもなく、

だけど、当り前の様に、自然な動作で、そっと。

あたしは抱かれるまま突っ立って俯き、涙をぼろぼろと床に零した。

もう、自分が何で泣いているか分からない。振られたからなのか、まだ好きだからなのか、それとも今まで自分でも気付かないほど、人生に我慢をして来たからなのか。

或いは、香取があまりにも、優しすぎるからなのか。

いずれにしてもコイツのせいだっ！ 弱ってる所に現れんなあ
っちに行けーっ。

あたしは心の中で、お得意の責任転嫁を叫びながら、香取の胸に頭を押し付けた。

「年下のくせにつ。ほんと、えらそーっ」

「……年上のくせに。ほんと、バカ」

その時、ほんの少し緩く彼に抱きしめられ、頭上に彼の顔が落とされた気がするけど、

それは黙って見過ごしてやる。

心地よい彼の腕の中で、しばらくあたしは動けなかった。

数分後、部屋の外から足音が聞こえ、赤い目を誤魔化すために慌ててトイレに駆け込むまで。

「妹？」

義希と何があったんだ、と冷たく見下す水島智哉に根負けして（今朝のあたし達の様子に、この人溜息ついてたもん。そんでイラッと睨まれて、かなり凄味があったんだもん）、あたしがよっちゃんに振られた話を口にする、彼は素っ頓狂な声を上げた。

「そんなワケないでしょ。あいつ、自分の妹は溺愛しすぎちゃって眼の色変わってるよ？ あんたのお兄さんの方が数倍マシだよ？」

「……ウソ……」

「ホントホント。自分のオヤジと妹の取り合いで、見ていて引くから。あ、それからね、前も言ったけど、あの人キス魔で加えてかなり惚れっぽい性格。それに潰された女の子達、かなり見てきたよ。僕が言うのもなんだけど、家庭向きじゃないね。本人が自覚していない所が、更にタチが悪い」

開いた口を塞げずにいると、水島智哉は、軽蔑と憐みが混じったような視線を向けた。

「そうゆうこと。わかった？ 迷える子ザルちゃん？」

「……ごめん、よっちゃん。今からあなたは、あたしのブラックリストに載りました。今後は各所で攻撃させていただきます。ロックオンだ。」

「というか水島智哉っつ。人から無理やり聞きだしておきながら、毎回毎回、あたしに嫌味をいうんじゃないっつ。というよりバカにしたように笑っつ。」

あたしが香取の腕の中でこっ恥ずかしく泣いてしまったのは金曜日。
日。

土日が挟まれていたのは幸いだった。顔、合わせられないもの。

そして月曜日。

来週には夏休みが始まる。

受験生にとっては地獄の夏休みでも、あたしにとってはありがたい。
い。

だって命を狙われる場所が一つ減るし、・・・香取とも、顔を合
わせずに済むし。

なのに最悪な事に、水島屋敷監禁宣言を出されてしまった。図書
館すら、よっちゃんか水島さんか香取を連れて行かねばならないの
よ？（ヒトミでは危ないらしい）

うーん、なんてストレスフル。

四面楚歌？ 背水の陣？ 前門の虎後門の狼？ 全部違うけどそ
んな感じ。 ああいやだ。

そんな悩めるあたしは、今日ものろのろと支度をしていた。もう
いっそのこと学校を休もうかなあ。

グダグダとしながら階段を下りて行くと正面玄関に、

香取が立っていた。はあっ？ 何で？

水島さんと、にらめっこをしている。な、なにっ？

「……………」

「……………」

「……君が連れてくの？」

「手間が省けんだろ？ あんたら、忙しそうだし」

「随分協力的だね」

「だろ。だからさっさと事態を片付けろよ。それが仕事だろ？」

あたしがビツクリして突っ立っていると、水島さんがあたしに気付いて振り向いた。

おはよう、の挨拶も無しに、小さな黒い、プラスチックの塊を渡される。

「じゃ、これ」

「？」

「制服のポケットにでも入れて、なんかあったら押して。僕達の携帯が鳴る様にしてるから」

「……………何かって……………」

「そ、何か。手遅れにならない様に、早い目にね。焦って義希を飛ばして、それでも事が遅かったとなったら、僕も命縮めた甲斐がないから」

「……………」

「何その顔。何か不服？」

「いいえ……………」

水島さんは美人な顔で、すごく冷たくあたしを睨んだ。こわっ。
朝から何よ、あたし、睨まれるような事した？ あ、毎朝きちん
と朝食を食べてないとか？

スタスタと去っていく彼の後姿を見ながら、あたしは一人で呟い
てしまった。

「なんかいつにも増して、皮肉に嫌味が上乘せされてる……」
機嫌、悪いのかな？

振り向くと、香取と目が合った。

ジッと、見られる。

あたしは金曜日の事を思い出してしまった。泣いて、甘えて、慰
められた事。

耐えられない。

「向こう、向いてて」

あたしはそっぽを向きながら香取に言うと、玄関を出た。

「何で？」

「恥ずかしいから」

「……ほんっと、プライド高いのな、お前」

「あんたほどじゃないわよ」

二人で屋敷を出る。無言で。顔が赤いあたし。

香取は長い脚でサツサとあたしを抜かすと、かつたるそうに前方を歩いた。

あたしはその後ろ姿を、恨みがましく睨みつけた。

なんで朝まで迎えに来ちゃってるのよ、本当に付き合ってるカップルみたいじゃない。

マズイ、勘違いしそう。あたしの頭が、香取と付き合っているのかと錯覚をおこしそう。

そしたらあたしの胸が、香取を好きなんだと誤解しそう。

すると香取が、こっちも見ずに（そりゃ見るなって言ったけど）低い声でボソツと言った。

「俺、お前の、みんなに無条件に愛されちゃってますオーラ、結構嫌い」

「.....」

なぜにコイツまで機嫌が悪い？

「飯は？」

コンビニ前を通りがかった時、急に香取が口を開いた。

相変わらずこつちを振り向かないの。だから、話しかけられたとは一瞬分からなかった。

「あ、うん？ まだ・・・」

「そ」

彼はスタスタと中にはいる。慌てて追いかけると、手慣れた様子で、おにぎりサンドイッチをかごに放り込んでいた。

そっか、毎朝こつちやって朝ご飯、買ってたんだ。

彼の日常を垣間見た気がして、ボーっと眺める。あのおにぎり、あたしのよね。

だけど何故か飲み物は一本。ミルクティー。

レジ前で、彼がキヤラメルをかごに放り込むのを見た。あたしの好物で、そつちやこの間最後の一粒をヤツにかすめ取られた。

今までの自然な流れで、どちらが言うでもなく例のフェンス前に来た。毎朝ね、ここで食べていたの。

でも今朝は、なんとなく微妙だわ・・・。

その時、後ろから声をかけられた。

「なあーんだ、制服、持ってたんだ」

ギクツとなる。この声は・・・あう、あう。

タイムン張れる自信はあるけど、そつちなる事態はなるべく避けたい。いや全力で避けたい。

ひえっ表でも裏でもネチネチ苛められるなんてヤダよおっ。

はるなちゃんは、もう本当に怖い顔をして立っていた。とてもとても、怒っていた。

「心配して、損しちゃった。それならそう言ってくればいいのに」「あなた……」

「はるな。いい加減にしろよ」

「いい加減にするのはそっちでしょ。私にあて付けているつもり？」

「おい」

「せっかくはるなの所に帰ってきてくれたのに。はるな、ずっと待っていたのに。なのにどうして、そんなひどい事するの？」

香取が押し黙る。

はるなちゃんは真っ直ぐ香取を見据えていた。睫毛の綺麗な目が吊り上がっていた。

そんなに怖い彼女を見て、あたしは決心をした。しばらくネットを見るのはやめよう。本当に、どんな事を書きこまれているかわからないわ……。

「私、ずっと待っていたんだよ？ 礼がイギリスにいた時だって、いつか私と結婚するためだ、その為に礼は我慢しているんだから、って、一生懸命耐えていたのに……」

「……」

「礼はいつも、私の言う事は聞いてくれていたじゃない。寂しいって言った時も、もうすぐ帰るからって言ってたじゃない。なのにどうして、帰ってきた途端、こんな人とずっといるなんて、どうして

「？」
「.....」

香取、あたし、見守っていてもいいかな？ なるべく遠くで。

「私は礼が好きなのにつ。ずっとずっと好きなのにつ。礼は私と結婚するんだから、そんな嫌がらせはもうやめてよ」

はるなちゃんは、痛いくらいに真っ直ぐな気持ちを爆発させた。

香取を見つめながら可愛い顔を歪ませて、涙を流し始める。

これ、俗に言う修羅場だね？

あたしはそろそろと後ずさった。ごめん、香取、応援してるから。マジで見守ってるから。やっぱり遠くで。

あたしとは対照的に、香取は微動だにせず、じつとはるなちゃんを見下ろしていた。

そして口を開いた。

「お前は大事な従妹だ。何かあったら俺が守る。.....だけどお前の事、恋愛対象として見た事はない。多分これからも」

「なっ.....」

「俺にとっては妹みたいなものだ。それ以上は」

あたしの歩みが止まった。「妹みたいなもの」？

キレたと自覚するより前に、香取の横っ面をひっぱたいていた。
我ながら恐ろしい。

「妹にキスするなやーっ!!」

二度目のそれも、それはそれは綺麗に決まった。

初回と同じように、香取は吹っ飛んで尻もちをついた。

ゆっるせないっつ！ あり得ない！ 今あんた、何て言ったっ？
?!!

座りこんだ香取が、殴られた頬を抑えて低い声で言った。

「……お前、殴る相手を間違えてねえか……？」

「妹みたいっつって手を出して、妹相手にキスまでして、妹を免罪符に逃げるんじゃないっ！！」

「……キレる相手も間違ってるだろ……」

「妹は禁句だ禁句だーっつ」

「バカっ痛えっやめろっ」

「……」

喚いて暴れて飛びかかるあたしを、香取は両手で掴みにかかった。
そんなあたし達を、はるなちゃんか絶句してきている。

あたしはもう、自分がコントロールできなかつたの。(お兄と似ている)

このやるーっ信じらんない信じらんないっ、
こんな奴こんな奴こんな奴ら、成敗してやるーっ！！

「謝れっ！ 謝れ謝れ謝れっ！ それでも許してもらえなかったら
潔く結婚しろっ！！」

「ヒスるなよ、ちよっと落ち着けて」

言いながらあたしを掴んで、香取は立ちあがった。

そしてあたしをトンと押し離すと身を引いて、まるでこちらをけん制するように小さく指さして、
低い声で言った。

「部外者は口閉じてろ」

眼光鋭く睨まれて、不覚にも言葉に詰まる。くっそ！

香取はあたしを睨んだまま頬に手をやり、「マジあり得ねえ」と
呟いた。

そして視線を真っ直ぐに、はるなちゃんに向けた。香取を見上げる
はるなちゃんの瞳が、一瞬、切なく揺らぐ。あたしは胸がチクリ、
とした。

そして彼はきっぱりと言った。

「はるな。俺が悪かった。でもお前の気持ちには答えられない。今
までは、お前が寄ってきてても」

目が、怖いくらいに冷たくなった。

そして彼は、低い声で言い放った。

「しかたねえか、って思っていた。どうでもよかったんだよ」

はるなちゃんが息を飲む。

香取は静かに続けた。

「でもそれじゃ、お互いマズイだろ？」

顔色の変わったはるなちゃんは、こっちが見ていても、正直辛い程だった。思わずもう一回、香取の頭をぶん殴ってやるうかと思っただよ。

彼女は唇を小さく結び、一呼吸置く。

そして香取を見上げると、絶える様な、だけど挑む様な表情で言った。

「……でも、これからは」

「責任持てねえよ」

その時、彼女の顔が悲しみで歪んだ。その後すぐに俯き、押し黙る。

その様子を見て、あたしは悟った。彼女が、香取の思いを、彼女の意味とは関係なく理解してしまった事を。

うつ。可哀想。いくらあたしに塗料をぶちまけても、これは可哀想。

これからあの子に上履き隠されても、やっぱりあの子が可哀想。あたしの持ち物取られても、やっぱりあの子が可哀想。サイトに書きこまれても。生卵ぶつけられても。やっぱりあの子が……

……んなワケないっ。それは無理っ。

その時、彼女が勢いよく顔を上げた。

「パパに言いつけてやるっ。そしたら礼なんか、イギリスに戻れないんだからっ。学校だって追い出されるんだからっ」

「伯父さんには報告済みだよ」

香取は無表情で言った。

「先の事は、俺が口出す事じゃないしな」

それを聞いた彼女は、本当に悔しそうな顔をした。だけどその瞳は、本物の悲しさでいっぱいだった。

そして黙って背を向けると、少し足早に去って行った。

あたしはその後ろ姿を見つめながら思ったの。

多分彼女は、香取が「どうでもいい」って思い続けていた事を、心の底では分かっていたんじゃないかな？ そんな感じがする。だ

って頭の良さそうな子だから。

……でもそれにしたって……

「……つめたいフリ方……」

散々甘い顔をしておいて、今更何よ？

あたしは私情を山ほど沢山、てんこ盛りに盛り込んで、限りなく非難がましい目つきと言いつき方をした。な。

なのに香取はあっさりと言った。

「言つたる？ 責任持てねえんだよ」

芝生の上に胡坐をかいて、彼はサツサと朝食を広げ始める。

「俺が相手することであいつが幸せになるんなら、別にどこまでも相手するけどさ。今は、俺が相手すればするほど、あいつはバランスを崩すだけだ」

そう言いながらサンドイッチを口に運ぶ香取を、あたしは立ったまま見下ろした。

何？ 今、何か難しい事を言わなかった？

あたしは眉間に皺が寄ってしまい、しばらく考えた後、言ってみた。

「……つまり、はるなちゃんの為、と……？」

「他に誰がいるんだ？」

彼はあたしを見上げず、ミルクティーを口にした。あ、それあたしの。

あたしは軽く溜息をついた。今のって、女の子を冷たく振って、相手の為だ」って言うヤツ？

分かるけどさ、ちょっと、いやかなりムカつくのよね。

「自分は、どうしたいのよ？」

イラッとしてあたしがそう訊いたら、一瞬、彼の飲む動きが止まった。

ウェーブの前髪に隠れて、表情が覗うかがい辛い。

「俺？ 俺は、俺が出来る範囲で、相手が求めるものを与えるだけ」

「……は？ どういう事？」

全く意味を理解出来ず、あたしは間抜けに聞き返した。

香取は再び、淡々とサンドイッチを食べ始めた。

「そうすれば、離れて行かないだろ」

「……え……」

「だからそれが出来ない連中は、最初から近づけない。そしたら逃げて行かないし」

彼の言った事がグルグルと頭を回り、あたしは唾然と立ち尽くす。今までの彼の台詞を全部繋げて、やっとその言葉の内容を掴み取った。

何て事。

「……それって、香取の人づきあい全般に、言える事なの？」
「は？」

「……つまり、面倒を見てあげられない人達とは、お友達にならない、って事？」

「そうなるの？ 知らね」

「お友達になつた人には、……相手の要求を常に飲むと？」

「はあ？ んなわけあるか。無理だろ、そんなの」

彼はあたしを見上げて「食わねえの？」と飲みかけのミルクティを掲げる。その時予鈴が鳴った。「バカ、鳴っちまったろ。責任もって食え」と言つて、それとコンビニ袋をあたしに押し付けると立ちあがり、歩き出した。

「早く来いよ」

あたしはそんな彼を、呆然と眺めていた。

この人、寂しいんだ。

「離れて行かない」様に、「逃げて行かない」様に、て、つまりはそういう事でしょ？

心の結びつきを求めるんじゃないで、自分から去らない人を求めている。そして相手の言いなりになれば、それが手に入ると思っている。だから相手の要求を飲めないとなると、遠ざける。自分から離れて行く前に。

置き去りにされるのが怖いから。

驚いた。だってそんな素振り、今まで微塵も見せてなかった。あまりにも俺様過ぎて。情が深い人だろうとは思っていたけど、まさかここまでとは。俺様キャラが、自分を守る鎧だったとは。

寂しい。人恋しい。置いてかないでくれ。今、そう言った。なのに目の前の彼は、いつも通りの様子。偉そうにかったるそうに廊下を歩いている。

……自分が言った事、分かっただけじゃないのかしら？

うん、分かっただけじゃないんだ。気付いてもいないんだ。自分が誰かを強烈に欲している事、自覚していないんだ。

あたしはついさっきの出来事を振り返った。彼がはるなちゃんを、最終的には受け入れなかった事。

・・・人を愛したいのに、心の垣根が高い人。そうかそれじゃあ、余計に寂しいよね・・・。

教室の中で楽しそうに、中森くんや山田くん達と話をする香取から、あたしは視線を外せなくなってしまった。

昼食休みなのです。・・・が。

「あー痛え。マジ痛え」

後ろの席の奴が、机に両足を乗つけて、態度悪くふんぞり返ってあたしにガンを飛ばしている。

彼の頬には、濡れたハンカチがあてがわれている。どんどん腫れて行く頬を見かねた唯が、用意したものの。

あたしは購買で買ったパンを、自分の席で、縮こまる様にして食べていた。うっいびられ過ぎてクリームパンが喉を通らないわつつもは三つはいけるのにつ。

香取の隣の机を陣取ってお弁当を食べ終わった中森くんが、こつちを見てクスクス笑いながら言った。

「二度も同じ女に殴られるなんて。お前実は、運動神経鈍いんじゃないかね？」

「つか何であいつに殴られなくちゃなんねーんだよ」

香取がイラついて言う。「ごめんってば。そんなに腫れるとは思ってもみなかったんだよ。確かにカツとなって手加減はしなかったけど、ほっぺたってそんなに手形通りに腫れるとは知らなかったんだってばあつ。」

あたしは益々縮こまって、二個目のパンの最後のかけらを口に入れた。

その時、香取のイライラマックス、怒りの声が背中に刺さった。

「あのさあ。俺ってお前の何なワケ？」

・・・な、何、その爆弾発言っつ。

あたしは一瞬固まってしまい、その拍子にパンを喉に詰まらせたのっ。

「うっ」

向かい合わせに座っていた唯が手を伸ばし、「ちよっと大丈夫？」
と言っつて背中をさすってくれた。

あたしがなんとか飲み込んだ時、彼女が小声で耳打ちしてきた。

「香取くんが従妹を振ったつて話、すごく有名。今日一日、彼女荒れてたつて」

・・・すごく有名つて、ちよっと・・・。

あの子、どんだけ荒れたのよ？ 怖すぎるじゃない。

お願い、あたしには手加減して。というより、香取に矛先向けて

？ 悪いのは香取だから。だよな？ だよな？

あたしはふうふう、と深い溜息をついた。

そして、唯を上目遣いで見た。

「通りで皆、あたしをチラチラと見るなあ、と」

「でしよう？ 香取くんと噂のカップルになっちゃってるよ？ 皆、真相を聞きたくてウズウズ」

「で、唯は？ あたしに何を聞きたいの？」

「真琴、何で最近予備校にも行かないの？ 行けない程、香取くんに弱みを握られてるの？」

今までで一番、応える事が難しい質問……。

あたしは机に突っ伏した。最近、この体勢が多くて可哀想なあたし。

唯は、あたしと香取が何らかの事情を抱えてつるんでいる事を、察している。

でもこの子は、あたしのプライベートを立ちいつて聞いた事が、一度も無い。

だからあたしと、友達をやれている。

そしてこの子は、いつも明るく柔らかかに笑っている。洞察力と思いやりに溢れている。

だからあたしの、親友になった。

唯にとっては数ある友人の一人だろうけど、あたしにとっては数少ない友達の一人なの。だから本当の事を言いたいの。

ちなみにヒトミはさ、親友とはちょっと違うんだよな。強いて言うなら、戦友？

あたしは机に顔をつけながら俯いて、小さく答えた。

「……あたしね、実は家庭の事情が複雑なの。ところが最近、そこに香取がぐいぐいと入り込んで「何だとおい」

目ざといならぬ耳ざとい香取のダメ出しが入る。
あたしは横目でジロツと後ろを睨んだ。

「ウソは言っていない」

「大きく違うだろ」

「それは聞き手の問題です」

「あ、ねえ、この間のあれ、どうなった？ 誰のものか分かった？」

急に唯が聞いてきた。あたし達二人に。

ギクツとなる。あれ、って、あれ、ね？

どうしよう。何て答えよう……。

「……あー……イマイチ。捜しているんだけど……」

あたしは答えにならない、怪しげな苦笑を浮かべた。唯が不思議そうに小首を傾げる。

すると香取が、そんな事をまるつきり無視した、俺様マイペースでしかもエラソーにあたしに言った。

「おい、帰り買い物付き合え」

何だ、その話題転換？

「……え？ あたしが？ てか何？ その誘い方」

あたしは体ごと後ろを向いてしまい、ますます香取を睨み上げた。
あのね、心の闇を抱えてるんだか年下なんだか知らないけどね、
そんな態度悪い理由になんかならないのよ。一度あたしが、し

っかりばっちり躑してやるっ！

決心も新たに立ち上がろうとすると、目の前の香取は机から脚を降ろし、グイッと身を乗り出してきた。

思わず引き気味になったあたしの腕を彼は掴むと、ニヤツと笑う。い、嫌な予感っ。

彼の唇が近づき、耳打ちされた。

「もっとまともなものを身につけろって言っただろ？ 今度はロシア柄かよ。捨てる、んなもん」

雰囲気のある小声の囁き。息が耳にかかる。彼の睫毛が、あたしの髪に触れる。

隣で見ていた唯が、顔を真っ赤にした。

あたしは違う意味で真っ赤になった。

「……………やっぱ見てんじゃないのよっ」

「ちなみにあの柄、サラファンって言うんだぞ」

「んなトリビアいらねえっ！」

「サイテーのセンス。まともな買えよ。付き合っただけでやる」

「余計なお世話ってんでしょっ」

「黙れよ。約束だろ」

「んな約束してないっ！」

おかげで唯の追及は免れたけど、あたしは本日何度目かの沸騰を

してしまった。

やっぱりあんた、しっかりあたしのスカート中見てるじゃないっ！
何が被害届出すよっつとぼけるのもいい加減にしろっ！

いやむしろもつとムカつくのは、あたしのパンツを見ても顔色一
つ変えない所だっつっ！

「お前達、ヒソヒソと何盛り上がってんの、ヤラシーな」
中森くんがニヤついてからかって来た時、

「おい香取」

クラスの男子がやってきた。

少し声を潜めて、だけど好奇心を見せながら彼に言う。

「お客さんだぞ」

あたし達が顔を上げると、教室の入り口にはるなちゃんが立っ
ていた。

噂の中心人物。クラスの視線が彼女に集中する。時々チラチラと
あたし達を見ながら。

香取は真顔になると、じっとはるなちゃんを見つめた。彼女は俯
いている。

彼はふつと息を吐くと、無言で立ち上がって入口へ行った。

そして彼女を促す様に、廊下へ出ていった。

唯が苦笑いをした。

「香取くん、大変そう」

「気が強そうだもんな、あの女。しつこい相手を切るのは疲れるぜ

? 山田はどこ行ったんだよ」

中森くんも苦笑いを浮かべながら、お弁当を片付けていた。親友の山田くんと一緒に、香取の窮状を憂いてやりたいのかもしれない。

午後の授業が始まるギリギリの時間になって、香取が席に戻ってきた。

眉根を寄せて、唇を小さく結び、険しい表情を浮かべている。あたしに気付くと、少し溜息をついた。

「悪い。俺、放課後ちよつと・・・」

「ん。いいよ、一人で帰るから」

「それはダメだ」

間髪入れずに、否定をされた。

「待ってるよ、ここで」

あたしは唯の手前、笑って茶化した。

「もー、束縛強いなあ。女の子に嫌われるよ？ なんつって」

「すぐ話終えるから。5分くらいで」

「そんな簡単な付き合いじゃないでしょ、あなた達」

あたしはつい、声を荒げてしまった。5分で終わる筈無いじゃない。

唯や中森くんの視線に気付いて、あたしは慌てて取り繕った。

「あたし達は付き合っていないって、ハッキリ言ってあげれば？
今だけの事情だって」

「お前には関係ない」

香取に冷たく言われる。

あたしはドキツとして、そして恥ずかしくなった。だって確かに、そんな事あたしには関係無い。

「……わかりましたよ。待ってます。……しゅしゅと」
「ああ。すぐ終える」

香取は素っ気なく言うと、椅子に座って授業の準備を始めた。
あたしは何だか悔しい気持ちで前を向く。
唯が眉根を寄せていた。

「……なんか、本当に複雑そうね……」
「……ホント、複雑なの」

先生が入ってくる。

あたしは唯に、力無く笑って見せた。

「唯には話せたらいいんだけど」
「気にしないで」

唯はニツコリと微笑んだ。

「あたし、そんなの全然関係なく、真琴が好きだから」
「……ああつ。あたしも愛してる唯ちゃんっ」
「席につけー」

あたし達の抱擁を、先生が白い目で見て言ったけど気にしない。

友情を温めあっているのよ邪魔しないで。

あれ？ 唯、その迷惑顔は何？

香取は授業が終わると、帰り支度もせずに出て行った。

あたしは待っている間、勉強をする事にした。地理の暗記用問題集を取りだそうとして・・・あれ、無い。

手帳よりちよつと大きいぐらいの、小型で持ち運び用の問題集。おかしいな、今朝入れたと思ったのに。車の中で勉強しようと思つてさ。結局香取と一緒に登校したから、出来なかつたけど。

・・・そつか。ひよつとして、あそこに落としているかも。

あたしは急いで、例のフェンス前に足を運んだ。

そしてそこで、見なくてもいいものを、見てしまった。

「お願い、礼」

「・・・はるな」

「お願いだから・・・」

はるなちゃんが、香取にしがみつくように抱きついていて。涙を流している。

香取は、瞳を伏せて、彼女の頭上を見つめていた。

別に香取は、彼女を抱き返している訳でも、キスをしている訳で

も、無い。

ただ、彼女をつき返さないだけ。

ただどあたしは、何故かとてもショックだった。
と言うよりも、物凄くイラついてきた。

多分、これはきつと、あたしのお気に入りの場所を侵されたからだ。この人達は、前もここでキスをしていたもの。いい加減にしてよ。

「……………ここでやらないでよ……………」
というか、連れて来ないでよ……………。

あたしは地理を諦めて、教室に戻った。
席に着くと、黙って数学を取りだした。あたしには関係無い。関係無いんだ。

気付くと、一時間。教室には殆んど人が残っていない。唯ももちろん、帰っている。

……………何が5分よ。バーカ。

あたしは集中力が途端に切れた。まったくやる気が出てこない。
しばらくボーっとした後、ふと気付いた。

変な匂いがする。
僅かだけど、匂わない？

「宮地さん」

呼びかけられて振り向くと、クラスメイトがいた。

「山田くん」

山田くんが、いつも通り爽やかにニコニコ微笑みながら、座っていた。
柔らかく聞いてくる。

「もう終わり？」

「あれ、みんなは？」

「え？ みんな帰っちゃったよ。だってもうすぐ教室、閉まるから
もうそんな時間？」

「うん。早いよね」

時計を見ると、確かに5時を過ぎていた。校舎を閉める時間だ。
あたしは急に、胸騒ぎがして来た。何で香取は戻らないんだろう？
そんなあたしの様子を特に気に留める事も無く、山田くんが言った。

「ねえ、数学得意だよね？」

「うん？ まあ」

「教えてよ。どうしても分からない所があつて」

そういつて彼は、自分の隣の椅子を引く。ここに座つて、と言つ事らしい。

「これ」

あたしは促されるままにそこに座り、彼の問題集を覗き込んだ。

「これは・・・三角関数を使って解くといいのよ」

「何でわかるの？」

「何でつて・・・公式を覚えてるから、何度か解いていけば・・・」

そこで言葉が途切れてしまった。何か山田くんの様子がおかしい。顔があたしに異常に近い。思わず横目で覗くと、彼は気のせいか、焦点の定まらないような目をしていた。なのに笑つてる。

580

山田くん、酔っぱらつてる？

そんなバカな。ここ学校だし。

あたしは驚いて、体ごと山田くんに向き直つた。

彼は微笑みながらなんだか気持良さそうに、益々あたしに接近してくる。

「ちょ・・・どうかした？」

「んー？ どうもしないよ？」

「だって・・・ちよつと・・・」

あたしは後ずさって、ついに椅子から立ち上がった。そしたら彼まで立ち上がったの！

うそっ。完璧、狙われてる?? 何でっ?

彼の異常ともいえるふわふわとした微笑みに、あたしはあり得ない事が頭をよぎった。まさかイツト? そんなはずは無い。だってイツト特有の気配と言っか、恐怖感は無いもの。だけどそれなら、さっきから薄く鼻にまとわりつくこの匂いは何?

そして彼のこの態度。

「山田くん?」

すると彼は、いきなりあたしの腕を掴み抱き寄せ、信じられない事にあたしの首筋に顔を埋めたのよっ。

「宮地さんって、いい匂いがある・・・」

「やだちよっをやめてよっ」

つき返そうとするのに、強い力で両腕を掴まれて動けない。

「香取なんかやめなよ。僕の方が、ずっといいよ。絶対君を、優しくしてあげる・・・」

「山田くんってばっどうしたのっ?」

「大丈夫」

優しく言つと彼は顔を上げて、うつろな目つきであたしを見つめて、うっとり微笑んだ。

「君が好きだから」

途端に強く押される。後ろの机に倒れ込み、そのまま床に押し倒された。

あたしはあまりの展開に、驚愕して、正直体がついていけなかった。

ゆるり、と彼は笑い、なおもあたしを見つめる。両腕を固定され、下半身は密着され、あたしは本格的に身動きが取れない。

「冗談でしょ？ 一体何がおこってるの？」

あたしは彼の、幸せそうな笑顔を見ながら、頭の中が真っ白になっていた。

どうしようどうしよう。何かが狂ってる。これはいつもの山田くんじゃない。こんな事はあってはならない。

あたしは彼の瞳を見つめた。イットの特徴であるオレンジ色の光が、無い。それに気配といい、彼がイットとは思えない。けどこの目は、正気とも思えない。欲情して狂ってる、という意味ではなく、いやあたしに欲情出来るなら話は別だけど、それは置いといて、多分今の彼は、まともな人間とも思えない。

「大好きだから」

あたしの頬や顎、首筋に唇を這わせながら、山田くんが囁いてくる。

急に香取の事を思い出した。これを見たら、彼はどうするだろう？
そうよあいつ、なんでまだ戻って来ないの？

一気に不安が押し寄せてきた。おかしい。この事態はおかしい。何か大変な事が起こっている。早く香取を見つけなきゃ。なんとかしなくちゃ。けどどうやって？

あれしか、ないでしょ？

あたしはかなり迷った。山田くんにがっちり押さえられてるし、

ここはやっぱりテレポーションしかないと思う。だけど、彼の目の前でやるの？ やったら最後、あたし、この学校にいられなくなるのではないかしら？

うつん、それどころか、もう日常生活を送れなくなるかもしれない。彼を通じて、みんなにバレて。

そこであたしは思い直す。

だけどひよつとして、目の前の彼は既に異常で、つまりはあたしが消えていなくなってもなんとか誤魔化せたりするのかな？

選択肢は一つしかない。こうしている間にも嫌な予感は募っていく。山田くんは、あたしの頬に顔を寄せている。足の上に乗られて、痛い。あたしは自分に言い聞かせていた。

そうよもし彼が正気でも、たった一人の目撃者。それならなんとか誤魔化せつ。

正直、山田くんにキスされるかどうかなんて、どうでもよかった。あたしは思ったより貞操観念の薄い女なのかもしれない。こんな貧相な胸を触られて相手の気がそれるなら、お安いもんよ、て本当に触ってる？ わあ、初体験。

問題はこの事態だ。何が起こってるのか確認しないと、よつちやん達を呼ぶ事すら出来ない。

危険な何かが迫っていると思えるんだけど、実は単なるあたしの勘違いで、まさかびっくり本当に山田くんが欲情してた、なんて事になったら、マジ、笑えない。

あたしは息を吐いた。

ごめん、香取。

訓練の結果、テレポーションの有無はコントロール出来るようになった、と思う。ただ、着地点まではコントロール出来ない。つまり、あなたのどこに落ちるか、分からない。

学校はもう既に人がまばら。今彼の所に飛んでも、はるなちゃん以外に見られる可能性は、低いよね？

あたしはゴクつと生唾を飲み込んだ。その間に、山田くんの唇があたしの口に近づいてきた。

き、緊張するよ。今から自分の意思で飛ぶとなると、ドキドキしてくる。飛んだ先の場所の状況が、全然分からないんだもん、勇気要るよ。

ああ、無邪気に突発的に無計画に飛んじゃっていた日々が懐かしい……なんて危ない橋を渡っていたんだあたしってば。

意を決して、あたしは目を閉じた。

息を吐いて、止めて、気を全て体内に落とす。例えるなら、胃を

下まで下げて行く感じ。

真琴、行きますっ！

「！」

次の瞬間、あたしはまともに地面に尻もちをついた。
「痛っ！」

途端に誰かに突き飛ばされた様だった。再び体をぶって、頭が混乱する。懸命に落ち着いてみると、そこは例のフェンス前だった。背中に何かが当たる。見ると香取が倒れていた。

「香取っ？」

「やっちゃった？ やっちゃった？ 突然彼の上に飛び乗って、彼、伸びちゃった？」

「香取、香取っ。……香取？」

あたしは息を飲んだ。口から血が出ている。よく見ると、顔が痛々しい程腫れている。

慌てて飛び下がると、彼の全身が見えた。服を着ているから怪我の様子は分からないけれど、かなり土で汚れている。

視界の端に、倒れている別の人を見つけた。心臓が飛び跳ねる。女の子？

立ちすくんだまま凝視して、その子のはるなちゃんだと気付いた。動かない。

あたしは自分の血の気が引いていくのがわかった。

二人が、地面に倒れてる。

何が、どうなっているの？

その時、この場所がどんな匂いに囲まれているのか、やっと気付いた。遅すぎる。

「ほら来た」

木の陰から男の声がした。

あたしは心臓が止まる程、恐怖で凍りついた。この声……！

そこにいたのは、村本だった。

相変わらず線が細く、眼鏡をかけているけど、以前に見た時の様なキチンとした身だしなみをしていない。

Tシャツによれよれのズボン、髪もボサボサだった。

だけど、そこから放出されるイット特有の殺気が、一気に上昇し

た。

ついに来たっ。やっぱり来たっ。

いつかこの日が来るって分かっていたのに動揺したあたしは、月並みな台詞を叫んでしまった。

「何であんたがここにいるのよっ」

「何でって、君に会いに来たに決まってるだろ？」

「どうやって？ というよりこれは何っ？」

倒れている香取とはるなちゃんを指さす。

その時、村本の後ろに男子生徒が二人、立っているのが目に入った。何故かあたしの方を眺めている。

「フフ」

村本が口の端を歪めた。その後ろで、彼らがゆらゆらと揺れている。

あたしは呆然と、その男子生徒達を指して言った。

「・・・何、この人達？」

「僕はね、力を得たんだ」

うつとりと話すその表情は、さっきの山田くんの様子を彷彿とさせた。

「気を吸った人間の記憶を消すだけじゃなく、操れてしまうんだ。」

すごいだろ。グリフィンなんてもついらない」

「・・・何ですって？」

「彼女が教えてくれたんだ。彼女が分け与えてくれた。だから僕は、君に会いに来た」

村本の瞳が、妖しく揺れる。

ヤバいつ。あたしは瞬間的に目を反らした。目を見ちゃダメってよっちゃんが言ってたっ。

そこに彼の気味の悪い声が続いた。

「君を、味わう為に」

あたしは彼の目を見ない様に注意をしながら、香取とはるなちやんを再び見た。パニックになりそうな頭を、懸命に沈めようと頑張る。なんとか逃げなきゃ。でもどうやって？ あのと二人を連れて、どうやって?!

あたしと村本が対峙している少し脇に、二人は、ニメートルくらい間を開けて倒れている。香取は沢山怪我をしている様だけど、はるなちやんに目立った傷は無い。

・・・そして二人とも、先程からピクリとも動かないっ。

「今日は僕を見てくれないの？」

「この人達に何したのよっ!」

興奮しすぎて声が上がずり、あたしは叫びながら涙ぐんでしまった。小刻みに震えるあたしの頭上に、彼の声が降ってきた。

「将射んと欲すれば、先ず馬を射よ」

言われた意味が分かんなくて、あたしは目を見開いて固まる。何？

「彼女が教えてくれたんだよ。彼が君の馬だと。君を手に入れるには、先ず、彼から片付けなくてはならない」

「彼女」が誰の事を言っているのかは分からないけど。あたしは自分の心臓の音が、耳鳴りの様にガンガン聞こえていた。息が出来ない。喉が詰まる。村本の言葉を、頭の中で反芻した。

「……つまり、香取達は、……あたしを狙うために、こんな目にあわされた……」

「……何したの？」

俯いたまま固まって聞いたら、村本の返答が短く響いた。

「吸ったよ」

本当に、息が止まった。
耳を疑った。

「てこずった。3人がかりで殴つてのして、やっとの思いでね」

笑みが含まれる言い方。

香取が、吸われた。

「……何て事……」

あたしは体中の血が逆流するのを感じた。吐きそうなくらいに、
怒りと憎しみがこみ上げてくる。

その一方で、激しい悲しみが体を喰い尽くしていった。
何も考えられない。

怒りに我を失ったあたしは、ついに顔を上げて村本を睨んだ。

Make contact 3

「彼女を先にやったらさ。彼、キレちゃってさ。激しく抵抗してたよ、君も見れたらよかったのに」

あたしは躊躇いもなく、彼の顔を睨み続けた。涙が滲んで、頭も視界も、何もかもがぼやけてハッキリしない。

怒りに支配されていく。

許せない。

「そんなに気にしないで。二人とも、そんなに喰ってない。だって君に会えるんだもの」

村本はひっひつとまるで引き笑いの様に、喉を鳴らした。

「お楽しみは、最後に取っておかなくちゃ。お腹一杯はもつたいない」

あたしは、全ての力が沸騰しているような感覚に襲われた。体中の毛が逆立つようだった。

見なくたって、分かる。

香取が彼らを殴っている姿。

なのに3人がかりで、ぼこぼこにやられる。はるなちゃんも既に

倒れている。村本が香取に襲いかかる。

あたしは涙がついに零れた。

ひどい。ひどい。こんなの酷過ぎる。

目の前ではるなちゃんが吸われて、香取はどんなに胸が裂けただろつ。

ずっと大事にして来た、大事な従妹なのに！！ 彼の心の支えなのに！！

うつろな目つきの男子生徒が二人、あたしに勢いよく飛びかかってきた。

あたしは膝を曲げると、地面を蹴った。彼らを飛び越す。

村本の目の前に着地した。

同時に、彼の顔面の中心に、拳を打った。

彼の鼻が折れる感触。村本は文字通り吹っ飛んだ。

「あゝあー！！」

お兄に昔教わった。急所は股間と鼻だ、そこを狙え。

鼻を押さえてうずくまる彼の横っ面を、靴のつま先で思いっきり蹴り上げた。

「ぐふっ」

村本が再び吹っ飛ぶ。口から、血が噴き出した。

まだ足りない。

焦りと怒りに満ちた彼の瞳がオレンジに輝いたけど、あたしは全く恐怖を抱かなかった。

再び飛びかかろうと身構えた時、村本が叫んだ。

「あいつらを殺すぞ！！」

ビクツとして、あたしは動きを止めてしまった。

振り返ると、生徒が一人ずつ、香取とはるなちゃんに付いている。

倒れている香取の首には、男子生徒の靴底があてがわられていた。いつでも、喉を踏み潰せるように。

「これ以上少しでも動いてみる。あいつが死ぬぞ」

村本が痛みを堪えるように、掠れた声を絞り出して言う。

あたしの奥歯がギリッと鳴った。

なんて卑怯な奴。生徒を操って、自分は手を汚さない。何も分からない彼らに、罪を犯させている。

あたしは息を小刻みに吸い、どうにか自分を落ちつけようとした。

ここには、守るべき人間が4人もいる。あたし一人じゃ無理だ。

お願い、香取、はるなちゃん。生きていて！

その時、あたしは水島さんから貰ったボタンを思い出した。

「畜生、くそつたね。やっぱサイは違う。手ごたえが違う。ざけん

な。やっとだ」

村本が訳の分からない事を口走っている。
あたしはポケットの中のボタンを押した。

「動くなよ？　じつとしてるよ？　・・・いい子にする」

彼の瞳がオレンジ色に光っている。けれども不思議な事に、その力は今のあたしには効いていない。

今度はテレポで、香取の上に乗っている生徒を蹴り飛ばそうとした。

しかし一歩遅く、村本に勢いよく顎を掴まれた。

上向きにされる。

目を覗きこまれた。

流石に少し、クラッと来た。しまった、やられた。

村本が、満足げに微笑んだ。

「ほらちゃんと。僕を見てよ」

「・・・まさか、あんたが山田くんも？」

「山田くん？　あ、君を襲った子？　うん、そうそう。僕が頼んだ。君に惚れてるよ？」

彼は努めて余裕を見せようと笑っているが、怒りと興奮が滲み出ている。

あたしは目が反らせなかったが、まだ自分を失ってはいなかった。

この金縛り、何とか解かなきゃ。

「この子達だつて彼の事が嫌いだし。そうやって本人の気持ちも根底に無いと、簡単には動かないんだ。特に僕みたいな初心者は」

あたしを見ながら、あたしを見ていない村本の目。

コイツ自信、まるで何かに操られているかのように、ゆらゆらしている事にあたしは気付いた。

「だけど大丈夫。これから沢山喰つてつて、きっと彼女みたいになつて見せる。あの人は、生きた女神だ。ただのがらくたグリフィンなんて、もう用は無い」

そう言つと、彼は顔を傾けてあたしに近づけた。

「僕は彼女に釣り合う男になつてみせる。その為にも、君は欠かせないんだ」

目の前で、彼の舌が唇を舐めた。

「ああ、美味しそう」

その時、彼の背後が揺れて見えた。

あたしは目を見開く。

女の人が、立っていた。

物凄く、綺麗な人。

美しい瞳。濡れた唇。豊かな黒髪。真っ赤なドルマリンスリーブ。妖しくて、艶っぽくて、冷たい人。

目眩がするくらい、妖艶に微笑んだ。

「この娘殺してって、誰が頼んだ？」

「・・・ああ・・・」

「誰も、でしょ？」

彼女の微笑みに、村本が陶醉して見つめる。

そして、あたしの目の前で、彼女は腕を振り下ろした。

村本の首に、綺麗に通った。

彼はサラサラと崩れ消えた。前に見た時と同じ。血飛沫も悲鳴も上げず。

彼女の手には、ナイフが逆手で握られていた。

「大丈夫？」

彼女があたしに微笑む。

あたしは呆然としていた。

「怖かったでしょう？ でももう平気よ。だから安心して？・・・
あの人達は、もう起きない」

彼女の瞳が細められる。あの人達、と聞いて、わからないままにも香取達の方を振り返った。

そこには、あの男子生徒達が二人、地面に倒れていた。

あたしは重ねて驚く。何が起こったのかわからなかった。

「ふふつ。いい子にしてれば、大丈夫だから。もう心配しないの」

彼女に声をかけられて、思わず再び彼女に顔を向ける。
彼女は優しく笑った。

「あなた、頑張らなくていいの」

沙希。

あたしは呆然と彼女を見つめていた。

たった一回しか、それも一瞬しか見た事の無い人だけど、直感的に分かっていた。

この独特の雰囲気。凄まじい美貌と・・・妖気。

よっちゃんの元カノ。楽しみで人を喰うイット。つきあった男性は皆殺し。よっちゃん以外は。

そして多分、よっちゃんの『狂気』の部分の、鍵を握る人。そんな事、言われなくたってわかる。

彼女は悠然と微笑んだ。引きこまれるような笑顔だった。

「ふふ。ところで悪いのだけれど、ちょっと教えてくれる？ 獅子鷲って今、誰が持っているのかしら？」

「・・・獅子鷲・・・」

「そう。青くて、これくらいの大きさ。翼を持った、ライオンのオナメント。見た事、あるでしょ？」

「あなたは・・・」

「私？ 私はねえ、ある依頼であの獅子鷲を捜しているの。ねえ、知っているんでしょう？ どこにあるか」

優しく、甘く、溶けるように囁いてくる。あたしを包むように笑いかける。

「教えてくれない？　すごく困ってるの」

あたしは彼女を見つめたまま、ゴクつと生唾を飲んでしまった。
彼女は嬉しそうに言った。

「あなたは知ってる筈よ」

恐怖感が無い。目の前で村本を消した人だと言うのに、そんな事をたった今成し遂げた様な気配が、微塵も無い。

だけどあたしは、鼻に付く様な独特の匂いを感じ取った。彼女の甘い香りに乗って、その奥底に薄く漂う香り。

それに気付いて、あたしは我に返った。
そして気持ちを落ち着けて言った。

「ここからあたし達を帰してくれないと、何も喋りません」

すると彼女の口角が上がった。

「あなたが言わないと、あの坊やは助からない」

僅かな間を置き、彼女が香取の事を言っているのだと分かってあたしはギクツとした。

そんなあたしを彼女が嬉しそうに見つめる。

「大事なお友達なんでしょう？　早くしないと、手遅れになるわよ」
「手遅れって……」

「助けたいんでしょう？　急がないと、彼の内臓、溶けちゃうから」

その衝撃的な言葉に、あたしは心臓が止まるかと思った。

目を見開くあたしに笑い、彼女ははるなちゃんに視線を投げた。

「なんならついでに、あの彼女をこっちで引き受けてもいいわ」

「・・・え？」

「二度と貴方達を煩わせない様に。ね？　いいようにしてあげる」

花が咲くようにフフと笑う。優しく、柔らかに見つめられる。艶やかな唇からこぼれる、恐ろしい言葉。

「彼を手に入れて、彼女はいなくなる。いいと思わない？」

「・・・そんな事・・・ダメ、させない」

「どうして？　いいじゃない」

「彼女にこれ以上手を出さないで。あの子は絶対に守る」

「・・・ああ、成程」

彼女は何か気付いたように、頷きながらあたしを見下ろした。

「彼の一番大切なものは、あなたにとっても一番大切。・・・泣かせるわあ。なんて純粹」

当り前じゃない。はるなちゃんが死んだら、香取は壊れる。
あたしは彼女を睨み上げると、グツと心を決めた。お腹に力を入れた。

「帰して！ あたし達を、今すぐここから行かせて！ 全員、あの人も開放して！」

「……んー。駄々をこねる子って嫌い。あなたに指揮権はないの。出来るのは、選択する事だけ」

眉を寄せた彼女の瞳が、一瞬鋭く光った。残忍な色が現れる。ギクツとなった。

「獅子鷲の場所を話して、自分と彼を救うか。物事を正しく判断できなくて、死んでいく彼の後を追うのか」

ドキン、と胸打つ大きな衝撃。一瞬にして空気を全て奪われてしまったかのように、呼吸が出来ない。

その時、声がした。

「勝手に俺を殺すな」

あたしと彼女が同時に振り向く。香取が、肩で息をしながら立っていた。

あたしは再び胸に衝撃を受けた。だけど今度のそれは、さっきは

全く無かった興奮が混じっている。

香取が鋭い目であたしを見た次の瞬間、今まで香取の側に倒れていた男子生徒が跳ね上がる様に立ち上がった。目が文字通り白目を向いている。怖い。弾かれた様に香取に飛びかかった。

はるなちゃんの側にいるもう一人の男子生徒も同じ行動をする。

その彼らの顔面を香取が、凄まじい勢いで殴りつけた。

あたしは思わず悲鳴を上げた。

あたしの目の前で、彼女が眉根を寄せた。

「嫌だわ。頼りにならない男って、本当に嫌。役立たずどころか足手まといなのよね。生きているだけムダ」

「逃げろっ！ 人を呼べっ！ このやろっ！」

「役立たずって、坊やの事じゃないわよ。あたしの周りがみんなそうなの」

「香取っ」

香取は既に一人を地面に倒している。でも随分辛そうで今にも倒れそう。

あたしは香取を襲っている生徒に飛びかかったけど、片手でほったを激しく殴られ、飛ばされてしまった。

「宮地っ！」

声と共に香取のパンチが彼の顔面にまともに入る。続いてみぞおちへのひざ蹴り。

体が降り曲がった所に、後頭部への激しい攻撃。

彼はそのまま、うずくまる様に動かなくなってしまった。

けれども香取も、その彼の上に折り重なる様につずくまっていた。

口を大きく開け、今にも何かを吐きそうな表情。

「・・・うっわ・・・」

自分でも体の状態をコントロールできないかの様に、喘いでいる。

「大丈夫っ?!」

あたしは立ち上がって彼に駆け寄った。

「坊や、あんまり動かない方がいいわよ。吸われた直後に激しくすると、本当に溶けちゃうわよ」

彼女の声が背後からかかる。懸命に聞こえないフリをした。

香取が顔を上げて、不安と心配が激しく入り混じったように瞳を潤ませて、あたしを覗き込んだ。

「大丈夫か、お前」

「香取は大丈夫なのっ？ 吸われたのっ？」

「・・・ん？ 未遂。お前、来たから・・・っ」

彼は再び俯き喘ぎだす。今にも何かを吐きだしそうで本当に苦しそう。これはイットに吸われた時の症状ではないだろうか？ だつてあたしはそうだった。

けれどあたしは、香取が動いて話せる姿を見ただけで、正直、安

堵してしまった。正気を保っているように見えるもの。

でもそれだけでは、香取には足りない。

「はるなちゃんは？ ホントに吸われたの？」

「・・・そりゃ、ハツタリだ・・・」

薄い唾液に混じって、ついに僅かに吐いた。

そして一息つくくと、香取は涙目になりながらあたしを横目で見上げて、口をぬぐった。

「お前が来るまではあいつはやられてない。気絶してるだけ」

初めて、酸素が吸えた。

あたしの肺に、空気が取り込まれた。

「・・・よかった・・・っ」

あたしは涙と血で汚れている、香取の頭をかき抱いた。思いつきり、思いつきり、抱きしめた。

よかった神様。二人とも大丈夫。本当によかった。よかった。

「・・・」

香取のウェーブの髪が、あたしの胸に埋まる。彼は一瞬、動きを止めた。

あたしはその頭の上に顔を埋めた。香取の香りが入ってくる。よかったよおおお。

「かわいい。二人とも」

彼女・・沙希・・の弾んだ声。あたし達は咄嗟に顔を上げた。あたしの腕の中で、香取がギリッと彼女を睨みつけるのがわかる。思わずあたしは、香取の服を掴み握った。あたしが彼を抱きしめている筈だったのに、まるで彼に縋りつくように彼のシャツをギュッと掴んだ。

沙希が微笑みながらあたし達に言った。

「坊やくらの年の男って、本当にスキ。目が堪らないのよね。独特の危うさがあってゾクゾクするわ」

「・・・」

「ねえあなた、あたしの物にならない？ 大事にしてあげる」

香取は無言。あたしは絶句した。

本当に柔らかい笑顔をしていて、それが怖すぎる。あの人のものになるってどういう事？ 話に聞いたみたいに、心まで吸い取られて食べられちゃうの？

香取があたしの腕に手をかけた。そして彼女を睨みながら、低い声で言った。

「お前、逃げる」

「え？」

「はるな連れて。出来るか？」

「出来ない」

きつぱりと即答をしたので、香取があたしを見上げた。

あたしは彼を胸から離して、その顔を見た。顔があちこち、見るのが辛い程腫れている。

「そんなの出来ない。香取がはるなちゃん連れてって」

「お前じゃあいつは無理だろ。やられる」

「だってあの人ナイフ持っている。今の香取じゃダメだよ。あたしこれでも村本をのしたんだから。あたしがやる。香取は逃げて」

強がりを言っている訳ではない。あたしは本気でそう思っていた。今のあたしは何でも出来る気がする。イトトの側にいるとサイの気が増幅される、と言うのは本当だった。

香取は腕を伸ばして、あたしの頬を片手で包んだ。殴られた頬を慈しむようにそっと撫でる。親指が、優しく滑る。

その親指が、唇をなぞる様に動いた。軽く開いたあたしの口から、歯を掠めた。

彼の瞳が細められ、こんな状況なのに、本当に魅惑的な笑顔になった。

「・・・わりい。それ無理」

そして彼は立ち上がった。真っ直ぐに彼女を見据える、長い睫毛と気の強い眉。綺麗な横顔がウェーブの前髪に縁取られているのを、あたしは見とれたままだった。

「俺がその獅子驚つての在り処を教えてやる。代わりにこいつらは離せ。全員」

「・・・貴方、知ってるの？」

「ああ。そしてあなたのその情報、どこからどうやって手に入れたものか言え。それからだ」

「・・・素敵。こつちに来なさい」

「・・・」

「・・・本当に効かないのね。その体質も魅力的。益々欲しいわあ」

「早くこいつら逃がせよ」

「じゃあこつちに来てよ。そうしないと、獅子驚なんて諦めてあの子、食べちゃうわよ？」

「・・・」

「香取っ？」

あたしは驚愕して叫んでしまった。だって香取が彼女に近づいていつてるっ！

彼女の瞳は既にオレンジ色だけど、それが香取に効かない事はわかってる。あたしはそのオレンジをまともには見れず、さつきから視線を落ち着かなくちらつかせているだけ。

だけど香取は自分の意思で近づいていつてるの？ バカな事しな

いでよっあの人、人殺しだよっ？

自分の方に近づいてくる香取を眺めて、彼女は神々しいくらいにゆったりと微笑んだ。

「物わかりがいいのね。それでいいのよ」

そして片手を伸ばし、香取の後頭部にまわした。別の手には、ナイフ。

あたしは彼の後ろ姿しか見えない。ヤバイ、なんとかしなくちゃ。飛んで、あの女を殴ってやる。

「あなたで手を打つのもいいかも」

そういうと、彼女はなんと、香取に口づけをした。ゆっくりと、舐めるように。

あたしは文字通り、心臓が止まった。

香取は微動だにしなかった。

「あれは、あなたの身近な人が持っていたけど手放したの。何も知らない子が、言われるままに彼女の鞆に入れた。その子がうっかり、私に口を滑らせた」

香取の後ろからでは、二人の頭は重なっているようにしか見えな
い。彼女は唇を重ねながら喋っているのだろうか？ どうして？
香取はどうして動かないんだろう？

「さ、それで物はどこ？ 言わないと彼女達、殺しちゃうわよ？」

頭が沸騰して、自分がこれからどうするなんて考える暇が無かつ
た。

気付いたら彼女の脇にテレポーションをしていた。たった数十
歩の距離なのに。

「え？」

あたしに気付いた彼女が、度肝を抜かれた様に一瞬固まる。そう、
隙が出来た。

女の人の顔を、しかも拳で殴るなんて初めての経験。

彼女はあたしに殴られて横転した。

「逃げてっ」

立っている香取をグイッと引つ張る。

彼女から解放された香取は、あたしを凝視していた。あたしは咄
嗟に、彼のほつぺたをバチバチと叩いた。

「香取、逃げれるっ？」

「お前、」

「ほらね言ったでしょ？ あたしに任せて、とにかく逃げてっ」

よかった正気だ。焦った目の色をしている。

彼があたしのテレポを目の当たりにしたのは、多分二度目だった。ひよっとして引いちゃっているのかもしれないけど、そんな事を今は気にしてられない。

彼を引つ張つて駆け出そうとした。

その時、あたし達は何か吹き飛ばされた。背中に激しい衝撃を受けた。

「あっ」

あたしと香取は別々の方向に転がった。ところが地面に転がったあたしは、再び衝撃を受けて、今度は木の幹に体を激しくぶつけた。

痛すぎて、言葉も出ない。息も吸えない。

なのに再び見えない力に体を持ち上げられて、今度は隣の木にぶつけられた。

頭に、胸に、背中に、体中に激痛が走る。薄れそうな意識の中で考えた。

この人、強いサイコキネセスを持っているんだ……。

「……あなた、恵美子の娘？」

遠くで彼女の声が聞こえる。

「空間を操れるなんて。なんて素敵。欲しいわ、私に頂戴」

足音が近づく。誰かの手が、あたしの顔に触れる。

「全部全部、私に頂戴」

黒い影が、あたしに近づく。

「やめっ」

香取の声が聞こえた気がした。

その途端、目の前の影が消えた。あたしの視界を、何かが横切る。続けざまに、地面を擦る音や風を切る音、何かが激しく動く音や爆発音までが、立て続けに聞こえた。爆発音？

あたしの頭はまだクラクラして、状況を把握できない。
なんとなく口の中に血の味がする。

「大丈夫かつ！ 宮地っ！ おいつー！」

香取に両肩を掴まれ、あたしは徐々に目の焦点を合わせることが出来た。

「・・・ほんと、いい男になったわね」

再び遠くから、彼女の声が聞こえてくる。誰に言っているんだろう？

あたしは目の前の香取を、ようやく見る事が出来た。

「・・・あ、・・・あ、あれ・・・」

「大丈夫か？ わかるか？ どこが痛む？」

「・・・香取・・・」

焦っている彼を認識して、視線をゆつくりと動かすと、視界の向こうに彼女と、そしてよっちゃんと水島さんが見えた。

彼女は彼ら二人に挟まれている。お互いの距離は3メートルくらい。二人はあの日本刀を構えている。そして彼女は、肩から背中にかけて大きな切り傷があった。生々しく肉が裂けて血が流れていて、ああ、イットの血は赤いんだな、なんて思った。

あの切り傷をつけたのは、よっちゃんだ。日本刀が汚れているもの。

彼女は深手を負っているのに、身惚れる程美しい姿勢で立っている。心の片隅で感心してしまった。

ただ、彼女の顔は痛みで歪んでいた。

「オールスター集合って訳ね」

「なんでお前が獅子鷲を狙っている？」

「・・・仕事だもの。理由なんて知らないわ」

「嘘だ。吐け。何でだよ」

鋭い眼光で、まるで視線で彼女を縛り付けて逃がさまいとするように、よっちゃんが彼女を睨む。そんな彼を、表情が読みづらい瞳の色で、目を細めて見つめる彼女。

この人達の過去は、どんな感じだったのだろうか？ お互いに・・
どんな感情が渦巻いているのだろうか？

彼女とよっちゃんのやり取りを、あたしは不思議な気持ちで眺めていた。

「あなたに私は殺せない」

「そう思うか？」

間髪を入れずによっちゃんが言う。

その彼の言葉に反応した様に、反対側の水島さんがジリッと間を詰めた。

それを彼女が横目で見る。そしてチラッとあたし達をも見た。

あたしの肩を掴む香取の手に力が入る。あたしも彼女と目が合い、頭の中が一気に覚醒した。同時にさっきの激しい怒りが蘇る。よくも香取を吸おうとしたわねっ。

彼女は皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「でも他の子達は違うみたい」

その時、再び衝撃が来た。

あたしは思わず身構えたけど、倒れたのは水島さんだった。まるでスライディングをしたかのように地面に倒れ込む。だけどよっち

やんは違っていた。

立て続けに衝撃が来る。それをよっちゃんがかわす。手を使って不思議に思ったけど、すぐに気付いた。彼女の念を、よっちゃんが自分の力で脇に飛ばしているんだ。近くの木の枝が塊となって、折れたり落ちたりしている。

エネルギーの塊見たいものが、陽炎の様に見える。それが二人の間を行き来している様に、激しく飛び交っている。こんなシーン、初めて見た。二人とも、お互いの気を増幅させているのだろうか？それともこの場にいるあたしの、神経が研ぎ澄まされちゃって、こんな物が見えているのかしら？

でも彼にはそれが精一杯みたい。表情に余裕が無い。ハンサムな顔が苦しそうに歪んでいる。

あたしは自分が一体どうすればいいか分からず、焦りながらも考えあぐねて、固まってしまった。

その間に水島さんが起き上がって、体勢を立て直す。普段はお人形さんみたいな顔が、強い意思を持った人間の表情をしていた。

そして彼は彼女に切りつけた。

だけどそれは一瞬の差で、彼女にかわされてしまった。振り返った彼女の腕を切りつけるにとどまった。

彼女の顔が歪み、水島さんを睨んだ。激しい憎しみが籠もっていてゾツとする。

彼女はすぐに口の端を上げた。

「良久は元気？」

バンっという乾いた爆発音。衝撃と共に折れた木の枝が大量に飛び散った。あたしと香取は咄嗟に、背中を丸めるようにしてそれを防いだ。香取があたしの頭を抱えるようにして蹲る。^{くすぐま}急いで確かめるように振り返ると、よっちゃんは地面に倒れていて、

彼女は仰向けに倒れた水島さんの上に、馬乗りになっていた。彼は手に何も持っていない。だけど彼女の振りかざした手にはナイフ！

無我夢中で、気付けばテレポで体当たりをしていた。と同時に彼女の手からナイフをむしり取った。彼女はあたしに突き飛ばされて脇の地面に転がった。あたしもバランスを崩して転がる。自分の手にあるナイフが自分の体のどこかに刺さりそうで、ヒヤツとした。弾かれた様に水島さんが体勢を立て直す。

その時、彼女が、飛んだ。ふわっと。

あたしは自分の事を棚に上げて、啞然とした。

この人、どこまで何でもアリなの??

彼女はフェンスの上に飛び乗ったかと思うと、向こう側に飛び下りた。神社の敷地に逃げる気だ。

フェンス越えはあたしの十八番。逃がすもんかなめんなよ。あたしは体を起こすと彼女を追いかけようと身構えた。

その時、後ろから水島さんの手があたしのお腹にまわり、グイッと引き寄せられた。

あたしは彼の胸に、背中から倒れ込んだ。何？ 邪魔された?!

「ちよっと…」

「追いかけんな」

「何でよっ」

「いいから。追いかけんな」

振り払おうとするあたしを、彼が後ろから抱きしめるように押さえつける。あたしは体を捻って、至近距離にある彼の顔を見た。綺麗な目が、真剣にあたしを見ている。いつものような皮肉めいたかたまるさは無い。更に強く抱きしめられて、一瞬ドキっとした。

だけど頭に血が上っていたあたしは、彼に怒鳴った。彼女に追いつけたのに！

「どうしてよっ」

すると彼は、小さなうめき声を上げながら体を動かし始めたよっちゃんを横目で見て、低い声で言った。

「意味が無い。あいつにバレなきゃいいんだ。だからもういいんだよ。追いかけるな」

脇に立った香取が眉間に皺を寄せ、難しそうな顔をしてあたし達二人を見ている。

あたしは水島さんの雰囲気を押され、不服そうな顔をしながらも黙りこくるしかなかった。

あいつって、よっちゃんの事？

大人しくなったあたしを見て、彼は軽く溜息をついてから腕を解いた。

こんな事が起きてしまい、あたしのお気に入りの秘密の場所は、惨憺たる状態になってしまった。

大きな木も足元の灌木もボロボロ。芝生もめちゃくちゃで穴が空いている。地面を見れば乱闘の大きさが分かる程だし。

あたし達は4人とも、見事なほどに満身創痍だった。血が滲み出していない人なんて誰もいない。

こうなると、最初から気絶しているはるなちゃんが一番マシに見えるてくる。

でもあれだけの騒ぎで一度も目を覚まさないのも、それはそれで心配で……

「はるなちゃんは？」

「こっちは大丈夫」

水島さんが携帯を切りながら言った。芝生の上に移された彼女には、彼が羽織っていたシャツがかけられている。

「でも病院へ連れて行く。人を呼んだから」

「本当に？ やっぱり吸われていたの？」

「自分で確かめてご覧よ」

「え？」

「匂い。嗅いでご覧？」

言われて彼女に近づき、匂いを嗅いだ。・・確かに。あの、イツト独特の匂いがしない。

あたしはハツと気付き、香取の方に駆け寄った。ギョツとした表情の香取の唇に、鼻をギリギリまで近づける。

微かに漂う、あの匂い。

そのままの体勢で目だけギロツと香取を睨み上げると、香取はたじろいで顎を引いた。

「何？」

「あなた、やっぱり・・・」

「平気だって」

「そう？」

香取に言葉を投げたのはよっちゃんだった。周囲の状態を調べていたのだけど、真面目な顔であたし達に近づく。

「これが？」

そうやって彼はいきなり、香取を横から軽く押した。ポンって。

不意をつかれた香取は目を丸くし、そのままコテン、とまるで漫画の様に地面に転がった。

「てつめえっ！」

「イキがいいけど病院直行。内臓溶けるってあながち嘘じゃないんだぜ？」

「はあっ？ いつから居やがったんだよっ」

「まこちゃんが村本の鼻を折る辺り？」
「よっちゃんっ？」

あたしもビツクリして声を上げてしまった。眉間に皺が寄っちゃう。そんなに前からここにいて見ていたの？ あたしが押したブザーもどきで気付いて、駆けつけてくれたんじゃないの？

よっちゃんはあたしに、少し申し訳なさそうな顔をして言った。

「偶然だよ。君の鞆に例のブツを入れた奴が誰か調べたくて、智哉と学校（こい）に来てたんだ。俺は外、コイツは校内でサイコメトリー」
「あんたの教室に行ったよ。最初に」

水島さんが気だるそうに言った。ついさっき、あたしを抱きしめながら（と言ったら語弊があって彼に冷たく軽蔑されそう）見せた真摯な眼差しが、微塵も感じられない。軽くム力つくぞ。何でか分からないけど。

ところが彼が続けた言葉を聞いて、あたしは絶句した。

「ちょっとした濡れ場を見て流石に驚いていたら、あんたは消えて彼は腰を抜かした」

「.....」

「大丈夫だよ。彼、操られてたんでしょ？ 今頃気絶しているし、目を覚ましたら忘れてるよ」

「何かあったのか？」

立ち上がった香取に聞かれ、一瞬、返答に詰まるあたし。

「うわー、アレをこの性格ひねくれ男に見られたかー・恥ずかしいぞ。」

「ま、でもしょうがないか、見られちゃったもんは。あたしが一方的に襲われただけで別にイチャイチャしていた訳でもないし、最後までされちゃった訳でもないし、そう考えれば服を脱がされた訳でもないし、まあ、いろんな所を触られまくった気もするけど。」

割とあっさり開き直ったあたしは、香取に向かって言った。

「山田くんに告白されて、押し倒されて胸触られて、多分キスされた」

「!」

聞いた香取は目を皿の様に丸くして、次の瞬間、急に俯き片手で口を覆った。

その動きにこっちが驚いていると、彼は地面に吐いてしまった。うわっどうしようっ?」

「やっ大丈夫っ? えっ、血が出てるじゃんっ!」

「!」

「内臓溶けちゃってるの? そうなの? どうしようっ?」

「口ん中の傷の血が混じってるだけですよ。落ち着いて」

水島さんが眉をひそめて言うんだけど、

「え? ホントにっ? そうなの? 大丈夫なの?」

「知らないよ。おい、自分の女くらい黙らせなよ。パニックってるだろ」

「……っ」

香取は起き上がったって口を手の甲で拭きながら、少し顔を赤くして悔しそうに彼を睨んだ。

あたしも『自分の女』って台詞に異議を唱えたいんだけど、まあ年長組からすれば、あたし達高校生が毎日つるんでいて、しかもお互いうるさくやり合っていれば、一括りにまとめて取り扱いたいんだろう。

ちよっぴり口を尖らせて水島さんを睨む。

だけど彼はあたしには目もくれず、香取を睨んで軽く溜息をついた。

「ったく、中途半端な事するから」

香取はまだ悔しそうに彼を見やっていたけど、あたしに視線を移すと、珍しく、躊躇う様に目を反らした。

そのまま視線を落ち着かなく空中に漂わせながら、遠慮がちに聞いてくる。

「……お前、平気か？」

ああ、気遣ってくれているのね。そう思って、意外なほど嬉しくなった。

これは安心させてあげないと。

「山田くんの事？ 平気だよ。だって相手は正気じゃなかったし、別に怪我させられた訳じゃないし」

「……」

「ホントだって。さすがに胸を触られた時はビクリしたけど、下半身まではいってないもん。ベロベロツてキスでもなかったし」

あたしの露骨な表現に、三人がギョツとしたような顔を見せた。

その後、香取は唇を歪ませ、水島さんは余計不機嫌な顔になり、よっちゃんは眉間に皺を寄せた。

「……何？ 言い過ぎた？ あ、それとも今の発言、貞操観念無さ過ぎ？」

てか、この沈黙、どうにかしてよ。

やがてよっちゃんがあたしに近づき、ポン、とあたしの頭に手を置いた。

真面目な顔で、静かに優しく言ってくれた。

「頑張ったね。偉かった。本当によくやった」

「……そう、まともに褒められると……嬉しいけれど、照れくさいよ。だってみんな見てるし。」

顔が赤くなっちゃって、あたしは俯いた。もう、この人に褒められたり頭撫でられたりすると、条件反射で尻尾が扇風機になっちゃう。わん。

隣から香取の、低くて暗い声が聞こえた。

「あなた、見てたんなら何で助けねえんだよ」

「・・・俺の出る幕、無いかと思って」

その台詞の真意が分からず、あたしは顔を上げた。

よっちゃんは落ち着いているけど、香取は目が吊り上がっていた。

「だからってコイツに任せて見学するのか？ コイツは女で、仕事にしているあなた達とは違うだろ」

「でも実際、沙希が来るまで俺達不要だったろ？ イットの気で、彼女の能力が随分強化されたじゃないか」

「そんでこんなに怪我負わせてどうすんだよつ。コイツはお前の所有物でもなければ持ち駒でもないんだ」

香取は腕を伸ばし、今度は彼が、よっちゃんの胸をポン、と押した。

だけどその表情は、よっちゃんが先程香取にした時とは全然違う。強い怒りが表れていた。

「二度と近寄るんじゃないねえ」

するとよっちゃんの眉間に皺が寄った。イラッとしたらしい。

「なんか逆恨みしてない？ 君が巻き込まれたのは俺達のせいじゃなくって、君の従妹が血迷ったから。大方彼らに乗せられて君を呼びだしたんだろうけど、それだつて君のせいだろ？ それに俺達が来なければ、どうやって沙希を追い払ったんだ」

「俺らの事を言っつてんじゃない。あんたのやり方が気に入くないっつってんだよ」

「わかってねえな。子供は口閉じてろ」

「義希、色々恨み買っちゃつてんだよ。分かつて無いのはそつちだつて」

ああ、ややこしい。

水島さんはてきばきと、地面に転がっている男子生徒の様子を確認しだした。屈んで額を触ったり傷を確認したり、時々「派手にやつたな」と呟いたり。

あたしはそんな彼を眺めながら、不意に彼女を思い出し、ボソツと呟いた。

「あの人、何者なんですか？ どういう能力を持っているの？」

シーンとなる。再び無言。ちよつと誰か答えて下さい。

屈んでいた水島さんが、よつちゃんを見上げた。よつちゃんは香取を睨んで、不機嫌に黙りこくつている。水島さんは近くにあった小石を取ると彼に投げた。それに気付いたよつちゃんは、水島さん

を見ると迷惑そうな顔をした。

そしてあたしに視線を移すと、無理やり笑顔を作って言った。

「沙希はかなりの能力者だよ。もともと、喰った人間を操る事が出来る・・・殺さなければ、ね。それがあいつの嗜虐趣味を、かなり増長させている」

気を吸った人間を操れる・・・。

普通のイトト（普通って何？）に気を吸われたら、通常の人ならその間の記憶を無くす、とは聞いてたけど、操れるとなると更に上を行くわけね・・・？

あたしは少し身震いがした。あの人の、暗い水底の様な冷たいオーラが、余計に怖さを増幅させる。

あれ、でも待てよ？

「え？ でもあの事務員、自分がやったみたいに言って、生徒達を操っていましたけど・・・」

「村本自体が操られていたのさ、彼女に」

彼に言われ、頭の中で色々と繋げるのに数秒かかった。

その後、その光景を想像して絶句した。

「・・・ええ？ それって・・・」

「そ。イトトの気を吸ったって事」

やっぱり！

「……うわぁ。共食い……」

「で、ヤツに自分の能力を植え付けて、村本ごと操っていたんだよ、きつと」

「……げえ……」

ピラミッド式のネズミ講を思い出しちゃう。村本を子とすると男子生徒達は孫。しかも複数いる。彼女は何処まで操れちゃうんだろう？ ひ孫？ 曾々孫？ 何人まで可能なの？ まるでウイルスで言う所のスーパープレッダーみたい。

「後ね、厄介な事に、彼女はサイの気を吸うと相手の能力まで得てしまう」

そう言っつて、倒れている生徒たちを見終わった水島さんは立ち上がった。

手を軽く払いながら、あたしを見て言う。

「彼女の念力、すごかったでしょ？」

「……はあ」

「あれ、出所でどころこの人だから」

彼が人差し指で軽くよっちゃんを指して、よっちゃんは一瞬下唇を噛んだ。

あたしはすぐに理解した。それどころか、よっちゃんが沙希に吸い取られているビジョンまで浮かんできちゃって、言つべき言葉が見つかからない。

「……ああ……」

「彼女は義希のを吸って、自分の中で増幅させちゃってんの。やだよねー、ホント面倒」

水島さんは腰に手をやると、軽く顔をしかめながらよっちゃんに言った。

「漫画や小説みたいに、やりすぎて自滅してくんないかな」

「……それ待ってる間に、俺らがヤラれるよ」

よっちゃんは小さな声で答えると、気を取り直す様に水島さんに言った。

「とにかく、あいつが獅子鷲を狙ってるとなると厄介だ。早々に手放しちまおうぜ」

「実はすでに今日の昼、新谷に持たせてる。飛行機は3時間前に離陸済み。これで安心だろ？」

「イギリスに？ 上にも報告済み？」

「もちろん。ネットにも流した。彼女の耳にもすぐ入るよ。悔しがるだろうね、無駄足踏んで」

「……じゃあ、沙希が、俺らの周りをうるつく事はもうないのか……」

呟くように言つよっちゃんがなんだか寂しそうに見える。気のせいかな？

「どうせ僕達には関係ないし」

水島さんがかったるそうに言う。よっちゃんは眉根を寄せた。

「お前はまた、それを言う」

「当たり前だろ。こんな目にわざわざ会いたいヤツが、どこにいんの？ イットなんて世界中にごまんといるんだよ？ イチイチ関わっていたらキリがないでしょ。僕は義希がいるからこの仕事をしてい
るだけだし」

「……人のせいにするなよ……」

「そうじゃない。義希の後をついていくって決めた、それだけ。だから他はどうでもいいの。そう言ったる？」

「智哉」

少し切なそうに、どこか戸惑った様によっちゃんが水島さんを見て、水島さんはいつもよりちよっぴり真剣な目でよっちゃんを見て……前から思っていたんだけどさ、この二人の関係って、何なの？ これがフツの幼馴染ってやつ？ 妙に居心地悪くて、あたしと香取はまさかのお邪魔虫？

他でやってくれないかな？ 根拠無くドキドキして、目のやり場に困る。

「あいつ、宮地の能力、羨ましがっていたぜ？」

そんな二人の心温まる（？）雰囲気にずけずけと香取が侵入した。
いいなあ、その度胸。

・・・て、え？

「それ取りに、戻ってくんじゃねえの？」

真顔で彼に言われて、あたしは本気で飛び上がった。

「香取っ！ 縁起でもない事言わないでよっ」

「可能性でかいだろ、アレ見りゃ」

ぎゃーっ怖すぎるっっ！

「多分大丈夫」

よっちゃんがこちらを向いて言った。

「一応組織に雇われている身だからな、勝手な事をしすぎると、解雇されるどころかかえって自分が命を狙われる。厄介者として、ね。だからそんな、大義面分の無い人喰いはしない筈だ。そこが組織の狙いでもあるんだけど」

あたしは心臓をバクバクさせてよっちゃんを見た。ほ、本当でしょうね？ 保証はしてくれるんでしょうね？ そんなあやふやな推察に心寄せちゃっていいんでしょうねっ？

香取は疑わしげにかつ不服そうによつちゃんを横目で見ていたけど、しばらくして尊大な態度でフン、と鼻を鳴らした。

「じゃ、残りは一つか」

何の事だろう、と思って香取を見たら、彼もあたしをじっと見た。一瞬ドキツとしたけど、彼の瞳はあたしを見ているようで見てはいない事に気付いた。あたしの向こうの何かを、まるで透かして見ようとしているかのようにキュツと目を細める。

独り言のように、誰に言うでもなく彼は呟いた。

「誰がコイツの鞆に、あれを入れたか。関わった人間は、どうやら最低二人はいるらしいな・・・この学校に」

二人・・・ゾツとする。その人達の、目的は何？ あの『沙希』とはどういう関係？

獅子鷲を持っていたとなると、やっぱりイットなのだろうか？

ああもう、胃に穴があきそう。

翌日。大事を取って学校を休んだあたしは、小腹がすいたので食料品でも漁ろうと思つて（もう遠慮するのはやめた。だって長丁場になりそうなんだもん）水島屋敷を歩いていった。

するとプライベートリビングから話し声がする。扉は開けっぱなしだから中が見える。よっちゃんと水島さんが、真剣な表情で何かを話し合っていた。二人ともソファに座らず、立ったままで中々白熱している様子。

あたしはこの間閃いた事を急に二人に言いたくなり、部屋に入りなり大きな声で言ったの。

「科学警察研究所に提案があります！ イット対策メガネを作ると言うのはどうですか？」

「・・・はあ？」

水島さんが呆れた様に言った。よっちゃんはポカン、としている。あたしは益々得意になった。うふふ、盲点突いちゃった？

「ほらほらあ、見ちゃうでしょ、目？ そうするともうダメじゃん。だから見ても大丈夫なように、偏光グラスみたいなイット光線カットメガネを作つてさ、それをあたし達がかかるの。メン ンブラックみたいに！ かつこいいし不自由なく戦えるしで、一石二鳥！」

「・・・」

「・・・何か言つてよ」

せつかく、なんか息詰まっていそうな二人に新しい風を吹かしてあげたって言うのに、感謝の言葉とか称賛の言葉とかは無いわけ？

すると何故だか一気に不機嫌になった水島さんが、無言で部屋を去ろうとした。

「・・・どこ行くの？」
「寝る」

こつちを見もせず一言そう言つと、廊下に姿を消す。あたしは啞然とした。

「何あれ？」

するとよっちゃんが、はあーっと溜息をついてドカツとソファに身を沈めた。

やっぱり少し不機嫌に、水島さんが去った廊下を睨んでいる。

あたしは、なんとなくピンと来た。

「喧嘩したの？」

するとまるで拗ねた子供の様に唇を突き出して、よっちゃんはあたしを目だけで見上げる。うわっかわいい、やめて欲しい。

「珍しー。どうして？」

今やすっかりタメ語で彼の隣に腰を降ろすと、彼は身を乗り出す様に、自分の肘を膝の上に乗せた。

そして組んだ手で顎を擦る。

「あいつが珍しく、俺に突っかかってきたんだよ。で俺が、珍しく流せなかった・・んだよな」

「なんて言われたの？」

「んー？」

あたしの方を斜めから見上げて、彼はちよっぴり自嘲めいた笑いを見せた。

「俺が自己中だって。何を今更ってカンジだけど」

「・・・」

「目的達成の為に最も確実な手段を取る。他人の評価は関係無い。評価が俺の目的じゃあないんだから」

そう言ってもう一回、ソファに深く身を沈める。頭を背もたれに乗せて、天井を見上げた。

あたしはそんなよっちゃんを身近で観察する。

そしてやっぱり、少しドキドキする。

「あの人、顔色悪くありませんでした？」

「智哉？」

彼は目だけであたしを見て、

「だろうね。仕事をした後、あいつしょっちゅう寝てるよ。具合が

悪くなるんだ」

「・・・何で？」

再び天井に視線を戻した。

「サイコメトリーってのはね。対象物の念とか見た情景を読み取るんだ。そんな相手の念が強いと、あいつの心がやられちゃうんだよ」

「・・・やられちゃう？」

「・・・うん。だって俺達が扱うのは、基本、事件だし。対象の相手が黒い心を持っていたり、或いは恐怖を体験していたりすれば、それを丸々、本人と同じように体験してしまうんだから。想像してご覧よ」

言われて素直に想像した。

あまりの怖さに、想像するのをすぐにやめた。

「・・・うわ・・・」

「ね？ 相手が殺されていたりなんかすれば、もつと最悪だろ？ 殺される疑似体験をしちゃうんだぜ。場合によっては体まで反応して、大怪我を負うケースもあるって。・・・俺だったら壊れる」

殺される疑似体験なんて・・・エグ過ぎる。『お触り魔』なんて茶化してる場合じゃ無いじゃん。

あたしは驚愕して、よっちゃんを見つめた。そんなに怖い事、あたしなら続けられない。

・・・だけど彼は続けている。そしてそれは・・・

「水島さん、よっちゃんがいるからこの仕事をしてるって」
「……」

あたしが言うと、よっちゃんは僅かに切ない表情を見せた。

「あいつ……昔からどっか俺に依存している所があつてさ……」
「……幼馴染で親友なんでしょ？」

「まあ、そうなんだけど……多分、自分の能力があんなんだから抱える物が多すぎて、イッパイイッパイなんだろうな。これ以上余計な物には関わりたくないし、考えたくも無いんだろう」

あたしは少し考えた。確かにそうかもしれない。サイコメトリーがそんなに相手の思いを取りこんでしまうのなら、なるべく余計なものに関わりたくない、と思うのは必然だろう。考えるのも煩わしい、というのも理解出来る。

でもさ。それでも何でこの仕事を続けているの？ 痛い目見るだけじゃん。

「……本当にそれだけかな？ だったらよっちゃんに絡まないで、一人で引きこもっちゃわない？」

あたしがそう言うと、よっちゃんは顔だけあたしに向けて、眉間に皺を寄せた。

「・・・うーん・・・」

そして困ったように視線を動かす。

その様子は、水島さんが自分に依存していると何で感じているのか、を改めて考えている様に見えた。

今更それに頭を悩ますなんて、男の人って、普段はあんまり物事を深く考えないのね。そう言えば香取に、これと真逆の事を言われた気がする。

「小さい頃の智哉はさ。顔が異常にキレーだし、あんな能力だし、・家庭環境もあんま愉快な物じゃないから・・・ずっと孤立していたんだよ。そこへ、たまたま俺と出会って・・・」

「・・・ひな鳥の様になつかれた、と・・・？」

彼の話聞いてあたしの頭の中では、孤独な美少年とそれを救った可愛い男の子、の図がキラキラと展開された。うん、悪くない。

するといきなり、よっちゃんが吠えた。

「あーっ、フエアじゃないよな、これっ」

あたしがビクツとして身を引くと、彼は起き上がって頭を両手でガシガシガシッと搔いた。な、何事?!

そしてあたしの方を向くと、ハンサムな顔が観念した様な表情になっ、言った。

「俺ね。初めて智哉と会った時、女の子だと思ったの」

「・・・ああ・・・」

「で、一目惚れしちゃったの」

「ああ・・・えっ?」

「だからあいつ、俺の初恋の相手なの」

「・・・ぎえっ、い、いくつの時?」

「さあ。小学校に上がる前くらいだったと思う」

そっそっそれは・・・オイシ過ぎるかも・・・。

あたしはこの爆弾告白に、引きつつも喰いついた(分かる? この微妙な心理)。

この人って、あたしがわざわざ攻撃しなくても、自ら突っ込み所満載の自虐ネタを披露しちゃうタイプなのかもしれない・・・あの『沙希』関連も然りで。

「影のある、無口な美少女を散々アタックして口説き落として」

悲しげに目を伏せるよっちゃん。ど、どこで止めよう?

「それが男だと知った時は、人生終わったと思った」

「・・・」

「でもその頃の癖が抜けなくてね。どうしてもつい、智哉を守っちゃう場面が多くなってさ・・・それも、なつかれた原因の一つかも。あの頃からあいつ、『よっちゃんの好きなように決めて』だったし」

「・・・」

「でもまあ、結局俺も随分それに甘えてきたんだよ。・・・あいつは文句なんか言わずに、絶対俺に付いてきたから」

幼少の二人をどう想像していいか分からずにいると（コメディ？
アブノーマル？ それとも純心？）
彼のワントーン落ちた声が聞こえた。

「俺も、いい気になって」

思わずマジマジと彼を見つめる。よっちゃんはそんなあたしに気が付かず、何かを深く思索している様だった。
そして不意に顔を上げるとあたしに言った。

「様子、見てきてやってよ」

「あたしが？ 追い出されるよ。部屋のみならず、この家まで。あ、その前に凍死させられるかも。夏だけ」

「大丈夫だよ。智哉、まこちゃんの事、かなり気に入ってるから」「うっそでしょ?!」

本気で目が丸くなっちゃったんだけど、よっちゃんは優しく笑うだけ。

いつもなら全力でお断りするお申し出だったのだけど、その時のあたしは、水島さんの苦勞と過去をちょっぴり聞いちゃったおかげで、彼の事が気になってしまっていた。

やっぱり人は、それぞれのストーリーを背負っちゃってるんだなと。

そこで渋々、恐る恐ると、あたしは彼の寝室へ行つた。

まさかこんな事をする日が来るなんて。逆立ちしても思いつかないわよ、絶対。

勇気を振り絞つて、部屋をノックする。すぐに返事があつた。

「誰？」

「・・・真琴です」

「・・・何で？」

「・・・何でって・・・様子伺いに」

「・・・」

「・・・具合を」

じつと待つた。返事が無い。全く。物音すら、無い。帰る。

そう思つた時、

ガチャ。

扉が開いて、水島さんが気だるそうに、不機嫌そうに立っていた。

そして、無言。

・・・いい加減にしるよ？ 恥ずかしいじゃない。

彼は無言で、目だけであたしを部屋に迎え入れた。

そこは15畳ぐらいはありそうな寝室で、ベッドと机とソファがあつても空間が有り余つてて、まあ屋敷からしたら大した事の無い広さなんだろうけど、熱効率の悪そうな大きさの部屋だな、とか僻んだりもして。

彼は無言でソファに座る。促されないものだから、あたしは部屋

の真ん中に立ち続ける。あんたは王様かいつ。

「・・・あの・・・具合は・・・」

「寝れば治る」

そうですか。

「・・・大変だね・・・」

「何が？ お互い様でしょ」

無言。

そうですね。そうでしたね。

あたしは無難に、その場を去ろうとした。

「・・・あー、それでは・・・」

「いつの間にそんなに積極的になったのさ」

「・・・はい？」

「嫌がっていたんじゃない無かった？ サイとか、イトトとか。対策メ
ガネって何なのさ？」

水島さんが、不機嫌丸出し、って感じで急にあたしに言葉を投げ
つける。

前代未聞のその勢いに、あたしはたじろぎながら言った。

「・・・いや、あったら便利かな、と」

「これからも僕達に関わってくって事？」

かぶせるように問いかけられたその内容に、あたしはギクツとなった。いきなり、あたしの今の状況の芯を、ナイフでえぐられた。

「・・・逃げられるもんなら、そうしたいけど。出来無さそうだし。だとしたら、少しでも居心地を良くしたい、と言っか・・・」
「逃げればいいじゃん」

彼は冷たい目をして言い放った。ソファからあたしを見上げて、その目に力が籠もった。

「綺麗ごとなんか言っていないで、さっさと逃げろよ」

言葉に詰まる。あたしは彼の顔が見られなくなって、俯いた。
あたしの中途半端さを責めているんだ。この人は、文字通り命を張ってやっているから。ううん、この場合、心を張って？

「どう言えば、伝わるんだろう？」

「あたし・・・香取が襲われたの見た時、マジ頭に来たの」
「・・・」

「自分の周りの人間がこうやって巻き添えを食らうぐらいなら、あたし、強くなりたい。戦い方を知りたい。先手を打ちたい、とさえ

思った。・・・だから」
「・・・」

一生懸命、真剣に、言葉に出してみる。一つ一つ、丁寧に。全身全霊で行って、こんなに真面目に彼に向き合ったのは、初めてだった。

昨日の出来事を思い出す。香取達が倒れていた時の事。彼らが吸われた、と聞いた時の事。

・・・香取が沙希に、近づいて行った時の事。

あの時の、狂気。

「でもね」

気付くより先に、言葉が口をついて出た。

「相手の事が憎くて、憎くて、・・・相手が死んでしまっても構わない、あたしがもし殺しても、どうせ灰になるから簡単だ・・・って」
「・・・」

初めて言った。そして言葉に出してみても、初めて気付いた。あたしは何て恐ろしい事を考えていたんだろう。

身震いがする。あたしは思わず、下唇を噛んだ。

なのに言葉が止まらない。感情が、溢れ出る。

「どうしよう。あたし、こんな事を続けていたら、よっちゃんみたいに狂っちゃうのかな？ あの人みたいに暗く目を輝かせて、イットを狩っていくのかな？」

「……」

「そんなの嫌だ、嫌だよ。あたし、自分を無くしたくない。そんな事になっても誰も救われないもの。・・・だけど大切な人をもし奪われたら、あたし、どうやって自分を保てばいいの？」

「……」

「……それが、怖い……」

水島さんの顔も見ずに、あたしは一人で喋りつづけた。そうする事で、自分の頭と心を整理している気分になってきた。気持ちが高ぶって、声が少し震えてしまう。

そんなあたしを、彼は黙って聞いていた。

再び訪れた静寂に、あたしはビクつきはじめた。思わず言ってしまった泣き事。こんな思い、彼らはいくつも乗り越えてきたに違いない。しかもあたしは最初、よっちゃんの狂気を批判的な気持ちで見ている。

どんな辛辣な言葉を言われるんだろう……。あたしはまだまだ入口しか経験していないのに、既にこんなに取り乱している。これでこの先、乗り越える気があるの？ とか。

「あなたは義希とは違うよ」

静かに言われたその台詞に、あたしは目を丸くした。

「あなたは狂わない。あなたは大丈夫。・・安心しろ」

顔を上げて彼を見る。水島さんも、あたしを見つめ続ける。

あたし達はそうやって、しばらく無言だった。あたしは不思議な気分で、彼を見ていた。

彼の短い言葉。なのに何故か、説得力があるから。

やがて彼は立ち上がると、あたしに近づいてきた。あたしの顎を指で軽く摘むと上を向かせる。

彼の作り物の様な天使の瞳が、暗い光であたしを覗き込んだ。

「見ててやるから。狂わない様に。だから、安心しろ」

あたしは目を反らせなかった。まるで催眠にかかったみたいで、心の中で彼の言葉を反芻した。

安心しろ。

彼の言葉が繰り返される。そんなあたしを見透かした様に、彼はもう一度、暗示をかけた。

「狂わないよ」

暗さの奥に、優しさが見えた気がした。何故か切なくなつた。頭の片隅で思う。サイコメトラーは、相手の心に入り込むのが上手なのかな？

フツと彼が微笑んだような気がしたら、次にはもう、何だか不服そうな顔つきになっていた。

「ところで女性が一人で男の寝室を訪ねるって、どうなの？」

「・・・え？」

「僕じゃなかったら食われてるよ？　・・・それとも食べられたいとか？」

甘やかに口角が上がって、あ、あり得ない美形がそーゆー目をしてからかうのはやめて欲しいっ。

「だ、だってよっちゃんが、水島さんの様子を見てやってくれって・・・」

あたしが慌ててそう言うと、彼は驚いたような顔をした。そしてあたしから手を離し、小さく舌打ちをして言った。

「舐められたもんだな、僕も」

そしてあたしに視線を戻すと、いつも通りの皮肉っぽい笑みを浮かべて言った。

「冗談だよ。お子様に手を出す程は不自由してないから、安心して」

こっこいつ……。ムダに雰囲気づくりおって……。

でも多分、彼の瞳の奥に見えた優しさは本物で。

きっと多分、彼はよっちゃんが思うほどは、人生を投げたはいないかもしれない。

Sweet heart 2

その病院は、水島さん家が懇意にしている病院で、所謂いわゆるそういう所らしい。香取はその個室にいた。

この期に及んで、あたしは彼の親を見ていない。言えた立場ではないかもしれないけど、保護者は一体どうなっているのだろうか？

開け放たれたドアを軽くノックする。彼は気だるく雑誌を読んでいた。

「どう？ 溶けた内臓、再生した？」

「・・・なまこかよ・・・」

挨拶もせず軽口を叩くあたしに、彼は眉間の皺を寄せる。あたしは気持ちよく無視をした。

「はい、甘党の君に差し入れです。キチのシュークリーム。欲しいかなあ？ 欲しいよねえ？」

「・・・何そのムダな元氣」

「うん、それこそ未遂だし、吐いたらスッキリした。やたら気分爽快」

「そのエネルギー、停電の時に使えねえかな？」

「なんて言った？」

「何も」

香取は澄まして雑誌を脇に放り投げる。いつも通りの彼に見えた。

こうやって改めてみると、まだ可愛い感じのする『少年』かも。髪型が粋がっちゃってるけど。

「いつ退院？」

「明日。大袈裟なんだよ」

「肋骨折ってたら、そりゃ大袈裟にもなりますわね。もっと病院に閉じ込められちゃえばいいのに」

「折ってねえよ。薄くヒビ入ってただけだ」

「はいはい。ムキになっちゃって。かわいいね」

「・・・一体どうしたの、お前？」

テンションの高いあたしを見て、香取は気味が悪そうにした。そんな彼の前に、洋菓子の可愛い箱を開けて見せる。そして人に見せておきながら、自分で先に言っちゃった。

「わ。おいしそ」

「なんで三つ？」

「あたしと香取と・・・はるなちゃん」

「・・・」

「お見舞い、来てるんでしょ？」

あたしがそう言うと、香取は黙った。長い睫毛が伏せられ、唇が固く結ばれる。

不服そうな、辛そうな、切なそうな、そしてどこか悔しそうな表情をした。

「・・・追い返す訳にもいかねえし。それであいつの、気が済むなら」

また逆戻りだ。はるなちゃん言いなりになっているんだ。

想像して分かっていた事なのに、彼の台詞を実際に聞いたら、あたしは憤りを感じた。香取に文句を言いたくなかった。慌てて言葉を飲み込む。

だって、そんな事、あたしが言えた立場じゃない。

「あいつを守ってやれなかったのは、確かに俺だし」

「・・・それ言うなら、全部あたしのせいだよ・・・」

シーンとなる。お互い、何を言っているのかわからない。こんな気まずい空気は初めて。

あたしは黙って、シュークリームを一つ取ると、彼の目の前に付きた。きだした。

彼はあたしとシュークリームを交互に見やると、口角を僅かに上げてそれを取る。

あたしは彼の目の前で、わざとらしく大口で、ゆっくりと、自分の分をかじって見せた。

ほら。食べなさいよ。

彼は少し眼を丸くしてそれを見ると、面白そうに微笑んで、自分の手の中にあるものを口にした。「ん、うまい」と言ってちよつぴり驚いたようにそれを眺める。嬉しそうだった。

あたし達の間、こんなに素直で穏やかな空気が流れたのも、初

めて。

あたしは何だか凄く嬉しくなって、そして満たされた気持ちになつて、ニコニコしながらそんな彼を眺めていた。

すると彼の動きが止まった。

真剣な面持ちで俯き、何かをジッと考えている様だった。

そんな彼に驚き、あたしもシュークリームを食べる手が止まってしまった。て、そうか、もう食べ終わったからだった。

「はるながやられた時」

ギクツとした。あたしが見たくないものを、彼が付きつけようとしている気がする。

・・・でも、多分避けられない。ついに来た。

「俺・・・あいつら、殺してやるって思った」

「・・・うん」

「絶対、何が何でも殺してやる、八つ裂きにしてやるって・・・すげえ、訳わからなくなつて」

そつだよね。ごめんね。そつだよね。

はるなちゃんは、操られていたあの男子生徒の一人の口車に乗せられ、彼を人気の無い所に連れ出した。その間に山田くんがあたし

を襲う事を、知った上での行動だった。香取をあたしから引き離したくて、あの場所を選んだ。彼女が学校で、香取とキスをしていた場所。

そんな事は、どうでもいいの。

だってそれは、彼と彼女の問題。

そりゃ一歩間違えば、犯罪だったけど。

あたしは、香取の大事な従妹を危険にさらしてしまった。そしてそれは、香取の心を大いに傷つけた。

香取は他人をあまり寄せ付けない分、一旦自分の中に入れた人達は、とことん大切にする。本人は気付いていないけど、彼らの存在そのものに依存する。

だからそんな香取の従妹が傷つけられると言う事は、彼自信が傷つけられるより、耐えがたい事なんだ。

彼の受けた辛さを思って、切なくなる。

「だけど、お前があんな女に喰われそうになった時」

香取は俯いたまま呟き、そして黙った。

何だろう、と思いたたしは顔を上げた。

香取はなおも俯き、しばらくして、はああ、と言う長い溜息をついた。

「頭に血が上るよりも・・・心臓が止まった」

あたしは眉根を寄せる。うん？ それはどういう意味だろう？

彼は顔を上げると、この上なく真剣な眼差しであたしを見つめた。

あたしは驚いて軽く顎を引く。

彼はあたしの瞳を捉えて、ハッキリと言った。

「お前がもし目を覚まさなかったら・・・俺、多分死ぬよ」

・・・え？・・・え？

それって・・・

・・・まさか。

絶句。

あたしは彼を凝視した。

彼の強い眼差しは、あたしに逃げる事を許さない。あたしは次第に、胸がドキドキしてきた。

けれども同時に、とても納得していた。この状況で納得だなんておかしいのだけれど、今まであたしの中でくすぶっていたモヤモヤ

が、全て、すーっと、消えて行ったのだ。

ああ、そうだ。あたしが思っていたのは、これだ。

あたしはこれが、欲しかったんだ。

胸が熱くなる。あたしは今、彼の心の中に入れているんだ。

どうしよう。

もっと欲しい。

彼は尚も、強い眼差しで続けた。

655

「あいつら全部、皆殺しにした後だけど。自信あるけど」

「・・・ついでに」

「え？」

「クリーム」

あたしは腕を伸ばして、彼の唇の端に付いていたクリームを指ですくい取った。

香取が一瞬、恥ずかしそうな顔をする。

あたしはそんな彼を見て、それから指に付いたクリームを見た。美味しそう。

そしてその指を、軽く口に含んだ。

甘い。

香取の目が見開かれるのが分かった。口の端には、さっきのクリーム
の跡。

あたしはゆっくり彼に近づいて行った。

香取は目を見開いたまま、動く事無くあたしを見ている。

あたしはベッドに両手をつけて屈み、彼の唇の端を、

ペロ

と舐めた。

やっぱり、甘い。

香取が息を飲んで、少し身を引いてあたしを見つめた。

あたしも彼を見つめ返す。強くって、激しくって、少年ぽくって、
熱くて綺麗な目。戸惑っているけれど、揺れる瞳であたしを見つめ
続けている。もう一度、って言っている。

だからもう一度、今度は唇全体を食むように、ゆっくりと、ゆっ
くりと味わった。

表面を、舐める様に。

見た目通り薄くて男らしい彼の唇を、舌に感じる。香取の肩が、
一瞬僅かに震えた様に見えた。

唇を離すと、彼は信じられないと言う様に、だけど少し余裕を無
くした様に、眉根を寄せてあたしを見た。

その瞳が妙に大人っぽくて、熱っぽくって、ゾクリとくる。

あたしの目の前で彼の唇が僅かに動いた。彼の綺麗な喉が、一回、
鳴った。

あたしは身を起こして、少し離れた。
そして気持ちを落ち着かせ、出来るだけ、静かにハッキリと言った。

「香取。あたしもう、自分の身は自分で守る。一生懸命鍛える。今までみたいに、逃げたり投げ出したり、しない」

彼が驚いたようにあたしを見上げている。

あたしは丁寧言葉に紡いだ。それが彼の真剣な姿勢に伝える、一番正しい形だと思ったから。

「決心がついた。あたしが頑張る事で誰かが救われるなら・・・こんな能力、やっぱ運命だもんね。与えられた環境の中で、最善を尽くそうと思う。あたしにとっての『最善』が、今変わったの」

あたしは、彼の心に入れたのかもしれない。彼の大切な人達の人に、なれたのかもしれない。

ありがとう、香取。

でも彼が、そういう人達の存在に依存し過ぎる事は知っている。彼の中の寂しい何か、そうさせているに違いない。

だったらあたしが、それを変えてあげたい。

そして香取を、幸せにしてあげたい。こんなに不器用で激しくて、真っ直ぐな人を。

お願い。自分の存在価値まで、他人に求めたりしないで。

お願いだから、あたしがいなくなったら死ぬなんて言わないでよ。
そんな事をしなくても大丈夫。
あなたは幸せになれる。
あなたはこんなに愛されている。皆にも。・多分、あたしにも。
だからそんなに怖がらないで。

「だからあたしを守るとか、失敗したら死ぬとか、そういうの、もう、無しね」

「……」

「あ、言つの忘れてた。今まで本当にありがとう。あなたのおかげで、あたしはここまで乗り切れた。あなた無しでは過こせなかった。・本当に心強かった」

「……」

「これからは、香取の手は煩わせないよ」

そのかわりこれからも、一緒にバカをやって行こう？

息を飲んであたしの台詞を聞いていた香取は、呆然と固まっていた。

あたしが少し首を傾げて彼を見つめると、彼はハッと気付いたような表情を見せた。

「……そうか。頑張れよ」

「うん」

静寂が、訪れる。

香取は窓の外に視線を移した。無言のまま。

あたしは彼が黙ってしまったので、少し不安になってきた。すると彼は振り向いてあたしを見上げ、薄く笑って言った。

「俺、疲れたからちょっと寝るわ」

「・・・そ？」

「ん。またな」

表情が、妙に優しい。あれ？ 優しいとはちょっと違う？

「あ、それから。もうまっすぐ教室に行けよ」

「え？」

「ちゃんと朝飯も食べよ。な？」

「・・・あ、うん・・・」

あたしは妙な気持ちになった。何とも腑に落ちない。

優しく病室を追い出され（？） そもそも優しい香取なんて既に変だ（あたしは益々パニックになった）。

部屋の外で、呆然と立ち尽くす。

え？ あたし、何か間違った？ 何を、どこらへんで？？

S w e e t h e a r t 閑話休題（前書き）

とりとめのない余談です。番外編、程ではありませんが。
つらつらと描いたので読みづらいかも知れませんが、お暇な時にど
うぞ？

Sweet heart 閑話休題

智哉の場合

ちょっと、マズイだろう。なにやってんだよ。

あいつの女遍歴を思い出してみる。多分、いや確実に、ファーストキスの相手は僕だ。

あいつは子供の頃から、まるで専売特許の様な爽やかな笑顔で、鬱陶しいくらいに明るく、感情の薄かった僕の反応なんて気にせずに、ズケズケと入り込んできた。

それでも相手にしなかった僕だったけど、決定打になった出来事がある。

5、6歳の頃、二人で家の裏で遊んでいたら（といってもあいつが夢中でトンボだかバツただかを追いかけていて、僕はかつたるく雑草でもいじっていただけなんだけど）、あいつは僕に近づいてきて、しゃがんで僕に顔を寄せ、

チュ

と唇にキスをした。

そして驚いている僕に、恐ろしい程邪気の無い笑顔で言い放った。「大きくなったらさ、けっこんしたいな」

・・・そうくるか！ 明るく物怖じしないつつつても限度があるだろ！

と、子供心にそれらしい事を思い、こいつの頭の中はどどういう構造なのだろう、と不思議になった。

その時までこいつと殆んど口を聞いていなかった僕は、ほぼ初め

て、口を開いた。

「けっこんしたいの?」

「うん。・・だめ?」

「・・けっこんしてどうするの?」

するとヤツはキョトンとした。

「え? おとうさんとおかあさんになるんだよ?」

おとうさんとおかあさん。そうか。けっこんするとそうなるのか。

僕は物ごころついた時から、母の顔を見ていない。

「だれがおかあさん?」

「え? きみだよ」

そこで僕はしばし考える。僕がおかあさんになれるのか? 確か

それは女だぞ?

「なれるのかな?」

「なれるよ。だって男はおとうさん、女はおかあさんになるって決

まってるんだから」

「・・でもぼく、おとこだよ?」

あいつはとても、固まった。僕は初めて、目の前で人が化石になつていく姿を見た。もちろんあれ以来、見た事はない。

次の日、あいつは再び僕の前に現れた。顔を真っ赤にして、土下座せんばかりの勢이었다。

「きのうはごめんなさい!」

よく謝れたな、と思った。普通恥ずかしすぎて、記憶から抹消するだろう?」

「もうぜつたいまちがえません! ごめんなさい! だからともだちを、やめないでください!」

「・・。友達だったんだ、僕達。それすら知らなかった。

「もうぜつたい、やりません!」

これは明らかに親に練習させられた台詞だ。こいつはどこまで親

に報告したんだ？（と、子供心に思った）

そこまで震えて謝るかね？　そして帰らないかね？

僕は感心して、無言で頷いた。それが僕達の始まり。

付き合ってみると、あいつはやりたい事満載の子供で、僕はついて行くのも面倒臭いんだけど付き合わないと膨れるし煩いしで、そのうち口癖が「よっちゃんの好きなように」になった。

僕の見目や能力ちからや環境や、この根暗な性格が原因で、周りからは随分と色々な事を言われたけど、正直全くどうでもよかった。

だけどその隣で顔を真っ赤にして立ち向かっていくあいつを見ると、それなりに愛おしいと思う様にもなった。

そして、あいつの失恋人生はそこからスタートする。

小学校低学年で母親を無くしたあいつは、父親が底抜けに明るい人だったのであまり問題無く成長した。そして高学年の時、担任の美人教師に恋をする。そしてそれを、底抜けに明るい親父に取られた。憐れすぎる。

で、荒れに荒れた中学時代に、塾講師に恋をする。どんだけ教師好きなんだあいつは、って話。で、そいつに喰われかかっちゃあ、世話ないよね。

だけどさ、あんな子供にまで手を出すとは思わなかったよ。

あの子が失恋した、とは聞いたけど、キスしたとまでは聞いてないよ？　見境なさすぎるだろ？

彼女は自由奔放、勝手気まま。なんて我儘な猫みたいな奴。けれども時々怯えた様に相手の顔色を覗う様子に、最初は本当に鬱陶しかった。

勝気と脆さの同居。世の中は青くて綺麗だと信じている。お話にもならない子供だね。

だけどそんな子供が、そのまま綺麗に大人になっても、たまにはいいんじゃない？

そんなおとぎ話が実現すれば、きっと救われるのは僕自身だ。それも悪くない。

つか、義希。あいつそろそろ、目を覚ませよ。

自分のやっている事、いい加減冷静になって振り返らないと後悔するぜ？

僕はベッドに寝転がり、天井を見つめて溜息をついた。

義希の場合

あいつが俺にあんなに声を荒げるなんて、正直驚いた。多分初めてだ。

え？ それだけ彼女に惚れてるって事？ うそだろ、気付かなか

った。

「大御所に孫娘を託されたのは残念ながら水島なんだよ。彼女になんかあつたら責任負うのはうちなんだ」

「鍛えてくれつつつて託されたんだろ？ 彼女が一人で生きていける様について、それがあの大御所ばあさんの頼みじゃねえか。だからお前だつてあのクソ新谷を使つてきたんだろ。つか今まで様子も見ずにあいつに丸投げしておいて、何なんだよ？」

「興味無いもん。彼女がどうなるかなんて」

「じゃ、今更何だ？」

「義希は彼女が沙希に喰われる寸前まで、ただ見ていた」

「・・・」

「それは彼女を鍛える為じゃない。実戦を経験させてやつた、なんと言わないよね？ 自分にとってベストなタイミングを見計らつていたんだろ、確実に沙希^{あいつ}を殺るために。僕が飛びださなかつたらどこまで見ているつもりだつたの？」

「・・・」

「いい加減目を覚ましなよ。沙希を目の前にして我を忘れる、てのはやめて。あ、忘れてる訳じゃないのか。だつてすべて計算ずくだもんね、すごく冷静に」

「・・・」

「だけどあんな子供達を、あそこまで傍観するなよな」

「俺はもつと子供だつた！」

「・・・」

「沙希とやり合つた時、俺はもつと子供だつたし妹は赤ん坊だつた！ 現実は大人と子供を分けちゃくれないんだよつ。子供だからつてお情けをくれる様な連中じゃないんだ！」

「嘘だよ。そんな奴らばかりじゃない。と言うより、子供だからと情けをかけないのは義希じゃないか」

「それはだから「僕はいいよ?」

「・・・」

「僕はあるたに付いて行く。とことんね。どこまでも。けどあの子まで道連れにするのはやめる。ハンターなんて、ふざけた道に引きこむな」

「・・・智哉、お前・・・」

「・・・何? 僕が他人に口出しするのが、そんなに珍しい?」

そこに彼女が登場。能天気にも、サングラスを開発して映画もどきのハンターをやるう、と言いだした。

・・・そりゃ、あいつの機嫌が益々悪くなる訳だわな。

確かに俺はあの時、沙希を最も確実に仕留める方法を選んだ。奴らに隙が出来るのは、捕食中と、睡眠中。沙希が彼女の気を吸い始めたら、いや夢中になり始めたところがベストだったんだ。あいつを殺せる。彼女だって、すぐに病院に搬送すれば大事には至らないと思った。俺の妹だってそうだったんだから。

だけど智哉はそれを許さなかった。今になって、俺を詰る。なじ

俺はリビングのローテーブルに突っ伏した。

俺の黒さを知らない彼女は、さっきも疑いなんて微塵も無い笑顔を俺に振りまいていた。

知ってるよ、冷徹で最悪な下衆野郎だって事ぐらい。

でも沙希あいつを倒さないと、俺は前に進めないんだ。他人を思いやる気なんて、更々無いんだよ。

だけど自分が、こんなにイラつくなんて知らなかった。

真琴とヒトミの場合（電話）

「なんか失敗した」

「え？」

「なにかを失敗したらしい」

「何を？」

「それが分からない。だから困ってる」

「それは困るねえ」

「・・・やっぱ積極的過ぎたかな。でも相手は年下のくせに相当経験値高そうだったからさ。あれぐらいしないとインパクトないかな、とか思ってる」

「・・・随分と、初々しさに欠けるね」

「・・・（ヒトミがそれを言う？）」「

「香取くん？」

「・・・なんか彼を相手にすると、喧嘩を挑む様な気分になっちゃうんだよねえ」

「女子高生というのは、もう少し恥じらいとか躊躇いとか、或いは夢見る気持ち、なんて言うのがあるんじゃないの？」

「（自分も女子高生のくせに）・・・よっちゃんには、まさしくそうだったんだけどね。不思議な事に香取には、そう言ったモノは全く「礼相手には、夢も見ないの？」」

「ヤツを負かす夢は見る」

「・・・災難だなあ、彼も」

「闘争心が、こう、沸々と」

「・・・（ムキになってるなあ）どちらかが素直にならないと、進むものも進まないのでは？」

「・・・」

「ただでさえ厄介なオマケがくつついてるのに。自分で事態を掻き回してどうするの？」

「・・・そうか。負けるが勝ちって言葉もあるもんね」

「（まだ言ってる）それで？ 礼のどういう所に惚れたワケ？」

「・・・俺様なくせに、あたしに惚れてる所」

「よく言うよ」

自分の弱さに、自分で全く気付いていない所。切なくって、危なっかしくって、見られない。だからこそ、見つめ続けていたい。

男らしく現実主義な所も。年齢の割には、実は懐が広い所も。いつも全力で、周りにガンを飛ばしている所も（笑）、けどその瞳が真っ直ぐな所も。ものすごく優しい所も、隠れへタレな所も。笑うとあとけないくらい魅力的な所も。

心地よい声も。長い睫毛も、綺麗な瞳も。

何もかもが、愛おしい。

何だろうね、これ。

こうなったらもう、腹を括るしかないでしょ？

いっちょ、突き進める所まで行ってみましょう！

「頑張れ、女の子」

「けどどうやって連絡取ればいいかわかんないんだよねえ」

「携帯にかければいいじゃない」

「知らないもん」

「えっ？」

「・・・（そんな驚く？）」

「そう言う事もあるの？ 信じられない、イマドキ化石みたいな子達だな。教えてあげるよ」

「えっ？ 知ってんの？」

「焦る？（くすっ）」

Sweet heart 3

香取からの連絡が途絶えた。

元々、連絡なんて取ってはいなかった。でも毎日学校に行けば顔を合わせるから、気付きもしなかった。

香取は退院した筈なのに、学校に来ないのはどうしてだろう？
まだ体の調子が戻って無いかしら？ でもだとしたら、あたしに一言、なんか無い？ あ、でもそう言えばお互い、携帯番号も知らない。

ヒトミから貰った香取の電話番号を（なんであの子が知ってるのよ？）ジツと睨む。やっぱりあたし、あそこで何かやっちゃったんだ。地雷を踏んだのかもしれない。それとただ単に、こんなあたしに引いているだけとか？ ならあたしが電話なんかしたら勘弁してくれて感じだよ。既に終わってるじゃん。あー、やっぱりあんな事しなければよかった。

悶々と悩む、そんな日々が続いた。そんな時。

「みつともないわね」

唯と二人で教室移動から戻ってきた所を、ガツチリ待ち伏せされていた。あたしはいい加減疲れて、溜息が出してしまう。この一年生、どれだけヒマなのよ。あたしに執着していたってなんの進展も収穫も無いじゃない。彼女がやってきた事って全てが空回りしているのに、それに気付かないのかしら？

本当はなんとなく分かってる。無駄だとか意味が無いとかじゃなく、あたしの事が気になってイラついて仕方が無いんだ。あたしを自分の視界からなんとか消したくって、そうしないと自分の心が休まらないから必死なんだ。全てをあたしのせいになりたいんだ。

でもそんな事思われたって困るし。あなたの視界から消えるにはあと8カ月はかかるんですけどね。

はるなちゃんのキラキラとした挑戦的な目つきを、あたしはまともに見る事無く教室に入ろうとした。

あたしの隣では唯が、怯え半分怒り半分で彼女を見ている。

はるなちゃんは、無視するあたしを更に無視して、大きいくらいの声でハッキリと言った。だから廊下にいた周囲の生徒達にも聞こえていたと思う。

「ガツガツしてたから、逃げられてるし。彼女面して礼にまわりついた結果がこれでしょ？ 滑稽って言葉がピッタリ。あんまりにも見物みもので笑っちゃう」

「・・・あたし、あなたには同情するけど。謝罪以外は聞かない」
「本当、いい気になっておかしかったら」

すると唯が、我慢ならないと言った調子で彼女に言った。

「おかしいのはあなたでしょ？」

「あんたは黙ってて」

彼女は唯を一瞥もせず言い放つ。

あたしは彼女に一言、かなりキツイ口調で言った。

「黙るのはあなた。はるなちゃんよ」

自分でもわかる。あたし、目が座つちやつてる。こういう時のあたしの目つきはかなり悪いらしい。気をつける様に、とよくお兄やヒトミに注意されていた。

あたしは今それを、出し惜しみする事無く存分に、彼女に浴びせている。

「そうやってあたしにまとわりついて、これ以上自分を惨めにするのはやめなよ。いつか取り返しのつかない事になるよ？ 落ち着いて、自分を追い詰めるのはやめなさい」

「何バカな事を言ってるの？ あたしはあんたを追い詰めてるのよ」

「追い詰められてないよ。・・・例え誰を使っても」

あたし達の横を、山田くんが中森くん達と通り過ぎて行った。こっちを見て少し訝しそうに、そして少し心配そうにしている。

山田くんはあれから数日学校を休んでいたけど、出てきた時にはいつもの彼だった。優しくって爽やかで、あの時の記憶が全然無い。あたしに対してもいつも通り、控えめで柔らかな笑顔を見せてくれていた。彼があたしの事を好きかもしれない、という話は、あたしの心の奥底にそっと、大事に閉まっている。

あたしははるなちゃんに向き直ると、彼女の心を言葉と視線で貫くように、強く言った。

「自分と彼との問題を、あたしとの問題にすり替えないで」

彼、とはもちろん、香取の事。

はるなちゃんも動じず、鼻で笑った。

「礼に逃げられた事に気付きもしない癖に、偉そうに、バカみたい」
「・・・会話、成立しないね？」

そのまま彼女を置いて行こうとしたら、再び背中に声をかけられた。

「結局は元の鞘に収まるのよ。礼はイギリスに帰って、いつかあたしと結婚する」

「・・・」
「あなたは置いて行かれるんだから」

先程から彼女は、まるであたしに喧嘩を仕掛けている様に話す。余裕を見せ、まるでビルのビップルームから下を見下ろしているかのように、自分だけの特別感を漂わせて話しを続ける。

だけどそのタイミングや彼女の体全体から、それとは真逆な、むしろ切羽詰まった不安感というものを感じてしまった。あたしに縋りつき、ねじ伏せ、負かす事で自分を保とうしている。そうしないと、今にも彼女自身が崩れ落ちてしまおうかの様に。

あたしは再び溜息をついた。

やっぱり、この子を見捨てられない。

彼女を振り返ると、真っ直ぐに目を見据えて言った。

「はるなちゃん。あたし、あなたの事許してないけど嫌いじゃないから、今からアドバイスをする。香取と話をしなさい。今、あたしに言った事も、言いたい事も、思っている事も全部、全て。あなたが自分の思いをぶつける相手は、あたしじゃなくて香取よ？ 受け止められるのは、あたしじゃなくて香取よ」

「・・・」

「そして何をどうするのかを決めるのは、前も言ったけど、あたしたちじゃなくて香取本人なんだから」

はるなちゃんは言葉に詰まったようだった。

睫毛の長い大きな目であたしを見つめた。その瞳が一瞬、あたしに縋る様に見えた。

彼女はすぐに目を伏せ、低い声で怒ったように言った。

「礼はイギリスに帰るって決めたの。今すぐに」

・・・はあ???

「・・・今すぐ?」

あまりにも仰天して、妙なイントネーションで返してしまった。アタシニホンサンネンメデスって感じに。何ですって?!

あたしの驚き様に、彼女は形勢逆転を感じたらしい。
急にニヤツと口の端が上がった。

「そう。7月中にね。向こうの学校に戻って、そのまま大学に行くのよ」

「・・・7月中???!」

「・・・うっそ」

そんなの世界中で、学校終わってんじゃん！ 夏休みじゃん！
って、そんなんじゃない無くて!!

「・・・何の為の転校？」

何の為に日本に戻ってきて、何の為にまた外国に行くの？ 思い
つきり無駄な動きをしていて、嬉しいのは飛行機会社だけじゃん。
香取が動けばエアが儲かる、ってそんなんでも無くて!!

何なのよ、一体！

はるなちゃんは顔を上げるとすっかり得意満面、眉が吊り上がっ
て意地悪な顔いっぱい笑って言った。

「ほーら、何にも知らない。礼にとってあなたは、その程度の人間
だったのよ」

「・・・」

「二度と私達の前に姿を現さないで。なんてね、言わなくなつたて出
来ないものね、残念」

「・・・真琴・・・」

唯が心配そうに、あたしに声をかける。あたしがショックを受けて
いると思っているみたい。

・・シヨック、受けてますっ！ 思いつきり！！
ハッキリ言つて、泣きたいわよっ！！

ああ、でも先ずは目の前のこの小蠅こばえちゃんを追い払わないといけないし、こんな時でも悲しいかな、あたしの丈夫な両足は震えもしないのよっくっそ！

あたしは気を取り直すと再び相手を見据え、年上らしく毅然とした態度で言つてやった。

「はるなちゃん。他人を思い通りには動かせない。皆それぞれ意思を持つて行動していて、それを操ろうとしたつていつかは歪みが来るものなのよ。そして物事は常に変わる。人間関係だつてね。だから出来る事は、いかに臨機応変に対応するかつて事。・・覚悟した方がいいよ」

「それつて負け惜しみ？ 単なる遠吠えにしか聞こえないんだけど？ 訳わかんないし。あたしはね、自分のしたい様にするの。それこそあなたの指図なんか受けないわ」

ええ、負け惜しみですよ遠吠えですつ。自分でも何言つてるのか分からないわつ。

でも要はね、これで済まないわよあたしを舐めるな覚えてろつて事なのよっ！！

「人を自分の思い通りに動かすなつて事。あなたが好きで縋りついているのは昔の香取だつて事。しっかり今の彼を見てやつて、それ

に対応した行動を取らないと、いつかあなたにしつぺ返しがるよ
って事。・・・いいよ、通じないなら」

今度こそプイッと彼女から顔を背け、教室に入っていく。
その背後から彼女の小さな呟きが聞こえてきた。

「やっぱバカ」

失笑を含んだその言い方！ うーっマジムカつくっ！

教室で怒りを抑えていると、隣で唯が感心した様に言った。

「真琴って、実はデイベート向きなのかも」

「は？」

我ながら支離滅裂のこの話の、どこが??

ノックもせず数学教員室の扉を開けた。

「先生っ」

だけど加藤も馴れたもので、全く動じずに返した。

「あ、宮地。明日終業式の後、何が何でも面談やるぞ？」

「香取がイギリスに帰るって本当？」

加藤が、少し警戒した様に片眉を上げた。

「・・・あいつから聞いたのか？」

「本当なんだ？ 何で？ 何でまた今頃？ 日本に来て数カ月も経って無いじゃん」

「・・・ご家庭の事情らしい。俺じゃなくて本人に聞けよ」

「何か知らないの？ 知ってんでしょ、教えてよ」

「知らないし、知ってても言えないだろ、そーゆー事は」

「・・・あいつって、何者？」

いつの間にか俯いていたあたし。呟くように言ったその台詞に、加藤の呆れた様な声が降ってきた。

「・・・お前さ、聞く相手を間違ってるじゃないか？ ちゃんと香取本人に聞いて、向き合えよ」

「・・・」

「お前は他人とうまくいつている様に見せかけて、実は我儘娘で勝気だからな」。つまりん意地とプライドを張りあっているんだろう？ 我儘を隠していない分、香取の方が不器用で大変だろうけど、分かりやすいよな。ま、女子って言うのは色々大変そうだから？ しょうがないんだろうが？」

「・・・あたしにだって、色々あるんだい」

「人は誰でも色々あるんだよ。環境だって、心の持ち様だって人それぞれだ。みんな自分の持ち場で頑張るしかないんだよ。だからお前だって頑張っているんだろう、色々と」

耳の痛いお説教があたしを益々凹ませていたんだけど、『頑張っている』と言われて、その言葉一つで、あたしは顔を上げてしまった。ほら、あたしって褒められるの好きだから。

後から冷静になって考えれば、相手を落として、それから上げる、なんて典型的なマインドコントロール術だよ。ヒトミがお兄に使った手だわ、ちっ姑息なっ。単純なあたしにピッタリっ。

「・・・あたし、頑張っている様に、見える？」

「おう、見える見える。頑張ってるぞ、お前は。我儘でお気楽でいい加減な性格の割には頑張っている。偉いぞ」

「・・・我儘そうでお気楽そうで明らかにいい加減な性格の教師に、褒められちゃったよ」

「同類だからな。よくわかるんだな」

加藤はニヤニヤと笑うと、足を組んで椅子に深く座りなおした。そのままクルッと椅子ごとこちらを向き、肘を机に付いてあたしを見た。

「香取の家は、よくは知らんが、所謂お偉いさんとのパイプがぶつとらしい。つまり親父さんの権力が世の中に通用し、あいつは色々苦勞を背負ってるって事・・・多分な」

「・・・」

「そういう時はな、正面からぶつかっていったり寄り添ったりできるのは、宮地や中森達みたいな、同じ世代の友達しかいないんだよ。だから本当は、俺がとやかく言うよりも、宮地が自分の頭で考えて行動する方が、絶対いいんだ。香取の為にも、頑張つてやれよ」

「.....」

香取が、友達は少なそうだ、というのは何となく分かる。彼の性格がそうさせているんだとばかり思っていたけど、彼を取り巻く環境も、中々複雑みたい。お父さんが偉い人だとしたら、下心満載で彼に近づいてくる人達も、沢山いたのかもしれない。だとしたら、デリケートな彼はかなり傷ついた事だろう。

掛け値なしに付き合えるのは学校の友人。確かにそういうものかもしれない。けど。

だとしたら、あたしは？

香取のあの台詞、『お前が目を覚まさなかったら、俺、多分死ぬよ』って、あれが友人としての台詞だったとしたら？ それくらい大切な友達だと思っている、という意味だとしたら？

あたしがした事って、あのキスって・・・

ひょっとして、彼の気持ちを裏切った事に、なるんだろうか？

「俺って今、教師やってる？」

事情も知らない加藤が得意そうにあたしの顔を覗き込んできて、教師じゃ無かったらぶん殴ってやるうかと思った。

でもまあ、今日は珍しくいい事言ってたから、見逃してやる。

今日一日で色々な事を考えすぎた。最早何を考えていたのか分からなくなってきた。だけど心が重い。胸の底に鉛の玉が沈んでいて、目をこらさなくっても見える様だ。あたしは面倒臭い事が大っ嫌いで、だから今までこんな鉛玉は、見て見ぬふりをして過ごしてきた。

でも今回は、そういう事はしたくない。

香取は、身近な人間の欲求を無条件で聞く事が、彼らを繋ぎとめる手段だと考えている節があった。

『俺が出来る範囲で、相手が求めるものを与えるだけ』 『面倒を見てあげられない人達とは、お友達にならないって事？』 『そうなるの？ 知らね』

はるなちゃんを振った後の台詞を思い出す。

そこまで考えたあたしは突然別の事を思い出し、顔面蒼白になった。

キスの後のあたしの台詞、『これからは、香取の手は煩わせない

』^{『よ}

。 . . . も、もしかしてアレを、香取拒否宣言に取られたんじゃないあ . . .

手を煩わせない!! 面倒を見るな!! あなたに何も求めていません!!
側にいたくない、 . . . とか . . .

え？ これって、あたしが悪いの？ 香取が悪いの？ ど、どっちなの？

いやそもそも、好みでもない女にキスをされた時点で引いているのかもしれないし。

いやいや大事な友情を裏切られたって事で、傷ついているのかもしれないし……。

いやあーっもっもうダメっ耐えらんないっ！

てか何でこのタイミングで海外逃亡するっ？？

この状況を打破するにはただ一つ。香取と話をすればいいのよっ。

部屋に戻ったあたしは、深呼吸をひとつすると思いきって電話をかけた。

ところが。ヤツは電話に出ない。呼び出し音を8回くらい聞いた後、あたしはビビって電話を切ってしまった。

・・・なんで電話に出ないんだろう？ あ、気付かなかったとか？

一時間後に再びかけた。コール10回、やっぱり出ない。

・・・なんで電話に出ないんだろう？ あ、取り込み中とか？

一時間半後に再びかけた。コール・・・出ないじゃんっ！

今度のあたしはすっかり頭に来てしまった（全く我ながら忙しい疲れる）。こっちは夕飯も食べないで電話にかじりついているって言うのにつ。こっとなったら意地でも鳴らし続けてやるっ。てか、

こんなに気付かないなら留守電くらいセットしろよっ。

と、思わず口に出している自分に気付いて、ドツと落ち込んだ。あだし、ストーカーの特質、あるかもしれない……。

どれくらい鳴らしたのか分からない。彼が電話を取った時、もうあたしは完全なる戦闘態勢に入っていた。嬉しいとかそんなのは、どこかに吹っ飛んでいた。

「やっと出た」

「……お前か」

うんざりとした口調と溜息に、かなり傷つく。だけど、同時に少し驚いた。あたしって気付かずに、それでも電話に出なかつたって事? …あたしを故意に無視していた訳では、ないって事?

いやいや喜んでる場合ではない。まずは言いたい事を言わなくては。

「何で連絡来ないの? 学校を休むのはまだしも、電話も出ないし、あだし、あんたがイギリス帰る事も知らないんだけど」

「……カンケーねーだろ」

「いや無くないでしょ。……友達なんだから」

「……あ?」

『友達』

遠慮して考慮して熟慮して、この言葉を使った。これなら、香取

が逃げやすいと思って。

・・・ううん、違う。逃げやすいのは、あたしだ。

さっきから心臓がバクバクして、声が振るえそうで、頭に血が上って耳が熱い。

なのに香取は、あたしの台詞一つ一つに、何だかすごくイラついて返してくる。

・・・だから、そのイラつきの原因は、なんなのよ？

「友達に連絡するとか、事情を話すとか、普通しない？」

「・・・話してどーなるんだよ」

「どーなるんだよって・・・」

「ウザイ。切るぞ」

香取は低い声で短く言い切った。

そしてあたしはついに切れた。ブチっ。

（あたしは、親しい間柄で思い通りにいかないとすぐに切れる、典型的な内弁慶。自分が切れる事で現状を打破しようとする、自分だったらお近づきになりたくないタイプです）

「ちょっと待て」

やっとの思いで繋がった電話、そうそう簡単に切らせてたまるかっ切れてるのはこっちだっつーのっ。

「今どこよ？」

「は？ だから関係ないだろ、お前に」

「一人なの？ 一人なのね？」
「だからしつこいって……まさかお前」

見なくても分かる。電話の向こうで香取の顔色が明らかに変わった。あたしが今やろうとしている事が分かったらしい。
あたしは畳みかける様に言った。

「一人なのよね？ 一人じゃ無かったら、急いで一人になりなさい
っ今すぐにつ」
「ちよ、バカお前」

ブチっ。今度は電話をブチぎり。
待つてろ、ウジウジと拗ねてるヘタレ俺様野郎っ。

先日の実践のおかげで、あたしは難なく香取の所へ『飛ぶ』事が
出来た。
そこはお邪魔するのが2度目の香取のお部屋だった。
「げっ」

ベッドから上半身を起こした状態の香取は、携帯電話を耳から取り
落としそうになった。
でも今度はあの時の様に、全身で後ずさる、という事はしない。
その代わりに目も口も、思いつき見開かれていた。あたしは、と
いうと、そんな彼の膝の上。

窓が全開。爽やかな夜風があたし達の間を吹いてきて……。

「お前っ信じらんねえっそれ使うかっ!!」

香取はベッドから飛び降りると同時に、物凄い大声を張り上げた。絶対外に響いてる。あたしはコロン、と転がった。

携帯を持っていてる手であたしを指さす。驚きが顔いっぱいだけど、それ以上に怒りが表れていた。

けれどもあたしもそれに負けず、かなりの声を張り上げて怒鳴り返した。香取のベッドに座りこんだままで。

「あんたが拗ねて話になんないからでしょっ!」

「命削つてまでする事かっ! バカじゃねえのかっつふっざけんなっ! もう2度とするなっ! 絶対にするなっ!!」

割と広い部屋の空間ど真ん中に、香取が立って叫んでいる。不思議と部屋が狭く見えた。それくらい彼の存在感が大きい。久しぶりに見る、香取の存在感が大きい。

香取は、怒りに我を忘れていて、といった体で感情に任せてまくしたてた。あたしはそんな彼を初めて見たので、咄嗟に何も言えずに、見とれてしまった。

こんなに激しい彼は、初めて見たよ。

香取はハッと我に返ったようで、途端に気まずそうに視線を反らした。綺麗な瞳が、弱冠潤んでいる様に見えた。

「……じゃあ、話を聞いてよ」
「……」

彼は僅かに顔を歪めるけど、こっちを見ない。
それでもあたしは、彼を見つめ続けて言った。

「勝手に自分から、離れて行かないでよ」

お願いだから。

「……仕方ないだろ。俺は」

「面倒を見れない？ あたしの？ イギリス行くから？ だから用
済み？」

すると彼が一瞬、言葉に詰まったように口をきつく結んだ。その
様子を見て、あたしは本能的に確信した。あ、当たりはコレなのね。

「……お前が、もういいつつたんだろ……」

イラついたように、少し悔しそうに、だけどどこか恥ずかしそう
に呟く彼の横顔は、なんだか16歳の少年の顔に見えて、子供だな
と思った。

だけど、それが嫌じゃない、って思った。
あたし、香取っていう子供、かなり好きだ。

「言ったよ？ 自立するって。でもそうしたら、あんたの側にいちやいけないの？」

「・・・側って・・・」

今度は少しギョツとしたようにあたしを見た。イギリスまで追いかけて来るって思ったのかしら？

あたしは彼を見つめ続け、出来るだけ落ち着いて、彼の心に届くように、言い聞かせるように言った。

「自立したって側にいれるじゃん。べつに世話して欲しいから、願いたい事叶えて欲しいから、近くにいる訳じゃないもの。遠くにいたって寄り添う事は出来る。人ってそうでしょ？」

香取が眉根を寄せる。女の子みたいな大きな瞳が、あたしを見ている。それが少し揺らいで見えるのは、長めのウェーブの前髪が影を落としているからだけかもしれない。

「隣で一緒に空気吸ってて楽しいから、側にいたっていいじゃん。話していて楽しいから、連絡取り合ってたっていいじゃん。楽しいに理由なんて無いよ。だって楽しいんだもん」

「・・・」

「・・・友達って、そういうものだと思う」

最後であたしは、彼から目を反らしてしまった。

・・・ラストの一言は、余分だったかも。言い訳みたいになっちゃ

った。

気を取り直して、彼に再び向き直る。

息を吸い、思い切って言った。

「香取は、あたしといて、楽しくなかったの？ それとももう、今はつまらない？」

「……………」

言った……………！ ついに言った……………！ これはある意味、逃げ場が無い……………！

心臓が早鐘の様に胸を打った。自分の瞳もゆらゆらしているのが分かる。ど、どうしよう、これ、彼に縋りついている様にならないかしら……………。

香取は少し驚いたように、あたしを凝視していた。あたし達の間、に沈黙が流れて、やっぱり夜風が心地よい。

しばらくして、彼は一息ついた。

「わかったよ」

「え？」

「わかったつつつてんの。お前と連絡とりゃあいいんだろ？」

「…あ、うん、え？…何それ？」

「時差なんか無視して、夜中だろつが明け方だろつが電話してやるからな。覚悟しろよ。無視したら許さねえ」

「……………はあ」

ジロツと睨まれて、それはいつもの香取大王に戻ってるから喜ばしい限りなんだけど、あれ？ あたしが言いたかった事ってこれだったっけ？ 聞いたかった事ってこれだっけ？

あたしはポカン、と彼を見上げた。

いいんだっけ？ これでいいんだっけ？

なんでイギリス帰るの？ とか、どうして電話に出なかったの？ とか、あたしの事どう思っているの？ とか・・・

「ところでさ。お前、いつになったら俺に告白すんの？」

突然、爆弾を投下された。

あたしは目の前が真っ白になった。

「・・・はっ？」

「俺の事が好きなんだろ？ だったらハッキリそう言えよ」

彼は腕を組み、首を少し傾け、眉根を寄せての呆れ顔で上から見下ろしてきた。不服そうにあたしを眺めている。

あたしは頭の血の気がサーッと引いて、逆に顔は一気に熱をもつて赤くなってきた（何て器用な）。

いいいい今、何て言った・・・？

「……かつ……とり……」

「少しは距離置いてやったら焦るかと思ったのに。中々口割らねーのな。理屈ばかりこねて」

ジロツと睨んで、まだまだ文句を言い足りない、とばかりに口を尖らす。気のせいか、少しほっぺが膨らんでいる。

「……な……ちよっ……えっ……」

あたしは逃げ場も立場も無くなって、ただオロオロとしてしまった。思わずベッドから降りる。今頃？

おかげで真向かいから彼と対峙する格好となり、何だか益々緊張をしてしまった。

ど、どうしようっ。何を言われた？ これってどういう状況なのっ。あたし、なんて言えばいいのっ？

否定も肯定も出来ず、この期に及んで未だに彼の真意が分からないあたしは、探る様に彼を見上げた。でも奴は相変わらず口を尖らせているだけ。

「……あ……んたは、どうなのよ」

まるで悪あがきの様な台詞を言つと、彼は、あたしの目の前でイラツと片眉を上げた。

そして凄味を増した表情で、あたしを更に睨みつけて言った。

「お前が死んだら死ぬ、とまで男に言わせといて、これ以上何が聞きたいんだよ」

息が止まる、とはまさにこの事。

時間差で、あたしはどうしようもないくらいに顔が赤くなった。

「なっ・・・」

「気付かなかつたとは言わせねえ。どんだけ鈍いんだその頭は」

どうしようもない、と言つた表情で香取が溜息をつく。そしてこちを見つると、小さく「馬鹿」と呟いた。

・・・今の彼の台詞って・・・それってつまり・・・そう言う事？

あたしは更に顔が赤くなり、口が止まらなくなった。どうにかしてっ。

「あ、あんだだつて、あたしがキスしたのに無反応だったじゃないっ」

「間髪置かずにお前がベラベラ喋るからだろ」

「で、でもだからって、フツーは女の子からキスしたらどういう

意味だか分かんないっ？ 分かるでしょっ？ 分かるわよねっ」
「分かつてるよ。だから仕掛けたんだろ」
「・・・っ」

彼は今や、面白そうに笑いながらあたしを眺めている。

あたしは絶句した。し、し、仕掛けた、ですってえ？

電話に出ない事も、学校に来ない事も、全部そう？ ひよっとしてまさか、渡英話までそうだと言わないでしょうねっ！！

恥ずかしさの極致で、体のすべての機能がショートした。ひよっとしたら口から泡を吹いているかもしれないわ。

その時、彼がフツと笑みを消した。真顔。ドキツとする。

少年っぽさが消えて、すごく大人びた表情をしていた。どこか切なくて、けれどもかなり真剣で、強い眼差し。あんまりにも綺麗で、あたしは息を飲んだ。

彼がゆっくりと近づいてきた。あたしは益々鼓動が速くなり、耳障りなほどになった。出来る事なら後ずさりしたいのだけれど、何故だか足が動かない。竦んでいる訳ではないのだと思う。香取との距離が縮まるにつれ、泣きたいくらいに安堵と嬉しさが混み上げてきたのだから。

なのに、あたしのおバカなお喋りは未だ止まらないっ。

「あ、あたしの事、好きなの？」

「・・・」

「いつから？ ってそんな事聞いても意味無いかっ」

「……」

「あ、あたしは別に、あんたがイギリス行っても平気だし、平気と言つか、行くなつて言ってる訳じゃなくって」

「……」

「あんたとはそーゆー関係抜きでも一生付き合えそつというか、付き合つ覚悟があると言つか、だからああいう事も簡単に」

クイツと顎を摘まれた。

上を向かされ、低くて艶っぽい声が降りてきた。

「いいから黙って、目、閉じろ」

そう言われて余計に顔に血が上り、目を見開いたままフリーズしてしまった。

なのに閉じられた彼の目蓋を見て、何て睫毛が多いんだ、バツサバサで羨ましい、なんて呑気に思ってしまった。

スツと通った鼻筋と形良い唇が近づき、ゆっくりとあたしの口を塞ぐ。

しつとりとして柔らかいそれに戸惑っていると、ざらつとした彼の舌を唇に感じ、ぞわり、とした。

知らずに肩がビクツと震える。

すると彼は唇を離し、あたしを見た。そしてクスツと、悪戯っぽく笑った。

それすら、ゾクつとくる。

再び彼はあたしに顔を寄せると、今度は目元や頬など、顔のいた

る所にキスを落としてきた。

まるであたしを綿わたでそつと包み込む様なそのキスに、目眩を感じる。初めは緊張して体が強張っていたのだけれど、次第に力が抜けてきた。ポーっとする。心地が良い。心がふわふわと浮かんで行きそう。

顔全体に彼の唇を感じ、彼の整髪料の香りが鼻孔に入ってきた。

こんなに優しいキスがあるなんて……。

蕩けそう。そう思ったあたしは、いつの間にか目蓋を閉じていた。すると彼の、誘う様な囁き声が耳に響いた。

「お利口さん」

それと同時に再び口を塞がれた。今度は彼の舌が容赦無く、あたしの口内を掻き回してきた。

ビックリして一瞬体を引いたけど、彼の力強い腕に阻まれる。彼があたしの舌を甘噛みして、絡み上げた。

その感触と、そこから伝わる甘い電流にあたしは思わず声が出てしまった。

「……んっ……」

かくん、と身体力が抜ける。ちょ、ちよつと、腰が砕けるの早くないっ？

けれどそんな事を考える余裕も与えてくれない。香取はあたしの項うなじを支えると、更に深く唇を重ねてきた。

柔らかくなぞられ、激しく絡まれ、優しくくすぐられる。

甘くて、熱くて、痺れて、訳わかんない。

さつきと全然違う。蕩ける、ってこういう事だ。

あたしは彼のシャツを握りしめるのが精いっぱいだった。それだつて、指が次第に開かれていく。

ヤバい、どうしよう・・・もうダメ・・・。

唇が離れた時は、あたしは香取に完璧に、抱きかかえられていた。あの丈夫な脚が腰から使い物にならないなんて、信じられない。

為されるがままの長いキスに、あたしの唇から唾液が零れていた。彼はあたしの顎下から唇にかけて、スーッと舐め上げた。

「あつ・・・」

思わず出た自分の甘い声に真っ赤になった。

だつて香取が、ニヤニヤしながらこつちを見下ろしている。

彼の瞳も、僅かに熱を孕んで潤んでいるけど。

「ご感想は？」

彼の腕に包み込まれ、甘やかに覗きこまれ、あたしはもう、無条件降伏。

「・・・参り、ました・・・」

これは絶対、この間のあたしの不意打ちキスに対抗するモノだ。仕返した。だつてあの時の香取はあたしになされるがまま、呆然としてちよっぴり動揺していたもの。

なのに今ときたら。なんなのよ、このキス。あんた本当はいくつなの？ どんだけ出来上がってる16歳なのよ。

唇に余韻が残る。体中が疼いている。
勝ち誇ったようなその笑みに、あたしは最後の抵抗を試みた。

「あ、あんたこそ、あの時の感想は？」

「ん？ 俺？」

彼は面白そうに、あたしを見下ろした。

そしてあたしの耳元に唇を寄せると、ゾクゾクする様な甘い声で言った。

「『女に襲われんの、俺初めて』」

あまりの恥ずかしさにカッとなったけど、それより早く、香取に抱きしめられた。

きつく、きつく抱きしめられて、それはさっきのキスより余裕が無くて、

まるで小さい子供に抱きつかれている様だった。縋りつく、というか。

あたしは少し、驚いた。どうしたんだろう？

だけど彼の腕は緩められないので、顔が見えない。

だから、まあしょうがないか、抱きしめさせてあげるか、

なんて思ってみた。

あたしって彼に完璧にヤラれているな、と苦笑いをして。
大好きすぎる、かも。

Leave me or love me ?

今日は終業式。やっと学校から解放される。

それはつまり、誰があたしの鞆に魔法アイテムを入れたか、という犯人探しが暗礁に乗り上げるのだけれど、その分危険も減る事になる。

でもあたしには、もっと複雑な事情もある。今年の夏は、気分が暗くなりそうだ。

きつとそれは、受験生って言う理由だけでは、ない。

制服に着替えている時に、携帯が鳴った。見るとヒトミからメールを受信していた。

『実は口止めされていたけど、今日、唯ちゃんに会いに学校に行く。何かあった？』

すごく驚いた。急いで返事を返す。

『唯に？ なんで？』

『知らない。全く』

『あたしも知らない』

『じゃあ、学校で。他言無用で宜しく』

携帯を閉じて、しばらく考えた。唯があたしに話せないで、ヒトミに話せる事って一体なんだろう？

・・そんなに頼りない？ あたしって・・。ズドンと落ち込ん

だ。

朝、いつもの車内で性格ひねくれ男と二人つきり。いつも通り勝手に一人で眠り込んでいる水島智哉を尻目に、あたしは地理のポケツト問題集を開いた。

結局香取が迎えに来たのはあの日だけで、それについてこの男にチクチクと嫌味を言われ続けてきた。だって事情が複雑だったんだもん、しょうがないじゃん、とあたしは心の中で膨れていた。

あの時は、ほら、あの後騒ぎがあつて香取が大怪我しちゃったし。その後は色々と、擦れ違いがあつて。

でも今は・・・その擦れ違いも解消されたし・・・解消っていうか、更なる関係に進展、っていうか・・・。

あたしは昨日の事を思い出した。目は既に、問題集なんて見ちゃいない。唇が少し開いてしまった。あの感触が蘇る。あたしキス、弱いかも。ダメだ、朝からゾワつとくる。うわ、耳元の彼の吐息がリアルに・・・

「ちょっと、一人で妄想するの、やめてくれない？」

いつの間にか隣の男が目を覚まして、胡散臭そうにあたしを見ていた。いやあつ！

「読んだのっ？」

「読むかつ。んな下らない事で力使うかよ」

「じゃ、なんで分かるのっ？」
「・・・あほか・・・」

心底疲れる、と言った表情で水島さんが呟く。そしてあたしを見ると、本当に嫌そうに言った。

「考えがただ漏れなの、あんたは。漏れちゃってんの、ドバーっと広がってんの、そこら中に」

そう言ってあたし達の足元に両手をちらつかせ、池でも広がっていそうなジェスチャーをする。

あたしは恥ずかしくって、もう、返すお言葉も無くって、ちっちゃくちっちゃく、なってしまった。

・・・ヤバい。やっぱり変態っぽい表情、してたのかしら？

すると彼は、今度は諦めた様な顔をして、シートに頭を持たせて上を仰いだ。

「ま、良かったんじゃない？ 幸せそうぞ。こっちも学校にお守りがいれば一応、安心だしね・・・今の君なら無敵って感じもするけど」

うーん、確かにあの日以来、あたしは自分の能力に自信とコツを掴んでしまった。

もうこの一連の騒ぎが収まれば、正直言って水島屋敷を卒業できそうな気がする。

水島さんは顔だけこっちに向けると、美人な顔を珍しく真面目に言った。

「僕が聞く事じゃないけどさ。どうするの？ 帰るんでしょ、彼？」

・・・どこから仕入れたの、その情報・・・。

「・・・どうもしない・・・っていうか・・・」

「どうしようもない、ていうか？」

「・・・なんか、楽しそうじゃない？」

「何で僕が楽しむの？ 筋合い無いし関係無いだろ。何言ってるの」

「・・・」

「・・・」

「だから面白い？」

「うん、そう」

即答するなやつ！！

ギツと彼を睨んだのだけれど、彼は軽く肩を竦めただけで、窓の外に視線を移した。このストボケ腹黒美形めっ。

ここは例のフェンス前。思えばちよっぴり久しぶりに来たものです。

別に待ち合わせた訳ではないけれど、香取が登校するならここに

いるのかな、と珍しくあたしも正門から歩いてきたら、やっぱりここで一人で、何でも無かったようにコンビニ朝食を広げていた。で、あたしも何となく隣に座り、何となく彼の朝食をちよるまかしていたんだけど。

気付いたら、この体制。後ろから、ぎゅうう、と腕をまわされております。随分長く。

……いつまで続けるんだ、これ？ 誰か来たらどうするんだ、これ？

「……ちよつと……」

「……」

「……ちよつとつてば」

「……」

「ちよつと香取っ」

「んー」

あたしの肩に頬を乗せているであろう香取は、一向に腕を緩める気配が無い。

信じられない事に昨日より一転、彼はとんでもない甘えたさんに变身していた。見事過ぎる。

しかも何故か、この体制が好きならしい。いや、こんな香取も新鮮で可愛くていいんだけど……。

「何やってんの？」

「見て分かんない？ 抱きしめてんだろ」

「……むしろ抱きついてる様な……」

「そつとも言っ」

「・・・やっぱ現実なんだ・・・」

「何が？」

「香取が昨日に引き続き、壊れている・・・」

「何とでも言えば？」

「ちよつとつてばっ！ わっ」

肩を掴まれくるん、とひっくり返され、芝生の上に仰向けにされる。

太陽が遮られた、と思つたら、香取の前髪が額にかかった。

「やっ・・・ここ学校・・・」

途端に落とされる、甘い、甘い、甘ったるい、キス。

昨日散々躰けられた(?)為、あたしは簡単に目を閉じてしまった。その目蓋に、香取の睫毛が触る。

目を閉じると余計、キスに集中してしまう事が分かった。頭の中まで全て、香取の舌の動きに支配されてしまう。もうそれしか考えれなくなつて、そしてそればかり、追い求めてしまう。

そんなあたしを見透かしたように、香取があたしの弱い部分をなぞつて刺激した。

これも全部、昨日知られてしまった事。あたしも知らなかった、あたしのキスの癖。

「・・・ふっ・・・」

あたしは自分から溢れた声に、聞こえないフリをする。

そしてやっとな解放されても、あたしは自分を戻すのに、いつも時

間がかかってしまう。

そんなあたしを彼は、いつもどこか切羽詰まった瞳で、でもどにかやるせない表情で見つめている。

手を、あたしの頬に添えて、包み込むようにしながら。

「なっ なっ 何て事すんのよっ!」

やっとの思いで反撃しようとしたら、香取はシレっと答えた。

「しょうがないだろ。お前が、キスして欲しそうな顔、してたから」

「・・・ なっ・・・ なっ・・・」

何でバレてるっ? じゃなくて、何様??

「金魚みてえ。顔赤くして、口パクパクさせてる」

香取は相変わらずあたしの上で、両手をあたしの脇についたまま、綺麗で不敵な笑みを浮かべた。

「俺の事、誘ってんの?」

言っなりあたしの唇をぺロっと舐める。

あたしは時間差で覚醒した。

「んな訳あるかばかやろーっ!」

思いつきり香取を突き飛ばし、やっとの思いで起き上がった。

「学校でっ！ しかもこんな朝っぱらからっ！ しかも外でっ！
誘う女がいるかっ！」

「何だそれ。学校じゃなくなっつて朝じゃなくて、室内だったらいいの
かよ？」

「ええ??？」

思わず目を向いちゃって、そんなあたしに彼は苦笑いをした。

「冗談だよ。そんな顔して本気に取るな」

その笑顔に、不覚にもキュッと切なくなった。あたしは唇を僅かに
噛んだ。

香取は、焦っているのだと思う。

・・・自分が、ここを離れる事に。あたしの側にいられなくなる
事に。

あたしは昨日の会話を思い出していた。

「俺、三日後にロンドンに発つんだわ」

何度も何度もキスを交わした後、低い声で呟く彼は、やっぱりあたしを後ろから抱きしめていた。

あたし達は、部屋の床に座り込んでいた。

「……」

「見送り、来なくていいから」

そう言う彼がどんな表情をしているのか、あたしからは見えない。後ろからまわされた彼の腕がそっと持ちあがり、あたしの頬や唇、首筋を優しく撫でた。

「……香取……」

「やる事いっぱいあって。多分、夏休み中に日本に帰る事は難しいと思う。そのまま向こうで進学する事になるだろうし、そうなる……」

掠れた声で話し続ける香取。顔も見えないし、抑揚のない喋り方をする。

だからこそ余計に切なさが募ってきて、あたしは最後まで聞けなかった。

「……そーれはよかったっ」

「・・・はっ？」

彼の手が止まる。

あたしは夢中で騒ぎ立てた。

「いやー、あなたの勢いにほんとビビってたんだよね！ 貞操の危機って言うか、このまんまじゃ性少年の餌食にされちゃうって言う感じで、ヤバかったもんっ！ 今、このタイミングで距離を置くのは非常にいい考えだ！ よかったよかった！ 安心安心！」

もちろん、これも本音ではある。香取のキスはあまりにも良すぎて、このままではあたし達はすぐに一線を越えてしまうと思った。

でも、だから何？ 越えられるなら越えちゃいたいよ。

行かないで。側にいて。ずっといて。ここにいて。

あたしは今まで未っ子の甘えったれで、周りの人達から常に、愛され、あやされ、気を使ってもらってきた。だからあたしは自分の我儘の使い方と、引っ込め方を知っている。

香取は、そんなあたしが多分初めて、『愛おしく思いやる』相手だと思っただ。

「・・・ちよっつと行って帰る、って訳じゃねえんだぞ？」

「知ってる知ってる！ イギリスだもんね！ 遠いよね！」

「・・・まさか『飛んで』こねえよな？」

「まつさか！ 地球の裏側っ！ 無理無理っそこまで化け物じゃないもんっ」

「・・・次、いつ会えるかも分かんねえんだぞ？」

「大丈夫！ ほら、文明の利器！ 電話！ メール！ ね、それでお互い、ちよつと冷静になろう！ ね！ 落ち着いたら香取だつて、あたしがそんな命賭ける程の女じゃないって気付くかもしれないし、前みたく金髪美少女にいつちやうかも知れないし、それにほら、あたし達つてそんな事で友達やめたりしないしっ」

この場合、年上のあたしが大人にならなきゃいけない。大丈夫、上手く行くよ？ だから不安にならないで？ あなたは一人じゃない。どこにいたつて、一人じゃないんだから。

寂しがり屋の香取が、少しでも落ち着けるように。彼の気持ち、揺らがない様に。

それにこのままだと、あたし達は暴走する。・・・あたしは溺れる自信があるし、狂った香取なんて恐ろしすぎる。きやあっ見たいかも。

「・・・マジ切れた」

「はい？」

「さつきから聞いてりやなんだよ？ 俺と離れるつて嬉々として喜びやがつて。お前、俺の事舐めてんのか？」

腕が緩んだ。背中にかかる声が低い。ひえっ。

「そ、そんなとんでもない。ただあたしは自分の操みを守る事に必死で」

「あっち行ったら俺が何するか分かんねえ、みたいな言い方して、お前の方こそどうなんだよ？俺がいない間、あのにやけた野郎と同じ屋根の下で暮らして、本当に何も無いつて言えるのか？あいつは好きでも無い女に、その場の雰囲気で手が出せる男なんだぜ？それに山田だつて分かったもんじゃねえつ。大人しい顔して、腹に何か抱えてないとそこまで豹変できねえだろうがよっ」

・・・そ、そつちに来るとは・・・。

思わず振り返って彼を見た。すると彼は慌てて目を反らした。

じーっと見てると、手で口を覆い隠した。相変わらず視線をずらしたまま。だけど香取、表情読まれたくないなら、隠すのは口元じやなくて、目、だよ？

「・・・ヤキモチ・・・」

「・・・あーそつだよっ悪いかっ」

「・・・嘘みたい・・・こんなに素直な香取は、初めて見た」

「・・・」

「拗ねてる。うわー、可愛い」

「可愛い言つな。マジ襲つぞ」

「げっ」

逃げようとしたけど、更に強く抱きしめられた。最早これは首絞めだよ、苦しすぎるよお兄さん。

「あたし達お互いさ、先の事を約束し合うにはまだ早すぎるよ。いいじゃん、行き当たりばったりで。なる様になるから。ね?」

お願い。乗っかって。

「・・・随分、余裕だな」

「だって香取はあたしに会いに来るもん、絶対」

「・・・何だよそれ」

あたしは深く、息を吸った。

さつきから嘘は言っていない。ただ、本当の事でも、どう組み合わせでどう言うか。それで本音はいくらでも隠せる。

それはあたしが、人生で会得した技なの。

「香取は、やると決めたらやる。それが理に適かなったりすべき事だとしたら余計に、迷いも無く、ね。イギリスに帰るのだって、香取なりの『正しい』理由があるからなんでしょ? だから止めない。それに香取なら、絶対隙を見つけてあたしに会いに来るよ。それぐらいの力を持つてる」

香取の腕が急に緩んだ。

再び何となく振り返ると、今度の彼はあたしをマジマジと見ていた。

「・・・知らなかった。俺って随分、信頼されてんのな」

「だってあたしに会わないと、寂しくって死んじゃう。でしょ?」

クスツと笑うと香取はもつと目を見開き、それから視線を天井に向けた。

ほう、と溜息をつく。

「お前の前だと、調子狂う・・・」

よかった。嬉しい。それで、いいんだよ。

「とりあえずさ、一緒に下着、買いに行こうぜ？」

「しつこいっ」

あたしは音だけ派手に、彼の頭を叩いてみせた。

彼は「痛い」と言っつて、ふくれて見せた。それが切ないほど、可愛かった。

The closing day

予鈴が鳴った。香取がさっさと荷物を片付ける。

「行こうぜ」

そう言ってあたしの鞆を持って立ち上がった。あたしはそれを見上げる。この姿、今日で最後なんだ。あさってにはいなくなっちゃうんだ。

彼はあたしに手を差し出し、少し首を傾け、優しく言った。

「来いよ」

「・・・」

あたしは立ち上がると、黙ってその手を取った。すると香取は、指を絡める様にして手を繋ぐ。

あたしは喉がキュツと詰まった。唇を噛み締める。

・・・何でこんなに、優しくなっちゃったんだろ。

もつと早くに、気付けばよかった。

手を繋いでいた時間は一瞬で、人目に付く所に出ると、彼は自然に手を離れた。

その代わり、あたしを見る目がひどく甘い。だけどどこか、からかう様な眼差し。ドキツとすると、面白そうにくつと笑って前を向かれた。なによう。

教室に入って鞆を置くなり、香取が言った。

「俺、はるなんとこ行ってくる」

「え？」

「あいつにきちんと謝ってくるわ。なんか俺、そういう事が欠けていた様な気がすつから」

「・・・」

「謝ってどうにかなる話しでもないんだけど」

「いいんじゃない？」

一瞬視線を下げた香取に、あたしは努めて明るく言った。

「何をどうやったって、香取がはるなちゃんを大事に思っているって事は、伝わっているよ。だっていつでも真摯だったし」

「・・・シンシ？」

香取がキョトン、とする。

そういうリアクションが来るとは思わなかったなので、あたしも彼を見つめてしまった。

「・・・ああ、ジェントルマンって意味じゃないよ。というか、自分でそこ引っかかるんだ」

そっか、日本語がちょっと弱いんだ。これは使えるぞ。あたしが最近覚えた単語を、後で使ってみよう。満身創痍とか突貫工事とか懐柔政策とか、うふふ。

彼が出て行った後一人でほくそ笑んでいると、山田くに声をかけられた。

爽やかな彼は、遠慮がちに教室の出入り口を振り返っていた。

「香取、出てきたの？」

「うん。そうみたい」

「怪我は大丈夫なの？ 肋骨？ だっけ」

「うん。大丈夫そうよ。よくわかんないけど」

「さつき会ったけど、機嫌良さそうだったぜ」

中森くんもやってきた。手ぶらだ。終業式とはいえ、舐めてる。さすがは兄貴。

「なんか落ち着いていた。角が取れた、っていうか」

「・・・へえ？」

兄貴の意外に繊細な発言に、あたしは感嘆の声を上げてしまった。中森くん、そんな感性持つてんだ？

「とげとげしさが無かった、って感じだった。あいつ、転校してきた時は目だけで喧嘩、売ってたたる？」

「ぶっ」

思わず嘖き出してしまった。目だけで喧嘩、売ってた売ってた！

「そうか。喧嘩売られていたのはあたしだけじゃなかったのか」

「違うよ。皆に売ってたよ。ただ買ってたのは宮地さんだけ」

「・・・嘘。何それ」

「いちいち買ってるから俺らもビックリしたよ。宮地さんってもつと、おとなしいって言うか、事無かれ主義で見ても見ぬふりするタイプかと思っていたから。あんなに熱い女子は初めて見たかも」

「うわーっ、何だそれ、カッコ悪いっ。なんだか凄く恥ずかしいっ。あたしは耳を手でふさいで、目をギューっと瞑った。」

「ご、ごめん、中森くん、それ以上言わないで」

「だから香取は、いいんだろうな、宮地さんが」

「・・・」

閉じていた目を開けて、中森くんを見てしまった。てかあたし、聞こえてんのバレバレじゃん。

「あんな難しそうな奴に、あそこまで突っかかっていく人間、今までいなかっただんじじゃないの？」

「・・・」

中森くんってすごいなあ。伊達に苦労して二年年上じゃないんだなあ、って思ってしまった。

彼が見せる包容力って、単純に年齢だけじゃないよ。経験とか、性格とか、全部だよ。だってお兄にないもん、こんな素敵な包容力。

・・・水島智哉にいたってはさっぱりだな、うん。

山田くんが隣で、首をひねりながら呟いた。

「そっか。香取って今日は機嫌がいいんだ？・・・なんか僕、すっげー睨まれた気がしたんだけど」

「それはお前、あいつの逆鱗に触れる様な事、何かしたんだ」

「え？何をだよ？」

「知らねーよ。怖えぞ、覚悟しとけば？いきなり殴られるかもよ？」

「ええー？僕、喧嘩苦手だよ、どうすればいいんだよ？」

「彼女に頼めば？」

中森くんはニヤツと笑って、あたしを親指で指さす。

あたしが少し驚いていると、山田くんはあたしを拝みながら言った。

「お願い、助けてっ宮地さんっ」

「殴られたら、殴り返す。あたしもやった」

そう答えたら、山田くんはギョツとしたようにあたしを凝視した。

「・・・香取に？」

「・・・そっぴや香取には、殴られる前に殴る、だったな。そもそも彼に殴られた事、ないし。」

「・・・あたし彼を、何回殴ったっけ・・・？」

「・・・今更ながら、あいつの女の趣味って何なのよ・・・。」

「・・・いや、別人に」

誤魔化し笑いにもなっていない様な微妙な笑みを浮かべると、山田くんは口がふわん、と開いてしまった。目はあたしを凝視している。

・・・百年の恋が冷めた瞬間、かしらね。しょうがないわね。だけれどなんだか悪い事をしてしまった気がするの、どうしてかしら？

「・・・こっわー・・・」

「暴力の応酬は、何も生み出しませんよ？ もっと文明的に解決しましょう」

引いてる山田くんの隣で、中森くんがあたしをからかった。動じていないらしい。それもそれで傷つく。うーん、複雑な乙女心。

その時、唯が登校してきた。気のせいか浮かない顔をしている。あたしはヒトミからのメールを思い出しながら、いつも通り明るい口調で声をかけた。

「唯。おはよー」

唯は挨拶もそこそこ、あたしに近づくと、耳元で小声で囁いてきた。

「ね、真琴。今日、加藤先生と面談するんでしょ？」

「え？ あ、そうだったかも。全然忘れてた」

「どこでやるの？」

「・・・知らん」

「・・・待ってても、いい？」

ちよつと神経質そうなその口調に驚いて、あたしは顔を離して唯を眺めた。

唯はなんだか、不安そうな表情をしている。

あたしはどう出たらいいか、一瞬迷ってしまった。

「・・・いいよ、もちろん。どうしたの？　なんか相談事でもあるの？」

「・・・うーん・・・そう、かも」

曖昧な苦笑い。

それを見てもあたしは、唯が何に困っているのか、或いは心配しているのか、さっぱり見当がつかない。

だから唯と同じような曖昧な苦笑いを、そのままそっくり返してしまった。

721

「あたしは頼りないもんね。役に立てないかも。ごめんね？」

「そんな事ないよ！」

焦ったようにあたしの顔を見上げる。

ヒトミから連絡を貰った事、バレたかな、と思いながらも、あたしは続けた。

「でもあたしはコンビニ女だから。目いっぱい利用してよ」

「・・・どういう事？」

「24時間開店中」

そういつてウィンクをしてみせる。
唯は何故だか、少し顔を赤くした。

「便利さが取り柄だから。あ、あと品数も豊富？ 大概の事なら驚かないよ、大丈夫！」

「・・・真琴・・・」

バンバン、とガサツなくらいに背中を叩いて見せる。唯はあたしにつられて、いつもの控えめな笑顔を見せてくれた。

でもあたしの頭の中は、もう既に、香取の事でいっぱいだった。
ごめんね、唯。

はるなちゃんに上手く、言えているのかな？

The closing day 2 (前書き)

今回の話中で、医療に関して不適切な発言があります。
物語上の演出であり、事実とは全く異なる事をご理解下さい。

The closing day 2

「・・・いつまで待たせるんだー・・・」

数学教員室の前。廊下にあたしは両足を投げ出し、ぺたっと座り込んでおります。

夏とは言えさ、こうやって冷たい廊下にお尻をつけてると、流石に冷えるのよね。だけどパンツ見せる様な座り方出来ないし、加藤がおっそいんだもーん。いつになったら来るのよっあの教師はほんつとに時間にルーズなんだからっ。

・・・パンツと言えば。ここ最近、国旗パンツを履いていない・・・くやしけれど・・・くやしから・・・香取には言わないけど・・・いかにもって感じで・・・でもレースの白・・・見せないけどっ。

いきなり携帯のバイブが鳴って飛びあがった。夕、タイミング良すぎっ。

見るとヒトミからのメールだった。

『面談終わった？』

何で？ 唯と一緒になのかな？

『まだ』

するとまたメール。早っ！ と思ったら今度は香取からだっただ。『まだか？』

・・・この人達、一緒にいるの？ 何、この気の合い方。

『まだ』

返信した瞬間に受信。まさかと思っただらヒトミから。
『せっかくだから帰り遊ぼう』

『…実はデートが…。でもちよつとくらいなら…。』
『…先約ありにて、行き先次第』

また直後に受信。ひよつとしてやっぱりの香取。
『早く終わらせる』

『…何なの、さつきからこの二人は？ どうかで繋がってんじゃない？ でもここついてないよね。』
『相手がいなきゃ終わらせようが無い』

香取 『じゃ、ほっとけ』

返信 『ほっとけるかっ！ カラオケ行きたい』

ヒトミ 『成程。からかいたい。どこがいい？』

返信 『カラオケ』

ヒトミ 『カラオケは嫌い。知ってるでしょ』

香取 『カラオケは嫌いだ。いいから早くしろ』

「あーっもっつ！ こいつらが付き合えばっ！！」

あたしは携帯に向かって怒鳴りつけた。

「じゃああたしは唯と二人でサシカラするっ！ あんた達二人はカフェで何時間でもお茶してろっ」

叫びながら、勢い出力最大でメールを打つ。そして二人に一斉送信したらすぐに返信が来た。

『甘いのは嫌い』

『なんであいつと茶を飲むんだよ』

「知るかつ」

気付くと教員室のドアが開いていて、加藤が呆れた様にあたしを見下ろしていた。

「・・・宮地って一人でも賑やかなのな」

「・・・センサー遅すぎ」

「悪い悪い。色々手間取っちゃって。ほんと申し訳無い。場所、ちよつと離れるぞ」

「え？ ここじゃないの？」

「落ち着かんだろ」

そついうとスタスタと歩いて行っちゃう。あたしは慌てて立ち上がると後を追った。

行きついた先は何と4階の端っこ。旧校舎で使っていない教室もちらほらあるから、日当たり良好の割には人影が少ない。この部屋の隣も空き教室になっていた。生徒数が一時期より減ってしまったからだと聞いた事がある。

古びた表札で『数学資料室』と書いてあった。

「何ここー？ あたし在校三年目にして初めて来たよー」

「よかったじゃないか。そついう俺も滅多に来ないけど」

「何これ？ 数学に資料なんか必要あるの？」

「だから使わないんだろ。ここしか開いて無くて。でも最近掃除したばかりだから・・・はい、どうぞ」

「教師と生徒が密室で二人つきりー。手を出さないでよー」

「・・・お前はなんつーか・・・太い性格してんなあ」

加藤は呆れた様に言いながら部屋を閉めた。

そして狭い室内で少し横歩きをして、小さな机に回り込んだ。椅子に座ると、厚いファイルを開く。あたしに、座れ、と顎で合図した。

「さてと。まずは志望大学・・・東都大医学部。宮地正気か？」

・・・人を散々待たせておいて、開口一番の台詞がそれかい。

「それはあたしのガッツを褒めてくれた言葉、としましょう」

「そもそも宮地はなんで医学部なの？」

「ウチが代々医者家系だからです」

「・・・たしかお祖母さんって・・・」

「獣医です」

「・・・そしてお父さんって・・・」

「歯科医です。婿養子です」

「・・・で、宮地は何になりたいんだ？」

「美容整形外科。でも手先が器用じゃないから精神科医かも」

「・・・何で？」

「二つとも、現代社会が求めているものだからですよ、先生。儲かりそうでしょ？」

「・・・現代社会が求めているものと言ったら、産婦人科とか小児

科じゃないのか？」

「えー？ それって大変なんですよ？ あたし色々背負っちゃってるのに、これ以上命縮めたくないよ」

「・・・」

ありや。黙っちゃったよ。どうしたんだろ。

加藤は机に肘をついて、片手で軽く額を覆った。

「・・・お前の夢って、何だ？」

「不自由の無い老後と、世界旅行。これは譲れません」

「・・・」

「もう帰ってもいい？ あたし結構人気者で、さっきからメールがバンバン入ってるんだ」

「・・・何から話せばいいんだか・・・」

何だか一人でブツブツ言いだした。あたしは無視して携帯を取り出す。早く戻りたいなあ。

加藤は分厚いファイルから一部分を取りだした。多分あたしのペー
ージね。

そしてそれを見ながら片肘をついて、気だるそうにというか、投げ出した様な口調で言った。

「まずさ。食いつばぐれの無い比較的楽な医者なら、町医者としての内科や眼科だろう」

「えっ？ なんで？」

思わず顔を上げて、加藤に食いついてしまう。だってそんな話初めて聞くもん。

すると加藤はうんざり、と言った表情で言った。

「老人相手に、患者が慢性的に通ってくるからだよ。大変そうなら総合病院にまわせばいいし、老人は元々先が知れてるだろ？ 診断が間違っていた、って責められる確率も、他の診療科よりは低いと聞くし？」

「おおーっ。先生、悪どいねえっ」

「……宮地に言われたくないよ」

加藤はついに頭を抱えた。「悪どい」と言われた事が堪えたっばい。肘について額を両手で覆ったまま、上目遣いであたしを見てきた。

「それに宮地。お前、医者には向いてないんじゃないのか？ 神聖な職業としてはあるまじき動機だろ、それ。お家の人は何て言うてるんだ？」

「何にも。だって言ってるないもん」

「……おい……」

そして最後には机に突っ伏した。頭をゴツンと下につけて動かなくなる。しっつれいなー。

あたしは無視して再び携帯をいじり始めた。しばらくして加藤は、はあ、と大きな溜息をついて、顔を上げた。

「俺は、責任感の薄いお前に、責任ある職業は向いてないと思う。医者じゃなくつても豊かな老後は過ごせるぞ。考え直してみれば？」

先生の顔は至って真面目。本気で言っているらしい。
あたしは勘で考えた。確かに。全てが正論だわ。

「・・・そうね。東都大、やめる」

「え？ そんなあつさり？」

「（どつかで聞いた台詞だ）うん。もちよつとランク下げて、藤崎大の医学部にする」

「変わんねえだろ、それ！ しかも医学部かよ！」

「だつてとりあえず医学部行つとけば、どこに心変わりしてもそこそこ対応できるでしょう？ そうねー、弁護士になりたい、とか建築家になりたい、とかで無い限り。あたし両方とも興味無いし」

「・・・」

「と言う事で藤崎大にしまーす。ちよつと楽ー」

「・・・そんな考えじゃ医学部の授業なんぞについて行けんぞ・・・」

「かもねえ。入学後に学部変更なんてしちゃうかも。でも先生の言うとおり、もう少し視野も広げてみるよ」

「・・・そうしてくれ・・・」

加藤は椅子の背もたれに倒れ込むと、手にしていたファイルを顔に乗つけて動かなくなった。充電切れの機械みたいに。

少し待って、あたしは嬉しくなった。これは終了したっ？

「で、お終い？」

「・・・進路指導はな」

「他に何が？」

「・・・お前に頼みがある」

椅子から腰を浮かしかけたあたしは、中腰の体勢で動きを止めた。
頼みがある？ 終業式後に？

「先生が？ あたしに？・・・何？」

よもや今更、手間取らせた罰として何か係りをやってくれ、とか
数学の資料を人数分印刷しろ、とか掃除もどきの肉体労働をしろ、
とかじゃないでしょうね・・・？

思いつきり警戒してヤブ睨みをする、加藤は顔にファイルを乗
せたまま、ボソツと言った。

「アレを返してくれないか？」

あたしは何の事だかさっぱり解らず、数秒後にオウム返しをした。

「あれ？」

「そう。わかるだろう？・・・あれ」

加藤は何故か、顔を見せずに話を続ける。あたしは眉をひそめた。
わかるだろう、って分かんないよ。あれ、って何よ？ あたしが

分かるはずのあれ、って何よ？

「・・・え？・・・あたし、先生に何か借りたっけ？」

返してくれ、と言われた以上、それは加藤のモノであり、それが私が現在持っている、という話であるなら当然、あたしが加藤から借りた、という図式になる。だってあたし、先生から何もかっぱらったりしてないよ？

唾然としながら言っても、加藤は微動だにしない。あたしは今度は少し焦ってきた。お前今更何スツトボケてんだこのやるーっとかって、怒られるのかな？ でも本当に覚えないし！

やがて先生は、静かな声で言った。

「・・・借りちゃいないよ。俺が勝手に宮地の鞆に入れただけだから」

言われて、益々困惑した。意味が分からない。

「は？ 何それ？・・・何、それ」

なのに直後、直感と共に背筋が寒くなった。

今まで混乱していた頭の中が一気に、ショートする。ある一点に

向かって。

呼吸が、止まりかかった。
生唾を飲んだけど、声がしばらく出なかった。

「何、それ」

The closing day 2 (後書き)

前書きにあるとおり、担任教師と主人公の会話で不適切な表現が多々、出てきます。フィクションの会話としてお楽しみください。

皆さまご承知の上で読みのお話と思いますが、御不快に感じられる方もいらっしゃるかも知れません。申し訳ありません。

The closing day 3 (前書き)

少々暴力的なシーンが出てきます。苦手な方はご注意ください。

The closing day 3

加藤は座って顔を隠したまま、微動だにしない。
あたしは次第に、口の中が渴いてきた。

「先生、何言ってるの？・・・マジ、ついてけない・・・」

「アレは俺がエジプトから持ち帰った物なんだ」

「・・・は？ え？ ちょ・・・？」

加藤がエジプトから持ち帰った？ 突拍子もない話に戸惑いそうになり、思い当たった。そういえば確かに、春先に、エジプト旅行に行ったって言ってた気がする。

あたしは知らずに呼吸が速くなってきた。

「・・・じゃ、先生は、ひよっとして・・・」

あたしは後ずさる。だってどうやったって、目の前の光景が信じられない。

「・・・嘘でしょ・・・」

加藤は黙って、顔の上のファイルを取って顔を起すと、あたしを見た。

そこにいるのは確かに担任教師。だけどその表情は、いつもと全く違う。真剣な、思いつめたような、諦めたような、覚悟を決めたような、色々な感情をすべて凝縮して、まっすぐにあたしにぶついている。

あたしは呆然として言った。

「……だって何にも臭わない……！」

あたしの浅い経験では、イットが近くにいると必ず独特の匂いがしたのに。

そう思っつて、はつとした。そうだ、匂いがした時、その時彼らは、喰っていた。或いは喰おうとしていた。

目の前の加藤は、そういった気配が無い。違いはそこなのか。生き物を襲おうとしない限り、わからないのか。

「俺は今まで、まっとうな人間として生きて来た。これからもそうするつもりだ」

先生の言葉は、まるであたしの考えを読んだかのような、肯定。

「……信じられない……」

「本当だ。俺は普通の人間として生活してきたし、今後もそれを続けたいんだ」

加藤は真正面からあたしを見据えた。

あたしは次から次へと色々な考えが頭をすり抜け、混乱を止める事が出来なかった。

「・・・じゃ、どうして・・・？」

普通の人間として暮らしたいなら、だったら何故、あの獅子鷲を手にしたの？ あれは欲望にまみれたイット達を取り合いをする、大きな争いの種なのに。

「何であれを？」

「・・・お前だよ」

「えっ？」

あたしが聞き返すと、加藤は苦々しそくに視線をずらした。

「去年、お前の数学担任になった時からマズイとは思っていたんだ。それでも何とか我慢は出来ていた。・・・だけど今年、お前の担任になって・・・抑えが効かなくなった」

抑えが効かないって・・・それはつまり・・・あたしを喰いたかったって事？

「・・・そんな・・・」

「以前のお前は、自分の力を全く制御出来ていなかっただろ」

加藤は顔をわずかに歪めた。

「ただでさえお前はサイの気を漂わせて、平気な顔をして歩いている。最初俺は我が目を疑ったよ。こんなに強い力を持った奴が、どうしてこんなに野放しなんだ、って。どんな力を持っているか知らないが、良く今まで無事でいたな」

それを聞いて、あたしはお祖母ちゃんに言われた言葉をまざまざと思い出した。『イトはサイの気が好物だけど、サイが自分の気をコントロールすれば、そうそう襲われる心配も無いんだよ。なのに真琴は訓練もせず、サイの気を垂れ流し。二言目には『どうせ消える能力』。そんな事じゃ、イトの方だって迷惑だろうよ』

あたしはショックで顔が青ざめていった。なんて事だろう、お祖母ちゃんが言った通りになっていたなんて。

「しかも遅刻する度にお前は、益々強い気をぶんぶんにさせてくる。どこかでサイをオモチャに遊んでいたんだろうってすぐわかったよ。・・・その度、俺はきつかったんだ」

衝撃を受けているあたしに追い打ちをかける様な言葉。あたしは頭がガンガンしてきて、その中を加藤の言葉がグルグルと駆け巡っていた。

あたしのせいなんだ・・・あたしのせいなんだ・・・あたしがあまりに無責任で無自覚だった為に、こんな事を引き起こしてしまったんだ。どうしよう、どうしよう、こんな事。

こんな事って？

加藤先生がイット。そして獅子鷲に手を出した。

「そんな時、たまたま旅行先で暴動にあって・・・たまたまタイミング良く、俺の手に入ったんだ」

「・・・そんな都合のいい話、あるの・・・？」

「俺はまっとうな人間として生きたい。自分の能力をコントロールしたい。出来る事なら無くしたい」

あたしから視線を反らしたまま、だけど背筋を伸ばしたまま、加藤は苦しげに顔を歪め、絞り出す様に言った。

「それが、俺の願いだっただんだ・・・」

あたしは一生懸命頭を整理しようとした。つまり先生は、イットである自分が嫌で、その能力を抑えたいがために獅子鷲に手を出したという事？

「じゃ、なんであたしの鞆に入れたりしたの？」

いつの間にか、あたしの口調は固く警戒した物に変わっていた。目の前の加藤は今の所、豹変する気配を見せない。だったらどうにか対応できるかもしれない。

・・・自分の担任教師であると言う事、この局面に置いて、自分が結構この担任を好きだった事を自覚して、あたしはポケットの中のボタンを押す事を躊躇った。もし呼べば、よっちゃんは間違いなく彼を切り捨てる。なんの迷いも無く。

「・・・怖くなつたんだ・・・」

加藤は僅かに俯き、少し悔しそうに呟いた。

「噂につられてか匂いにつられてか、イットが周りをうるつくようになった。そして学校内まで侵入して、次々と自制を失っていく。最初は彼らも普通の人間だったのに・・・怖くなった。なのにあの獅子鷲は俺の願いを叶えてくれるような心配すらない。そんな時に事件が起きて、宮地がハンターと知り合いだと知った。ハンターは組織に属する。彼らなら、あの獅子鷲の取り扱ひも熟知していると思つたんだ」

・・・つまり、手に負えなくなり役に立ちそうもないから、あたしに押し付けたって事？

「そんな無責任な！」

思わず叫びながらも、無責任、という言葉で他人を責める自分が、あまりにも滑稽で不釣り合いに感じた。無責任だったのはずっと、

このあたしなのに。

加藤はグツと唇を結ぶとあたしを見上げ、次の瞬間、机に擦りつける程に深々と頭を下げた。

「スマン、宮地。俺のせいでこんなことに巻き込んでしまって、本当に申し訳なく思っている。・・でもどうか解ってほしい。俺は普通の人間になりたかっただけなんだ」

平身低頭のその姿に、あたしは絶句をするしかなかった。だって、先生は、どっから見ても、普通の人間じゃん・・・！

誰よりも現実を知っている筈なのに、イットとの戦いであんなに酷い目にあつたのに、あたしはそれでも目の前の光景を受け入れる事が出来ない。

しばらく言葉も無く立ちすくんでしまう。すると思ってもやらぬ所から声が聞こえてきた。

「その為に、自分の手を汚す事になってもね」

狭い部屋の窓際。明らかに数学とは関係の無いガラクタが段ボール箱や紙袋、プラスチックケースなどに山積みになっている一角。声はそこから聞こえてきた。

あたしは本能的に飛びあがった。あり得ない所から・・・あり得ない声だ！

「・・・沙希・・・!」

「あら。年上を呼び捨てにするとは、お行儀がなってないわね。レディとは言えないわよ」

どこから湧いたんだ、と問いただしたくなる様に、まるで幽霊の様にふわっと彼女は現れた。

深い紫色のラップワンピースを着ている。背筋が寒くなる程の、凄味ある美しさ。

あたしは彼女を見た途端、まるでフラッシュバックの様にあの時の光景が思い出された。

倒れている香取とはるなちゃん。

彼女に近づく香取。香取に近づく彼女。

全身の毛が、逆立つ感覚を覚えた。

「・・・なんであなたがここにいるの?」

「先生に招かれたからよ。決まってるでしょう?」

「この人は、俺の願いを叶えてくれる」

先生は焦ったように立ち上がってあたしに喋り出した。その様子を見てあたしは愕然とした。

沙希と先生がつるんでいる。

初めて、先生がイトトである事が現実味を帯びてきた。

「俺の力を吸い取ってくれる。もう、悩まされる事が無くなるんだ。この人はハンターとは別だが、同じような組織に属していて、アレを引き取ってくれると言っている。俺は彼女の上司に直接確認したい、その組織の事も知っている。有名なんだよ。もう、心配しなくていいんだ」

「嘘だよ先生っ！ 騙されてるんだよっ！」

「俺は、普通になりたい。そして穏やかに過ごしたい。頼む宮地、答えてくれ。アレはどこにあるんだ？ この人に渡してやってくれ」

「だって・・・だって先生・・・」

あたしは混乱して理性を失いつつあった。動悸が高鳴り涙が出そうになる。

先生の能力を沙希が吸うの？ そうしたら先生はイトトじゃ無くなるの？ そんな事、彼女は出来るの？

獅子鷲を彼女に渡せばいいの？ それで万事が解決するの？

何かが違う。問題はそこではない。何かが違う。

あたしがスカートのポケットに手を伸ばしかけた時、沙希の鋭い声が飛んだ。

「お嬢ちゃん。あの坊やや義希達を呼んだら、後悔するわよ」
「えっ？」

ガタンガタン！ と積み重ねていた物が崩れる音がした。
そして沙希の背後から、すうっと、女子生徒が一人

浮かんできた。

頭を上にして、一見すると立ち姿の様に。だけど目蓋を閉じて首を垂れ、力無く下げられた腕や足がゆらゆらと空中に揺れる様は、まるでドラマでよく見る首吊り自殺の様。

「・・・唯っ!!」

「山本っ?!」

あたしと加藤の、両方の叫び声が小さな部屋に響いた。

「唯に何したのっ!!」

「言う通りにしないと、今度こそ殺す。本気よ。分かるわね？」

「何で山本を・・・っ!!」

加藤はこの上なく驚愕して、金縛りにあつたかのように動く事が出来ない。驚きに見開かれた彼の目を見て、あたしはまるで昔の自分を見ている様な気がした。この人、色々な事に対して、考えが甘すぎるんだ。

単に経験不足が原因なだけで、今回がたまたま不幸だっただけ、なのかもしれないけど。

怒りが湧いてくる。抑えが効かない。

「彼女の親友だからよ。このお嬢ちゃんに密室なんて無意味だから、逃げられたらお終いでしょ」

「何をしたんだっ」

「何も？ うるさいわねえ、色々と面倒だから目を閉じてもらってるだけ」

一気に焦燥を募らせる先生とは対照的に、沙希は心底楽しそうに口角を上げた。

空中に浮かんでいる唯の体が肩から下、ゆーらゆーらと揺れる。

彼女がやっているんだ。

唯は力なく気を失ったまま。

沙希は得意そうにあたし達に言った。

「身分と人種と、歳の差も越えた禁断の恋人なんですよ、先生。泣かせるわ。先生が獅子鷲を持っている事、教えてくれたのはその子なんだから」
「なっ……」

絶句する加藤を尻目に、あたしは頭が真っ白になる。衝撃の台詞の連続に、心が付いて行かなかった。

唯と、先生が、恋人？

「おかしくって、泣かせるわ」

沙希はそう言つと、あたしに視線を移した。その眼差しは色つぱく、軽薄で、蔑みに満ちていた。

「あなたは親友なのに気付かなかったの？ この子の異変に。．．この子が慢性的にイットに吸われている事」

言葉を理解してあたしが先生を振り返ると、先生があたしから顔を反らすのが同時だった。

それはつまり、先生が唯を吸い続けていた、という何よりの証に見えた。

あたしは心臓が止まりそうになった。

目の前の唯が揺れる。

「サボリ癖が裏目に出たのね。ちゃんと訓練を積んでいてよく観察していれば、親友の大事も担任教師の事も、あなたぐらいなら簡単に気付いた筈よ？ 少なくとも、恵美子はそうだった」

あたしのせい。ここでも出てきた。あたしのせい。

頭に血が上る。
耳鳴りがする。

「宝の持ち腐れ。ホント勿体無い・・・」

「山本は関係ないだろっ？ 離せっ！ アレの在り処は俺が必ず聞き出すから・・・っ」

「バーカねえ、先生。獅子鷲はとっくに海の方へっよ」

まるで遠くから聞こえる様な、楽しむ沙希の声。
そして先生の、動揺と驚愕。

「・・・何だつて？」

「あれから何日経ったと思ってるの。彼らが悠長に手元に置いとくとも思ってた？ それはそれは嚴重に、然るべき措置が取られていますわよ」

あたしはまるで他人事のように聞いていた。目は何も見ていない。体の内側からは憎悪と共に、沸々と何かが湧いてくる。

それはどんどん大きくなってきて、もう押さえようがない。

先生の小さな呟きが耳に入った。

「・・・じゃ・・・あなたは何で・・・」

「このお譲ちゃんなら解っている筈よ」

沙希の瞳がオレンジ色に光った事さえ、ピントのずれたスクリーン越しに見ている気分だった。

自分が彼女に喰われるかも、という考えや恐怖感なんてとうに無い。

あるのは、抑えが効かない何か。怒りや憎しみだけでは無い、何があたしを支配していく。

ピントのずれたスクリーンの、中央部分だけが歪なほどに、くつきりと鮮やかに浮かび上がる。

そこに見える、獲物。

「命まで取ったりしない。ただちょっと、その能力を分けて貰いたいだけなの」

「・・・サイの・・・？・・・まさか、最初からそれが目的で・・・」

「ふふ。抵抗しないで？ ね、お願い。ちょっとだけだし、そしてら親友もちゃんと、無事にお返しするから。ね？」

先生と沙希の会話を遠くに聞いて、あたしは自分が無くなるのを感じた。

沙希があたしの顎を掴む。

だめだ、コントロールが効かない。

それに身をゆだねる、と諦めた時には、快感すら覚えた。

狩ってやる。

気付く間もない。あたしは手に何かを持っていて、それで沙希の喉元を切りつけた。

それはナイフでは無い。だから深くは入らなかった。

「ひっ」

声と共に、喉から血が流れ出た。足りない。嘔き出していない。

胸元を掴み寄せ、あたしは迷わず彼女の首元にそれを突き刺そうとした。

バンっ！

という激しい衝撃であたしは後ろに吹き飛ばされ、手にしていた物も落ちる。持っていた物は、加藤の文房具だった。

先程の衝撃と共に彼女の後ろの窓ガラスが割れ、大小のかけらが一斉にあたしに向かって飛んできた。

あたしは咄嗟に自分の鞆を拾い上げ、首から上を隠しながら彼女に突進した。

体の他の部分にガラスの破片がぶつかっても、気にならない。

大きな破片を、空中で素手で掴んだ。

手の平が深く切れて血が流れるけど、気にならない。

迷わずそれで、沙希の肩を深くえぐった。深く突き刺し、捻じり

込み、切っ先を捻じり上げて掘り上げた。

「ぎゃあっ」

悲鳴共に彼女があたしの頬を殴り、後ろに崩れた。唯が落ちる音がする。先生が駆け寄る。

あたしは崩れた彼女に迷わず馬乗りになった。力いっぱい、拳を彼女の顔にぶつけた。感触は意外にも普通の人間のようだった。口と鼻から少量の血が飛び散る。肉の感触すら、あたしの中の何かを煽る。

沙希は目眩を起こしたように、反応が鈍くなった。

あたしは床に落ちていたガラスの破片を拾うと、馬乗りのまま、首の頸動脈に向かって大きく振り下ろした。

その時、後ろから何かがぶつかってきた。

あたしはそのまま、その何かと一緒に、横に投げ出される様にして転がった。

「うっわっと、間に合った」

床一面の尖ったガラスからあたしの身を守る様に、後ろから抱きしめていたのは香取だった。

彼は自分の体が直に破片と擦れてしまい、半袖の腕からは血が滲み出た。

「ほら、落ち着けよ」

あたしはそんな彼に気付かず、失神した沙希にトドメを刺そうともがく。

だけど香取は益々あたしを強く、後ろから抱きしめてきた。同時に耳元で、あたしをなだめる様に繰り返す。

「落ち着け。おい落ち着け、宮地。俺だ」

「あたしがやる・・・っ」

今なら。彼女はあたしの大切な人達ばかり傷つける。憎い。憎い。憎しみって、こんなにパワーを感じるものなのか。みなぎるこの力は何だろう？ 抑えが効かない。コントロールが出来ない。自分を見失う。

この渦に、巻き込まれたい。

「あたしならやれるっやつてやるっ！ 離してっ離してっ」

「暴れるなよ、おいてば。ほら」

香取は身をおこしながら、その腕から抜け出そうともがくあたしの動きを、少し乱暴に封じた。

「まるで猫だな。その爪引っ込めろ」

そう言ってあたしの手首を両手で掴む。あたしの掌から流れる血で、香取の手が汚れた。

そしてそのまま、きつくきつく抱きしめられた。

あたしの耳元に唇を寄せる。

吐息と共に、優しく囁くような、けれども凜とした、それでいて蕩ける深い声が届いた。

「大丈夫だ、大丈夫だから……。お前がやる必要は無いんだ。やっっちゃダメだ」

中央部分の歪なピントが、急に薄らいできた。それに合わせて、全体の風景が元に戻る。視界に馴染む。

あたしは、首から血を流して床に倒れている沙希を、初めて見た様な気がした。

The closing day 2・5 (前書き)

第三者視点です。

真琴と加藤が面談を始める、30分程前。

「・・・なんつだ、コレ・・・」

礼は教室内の自分の席にだらしく座り、自分の携帯に帰ってきたメールの返信を見て呟いた。教室内には、彼一人。

真琴からの返信にはCCが付いている。それは礼が本意ながら、真琴の安全を守るためだと渋々連絡先を交換した相手の内の、一人だった。その相手と一緒に茶を飲めとは、どう言う事だ？ 冗談じゃない、なんであんな嫌味な奴と。

「あー、いたいた」

まるで図った様なタイミングで、その嫌味な奴がやってきた。

性格とは裏腹に、切れ長の瞳にスッキリした顔の輪郭、華奢な長身に長い脚、といたって爽やかなご登場だ。

礼はジロツと彼女を睨み上げた。

「・・・お前・・・他校の生徒がこんな所を、何堂々とウロウロしてんだ」

「友達に呼ばれた、って言ったら普通にスルーだったよ。元々、大体の人と顔見知りだし」

「相変わらずユルイ学校だな。あんな事が起こったのに、学習能力は無いのか。問題じゃないかよ」

「身元が確かですから。見逃してよ」

唇の両端が上がる。少し首を傾げて礼を覗き込んだ時、長めの前髪がサラッと揺れた。

楽しそうに目を細めるその姿に、礼は益々不機嫌になった。目つきが鋭くなり、元々の女顔を感じさせないくらいに鋭く尖った表情になる。

「・・・何しに来たんだ」

「あ。やっぱり怒ってる。残り僅かな逢瀬を邪魔されて、拗ねてる」「わかつてんならサッサと消えろよ。お前とサシで茶飲みなんてお断りだからな」

「怖いな。残念。それも面白そうなのに」

「面白いのは teme だけだろ」

プイッと顔を背けると、長めのウェーブの前髪が彼の表情を隠した。

ヒトミは楽しそうに笑いながら、腕を組んで彼の机の上に腰かけた。

「はは。色々掘り出し物の小ネタが満載だよ？ なんてったって、あの子とは付き合い長いんだから。聞きたくはないの？」

「聞いているとなんかムカつきそうなんだよ。女のお前なんて想像できないから、無理。余計なエネルギー消費したくねえし」

「相変わらず素直だねえ。赤面モノの愛情表現。憚はばかるって事を知らないの？ おまけに嫉妬深い奴。男の嫉妬は醜いよ？ 嫌われるぜ？」

「・・・幸いすぐに消えるからな。嫌われる程には側にいねえよ」

最後の礼の呟きに、ヒトミは軽く目を見開いた。意外そうな表情で、けれど少し納得したかのように、礼を見ながら頷く。そして視線を空中にずらした。

「真琴は、こういう事に免疫ないから」

先程までのからかいの台詞とは声のトーンが違った為、礼は横目で僅かにヒトミを見上げた。

彼女は腕を組んだまま、空中を見つめて言った。

「あの子はあまり深く物事を考えないし、割り切りも早い。執着心が薄いから、頭の中身を切り替えるのが得意なんだ」

「・・・」

「・・・それが分かってるから、礼は焦ってる。だろ？」

「・・・」

「気持ちは分かるけどさ。感情に任せて彼女を傷つけるんじゃないよ」

「・・・は？」

「やり逃げするな、って言ってるの」

ヒトミは礼を見据えてキツパリと言う。

彼女の口からいきなり出た直接的な表現に、礼は一瞬身を引いてしまった。

そこに畳みかけるように、ヒトミは言葉をねじ込んだ。

「真琴は君を支えたつくつて、必死で背伸びしている。君が思っているよりずっと深い所で、君の事を理解している。そんな可愛い年上の彼女を、衝動に任せて壊すんじゃないよ？ それほど強くはないよ、あの子」

「・・・知ってるよ」

「本当？ そうは見えなかったけど。ギリギリのところまで、騎士ナイトの顔を保ってますって感じで」

多少、見下げる様な視線。しかし全てを言い当てられた為、礼は返す言葉が無い。

「・・・お前、マジでムカつくな」
「それは光栄。ありがとう」

ヒトミは満足気に、ニヤツと笑った。真っ直ぐに自分を見返す彼が、彼女はとても好ましく思った。まだ幼さが残る顔つきなのに、瞳の奥には強い信念が見える気がする。初めて会った時、彼は何かを求めている様な目つきをしていた。今は、あの時より格段に、男の目をしている。

「次に会った時にも、再び彼女を取り返す、くらいの気構えを持つたら？ それでいいだろ？」

「マジウザイ。次、口開いたらぶん殴る」
「こわっ」

わざとらしく肩を竦めるヒトミを見て、こいつはやっぱり女だな、と礼は思った。男言葉を使って男の立ち振る舞いがすっかり板についているが、人間関係など一つの物事を深く考え詰めるのは、女の特徴だ。男は利害が絡まないと、それほど深くは考えない。台詞は端的だが、彼女は真琴と自分の事を随分と観察していて、考えている。これに比べたら真琴の方がまだあっさりしていて、そう言う意味では男っぱいのもかもしれない。或いは単に子供っぱいだけか。

根はしっかり女なのに、男のふりをして生活している。コイツも中々複雑な奴だよな、と横目でヒトミを見た。彼女は面白そうに、他校の教室内を見回している。俺の事を分析している場合かよ、その観察眼、自分に向けるよ。お前の方が俺よりよっぽど、現実から目を反らしているじゃないか、と礼は心の中でヒトミに毒づいた。

それでも、彼は彼女に対する信頼を感じていた。コイツは頭がいい。そして俺や宮地と違って、感情に支配される事が少ないのだから。

・・・自分の利益と宮地の利益が相反した時、どっちを取るかな？

「ところで唯ちゃん、知らない？」

振り向きざまにヒトミが問う。

「は？ 山本の事？」

「うん。呼ばれたんだけど連絡つかなくて。携帯も繋がらなくてお

かしいんだよね」

「充電でも切れたんじゃねえの？」

「あの子がそういうタイプに見える？」

「・・・見えないな。宮地ならありうるけど」

「でしょ？」

彼女は礼の前の席の椅子を引き寄せると、背もたれを前にして椅子を跨いで座り、礼に片手を出した。

「という事で、真琴が終わったら聞いてみる。なんか暇潰しするものない？」

「はあ？ ふっざけんな」

礼は顔をしかめたが、彼女はそんな彼の表情に頓着せず、白々しくもニコニコと差し出した手を引っ込めない。

礼は諦めた様に溜息をつくと、自分の鞆の中から携帯ゲーム機を取り出して、彼女に乱暴に押しつけた。

すると今度は彼女が顔をしかめる。

「・・・えー。ゲーム嫌い」

「じゃ文句言うな。あいつはコレで何時間でも潰せるぞ」

「えー？ 二人でそんな事で時間潰してるの？ 時間が無いのに、なんて無駄な事してるんだ」

「うつせえな、さつきから」

礼のイラついた様子が面白く、ヒトミはくつくつと笑いながら、そのゲーム機を握った。そして馴れた手つきで戸惑う事無く起動させる。始まったゲームに感想も文句も出さない。その様子に、何だよコイツ、やり馴れてんじゃねえかよ、と礼は再び毒づいた。

黙ってゲームを続けるヒトミを尻目に、礼は本を広げる。実は礼もゲームにはさほど関心が無く、本に費やす時間の方がよほど長い。派手な外見と崩れた口調とは、かけ離れている。活字中毒かと言う程、多種多様な本を読む。

十分程経った頃、礼は何気なく顔を上げた。ヒトミの、あえて言うなら気配が、変わった事を肌で感じたからだ。

「・・・」

ヒトミはゲームの手を止めて、呆然としたように前方を見つめている。

礼は不審に思って、彼女が見つめている先に視線を移した。何も無い。

再び彼女に視線を戻した。

彼女は一点を見つめたまま、呟いた。

「・・・真琴は今、どこにいるの？」

「・・・知らない。担任との面談だから、誰かに聞けば分かるんじゃないか？ どうしたんだよ？」

「なんかヤバい気がする」

「・・・は？」

「多分、ヤバい事に巻き込まれている」
「何だつて？」

礼は素早く反応した。昨日まで自室に引きこもっていたくせに、その間ずっと恐れていた事が蘇る。戦慄にも似たものが胸の中を走った。あいつがまた襲われているのか？

礼が腰を浮かせた時、ヒトミは携帯を取り出して躊躇なく誰かに電話をかけた。

そして淀みなく話し始めた。

「もしもし、東田です。．．真琴が多分、トラブルに巻き込まれています。ハッキリした事は分かりませんが、かなり良くないと思います。．．おそらく。．．学校です。．．はい」

無機質なまでに落ち着いた口調。礼はそれを注意深く観察した。
ヒトミは電話を切ると、そのままの体勢で動きを止めた。

「．．あの人にも知らせるか」

そう言うと再び電話をかける。

「もしもし．．はい。．．はい。．．多分．．恵美子さん、私思
うんですが、彼らは少々、暴走しすぎやしませんか？．．それは
そうです、上手くいってます。でも、一度ご覧になるのもいいかと
．．．．要は私が少し不安なんです。．．．はい、ありがとうございます
います」

電話を切ると、ヒトミは強い眼差しで礼を見て、鋭く言った。

「捜そう」

立ち上がりかけたヒトミの腕を、礼が掴んだ。

「どう言う事だよ、おい」

鋭く睨む礼を、ヒトミは探る様に見つめる。

そして決心した様に言った。

「……私と真琴は、パイプで繋がってるんだ」

「……はっ？」

「私が今まで見た事があるビジョンは、両親と、真琴だけ。最近じゃ彼女ばかり見える」

「……」

「昔は私も真琴も、身内との繋がりの方が強かった。でも成長するにつれて、多分、波長の合う人間と繋がる様になっただんだと思う。詳しい事は分からないよ、何もかもがあやふやなんだから」

スツと立ち上がると、ヒトミは指を三本立てて、礼に突き付けた。

「私が最近見たのは、三つ。一つは彼女が礼の所に初めて飛んだ時。二つ目は彼女が初めて学校でイットに出会った時。三つ目は……礼が地面に倒れていた時」

礼が驚いた様にヒトミを見つめる。
彼女は僅かに笑って言った。

「最後のヤツは、かなり鮮烈なイメージが来たよ。相当ショックだったんじゃない、真琴」

「……」
「切れ切れなんだ。断片的な事しか分からない。こんな事滅多に起こらない筈だから。そもそも専門外なんで」

自嘲気味に笑って視線を下げる。そんな彼女を見た後、礼はハッキリとした口調で言った。

「二手に分かれよう。面談中だから教室の筈だ。しらみつぶしに捜すんだ」

顔を上げて礼を見て、ヒトミは頷く。二人は走りだした。

「……どこだよっ」

校舎中を見回したのに、真琴がいない。

二人は携帯電話で連絡を取り合った後、正面玄関前に来ていた。礼がイライラと首を振る。

「そもそもなんであいつは俺ん所に飛んで来ないんだよ……まさ

か

「……唯ちゃんもない」

ヒトミは悔しそうに唇を噛んだ。

「偶然じゃ、ないね」

気持ちを抑えられなくなった礼は、ヒトミの胸倉をネクタイごと掴み上げた。

「お前、何を見たんだよ？ どこだったかハッキリ思い出せっ」

「そんなに簡単な話じゃないんだ」

「んな事問題じゃねえっ。思い出せつつってんだよっ」

ヒトミは掴まれた事に全く抵抗を見せず、悔しそうに唇を引き締めながら、目を細めて言った。

「屋内……だと思っ。……薄暗い……物が積み上がっているのか・
・窓が小さいのか……影が多かった……」

「倉庫か？」

「光はあつた。窓の光だと思つた」

「窓があつて、物が積み上がっている所……教室じゃないとする
と……」

一瞬考え込んだ礼が、顔を上げると同時に弾けるように駆けだし

た。

ヒトミもその後を追う。礼は数学教員室に駆けこんで行った。ヒトミが着くと、中では一人の数学教師がキョトンと礼を見ていた。

「僕達が自由に使える部屋？ なんの話だい？」

「数学の先生たちが自由に使える部屋ですよ。教室以外に」

「教室以外？ ここだよ」

「ここ以外」

「はあ？」

話が見えない教師は啞然とする。

「ああ、部室とか？」

「・・・加藤先生は何部？」

「加藤先生？ 水泳部だよ。忙しそうだよ、夏だからね」

「今日も練習？」

「じゃないのか？ 知らないけど。一体どうしたんだ？」

「いえ、ちよつと」

活動中の部室内で、何か事が起きるのだろうか？ だとすれば、とんでも無い惨事を招いたりしていないだろうか？ そうなるとマズイのは宮地自身だ。

礼がギリつと奥歯を噛み締めた時、数学教師が思い出したように言った。

「ああ、そつだ。数学資料室もある」

「・・・数学資料室？」

「うん。滅多に使わないけどね。あそこなら自由に使えるよ？ 何？ どうか部屋でも捜してるのかい？ 何をしようとしているの？」

「鍵、ありますか？」

「鍵？ 何に使うのか教えてくれないと、おいそれとは貸せないよ」
「そつじゃなくなつて。今、誰か使っているのかだけ知りたいんです。鍵、ありますか？」

怒鳴りつけたいのを必死に我慢して、礼は訪ねる。今、目の前の教師の反感を買うのは避けたい。

「えー？・・・あれ、無い」

緊張感の無い驚きの声に、礼は息を飲んだ。ビンゴだ。

「おかしいなあ。滅多に使わないのに。誰が使ってるんだろ」

「それどこですか？」

「4階の旧校舎西端。使い辛くつてね、殆んど利用してないんだよ。珍しいよね、誰が何を取りに行ったんだろっ？」

台詞の最後は二人とも聞いていなかった。瞬時に駆け出す。

旧校舎は盲点だった。あそこは普段、授業で使う教室は少ない。

礼は校舎を結ぶ一階の廊下を走りながら、目の端に何人もの人影を捉えて思った。今頃この時間に、なんでこんな所に人が沢山いるんだ？ 狭い中庭もどきに。

益々嫌な予感がする。

目的の部屋から大きな物音が聞こえた時、彼は心臓が凍りそうになった。喉が張り付いて塞がるようだった。

勢いよく扉を開けると、真琴が派手に人を殴っていた。倒れている女の上に、馬乗りになって、血だらけで。

礼は、自分の体に血液が戻ってくるのを感じた。呼吸も戻る。真琴は手近にあった大きなガラスの欠片を掴むと振り上げた。そこで初めて、自分が彼女に見とれている事に礼は気付いた。

ためらいが無く、凜とした表情。冷徹なまでに美しい。

ヤベえ。見入っている場合かよ。

礼は駆け出し腕を伸ばし、真琴をすくい取った。

The closing day 4

おとなしくなったあたしから、香取は身を引いた。ポケットからハンカチを取り出し、血で染まったあたしの掌に巻き付けている。ハンカチが、みるみる赤くなっていった。

あたしは呆然と座りこんだまま、彼を見た。

「・・・香取・・・」

「とにかく、ここから逃げよう。山本を連れ出すんだ、行くぞっ」

香取は強い瞳であたしを見ると立ち上がり、あたしの上腕を掴んで引つ張り上げた。

唯も加藤先生も既に部屋にはいない。あたしは香取に引つ張られて、廊下に出た。

「よくもやったわね・・・」

部屋に一人残した沙希の呟き声が背中にかかったけど、それを振り切る様に走りだした。

廊下を走り階段に辿りつき、2階の踊り場までたどり着いた所で、あたし達は唯達を見つけた。

正確には、唯と加藤先生と、そして何故かヒトミが、踊り場で立ち往生をしていた。ヒトミがいる事に驚いたけどすぐに、もっと異常な事に気付いて息を飲んだ。

「・・・な、何・・・」

男子生徒三人に囲まれている。一目見てわかった。あの時の男子生徒と同じ目をしている。今度は匂いも感じた。間違いない、操られている。

そんな事が出来るのは、彼女しかない。

あたしは先程とは打って変わって興奮はすっかり冷めてしまい、思わずたじろいで小さく呟いた。

「・・・どうしよう・・・」

「・・・突破するしかないだろう」

香取は彼らを見据えながら、その眼差しに力を込めた。腕を構えて、完璧な戦闘態勢だ。改めて、喧嘩馴れてる様子に感心する・・・これもあたしのせい？

加藤は、気を失っている唯を抱きかかえたまま、余裕無く相手の生徒達を眺め回していた。あの人が唯を吸っていたんだと思うと、今すぐにでも彼女を取り返したい気分だけど、それは無理。表情からしても、きっとここでは唯を守ってくれるのだろう。それに賭けるしかない。

ヒトミは眉をひそめた。口を僅かに尖らせ、気乗りしなそうな様子だけど、何故か両手首をグルグルと回している。

「私、腕力には自信があるんだけどゲーセンでしか試した事なくて・・・」

・・・あたしは知っている・・・ゲーセンでのパンチゲーム、新記録を出した事があるのよ、この子・・・。ピアノをやめた一時期、狂ったようにハマっていたから。もう指を気にしなくていい、って。あのでっかい手で殴られたら、男でも気絶するわよ、ううん、それじゃ済まないかも。

「^{いざこ}拳傷めんなよ」

ヒトミの威力を知らない香取は、彼女をチラッと一瞥すると優しい言葉をかけた・・・優しい言葉？

うん、確かに気遣っている様にも聞こえるけど、ソレ、女の子にかける言葉かしら？　むしろ男同志で交わされる、「一緒に殴ろうぜ」系の台詞じゃない？

とか思っている間に清々しい音がして、生徒が一人転がった。正確には、軽く吹っ飛んだ。

あたしが本気で引いていると、当のヒトミは満更でもない顔で言った。

「気持ちいいもんだね」

「素質、あるんじゃない？」

香取が軽く驚きつつも満足そうに言うと、ヒトミも切れ長の眼を彼に向けてニヤツと笑った。て、あんたらバディかいっ。何、その通じ合っちゃってる雰囲気は。いつの間に？

ああこの場合、男同士の友情を微笑ましく見守るべきなのか、そ

れとも彼女に嫉妬の炎を燃やすべきなのか。もうヒトミっ。あんたのその紛らわしい立ち位置があたしを悩ませるのよっ。

と、あたしは一人で乙女の世界に入りそうになって、そこで気付いた。げ、一人増えてる。ヒトミが一人倒したのに、後ろから一人増えてる。

驚いていると、倒したはずの生徒が早くももぞもぞと動き出した。目つきまでは見えないけど、雰囲気は変わっていない。正気に戻ったとは思えなさそう。つまり、殴っただけじゃダメなんだ。

「でもそうしたら、あの人達はずっとあのまま・・・」

あたしがそう言った時、健全なる3人が一斉に飛びかかってきた。ひええっ、あたし、お兄にちよこつと教わったなんちゃって護身術しか持ってないよう、素面まへのあたしを襲襲わないでようっ。

「うわっ」

「くっ」

あたし達はかろうじてかわす。あたしは突き飛ばすのがやっとだった。だってここ、廊下だよ？ すぐ側は階段だし、下手にやりあって足でも滑らせて、打ち所が悪かったら死んじゃうじゃん。死にたくないけど、殺人犯になるのもやだっ。

香取はあたしの手首を掴むと、階段を駆け下りながら怒鳴った。

「んな事、後から考えろっ」

そんな事、とは、操られている生徒たちの事。

あたしは彼に引きずられながらも、天井を・・・旧校舎4階を見上げながら呟いた。

「でも、全てを解決する唯一の方法がある。・・・諸悪の根源を断てば」

そう、彼らを操っている大元おおもと・・・彼女を消せば、みな正気に戻る。だってあの時の彼らがそうだった。

後ろからヒトミ達もついてくる。香取は走りながらあたしをチラッと見ると、意志の強いまっすぐな目を前方に向けて、言った。

「どうしても殺やりたいなら、俺が殺やる」

瞬間、あたしの心臓がドクン、となった。殺人を犯す香取。彼は本気だ。本能的に恐怖が沸き起こる。例え相手がイットでも、そんな事をしちゃダメだ。激しい思いが心を支配した。

そんな香取、あたしは見たくない。

「・・・無理だよっ」

上手い言葉が見つからず、咄嗟にそう叫んだら、

「そう思つか？」

間髪置かずに香取に言われた。ギクツとなる。

あたし達は旧校舎一階にたどりつき、唯一開かれている渡り廊下に向かつて走り出した。

香取は前を見据えながらキツパリと言った。

「今のお前の方が無理だと思う。目の前の状況に流されて、深く考えずにやっちまっていいのか？ 宮地はそれでも、これからの人生を生きていけんのか？」

その言葉を聞いたあたしは、胸に刃物を突き付けられた様に感じた。人殺しをして、誰にもバレずに罪に問われないとしても、お前は平気なのか。彼はそう尋ねているんだ。

その時、目指す出入り口から急に人影が現れた。と気付いた時にはいきなり襲いかかってきた。二人以上いる。ひえっ。

香取が勢いよく、相手のお腹に横蹴りを入れた。

「がっ」

「いやっ」

倒れた生徒があたしに腕を伸ばしかけたので、咄嗟に頭を殴ってしまう。彼は完全にのびてしまった。すぐに横から後ろから手が伸びる。あたし達は来た道を勢いよく引き返した。

あたしはもう、手を滅茶苦茶に振りながら、相手を突き倒したり張倒したりしながら、大声で香取に怒鳴った。もういやっ。

「深く考える時間なんかないじゃんっ」

「じゃあやめとけ」

追手を引き離れた所で、彼は廊下の窓を開けた。後から来たヒトミに目配せをする。

彼女は軽く頷くとひらりと窓を乗り越え外に出て、あたしの隣に来た加藤先生に手を出した。

「彼女を」

先生は息を切らしながら、抱きかかえていた唯をヒトミに渡す。青白い顔色で目を覚まさない彼女を見てあたしはすごく辛くなり、怒りに満ちた目で加藤を睨んだ。

すると香取があたしの肩を掴み、乱暴に自分の方に向かせた。

長い睫毛の比較的大きな瞳が、まっすぐにあたしを覗きこんだ。

「自分を見失うな、宮地。見失ったら、何をやっても失敗するぜ。上手くいかないし後悔する」

強い光を放って煌めく彼の黒い眼に、あたしは吸い込まれる。

香取はそんなあたしの中に割り込むように、視線を絡ませ顔を近づけ、低い声で言った。

「何かを成し遂げたいなら、目を開け。落ち着いて、自分がやるべ

き事を瞬時に判断するんだ。それが出来るのは経験だけだ。無理なら踏み止まれ。流されるな、支配されるな。それはお前じゃない」

彼の言葉が、視線が、吐息が、全てあたしの中に入り込み、あたしの胸を内側から激しく打った。

あたしは、心が絡み取られたように、呆然と彼を見つめた。

「・・・香取・・・」

綺麗な造りの少年の顔の奥には、あたしが足元にも及ばない大人の彼がいる。

あたしはゆっくりと息を飲み込み、口を開いた。

「あんた本当に16歳？」

「言う事はそれか？」

呆れた様な、失望した様な、そして少しイラッと来た様に彼が突っ込む。

いつものペースを取り戻したあたしは、横目で彼を眺めてからかうように言ってしまった。

「だってその悟り、お爺ちゃんみたい」

「・・・ああ？」

喧嘩売ってんのか？ という彼の口癖が聞こえてきそうな表情。

片眉を上げてあたしを睨んでいる。あたし達の脇では、加藤先生が窓を越えて行く。

あたしは未だにドキドキする胸を隠すようにしながら、香取に促されて窓枠に乗った。

二度惚れした、なんてバレたら、大変な目に合うわ。

「・・・もしあたしがああだったら、どうするのよ」

窓枠の上で、あたしは目で唯を指して言った。唯は再び先生に抱きかかえられている。先生は、本当に唯が大事そうで、その顔は教師でも、獲物を手にしたイットの顔でもなかった。

「決まってるんだろ。死んでもぶつ殺す。つか、死ぬまでぶつ殺す」

香取の懨然とした表情。そこにはさっきの大人びた様子も無いし、筋の通った口調も無い。感情に任せて物を言う、いつもの香取大王だ。ていうかあந்தのその台詞、意味よく分かんないし。

おまけに、可愛いとか思っちゃうし。そしてやっぱ、嬉しいし。

あたしはクスツと笑った。

「さっきと言う事違うじゃん」

そう言って飛び降りる。

香取はわざとらしくトボケた表情をしながら、窓枠に乗った。

「当たり前だろ。16歳なんだから」

その時、向こうの方から人騒がしい物音がした。

新しい追手か、と思ってギクツときたら、後ろからは廊下を駆け
てくる古い(?)古い追手の音もして、あたしは飛び上がった。も
ーっ、疲れたっ!! 誰かどうにかしてっ! この際、無責任と言
われようと他力本願と言われようとどーでもいいからっ。なんとか
してっ!

複数の人影がやってきた。女の子まで混じってる。うわ、可愛い
そうっ。左右どちらに逃げようかと視線を走らせた時、鈍い音と共
に、彼らがほぼ同時に地面に倒れた。何事?

その後ろには、よっちゃんと水島さんが立っていた。きゃあっ、
暗闇の中的一条の光っ!

The closing day 5 (前書き)

少々残虐な表現が出てきます。苦手な方はご注意ください。

The closing day 5

天使のような超絶美系の水島智哉が、木刀を手に提げて悠然と歩いてくる。その様子が、すらっとした長身を一層際立たせて、思わず見入ってしまった。前髪が少し乱れていて、余裕のある態度より以前には、相当ご乱闘を繰り広げたんだろうな、という事が分かる。

彼は周りを見渡しながら、呆れたように冷たく言った。

「どーなってんの、この学校」

その後ろから、彼よりちよっぴり背の高いよっちゃん顔のをぞかせた。

いつもは人懐っこい表情が、あたしを見て少しほっとしたようになつた。

「まこちゃん、無事だね？ よかった」
「おかしいでしょ、三流ホラー映画の真似でもしてんの？ 何、この数」

水島さんが言ってるそばから、更に変な奴らが集まってくる。本当、湧いて出たようにわらわらと、その数10人以上！ ぎゃーっ！！

あたしはゾンビもどきから目を反らせないまま、後ろにいた香取をひつつかんだ。

「やだっつ 怖い怖いっつ どんどん来るっ こんな観たっ ゲームで やったっ やだやだやだっ」

「落ち着けてば」

「落ち着けるかっ!!」

「DSで高得点出してたじゃねーか」

「DSはあたしを襲わないっ!!」

もう、問答無用で気色悪いのよっ。こんなリアルバイオ ザード みたいな世界、耐えらんないっ! 元は普通の生徒達であたしと一緒に生活していたのにこの豹変、って所が最高に恐怖なのよあつ。

よっちゃんが彼らに向きあいながら、素早くあたしの所に異動してくれた。にこつと笑って、あたしの頭を軽く撫でてくれる。うっ優しいっ 守ってくれるのね。守って守ってっ。

彼はあたしの顔を覗き込んで、包容力溢れる、魅力的な笑顔で言った。

「大丈夫だから、ね? 絶対上手くいから。なんならこれ使っ?」

手渡されたのは、木刀。木刀かいつ。これで殴れば心強いでしょうっ??

「そーゆー問題じゃなあいつ!」

「怖くない。ほら、怖くない」

よっちゃんに、眩しい笑顔で優しく背中をポンポンされて、

「キツネリスでもなあいつ！」

「え？ 何、それ」

「もーやだつどーにかしてよっ、げ、か、香取っ、やり過ぎは良くないよっ」

「だから手加減してんだろがっ。どうにかしろっつたりやめろっつったりうるせえなっ」

「そうは見えないっ全然見えないっ。うわっ足加減もしてないっ」

「宮地もちよつとは手伝えよっ。俺がどんだけお前に殴られたと思っつてんだっ」

「だつて相手は香取じゃなあいつ」

「そりやどーゆー意味だっ！！」

「いやあつまた復活したっ、えいっえいっよっちゃんこっちもなんとかしてっ」

二人でぎゃあぎゃあ騒ぎながら、次々と来る相手を殴っていった。あたしは相変わらず、叩くのが精いっぱいなの。よっちゃんはあたし達の様子にポカンとしながらも、洗練された手さばきで木刀を使って相手を倒していつてる。でも目が呆れてる。

「いーかげんにしろ」

騒ぎながらグルグルに手を振り回していたら、いきなり香取に襟首をグイッと掴まれた。

そして乱暴に引き寄せられ、鼻先が触れ合うくらいの距離で、低く脅された。

「その口塞ぐぞ」

・・・目が、据わってる……。口塞ぐって……。方法は、聞かずもがな。

「・・・黙ります」

「よし」

突き放す様に解放されて、マ、マジでビビった……。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

相手を一通り地面にのした水島さんとヒトミ、そして間近のよっちゃんが絶句した様にあたし達を見た。

「・・・開き直った子供って、こえー……」

水島さんのドン引きした声。まったくくだ。

その時、向こうからまたもや人影が複数、近づいて来た。ああ。足元に倒れている生徒達は、再びゆっくりと動き出す。

逃げ出そうとしたあたしの近くで、ヒトミがうんざりした様に言った。

「埒が明かない。こういうのって好みじゃないな。どうにかなんな

いんですか？」

「お上品なお嬢様には無理があるって訳ね」

水島さんが厭味つたらしく言う。けれども彼女は平然と返した。

「おっしゃる通りです。相手は一般人でしょうか？ 切り捨てる訳にもいかず、ただ殴り続けても意味が無いと思うけど？ 被害が拡大するだけ」

すると彼は前方とチラツと見て、それからヒトミに視線を向けると、満足そうにニヤツと笑った。

「同感だね。だから我らがヒーローに期待を寄せよう」

そう言ってよっちゃんに目配せをする。

よっちゃんは目を見開いて、憎々しげに前を睨みつけていた。

そんな彼を眺めて、水島さんは皮肉と信頼に満ちた目で言った。

「そっちは任せたよ、義希」

「・・・やつと来たか」

よっちゃんは彼の言葉も聞こえていない様子で、低く呟く。顔からは憎悪が溢れていて、目から暗い光が放たれている。そして前方の人間・・・沙希に向かって歩いていった。

いつの間にかそこに立っている沙希は、首から肩にかけて血だらけで、微笑んでいた。だけど、見るからに狂っている。あたしは戦慄した。

よっちゃんは手に真剣を握っている。そして彼女に向かって歩みを止めない。怒りはあるのに、緊張とか間合いとかを感じられない彼の後姿は、まるで自分がここで死ぬ事を悟っているみたいに見える。一度そう思ったら、もうどうしようもなかった。

「ごめん、香取」

「宮地?!」

ぎょつとしたような声の香取を置いて、よっちゃんの後を追う。こちらに向かってくる相手なんて、本当は飛び越せばいいだけだもの。唯が気になるけど、水島さんもいるし大丈夫だろう。

「義希」

彼女のうつとりとした声が聞こえたかと思ったら、もの凄い衝撃を受けて吹き飛ばされた。体をおこす間もなく立てつづけに爆風みたいなものが来て、人や石や木の枝などが飛んでくる。中々顔を上げられない。

「大好きよ」

何が起こっているんだろう。どうなっているんだろう。

とてつもない不安が襲ってきて、あたしは懸命に立ち上がった。やっぱり顔を上げる事が出来ず、それでも走りだそうとした。

するとあたしの足元に、彼の日本刀が転がってきた。握りの部分

が血で染まっている。

あたしは驚愕した。よっちゃん?!

「愛してるわ・・・この上なく」

「俺も」

途端に、すべての風がやんだ。

「愛していたよ」

世界が、呼吸を忘れたかのように、止まったみたいだった。

沙希が腕を伸ばして、よっちゃんの喉元を握りつぶそうとしている。そのまま、彼を凝視していた。

彼は頭から血を流して、切なそうに彼女を見つめていた。

彼女のお腹に刺したナイフを、彼は更に奥へと、ねじ込んだ。

「・・・っ」

「堪らないくらい」

呟く彼の瞳が揺れている。それはどこか、憐みを含んでいる様だった。

まるでテレビのワンシーンの様に現実味を帯びていない光景を、あたしは不思議な気持ちで眺めた。

信じられない様に彼を見つめていた沙希は、次の瞬間、瞳を鮮や

かなオレンジ色に変えた。

憎悪と狂気。

ハツとした時には、彼女は腕一本で彼を空中に持ちあげていた。彼の喉元に彼女の爪が喰い込んで、血が流れ出す。彼は僅かに唇を噛み締めたままぶら下がった。垂らした腕や足が不自然に曲がっている事に気付く。折れているのかもしれない。

大の男を片手で、空中にぶら下げている。お腹にナイフが刺さったまま、血だらけで、目があり得ない色に光って、口元は醜いくらいに歪んで笑っている。

この人、間違いなく、化け物だ。

「あの時私に全部食べられていれば、こんな痛い目に合わなくて済んだのに」

「義希！」

水島さんが叫んだけど、まるで殴られた様に倒れた。吹き飛ばされて動きを止めていた生徒達も、次々と立ち上がり襲ってくる。

「くっそ！」

水島さんはもどかしそうに彼らを振り払い、こちらに駆けて来ようとした。

だけど沙希は見向きもせず、よっちゃんを見上げて口角を更に上げた。

「ただで殺すのはもったいないけど、そんなに悠長な時間はないの。・・・ごめんね？」

ギリッと握り潰されて、彼の喉元が捻じれる。爪が皮膚に喰い込み、肉が抉れる。彼が苦しそうに口を開けた。

「さようなら」

あたしは本能的に手元の日本刀を掴んだ。同時に跳躍する。彼女の脳天に向かつて、日本刀を振り下ろそうとした。

何も考えられなかった。どうなるか、なんて頭を掠めもしなかった。

上から降ってくるあたしと、彼女の目が合う。仰天した顔つきで、彼を掴む手から力が抜けた。

あたしが腕を振り下ろす瞬間、誰かに突き飛ばされた。

日本刀は、彼女の肩を切り裂いた。

「ぎゃあっ」

日本刀が手から奪われる。よっちゃんは地面に転がって咳き込む。

あたしを突き飛ばしたのは、加藤先生だった。

先生はオレンジに光る瞳であたしを見た。不意をつかれたあたしは、体の自由を奪われてしまった。先生の手には、あたしからもぎ取った日本刀が握られていた。

しまった。まさか先生にやられるなんて。

あたしは受け入れられなくて、驚愕した。油断した、なんてものじゃない。

あたしはバカだ。

先生は顔を歪めて、唇を噛み締めてあたしを見下ろした。その唇から血が出る。

やられる、と思って、あたしは息を飲んだ。

先生の後ろで、沙希があたしを激しく睨んだ。

「このガキっ」

先生はなおもあたしを見下ろしている。そして日本刀をかざした。

皆が叫ぶ声が聞こえる。あたしは先生から目を反らせない。

先生が切りつけた相手は、沙希だった。

意外な光景に、誰もが息を飲んだ。

首筋から胸にかけて大きく切られた彼女は、だけどそれほど血を流さない。胸の骨が覗いた気がした。

先日、よっちゃんが一振りでイットを消した事を思い出し、ああ

人を切るにもコツがあるんだなあ、なんて心の片隅で冷静に感心してしまった。

先生がもう一太刀、大きく振りかざす。

その時、手から日本刀が飛び落ち、先生は襟首を彼女に掴まれた。

ごうっという激しい耳鳴りと僅かな頭痛がした。

それは一瞬の出来事かもしれないし、長かったのかも知れない。

先生は地面に転がった。

先生の服をきた、ミイラだった。

「バカみたい。今更人間のフリして、自分だけは特別だとも思ってたの？」

吐き捨てるように言う彼女は、お腹にまだナイフが刺さったままだし、胸の骨は白く見えている。肩の抉れた肉まで見えている。

なのに、流血が止まっている。

先生を、吸ったんだ。

それで、回復したんだ。

あたしは呆然と彼女を見やった。

「ああ、そうね。あなた、イットの自分を消したかったのよね。よかつたわね、願いが叶って」

冷たく言い放つ彼女を見ているあたしは、収まった耳鳴りの代わりに頭痛が激しくなるのを感じていた。

先生が、あたしから刀を奪ったのは、

あたしに人を斬らせない為だった。

あたしを守る為だった。

なのに自分が殺されてしまった。
どこまでも、どこまでも、読みの甘い人。

頭痛が激しさを増す。目眩がして周りがグルグル回る。なのに体の感覚が全く無い。

あたしはゆらっと、立ち上がった。

沙希が暗闇の中に立っている。彼女が何故狼狽しているのかは分

からない。

だけど分かる事がある。あの先には、更なる暗闇が待っている。抜け出す事の出来ない、沼の様な暗闇。

そこに、突き落とせ。

「何こじ」

初めて見る、彼女の怯えた瞳。

突き落とせ。

あたしは彼女に向かって、暗闇に向かって手を伸ばした。

そして一步、暗闇に向かって踏み出した時、別の腕を、誰かに強く引つ張られた。後ろに戻される。

あたしはそれには構わず、彼女のお腹から出ているナイフの柄を、グイッと押しやった。

押された彼女が、僅かに暗闇の中に埋もれる。後ろに引つ張られたあたしはバランスを崩す。

次の瞬間、彼女は消えた。

怯えた目をして、暗闇ごと消えた。

The closing day 6

ポカン、とした。

何もかも、消えてしまった。

頭痛まで、消えてしまった。

急に頭の中の霧が晴れた様に、あたしの眼には鮮やかな景色が戻ってきた。体の痺れも無くなっている。

あの暗闇は、何だったのだろうか？

沙希は、どこに行ってしまったのだろうか？

あたしは彼女を、どこに突き飛ばしたのだろうか？

唖然としたあたしは、後ろであたしを抱きとめている人を、ゆっくりと見た。

「・・・お祖母ちゃん！」

「真琴」

あたしの腕を掴んで引き戻していたのは、なんとお祖母ちゃんだった。

あたしはガバツと身を起こした。

「何でここに？」

「ヒトミから連絡を貰ったんだよ」

お祖母ちゃんは眉間に皺を寄せて、顎を引いてあたしを見ている。これは、お説教をする時の顔だ。ええっ？ 何でここに来るのよっ。連絡貰ったって、いつの話よっ！

ビックリしていると、お祖母ちゃんは視線をあたしから、前方の空間へ、移した。

「・・・今のはサキかい？」

ギクツとした。お祖母ちゃんの眉間の皺は消えていない。難しそうな顔をしているけど、複雑すぎて表情が読めない。

「・・・うん」

あたしは少し俯いた。沙希が消えたのは現実なんだ、と思った。それにお祖母ちゃんはやっぱり沙希を知っている。彼女だって、そう言えば何回もお祖母ちゃんの名前を出していた。

「知り合い？」

「・・・昔ね」

お祖母ちゃんは表情を崩さず、それでも彼女が消えた空間を眺めつづけていた。

そしてあたしに視線を戻すと、今度は穴が開く程、真顔であたしを見つめ出した。

「何・・・？」

あたしは冷や汗が垂れ始める。だ、だって、お祖母ちゃんにこれほど凝視される事、生まれてこのかた記憶に無いよ……。

その後ろから、制服がよれよれになったヒトミがやってきた。

「真琴……今の、何？」

疲れ切った様子だけど、驚愕の表情であたしを見ている。そんな顔のヒトミも初めて見たので、あたしはギクツとなった。

「え？」

「さっきのアレ……」

まるで初めてあたしを見るように、幼馴染があたしを見る。

彼女の後ろで、水島さんも、そして香取までもが同じ表情をしている。あり得ないものを見るように。

あたしは途端に、胸が物凄く痛くなった。

「……えっと……あたしもよく、わかんない……」

あたしの後ろで、掠れた声が聞こえた。

「……空間を操るって……」

振り返ると、よっちゃんが立っていた。

足を引きずる様にして、腕を下げ、首から血を流し、目は、愕然と見開かれていた。

「……ごういう事か……」

あたしは顔から血の気が引いて行くのが分かった。皆の視線が、あたしを追い詰める。ヒトミが眉根を寄せて、厳しい顔つきで聞いてきた。

「あそこ、どこ？」

「さ、さあ……」

「異空間って事？」

「えっ？ ……さあ……」

「何も分らず、やったの？」

「……やったっていうか……そうなってたっていうか……」

四面楚歌。そんな言葉が浮かんた。空気が冷たく刺さる。おかしい。ここにあたしの敵なんていないのに。

泣きそう。

「……成程……」

水島さんが、目を細めて小さく言った。
次の瞬間、

「あー、びびった」

「また一つ、世界が広がった」

「世の中には不思議な事だらけだな」

「ユーレイ初めて見た時くらい、ビビった」

水島、ヒトミ、よっちゃん、香取の順に口を開き、

そして香取の台詞に、みんなが目を向いて食いついた。

「えっ?! 幽霊見た事あんのっ?!」

「・・・この場合、幽霊よりお前らの方がよっぽど珍しいと思うが?」

香取の、生ぬるい目。

いやっ、でも幽霊なんて見た事ないっ! 恐すぎるっ。

水島さんが振り向き、いつもの冷たい目であたしを見下ろして言った。

「ま、あんな大技は滅多に見れないからビックリしたけど、いいんじゃないの? そういう事も出来ますって事で」

「でもやりすぎない方がいいよ。寿命縮めちゃうよ?」

優しいよっちゃんが、暖かい眼で心配そうに言ってくれる。

失ったと思っただ居場所を取り戻したあたしは、一気に生きた心地を取り戻した。

すると水島さんが、更に冷たくよっちゃんに返した。

「じゃ、ハンターなんか誘わなきゃいいんじゃない？」
「……………」

グツと言葉に詰まるよつちゃん。そして悔しそうに彼を見上げて、水島さんはツンと横を向いた。

……この二人、なんかあったのかな？　そう言えばこの間も喧嘩してたな。

まあ、何とかは犬も喰わないって言うし？　（夫婦みたいなもんでしょ、この人達）

気を取り直したあたしは、お祖母ちゃんに向き直って訪ねた。地面に転がっている大勢の生徒達を指さす。沢山吸ったな、彼女。

「この人達、何で倒れてんの？　…沙希が死んだから？」

「さあ。それはどうだろうね」

「えっ？　あの人、死んでないって事？」

「…さあ」

「…どこに行ったの、彼女？」

「さあ」

「……………」

…役に立たない。何しに来たんだ、この人。

その時、急に叫び声がした。

「先生っ！」

振り向くと、いつの間にか気が付いた唯が、ミイラに抱きついて
いる。

正直言つて、ギョツとした。あんまりにも異様な光景で。

「唯」

「先生っ先生っ！」

唯はミイラを激しく揺すぶっている。わ、わ、そんなに揺らすと腕とか取れちゃうんじゃないの？ ポロ、って。それでも死んでるんだから関係ないのか、ってそんな事じゃなくって、そもそもなんでアレが加藤だつて分かるの？ 愛の力は偉大ね、って服装からなの？ ああ、マジで首が取れそうっ。

「唯、唯・・・」

「真琴っ先生を助けてっ」

唯が勢いよく頭を上げて、涙でぐちゃぐちゃになった顔であたしを見た。えっ？ ミイラを助けるって？！

「唯、先生はもう・・・」

「まだ息をしてるっ」

「ええっ?!」

うつそでしよっ？ あたし達は飛び上がった。息をしているミイラなんて、聞いた事ないよっ。

お祖母ちゃんが素早く脇に座りこみ、鼻の下とか、首の付け根とか、胸とか手首とか、いろんな所を触ったり、耳をくつつけたりしている。ひええっお祖母ちゃん偉すぎっ、流石は獣医っ。

はっ。医者を目指しているあたしも、あれぐらいは出来ないといけないのっ？ 例え相手がミイラでも？ うひよおっ。

眼を白黒させているあたしの足元で、お祖母ちゃんはあたし達を見上げると、少し難しそうな顔でもハッキリと、頷いた。マジですか？！

ただどあたしに縋りついた唯の台詞を聞いて、あたしは更に驚愕した。

「先生は苦しんでいたの。なんとか上手くやろうとして、真琴の事も守りたくって必死だった。鞆にグリフィンを入れたのは私よっ。真琴なら何とかしてくれるだろうと思って、私が入れたのっ」

「・・・え・・・」

・・・唯が、アレを、入れた？

「お願い、先生を許してあげて。お願い、先生を助けてあげて」

「・・・唯・・・」

あたしは生唾を飲みこみ、信じられない思いで唯を見た。

「何で、あたしの事を・・・」

唯はあたしから手を離し、辛そうに俯いた。

「先生がどういう人間なのか、私は知っている。真琴のお友達がどんな人達なのかも」

唯の断言に、あたしは驚いた。

「今までの事件に、真琴と香取君がいつも絡んでいた。私、二人は一体どういう関係なんだろうって思っていたの。でも真琴はそれには触れられなくなさそうだったし……。真琴はいつも、何かを隠している感じがして、私はやっぱり、少し寂しかった。……。そんな時にね、気付いたの」

唯が濡れた瞳で、再びあたしを見る。

「加藤先生も同じ雰囲気だ、って。真琴と似てる、って」

なんとなく、言葉に詰まる。口を開けなかった。

似てる、って。何が？

それが聞けない。

「・・・先生が聞かせてくれた話から・・・私は、真琴がハンターだと思っていた」

唯はまた泣きそうな顔をしながら、自嘲して笑う。

「真琴は先生の事に気付かない。先生がおかしなことをしなければ、自分を保って暴走さえしなければ、先生は誰にも気づかれずに済むと思ったのよ。．．なのにあの小さな置物のせいで、先生はトラブルに陥っている。あれさえ、あれさえ手元になれば．．」

再び興奮が舞い戻ってきたのか、彼女は喉を詰まらせて唇を震わせた。

「．．君はいつ、彼の正体に気付いたんだい？」

側に立って話を聞いていたよっちゃんが、静かに尋ねた。

「．．先生が、泣いていたから．．私を吸った後に」

唯は俯いたまま、誰にも表情を見せずに言った。

「面談中に．．色々話していて．．私の事とか、先生の事とか．．いつの間にか気を失っていて．．目を覚ましたら、先生が．．あたしを抱いていたの．．．．声を押し殺して、涙を流してた」

震える彼女の肩を見ながら、あたしはぼんやりと考える。加藤先生に一線を越えさせてしまったモノは、一体何だったのだろうか？ たまたま目の前にいたのが唯だっただけなのだろうか？ それとも、恋愛感情が高まると、相手の気を吸いたくなるのだろうか？ 或いは、エジプトで獅子鷲を手に入れる時点で既に、一線を越える行為をしていたのかもしれない。後は雪崩のように、自分の本能を止められずに。

「びつくりして、問い詰めて問い詰めて、そしてやっと、全てを話してくれた。聞いた時は驚いたけど、でも恐くは無かった。むしろ嬉しかった。だって先生は先生だもん、そうでしょう？ 先生はそのまま行方をくらまそうとしたけど、私が引き止めたの。だって先生はそういう風に生れただけで、何も悪くない！ 先生のせいじゃない！ 現に私は生きている！」

あたしは以前に唯とした会話を思い出して、聞いた。

「・・・沙希に話したのも・・・」

途端に唯は、ギクツと動揺した。

「何も言っていない。ただ中村先生が、あなたの学校で事件が起きたようで大変ね、って言ったから、親友が巻き込まれて本当に心配です、って言っただけ」

・・・中村先生・・・沙希の事？・・・やっぱり彼女は唯の塾講師・

唯・・・彼女に、相談に乗ってもらってたんでしょ・・・？・・・先生の事」

あたしがそう言うと、唯は苦しそうに目蓋をキツく閉じた。そしてあたしに背を向けて、先程から立ちつくしているよっちゃんと水島さんに向かって言った。

「お願いします。全部私のせいなんです。先生を助けてください。先生を・・・」

我慢が出来ずに嗚咽が漏れ、彼女はそのまま体を折り曲げるように、額を地面につけた。

「・・・助けて、下さい・・・」
「・・・唯・・・」

あたしは絶句した。他の誰も、何も言わない。唯のすすり泣きだけが聞こえ、とても重い空気が流れた。

「悪いけど、無理だよ」

落ち着いた声で、冷静に答えたのは水島さんだった。

「イトトに喰われた人間は、自己回復を待つしかない。それに彼はいくらまだ息があるとはいえ、普通の人間ならこんな状態では生きられない・・・人間じゃないから、生きているんだよ」

「だから・・・っ」

「あきらめろ」

冷たく突き放す様に、よっちゃんが言った。敵意すら感じさせる言い方で、普段の優しさが微塵も感じられない。彼が女の子にこんな物言いをするなんて、予想はしていたけど信じられなかった。

「人喰いのイトトを生き返らせるような理由は存在しない。術すべも存在しない。あつたところで、俺たちに頼みこむのはお門違いだ」
「そんなっ」

唯は非難めいた色をにじませ、驚いたようによっちゃんを見た。そしてあたしを振り仰いだ。

「真琴っ」

最後の頼みの綱。彼女の瞳がそう言っている。この綱を取らなかつたら、あたしと彼女との絆も絶たれる。

「・・・唯・・・」

どうすればいいのかわからないあたしは、彼女を見つめたまま狼狽するしかなかった。

「・・・沙希に喰われたのかい？」

お祖母ちゃんが、静かに聞いてきた。

おかげであたしは、唯から視線を反らす事が出来た。ホッとした。

「・・・うん・・・」

おばあちゃんはミイラになった先生を黙って眺めて、そして言った。

「通用するかどうかは解らないけど、手段はあるよ」

「えっ？」

「ただしここまで激しく喰われた人間を私も見たことがないから、全く元の通りに戻る保証はないよ」

「・・・と、言うと・・・」

「とにかく、やってみるさね」

お祖母ちゃんは先生を見たまま、僅かに微笑む。あたしは仰天した。

「お祖母ちゃん？」

「宮地さんっ？」

あたしよりも仰天の声を上げたのは、よっちゃんだった。でも彼の声には、驚きだけではない、明らかに拒絶の響きが混じっていた。

「医者だね。目の前に患者がいて、治してくれと頼まれば、例え敵でも治さざるを得ないんだよ」

「そんなバカなこと・・・」

「あんたは自分の仕事を全うすればいい」

背筋をぴんと伸ばしたお祖母ちゃんからは、どんな反論をも跳ね返す硬質な雰囲気が放たれていた。

「道に外れたイットを切る。あなたにその資格があるのか、彼がどれだけ道に外れた事をしたのか、考えどころではあると思いますけどね」

よっちゃんは眼を見開き絶句して、顔が少し赤くなった。

そして我慢がならない様に、お祖母ちゃんに向かって叫んだ。

「人を吸っている時点で充分道に外れています！ 彼はそれを自覚していた」

「でも誰も殺していないっ」

唯がすかさずよっちゃんに叫び返す。彼は唯に向かって怒鳴った。

「結果的にだろっ。殺人未遂を野放しにするのかっ」

お祖母ちゃんは静かに言った。

「少なくとも処刑はしないだろうと思いますが。私の口出す事ではないのでしょね。お上はあなた方を信頼してこそ、そのお仕事を任命されたのでしょから」

凜とした眼差しで、射抜くようによっちゃんを見て、言葉が続けた。

「でも、それに溺れるような事になっても、誰もあなたを助けてはくれません。そこを充分に気をつけて、自分は神ではない事を自覚おしなさい。さもないとあなた自身が、狩られる立場になりますよ」

強烈な台詞に、あたしは衝撃を受けた。狩られるって、よっちゃんが？ そんな訳無いじゃないっ。そんな恐ろしい事、起こる訳が無い。

そう言いたいのにな、言葉が出ない。誰もが、お祖母ちゃんに逆らえない。理屈だけでは無い強さと、強さだけでは無い道理がある。そして何より、オーラがある。

「個人的な恨みは、個人的に晴らしなさい」

よつちゃんは何も言えずに、押し黙るしかなかった。
そんな彼を、水島さんは無表情に眺めていた。

一方のお祖母ちゃんは唯に向き直ると、何も気に留めていない様に
晴れやかに微笑んだ。

「さてね。彼を元に戻せるとしても、やるのは私じゃない。私には
そんな技わざ、さっぱりないからね」

「え？ だつてお祖母ちゃん、さつき自分で医者いしやは云々つて・・・」
「やるのは、私じゃない」

楽しそうに笑つて、お祖母ちゃんは横を見た。

「トミだよ」

大きな木にもたれかかつて腕を組み、第三者を決め込んでいたトミは、いきなり名前を呼ばれて啞然とした。

「えっ？ 私？」

体をおこす事も忘れ、口を半開きにしていた。

The closing day 7

みんながヒトミに注目して、当のヒトミはかなり当惑していた。そして、お祖母ちゃんを見つめたまま呟いた。

「私が、何？」

「お前が、あいつを生き返らせるって」

ヒトミの隣の香取が彼女に言っつて、彼女は余計に固まった。

「……は、はああああ？」

……すつごい。こんなに動揺したヒトミは、かなり久しぶりに見たかも。いつ以来だろう？ 記憶に無いわ。

でもさ、ミイラを生き返らせてくれ、なんて言われたら誰だってビビるよ。彼女も例外では無かったって事ね。

「ヒトミ。アレをやってくれないかい？」

「アレ？ って何ですか？」

ヒトミは本気で分からないらしく、お祖母ちゃんに真正面から問いかけた。

お祖母ちゃんは彼女を見つめて、そして柔らかく微笑んだ。その笑顔をしばらく見たヒトミは、すうっと顔を青くした。

「えっ？ あれをですか？」

えっ？ 何をですか？

「・・・で、でも・・・」

次に彼女は、顔を赤くした。あたしはもう、ビククリ。顔を赤くするヒトミなんて、ホント何年も見ていないっ。彼女は口を片手で覆って、片手を軽く振って言った。

「・・・え・・・ちょっと・・・無理・・・」

その狼狽ぶりに、好奇心がムクムクと湧きおこる。何何何？ 何でそんなに動揺してるの？ ヒトミは何が出来るの？

でもそんなあたしの食いつき振りを更に上回る人物がいた。

「お願いっヒトミくんっ」

「唯ちゃん・・・」

「お願いっ先生を助けてっ・・・お願いっお願いっ」

「・・・」

唯はヒトミの胸に縋りつく。ヒトミは両手を軽く万歳状態で、途方に暮れて唯を眺めた。

そしてお祖母ちゃんを見た。相変わらず、お祖母ちゃんはニコニコとヒトミを見ている。

「・・・」

ヒトミはもう一度、胸元の唯を見た。そして、お祖母ちゃんを見た。

「……ああ」

そして、上げていた両手で顔を覆って、天を仰ぐ様にして固まっ
てしまった。なっ、何っ？

よっちゃんがあたしの耳元で、小さく囁いた。

「彼、どうしたの？ 何が出来るの？」

「（彼……）さあ……、あたしにも分かりません」

全く想像がつかない。でも、ヒトミが激しく抵抗を感じている事
は、分かる。

あたしは、上を向いたまま両手で顔を覆って固まっている彼女に
近づくと、背中を優しくポンポンとした。

「大丈夫。怖くない、ほら、怖くない……いたっ」

「何か知らんが空気読め」

「何か知らないなら叩かないでよっ」

頭を押さえて香取を睨む。勇気づけようとしたただけなのに何よう
っ。よっちゃんがやると許されて、何であたしだとダメなのようっ。

しばらくしてヒトミはほう、と溜息をつくくと、手を降ろして、観
念したようにお祖母ちゃんを見た。

「あの、人のいない所でなら」
「誰もいないさね。あたし達以外」
「・・・この人達、見るんですか？」
「恥ずかしい事じゃないだろ。お仲間だし、第一みんな、怪我をしているじゃないか。ついでだよ、ついで」
「・・・人に試した事、ないし」
「あたしは元気さ。それで充分」
「・・・」

ヒトミは眉間に皺を寄せて、眼を瞑った。
口を薄く開けて黙り込み、今度は大きな溜息をついた。

「・・・人生最大の恥辱・・・」

なんか、ヨーロッパの騎士がプライドを傷つけられました、って感じ。宝塚の男役が、哀愁漂うシーンを演じている時みたい、見た事無いけど。

彼女はゴクつと息を飲むと、決心した様に眼を開いた。

「開き直った。どうすればいいんですか？」
「おっ。じゃあ、あの人の側に座って、顔を近づけて、後はいつも通りにやっごらん」
「顔を近づけるだけでいいんですね？」
「そう。響きがよく伝わる様に」
「はい」

スタスタスタ、とミイラ先生に近づく。片膝をついて座って、彼の様子をうかがう。先生は、ああ見るのも嫌なんだけど、顔も首もどこもかしこもが、しなびて固まっている。皮膚の色は茶色じゃなくて、血色がひどく悪い色。そんな先生の傍らに唯も来て、彼の手を両手でギュツと握った。ひえ。

恐る恐るあたしも近づいて覗きこむと、ヒトミは顔も上げずにあたしに言った。

「真琴。これに対するコメントは一切聞かないから。何も言わないで」

「……はい……」

あたしは思わず半歩下がって、構えてしまった。生唾を飲み込んで、一体何が始まるんだろう？

どこからか、場違いな旋律が聞こえてきた。

それは柔らかで魅惑的で夢見心地で滑らかで、風に乗って聞こえてくるようであり、空気を通じて、大気から聞こえてくる様でもあった。

耳から聞こえてくる様でもあり、肌から感じている様でもあり、頭が聞きとっているようでもあった。

大きな音量なのか、囁く様な旋律なのか、それすら分からない。

それが、二歩先の足元に座っているヒトミの歌声だと気付くのに、

たつぷり一分近くはかかった。

眼を見開いて彼女を見る。

彼女の歌は、そもそも何かの言葉を言っているのだから上手くは聞きとれず、とてもうっとりするけれど、迂闊には聞き流せない繊細な何かがあった。

そして何よりも、彼女の表情。

目元がうつすらと赤くなり、瞳は潤み、睫毛は濡れ、唇は赤く染まり・・・て、滅茶苦茶色っぽい。中性的な艶あてやかさを身に纏い、どこか恍惚とした表情で、胸を締め付ける程、切なく歌っている。

あ、あたし、ヒトミの歌は好きだけど、こんな歌い方は初めて見た。ドキドキして、目が反らせない。

いつもは余裕をかまして毒舌皮肉屋の、人をからかう様な甘やかな視線がお得意のヒトミなのに、今の彼女は、どんな女も太刀打ちできない神々しさと色っぽさを持っている。

眉根を寄せてあんなに切なく艶っぽく歌うなんて、あの表情、正直、裸を見るより恥ずかしいかも。マズイよドキドキするっ。

何分続いたのか分からない。

全身全霊でその歌声を聞いていたハズなのに、気付けばそれは終わっていた。

見るとみんなも、戸惑った様に我に返ったように、お互い顔を見合わせている。

夢見心地に身をゆだねていた訳ではないのに、まるで今まで、催眠状態になっていた様な気分だった。

そしてなんと、先生の顔が元に戻っていた。

顔色はまだ悪いのだけれど、しなびていない。お肌に張りがある。わっ、おじいちゃんから若返ったっ？！

「あの子の旋律には、独特の周波がある。歌も歌い方も、その家が代々受け継いだものだよ。これがまさしく、あの子の本領発揮さ」

お祖母ちゃんが満足したように言った。

ヒトミはまだ潤んだ目で、頬を少し赤く染めたまま、悔しそうにお祖母ちゃんを見た。

「おやおや、そんな顔をするでないよ。何よりも尊い力だ。誇りに思っても、恥ずかしがる事は無いだろう？ 効いてよかった」

お祖母ちゃんはニツコリと微笑む。

そしてあたし達を見回して言った。

「この事はくれぐれも他言無用。この類の力は、昔から様々な争い事に巻き込まれてきた。水島さんならお解りでしょう？ 皆でこの子を守ってやって下さい」

水島さんが僅かに目を細めた。

後から聞いた話だけど、サイコメトリーは、その力をあてにして様々な人が頼ってくるらしい。それにいちいち対応していると、彼は身も心も持たない。

それと同じで、ヒトミのこの力も、人に知れるとそれこそ世界各地から、人々が大挙してやってくるらしい。それでヒトミのご先祖様は苦勞したそうだ。しかも彼女の歌は、誰でも若返らせる訳でも誰の病でも治すという訳でもない。すると恨まれる。目の前の病人を治せないという十字架を、彼女も背負ってしまふ。

でもそれって、医者と同じじゃん。

そんな事言ったら、お医者様はやってられないじゃん。

こんなあたしの思いが甘かった、と思い知るのは、ずっとずっと後の事。

ヒトミは立ち上がると、先生と唯を見下ろした。唯は先生に覆いかぶさり、声も無く泣いている。先生はまだ目を覚まさない。

それをなんとも複雑な表情で見た後、あたしと目があつた。途端にムツとした顔になる。あたしは慌てて言った。

「何にも言っていないよ」

「・・・」

「いいじゃん、すごいじゃん・・・で、何にも言っていないってば」

「・・・」

「・・・いつからなの？ ていうか、なんでお祖母ちゃんが知ってる

の？」
「うちの植木が毎年素晴らしい花を咲かせるのは、ヒトミのおかげ
さ」

満足そうにお祖母ちゃんが言っ

「・・・花？」

「そうそう。肥料入らずでね」

「・・・肥料・・・」

あたしは啞然とヒトミを見上げた。

「・・・花咲かじいさん・・・？いたっ」

「・・・」

ヒトミはあの艶やかで恍惚とした表情を見られたのがよっぽど恥ずかしいのか、先ほどから一言も発しない。無言であたしの頭を叩いた。やめてよっこの怪力女っ！

よっちゃんが、ボソツと呟いた。

「・・・俺、先、行ってる・・・」

彼はびっこを引き引き、去っていった。

「……」

この後始末はどうするんだろう？ 沙希が消えた事がやっぱり辛いんだろうか？

そう思って彼の後姿を見ていたら、横で水島智哉の冷めた声が聞こえてきた。

「あーあ、あいつ惚れちゃったよ」

……はっ？

……惚れた？

……よっちゃんが？

……誰に？

「……はい？」

「でもなんか悩んでるみたいだから、面白いで放っておこう」

彼が半眼でよっちゃんの去った方向を眺めている。

あたしは絶句した。

「……って、まさか……」

「言ったでしょ？ 惚れっぽいって」

……嘘だ……。

「昔っから面食いだから。でも男に惚れてどーすんだろ。男じゃないけど」

「……」

……それで悩んでいる、と……？

ちよつと沙希はどうなったの？ そんな簡単でどうするの？ いや、簡単じゃないのかもしれないけど、堪らない程惚れていたんじゃないのっ？ 自分が狂っちゃうのも厭わなくらいっ……！

いや、聞くまい……。新しい人に目を向けるのはいい事だ……。あんな化け物に捕らわれているくらいなら……。でも何で、あの子……。うっそでしょ……。

なんとも複雑な胸中であたしが黙り込んでいると、お祖母ちゃんが近づいてきた。

みんなは既に想い思いの事をしている。

「真琴。お前、何か持ってるかい？」

「は？ 何かって何？」

ハンカチチリ紙？ 無いよ、今は。

するとお祖母ちゃんは、勝手にあたしのポケットに手を突っ込んできた。

「ちよつとお祖母ちゃん、何？」

「……」

お祖母ちゃんは眉間に皺を寄せて動きを止め、ゆっくりとポケットからソレを取りだした。

それは、なんと、あの獅子鷲だった。

「コレ・・・!!」
「しっ!」

大声を上げそうになったあたしの口を、お祖母ちゃんは片手で覆った。

「ただどあたしの頭の中は大パニック!! なんでコレがあたしのポケットにあるの?? ロンドンに持って行ったんじゃないの? あたし入れた覚えなんて無いっ! 今朝は確かに無かった!!」

「いいから黙ってお聞き。これこそ他人に言うんじゃないよ」

お祖母ちゃんは小声で厳しく囁いた。

「これは私が預かっておく。いいね? 誰にも、例えあの子達にでも言うんじゃないよ。分かったね?」

その迫力に、あたしは口を塞がれたまま、お祖母ちゃんを凝視して頷いた。

お祖母ちゃんはそれを素早く自分のポケットに滑り込ませた。

「……どうするの、それ……？」

「後から考える。お前は心配しなくてよろしい」

「……何で、あたしのポケットに……」

お祖母ちゃんはあたしを見た。

「……お前が今日やった大技、あれは多分、これのせいだよ」

「……え？」

「お前が呼んだんだ、多分」

「……え？」

呆然とお祖母ちゃんを見上げる。

お祖母ちゃんは、厳しい顔つきで言った。

「真琴。お前は、世界を動かす何かを持っているのかもしれない。望むと望まざると、関係無く。もう、今までの様に逃げてはいられない。覚悟しなさい」

あたしは血の気が止まる、思いがした。

「……意味が、分かんない」

「私も分かんない」

お祖母ちゃんはあたしから視線を反らすと、遠くを見た。

その横顔は何かを思いつめているようで、ヒトミに見せていた笑顔とは全然、深刻さが違っていた。

あたしはゴクつと生唾を飲み込んだ。

学校の中。後始末に追われる仲間達。それを黙って見ているお祖母ちゃん。

それを見つめるあたしは、自分の状況が、目の前でみるみるうちに変わっていくのを眺めている気分だった。

あたしの人生。

第二章が始まるのかもしれない。

Home

何で獅子鷲があたしのポケットにあったのだろう？

いくら黙っているって言ったって、モノが無くなれば向こう（ロンドン）だって大騒ぎじゃない？ 水島さん達の耳に入るよ。

翌日の午後、たつぷりと休養を取ったあたしは、悶々と考えながら水島屋敷の廊下を歩いていった。行き先はもちろん、台所。目的はもちろん、冷蔵庫を漁る為。もうすっかり、抵抗が無くなったの、うふっ。

あたしの力が世界を変えるって、どういう意味？ そりゃ、この力が他のモノより特殊なのは、何となく分かるけど……。

「あっ……」

何か声が聞こえた。あたしは顔を上げた。何だろう？

居間から聞こえる？ あたしは普通に歩いて行った。

「……あっ……んっ……あっ……」

あたしは固まった。リビングに三步程入った所で。

目の前のソファの上には、仰向けに横たわって服もはだけてあられも無い美女と、

その上に覆いかぶさる様に乗っかっている、水島智哉の後姿。

明らかに、彼女の胸に、唇を這わせてる。もう片方の胸は、手を這わせてる。と言うより揉んでいるっ？

「……………」

絶句してたら、彼が顔を上げた。そしてあたしと、目があった。じっと見られる。

そしてあたしもジッと見た。って、だって！！あまりに刺激的、じゃないシヨックすぎて、頭のヒューズが飛んじやっただもんっ！

奴がぶっ飛ぶような台詞を、真顔で言った。

「・・・取り込み中なんだけど。見たいの？」

「じっごめんなさいっ！」

やっとこさ覚醒したあたしは文字通り飛び上がって、慌てて居間を出て行った。

そこでハッと気付く。ちょっと待ってよ、居間って、いくらなんでも公共スペースなんじゃない？一緒に暮らす以上（いやあたしが単に居候なだけなんだけど）、ルールってもんがあるでしょう？！

抗議してやろうと思って、無謀にも部屋に戻った。

「というかりビングでやる方もどうかと思うんだけど……！」

「家主が何処でやろうと家主の勝手」

「あん」

事態はさらに進んでいて、彼は彼女のスカート中に手を突っ込んでいた。上半身なんか完全に出ちゃって、ブラもひも状にぶら下がっているだけだし。

「性教育ならお断りだよ？」

綺麗な瞳で流し眼されて、逃げない思春期の女の子がどこにいるっ！！

なんだあのエロエロ悪魔はっ！

わき目も振らずに危つく本気走りをしかかって、壁にぶつかる前に、運良く新谷さんに抱きとめられた。

「ひゃっ！ あ、新谷さん」

「どうも。・・・どうされました？」

「いえっどうもっ、どうもされませんっ」

「？ そうですか。ところで智哉様を知りませんか？」

「智哉様っ？ 知りませんっ。知っていませんっ全然っ」

「？ そうですか。失礼します」

新谷さんは首を傾げた後、そつとあたしの肩から手を外し、そのまま歩いて行った。って、その先はっ！

「あーっ、新谷さん、そっちはっ！」
「……失礼しました」

遅かった！

と思ったのに、何の騒ぎも起こらず、新谷さんは顔色一つ変えずに部屋を出てきた。

啞然としているあたしの前に、彼がやってくる。

「……新谷さん？」

「ああ、驚かれましたか？ 困ったものですよね。ああなると止められない。所構わず、ですから」

あたしの表情に気付いた新谷さんは、少し肩をすくめて苦笑した。

「ま、滅多にありませんし、そのうち収まりますから。あまりに御不快でしたら、しばらくご実家に戻られるのはいかがですか？」

滅多に無いって、そのうち収まるって、これは恒例行事かい……
いや、健全なるハタチ過ぎの男子ならそう言うものなのかもしれないけど知らないけど……

「……実家……」

彼に言われて、あたしは昨日の夜……あの事件の後の事を思い

出した。

場所はもちろん、あたしの家。

登場人物は、あたしと、お兄と、お祖母ちゃん。

『なんでイットにはなんの効力も発揮しなかったパワーアップアイテムが、あたしを追いかけてくるのっ!!』

『おい、真琴。落ち着けよ・・・』

『しかもそれでなんであたしがパワーアップしちゃうのよっ!・・・はっ・・・ひよっとしてあたしまさか・・・』

思わず両手で頬を抑えて、恐る恐るお祖母ちゃんを見る。

『イットなの?』

『お前は単純でいいねえ』

お祖母ちゃんは溜息をついた。

『別にあれは、イットの物でも、彼らに力やご利益をもたらすものでも何でもない。もっと違う物だと目めされているんだ』

『それは何?』

『まだ言えない』

『何で?』

『時期じゃない』

『もっつ。いっつもそればかり! あたしにどうしろって言っつ』

『つ
』
『どうもしないでよろしい。とりあえず、水島さんのお宅に戻りな
さい』

煩そうに答えるといつも通り背筋を伸ばしてお茶を飲む。
そんなお祖母ちゃんを見て、あたしはついにキレた。

『・・・さつきから何なのよーっ』

『押さえる、真琴。な？ 気持ちは分かるがここは押さえる』

『お兄はいつの間にお祖母ちゃんの手下っ？』

『手下って何だよ、お前いくつだよ、落ち着けて』

お兄はグイ、とあたしを椅子に座らせた。

『お前があそこに行つてこれだけ成長したんだ。俺だって認めない
訳にはいかないだろう？ そこまでバカじゃない』

『・・・』

『自分でもハッキリ分かるくらい、お前に関しちやお役御免なんだ
よ。俺じゃもう、無理なんだ。お前を守ってやれない』

『・・・あたし、もう守ってもらわなくても、大丈夫だもん・・・
』

『・・・違うな。言葉がまずかった』

お兄はあたしの前に回り込むと、あたしの目線まで屈んで、子供
の頃のように優しく笑った。

『お前は守られに行くんじゃない。助け合いに行くんだ。仲間同士、助け合うんだ。お前の助けを必要としている連中は山ほどいる。お前は、その中に身を置くんだ』

『そこを見据えている事は、お前の顔を見れば分かる。とっくに気付いていたよ。覚悟してるんだろ？ じゃ、頑張れよ。俺達は家族だ。真琴の居場所はいつだってここにある』

『……』
『そしてあそこにもあるんだ。すげえじゃないか、それって』

そう言って、あたしの頭をぐりぐりと撫でた。明るい笑顔だった。

『な。頑張ってみるよ。嫌な事をされたらぶっ飛ばせ。変な事をされたら逃げて来い。俺がぶっ飛ばしてやる』

『……お兄……』
『俺達家族は、ちゃんと真琴を愛しているから』

あたしはお兄を見上げた。

『なんてクサイ台詞……』

『薫はドラマチックが好きだからねえ』

『……』

『ねえお祖母ちゃん、助け合いにヒトミは参加しないのかなあ？』

あの子も一緒だといいのに』

『……スルーかよ』

するとお祖母ちゃんは少し微笑んだ。

『あの子はね、家族の問題が片付いたら、自分で動くだろうよ。・
・今のヒトミには、あの家が必要なんだよ』
『・・・おじさんと、おばさんの事?』
『そうそう。不器用だからね、あの一家は』
『・・・』

ヒトミは音楽が好きなのに嫌い。歌も、人前ではまず、歌わない。ただ昨日のあの歌は、先祖代々語り継がれた歌だと聞いた。と言う事は、ヒトミのご両親にも何かあるのだろう。

生き返った加藤先生が、目を覚ましたと言う情報は、まだ聞いていない。

「しかし今回はよっぽど、ストレスが溜まっておられるのでしょうねえ」

新谷さんのしみじみとした台詞に、あたしは我に返った。

「ストレス?」

「ええ。たまに、かなりストレスが溜まるとああやって解消されるのです。一日に何度も」

「・・・一日に何度も・・・」

「ああ、間違えた。一日に何人も」

「・・・何人も・・・」

「元々女性にはあまり興味の無い方なんです、その反動が来るのでしょいかね。男性の方が好き、と言う訳ではないのですよ。ご自分以上に魅かれる方に、出会った事が無いのでしよう、由井白様以外には」

居間に視線を投げかけながら、柔らかく彼が言う。

その合間にもリビングからは「いやっ・・・あん・・・はっ・・・」とか聞こえてくるし。変でしょこれっ！

「・・・ごめんなさい、新谷さん。あまりにも濃いお話の連続に・・・お腹いっぱいというか・・・胸やけがすると言っか・・・」

あの声に。

「すみません。喋りすぎました」

新谷さんは苦笑した。

「宮地さまが、少しショックを受けていらっしやる様子だったの
で」

・・・ショック？

・・・そりゃ、まあ・・・。

「・・・そうですか？」

「はい。・・・そう・・・」

彼はあたしを見て、その柔らかな視線を細めた。

「信頼していたお兄様に裏切られた、様なお顔で」

・・・信頼？ お兄様？

あたしはビックリした。

「・・・そんな事を言う程、あたし達、仲は・・・」

「よろしいかと」

「・・・ええー？ そうですか？」

「はい。とても」

「・・・」

心当たりが無い。

そう思って首を傾げた時、突然にあの光景を思い出した。

『見ててやるから。狂わない様に。だから、安心しろ』

彼の手が、あたしに伸びる。

頬をそっと包む、あの暖かさ。

瞳の、黒い煌めき。

『狂わないよ』

確かにあの時は、凄く心が落ち着いた。理屈抜きの、絶対的な信頼を感じていた。

「・・・まあ、あの人意地悪だけど、嘘とかは言わなさそうだし」
「智哉様は、敵味方の線引きをはっきりとなさる方です」

新谷さんは微笑んで、あたしを見つめた。

「味方と認識していただくには一苦労ですが、一度認めたとお相手を裏切ることは、ありませんよ」

どこかで身に覚えのある、その感覚・・・。

「・・・ああ、香取みたい・・・」
「？」

彼は不思議そうに首を傾げた。

あたしは気を取り直して、前から気になっていた事を聞いてみた。

「ところで新谷さんってさ、沙希って人、知ってる？」

すると彼は事もなげに言った。

「知ってますよ。私の姉ですから」
「！」

あたしは心の中が、100メートルくらい後ろにぶっ飛んだ。何ですって?!

「新谷サキエ。私の腹違いの姉です。両親ともにイットです。もう随分長い事、会っていませんが」

「.....」

「彼女は我が姉ながら、美しく、聡明で、行動力があり、相手の心を読む能力に長けていて、そして根っからの悪です」

「.....」

顔色を変えずにそう言い切る彼に、あたしは言葉が継げなかった。そんなあたしを真正面から見据えて、彼は深々と頭を下げた。

「真琴様にもご迷惑をおかけしたそうで、申し訳ありません」
「そんなっ.....」

あたしは大慌てで両手を振る。だけど頭を下げた新谷さんには、それが見えない。

どうしよう。だってあたし、あたし.....

「.....あたし、あなたのお姉さんを.....」

「姉は、17の時に家を出ました」

あたしの台詞を遮る様にして新谷さんは口を開き、そして顔を上げた。

黒い瞳で、再びあたしを真っ直ぐに見た。

「その時に、死んだのです。私達家族は、そう思っています・・・
と言っても、今の身内は私だけです」

そう言っつて、ふっと、切なそうに顔を歪めた。

「ああいう人間も、いるのです」

「・・・」

どういえばいいのか、分からない。

だってあたしは、新谷さんの置かれた状況が、まだまださっぱり
分からないもの。

それでも、何か上辺だけの言葉でもかけるべきなのだろうか？

「・・・あなたのおばあさまが子供の頃」

彼は視線を漂わせ、綺麗に微笑んだ。

「よく、三人で、林や川辺で遊びました」

懐かしそうに、目を細める。

「彼女は、美しく、凜として、強かった。誰とも分け隔てなく、真
っ直ぐに向き合っていた」

しばらくそうやっていた後、あたしに視線を移して言った。

「今の、あなたの様に」

そこで初めて、「彼女」とはうちのお祖母ちゃんだった事を、知る。

そっか、お祖母ちゃん達、幼馴染だったんだ……。

「……新谷さん……」

あたしは彼を見上げた。

新谷さんは、とても優しくあたしを見ている。あたしを通して、お祖母ちゃんを見ているのかも知れない。

昔付き合っていた二人。どういう歴史があるんだろう？ ……この目、お祖母ちゃんの事が好きだったんだろうな……。

「うちのお祖母ちゃんは、したり顔で勿体ぶって何にも教えてくれないし、失敗したり間違えると思いつきりバカにするし、自分のやりたい事は真っ先にやっちゃうし周りが従わないと怒るし、好きな食べ物が夕飯で出なくても怒るし、時々患者さんの飼い主に説教がますし、かなりの我儘婆さんですよ？ いくら付き合っていたとしても、美化しちゃいけません」

「……」

新谷さんが絶句した。だって本当の事だもん。

ここに香取がいたら、「テメーの事は否定しねえのかよ。図々し

「奴」とか言われそう。ふん、いいでしょ。

するとあたしの後ろを誰か通った。

振り返ると既に後姿。髪の毛の短い、とてもナイスバディなお姉さん。

「……あれ、今の……?」

「おや、今日は二人をお相手ですか。お元気ですねえ」

新谷さんが感心した様に言っ、そのお姉さんは居間に入っ、
って、「はい智哉」とか声が聞こえてきちゃったりして、

おいこらちよつと待て、それは許せねえっ!

3Pなんてそんないかがわしいもの、

「……せめて自分の部屋でやれえっ!」

「はいはいはい」

乱れた服を整えるでもなく、水島智哉はポケットに片手を突っ込み、
片手で髪をかきあげて、かったるそうに出て行った。

その後ろからお姉さま方が、実に楽しそうについて行く。先のロ
ングヘアのお姉さまは、ブラウスを手で合わせているだけだしっ。

なんっだ、あの男っ!

Home (後書き)

実は前回にて本編は終了しました。

本章では、とっちらかった物の後片付けです。

彼らの未来に繋がる様な、そんな彼らが想像出来る様な終わり方にしたいと思いますので、後数話、お付き合いを宜しくお願い致します。

一話一話が相変わらず長くなり、申し訳ありません。

皆様の、お暇つぶしになっておりますように・・・。

G i r l

『お祖母ちゃん。香取、あさってイギリスに帰るって。そして日本に帰って来ないって。変だと思わない?』

『変って?』

『だって5月の半ばに転校生としてやってきて、たった2ヶ月で外国に帰っちゃうんだよ? 歳はあたし達より二つも年下なのに同じクラスだし、そんな人の所にレポっちゃうし、そして彼はイット金の縛りが効かないんだよ? おかしいと思わない?』

『・・・』

あたしは昨日の会話を思い出しながら、廊下を歩いていた。

『その人は、真琴の事を傷つけるのかい?』

『・・・ううん・・・』

あたしは立ち止ってしまった。

『・・・守って、くれる。・・・それに・・・今では大事な・・・友達』

『・・・じゃあ』

あの時のお祖母ちゃんは、微笑んでいたけど、目は笑っていなかった。

『しばらくは、それでいいんじゃない？ 要は自分だから、真琴。自分がどれだけ、強くいられるか』

それは多分、相手がどんな人物であれ、未来がどんなものであれ、自分が強ければ大丈夫、って事なのだろう。

「真琴ちゃん。何やってるの？」

立ち止まっていたら、よっちゃんに声をかけられた。Ｔシャツにジーンズ、っていうラフな姿。腕のギプスが痛々しいけど、本人はいたって明るそう。こんな時間にここにいるなんて、珍しい。

あたしは嬉々として彼に言った。

「よっちゃん！ よかった、ねえ、パソコン持ってる？」

「パソコン？ 今？」

「うん」

「持っていないよ。だってここに住んでいる訳じゃないもん。智哉の借りれば？」

「・・・それが・・・あの、今・・・取り込み中で・・・」

「取り込み中？」

「・・・その・・・まだまだ・・・手が離せなさそうで・・・」

「いいじゃん、借りるくらい。あいつ何台も持つてるから、一台借りてきてやるよ」

「だっだめだめだめっ行かないでっ」

「・・・どしたの？」

「・・・あの人・・・その・・・ストレス解消中だから・・・」
「スト・・・ああ」

よっちゃんは納得した様に頷いた。整った顔であたしを見る。

「いつから？」

「え？ さ、さあ、かれこれ2時間以上は・・・」

「じゃ、もう終わるっしょ」

気軽に言っただけに歩きだそうとするから、えっ？ 水島さんの部屋に行くの？

「ちよちよちよちよっ！」

「だーいじょうぶだっ。俺が借りてきてやるから」

「・・・」

「・・・そんな泣きそうな顔しないでよ。分かったよ、行かないから」

だっだっ。あんなエロの邪魔はしたくないよ。あたしのせいで中断させたら、何を思われるか分かったもんじゃないよ。ただでさえ無理やり場所移動させたのに。

気付けばよっちゃんのTシャツの裾を掴み、確かにあたしはベソをかいていた。

よっちゃんは楽しそうにくっくと笑った。

「そんなにシヨツクなんだ」

「・・・新谷さんとおんなじ事言わないで・・・」

「あいつ普段、女の影、ないからな」。特定の子とは付き合わないし。たまにその気になると乱れ食いだし・・・っておっと、これは余計」

「・・・」

「大丈夫だよ、まこちゃんの事はかなり大切に思ってるから。珍しいんだよ、智哉としては・・・そんな、兄貴取られたみたいじゃないの」

「・・・（また同じ事言ってる）・・・」

「で、なんでパソコン必要だったの？ 今すぐ使う？」

「・・・浴衣の着方、調べたくって・・・」

なんとなく恥ずかしくなって俯いて答えると、よっちゃんの少し素っ頓狂な声が聞こえた。

「浴衣？」

「・・・今日、友達と夏祭り行くんで・・・浴衣、着ようかな、と今朝、家から持って来たんだけど・・・」

「・・・友達って、香取くん？」

「・・・」

「いいねえ、デートかあ。真琴ちゃん、一人で浴衣着るのは初めて？」

「毎年、着付けの方法をネットで見ながらだけど、一人で着ていたの。だから今年もやれるかな、と・・・」

割と簡単な着方なので、四苦八苦しつつも、なんとか一人でやっていた。女らしい事は結構苦手なあたしだけど、帯も結べることは密かな自慢だったりする。

髪は、お母さんにしてもらっていた。

「僕でよければ、手伝おっか？」

そう言われて、あたしは漫画の様に目が点になった。

「……はい？」

「俺、割と着物には馴れてるから。親戚の女の人や妹の着物、よく着せてやってるし」

「……え？ な、何故に……」

「実家が寺なんだ」

ハンサムな顔でニッコリと微笑まれ……お寺？！

「……ええー?!」

「おいでよ、手伝ってあげる」

手を繋がれて、あたしは彼の後に続いた。けど、彼の手に萌えている場合じゃ無かった。

お寺って、お寺って……将来、お坊さん?! 頭剃るのっ？

「ん・・つと。この足じゃ力、入んねえなー」

よっちゃんが帯をしめ上げる。

浴衣のはしよりも、襟を抜くのも、彼はビックリするほど手慣れたものだった。もちろん中の下着とかタオルとか諸々の下準備はあたしが一人でやったけど、浴衣を羽織った後に来た彼は、「ちよつとごめんね」とか言っただけ、あたしの体を見る事無く、とても手際よくやってくれた。本当に、ビックリした。

「・・・よっちゃん、怪我・・・」

「うん。足は大した事無いんだけど、手がね。不自由するよね。ちよつとここ持ってて」

そう言っただけ、帯の端を肩越しに渡される。

「・・・」

あたしは、包帯を巻いている自分の掌を握りしめた。

「あたしの右手の傷、無くなっている・・・！」

「そりゃヒトミのおかげだよ」

「・・・でも、他の人達は・・・」

「効く人効かない人、様々だって言っただけ？ でも真琴には効くよ。これからもね。だから薫じゃ手に負えなくなつた時、ヒトミにお願

いしようと思っただんだ、私は『

『・・・イトの先生とあたしにだけ効いた、なんて、なんかビミ

ヨー』

『・・・』

『獅子鷲の件もあるし・・・』

「帯は？ 最近のリボンっぽい結び方、する？」

後ろから言われて、あたしは目を丸くした。

「それもお寺で身につけたんですか？」

「妹にねだられて、ね」

彼はクスクス笑いながら、帯を仕上げた。

「じつち向いて」

そう言っただあたしの肩を抱き、ゆっくりと前を向かせる。

優しい瞳が細くなり、愛おしそうに見つめられた。

「似合ってる。すごく、可愛い。・・・すごく、いいね」

そう言いながらあたしの首筋に両手を這わせてくる。ドキッとした。

彼はそのまま、あたしの後ろ髪を上を持ち上げた。手が、後頭部とうなじに当たる。

彼は微笑みながら、耳に染みいる心地よい声で言った。

「髪はこんな感じだろ？ アップにするモノ、もってんの？」

「え？ あ、はい、一応・・・」

「そっか」

そう言っつて、あたしを見つめ続ける。

どうしよう。やめて欲しい。忘れていた感覚が復活しそう。

「ちょっと待ってて」

そういうと彼はにこっと笑って、部屋を出て行ってしまった。

取り残されたあたしは、胸の鼓動を抑えつつも、かなりホツとした。

なのに。

「・・・何なの？」

「まこちゃんの髪。上げてやってくれよ。智哉、こーゆーの得意だろ？」

ラフなズボンにシャツを羽織っただけでボタンすら止めていない、乱れた前髪が額にかかって無駄に色っぽい水島智哉が、あたしの部

屋の入口にもたれかかって、とつても不機嫌に腕を組んでいる。
あり得ない、結局彼を連れてきたのっ？ パソコンを避けた意味
が無いじゃんっ。

「・・・お楽しみ中の所を狩りだされて、なんで僕が人のデートの
支度を手伝わなくちゃいけないんだよ」

「いいだろ、ちょっとくらい。少し休憩しろよ」

「ガツガツしたい気分なの。たまには肉喰うんだよ、僕だって」

水島さんは少し唇を尖らせてよっちゃんを睨む。

睨まれたよっちゃんは楽しそうに笑うと、「まあまあ、こんなに
可愛いんだから」と言いながら、あたしを鏡の前に座らせた。

水島さんは諦めた様に頭をガシガシとかくと、あたしの後ろに
立つ。

そして明らかに見下ろした態度で（実際、見下ろしてるんだけど）
あたしに手を出した。

「ピンとゴム。ちよーだい」

「あ、はい」

「智哉は上手いんだ。たまに俺んちに駆り出されて、手伝ってるん
だぜ」

「・・・はあ」

「そっぴやさっき、病院から連絡あったよ」

手際良く髪をまとめながら、水島さんが言う。

「あの先生、目を覚ましたって」

「ほんとっ?!」

「動くな」

低い声で脅されて、グイっと頭を前に向かされた。痛いってば。彼は滑らかに手を動かしながら話を続ける。どんな特技なのよ、これ。凄すぎる。

「ただね。頭が全然働いていないらしいよ。自分が何者かもそこが何処なのかも、誰が何かもさっぱりだって」

「・・・そんな」

「養生するとしても、夏休み明けに教職復帰は難しいかもね」
「・・・」

言葉が、出なかった。

シヨックで頭が働かない。

ふいに、加藤先生の笑顔が思い浮かんだ。そう言えばあの先生は、いつも笑っていた。

先生が、先生じゃなくなっちゃった。

もう、あの先生には会えないかも。

ミイラ姿を見たときよりも、今の方がリアルにシヨックなのって、
どういう事だろう？

「思いださないといいな」

よつちゃんが低い声で、ボソツと言った。

「え？」

「彼は、イットである自分を消したかったんだろ？ だったら思いださないといいな。その方があの彼女も安心するんじゃないか？ ・やり直しも、きくだらう」

「・・・」

「文字通り、全てをリセット、か。羨ましいもんだ」

皮肉っぽい言い方。あたしは押し黙るしかなかった。水島さんは何も言わなかった。

「出来た」

急に言われて、いつの間にか俯いていたあたしは鏡を見た。

そこには、髪を一つにまとめて左耳の上に可愛く止めているあたしがいる。

無言で手鏡を渡されて後ろを写すと、そこは無造作に見えてとても素敵にまとまっていた。

「・・・うわぁ」

「あとは適当に自分で飾ってよ。それじゃ、僕、戻っていい？ 彼女達待たせちゃってるんで」

「盛ってんなあ」

「よっちゃんに言われたくないよ。女切らした事、無いくせに」

「俺はいっぺんに二本以上の煙草は吸わない」

「トータルでは、あんたの方がヘビースモーカー」

乙女な気分で鏡を覗いているあたしの後ろで、乙女なあたしにふさわしくない会話が繰り返されている。

「彼女を可愛くしちゃってどうすんの？ そんなに今の彼とくっつけたい訳？」

「・・・どういう意味だ？」

「寂しい元彼を慰めようって魂胆？」

「・・・なっ・・・」

ああ、よっちゃんが遊ばれちゃってる。悪魔な幼馴染に。

「ちえっ。義希が男にはしるなら絶対僕だと思ってたのに」

「・・・おつまえ、ふざけんなっ」

「真面目真面目。慰めてあげるから、寂しくなったらいつでもおいで？ なんなら今から参加する？」

「俺にはそっいう趣味はねえんだよ。一人で戻れっ」

工口悪魔は意地悪そうな笑みを浮かべて、消えて行った。

それを見送ったよっちゃんは、呆れた様に呟いた。

「・・・あいつ、拗ねてんなあ」

「・・・よっちゃんのせいぞろい？」

「？　なんで俺のせい？」

「・・・なんとなく・・・」

「まごちゃんがデートするから、拗ねてんだろ」

「・・・そうかなあ」

「そうだよ。あいつの表現方法、屈折してっから。こっち向いてっ
覧？」

よっちゃんの手があたしの顎に伸び、そつと彼の方を向かせた。

煌めく瞳に覗きこまれて、再びドキツとする。この人、本当に人との距離が近すぎる。問題だわ。

「ちよつとだけ、メイクしてあげる」

「えっ？」

「コレは俺の軽い特技。バイト先でね、メイクさんの女の子と付き合った事があった」

「・・・はあ」

この類の話には、もう何を聞いても驚くまい。

彼はアイライナーを手に、微笑んだ。魅惑的な笑顔。

「目、閉じてご覧」

・・・ちよつと、異様なシチュエーションだと思う。だけど逆らえなくて、瞳を閉じた。

どこことなく、香取に後ろめたさを感じる。これをあの子が見たら、どうなるだろう？

でも、よつちゃんはあたしが対象外だし。あたしも、今会いたいのは香取だし。

けれどもドキドキする。彼の手が、あたしの目蓋や頬の上を、繊細に、滑らかに滑ってゆく。

彼の吐息が、頬にかかる。それをあたしが吸う。

「口、軽く開けて」

心地よい声で囁かれて、あたしは薄く唇を開けた。

彼の手が再び動くのに、しばらく間があった。何をしているのだろう、と思うと、余計にドキドキする。

やがて、あたしの唇に、そつとリップが塗られた。潤いがあり滑らかで、これはあたしが普段使っているグロスなんだろう、と思う。

はみ出てしまったらしい所を、彼の親指が拭い取った。

そのままの体勢で、頬と口元に手が添えられたまま、再び動きが止まる。

あたしは、じっと待った。

「……よっちゃん？」

いくらなんでも間が開きすぎているので、そっと目を開いた。

「あ、ごめん」

彼は慌てた様に手を引っ込めた。

「可愛いよ、マジで。ちょっとヤバいくらい」

そう言って笑うのだけれど、彼の瞳が、僅かに戸惑っている。唇を、少しきつく結んでいる。

「キスする時の顔」

「え？」

「今の。キスする時の顔だったでしょ？ そそられました？」

あたしは彼の目を見つめたまま、悪戯っぽく、だけど挑発するよつに言ってみた。

よっちゃんは一瞬目を見開き、それからすうっと真顔になった。

「・・・俺の事誘惑して、どーすんの？」

「二」の間のお返し」

ニヤツと笑ってみせる。散々振り回されましたからね。これくらいやり返さないと。

あたしは余裕たっぷり、彼の額を人差し指で突いた。

「惚れっばいお兄さん。ヒトミを落とすのは難しいですよ？ それともやっぱりあたしがいい？」

「・・・君へのご奉仕の、お礼がこれ？」

よっちゃんが困ったように苦笑する。何言ってるの、まだまだ仕返し足りないくらいよ？

「お陰で彼氏とデートが出来ます。惚れ直させに、行ってきまーす」

あたしが明るく手を振ると、彼は腕を組んで、満足そうに笑った。

「行っておいで。しっかり惚れさせて来い」

Stay by my side

待ち合わせの場所に着いたら、香取は既に来ていた。

カジュアルなスタイルにアクセサリを合わせて、それが凄くサマになる。最近伸びた前髪が一筋程、長い睫毛に触れていて色っぽい。一瞬見とれたら、向こうもこっちをガン見している事に気付いた。

お互い、至近距離でにらめっこ。

「・・・香取、透視でもしてるの？」

「いや、ああ・・・」

香取は眉間に皺を寄せて、片手を顎に持って来て、感慨深く言った。

「すんげえズン胴だなあ、って思って・・・ついて!!」

「『馬子にも衣装』って言葉、知らないのっ？」

「それ、褒め言葉かよ？」

「あんたの台詞よりはマシよっ」

頭をさする香取を尻目に、あたしはブンつと横を向く。着物はね、ズン胴になる様に着るものなのよ。その方が綺麗なの。だから腰にもタオルを巻くんですよ。でも確かに、自分で馬子にも衣装は自虐過ぎる。

そしてそのまま膨れて言った。

「あーあ。よっちゃんはメツチャ褒めてくれたのになあ」

本命に褒められなくちゃ、意味が無い。

何だか拗ねたくなってくる。明日にはお別れしちゃうのに。だから頑張ったのに。

「・・・あいつ、いたの？」

「だってこの浴衣、よっちゃんが着せてくれたんだもん。メイクだって彼。髪はなんと水島さん。イケメンが寄ってたかって・・・何？」

香取が乱暴に、あたしの手首を掴んで引き寄せた。

睫毛の長い眼が、吊り上がっている。ギクツとなった。

「宮地、あいつらにそんな事頼んだのか？」

「たっ、頼んだっていうか、よっちゃんが『やってあげる』って言うって・・・」

「裸見せたのかよ？ 顔、触らせたのか？」

「ええー？」

更にグイッと引き寄せられたので、あたしは彼の尖った光の瞳を、まともに覗きこむ羽目になってしまった。

綺麗なんだけどやっぱり恐くて、慌てて目を反らした。

「はっ裸なんて見せてないよっ。・・・顔は、まあ・・・」

よっちゃんの手の温もりを思い出す。彼の動揺した瞳と、自分のした挑発を思い出す。

一気に後ろめたい気分になった。

香取は僅かに俯き、小さく舌打ちをした。

「・・・あいつら、ぜってえ締め上げる・・・」

言うなりあたしは顎を掴まれ、強引に彼の方を向かされた。

「何っ？」

荒々しい動作に思わず身を固くする。彼はポケットからハンカチを取り出し、それであたしの唇を「ごしごし」と擦り始めた。

眉間に皺が、寄っている。

口が、への字に曲がっている。

・・・これは、拗ねている。

「よその男が塗ったりリップに、彼氏がキスできると思っつ？ あいつはソレ狙ってたんだぜ」

「え？ 嘘？ あ、取っっちゃってるの？」

「当り前だろ。寝ぼけんなよ」

「・・・香取、怒ってる・・・？」

後ろめたい気分を引きずって恐る恐る聞くと、香取は半眼であたしを見下ろしてきた。

「へえ、それは分かるんだ？ よかった。じゃ、俺が今、どうするか分かる？」

冷えた言い方。無条件に、ぞくつとなる。

本気で怒らせた？ と思って焦りと少しの恐怖に襲われた時、乱暴に上を向かされた。

「香取っ・・・んっ・・・」

いきなり彼の唇が覆いかぶさってきた。

ここは駅前。所謂待ち合わせスポットで、公衆の面前。

そこで彼は、あたしの唇全体を覆う様に食^はみ、その中に隠れている舌で舐め上げた。

ざらつく舌を唇に感じ、さっきとは違う感覚で背筋が粟立つ。

彼は角度を変え、何度もあたしの唇を舐めつくした。彼の唇は、まるであたしに息をする事を許さない様に離れない。

甘い感覚が首筋を伝い、肩が小さく震えた。

やっと口づけが終わった時、彼の黒い瞳が、煌めきながらあたしを覗き込んでいた。

真顔で言う。

「消毒」

あたしは真っ赤になった。自分の唇は、彼の唾液で濡れている。恥ずかしいくらい、赤く濡れている。塗ったリップなんて、既にな

い。
羞恥心が一気に襲ってきて、彼の胸を突き飛ばした。だってこの駅って、学校の近くだよ？ 誰か知り合いに見られたらどーするのよっ。実際、周りの視線を痛いほど感じるもの。ああ、みんながこちちを見ている気がするっ。

「ひ、人前だよ・・・っ」

「関係無いね。自業自得だろ」

香取は冷たくそう言うつと、まるであたしを煽る様に、更に顔を近づけた。

そして、低く掠れた声で囁いた。

「文句があるなら聞いてやるけど」

彼の怒りと色気の両方を同時に感じてしまい、あたしは息を止めてしまった。

そんなあたしを見つめた香取は、しばらくしてふっと力を抜いた。あたしから顔を離し、一瞬苦笑した。

「……嘘だよ。宮地のせいじゃない。怒ってるのは本当だけど。あいつらに……っより、コントロールが効かなくて、情けない自分自身に」

そう言っであたしを見つめる。真摯な黒色の光が、真っ直ぐにあたしを射抜いた。

「似合い過ぎる。すげえ可愛いよ。それをあいつがやったかと思うと、マジムカつく」

……こ、こんなに真剣に言われると、逃げ場が無い……。

「……言っでて恥ずかしくない?」

「そう? これくらいフツーだと思うけど」

「……その顔だから許されるんだよ……」

「何?」

「何でも無い」

この台詞を、見た目の宜しくない男の子に言われたら、寒いよなあ……。自分の彼氏とは言え、容姿のいい男は得するものなのね……。

とにかく香取のご機嫌も治った事だし、あたしは複雑な溜息をそつとついた。

香取は悪戯を叱られた悪ガキの様に、少ししょぼくれてちょっぴり拗ねながら言った。

「リップ、取っちまって、ごめん」

「大丈夫だよ。持って来てるし」

「本当？ じゃあ、俺にやらせて」

「はい？」

「本当はその浴衣も脱がせたいけど、着せられないから次回に取ったく。絶対、習得してやる」

意欲に満ちた顔で、キリッと言う。

お互いに告白し合ってから、この子は随分素直になった。

素直に・・・嫉妬心を見せて、甘えてくる。普段の彼と、ギャツプありすぎ。

あたしは感心して言った。

「・・・張り合うなあ」

「違うよ。脱がせたいのは、そういう意味じゃない」

ニヤツと笑いながら、「リップ頂戴」と言うので、持ってきたグロスを渡す。

彼に顎を摘まれたのであたしは素直に顔を上げ、少し唇を開いて、

何となく目を閉じた。

「……コレ、やったのかよ。ホント、ムカつくな」

不機嫌な声と共に、あたしの唇には再びグロスが塗られる。丁寧に、優しくそつと。

塗り終わって、あたしは目蓋を開いた。

彼はあたしの真正面に立ち、見下ろしながら不敵に微笑んだ。

「来年は、俺が着せて俺が脱がせるから。他の奴には触らせんなよ？」

「……来年……？」

来年が、あるんだ？

「そ。この唇も、絶対、他の男に触らせんな？」

愛おしそうに、親指が唇の端を撫でる。

彼の眼は少年の眼だけど、瞳の色は大人の男の色をしている。だからそのギャップに、再びドキッとした。

「……来年も、一緒に行けるの？ 夏祭り……」

「……多分ね」

「多分？」

眉間に皺が寄って、彼を見上げてしまった。
香取は得意そうにあたしを見下ろして、言った。

「俺、転校、やめたから。秋には日本に戻って、この高校卒業する」

・・・え？

あたしは大きく目を見開き、口も開き、息が止まった。

転校、しないの？

「・・・うそ・・・」

「ほんと」

「・・・な、んで・・・？」

「んー、色々と、ね。一番の理由は、俺の激しい反抗期かな。生まれて今までで最高、親父に反抗したからさ。代わりに色々と交換条件、飲まされたけど」

「すげえだろ」と言いながら彼は、驚きのあまり立ちつくしているあたしの両肩に腕を寄せ、ニッコリと笑って小首を傾げた。

「嬉しい？」

初めて見るかもしれない。香取の、あどけない笑顔。

「・・・香取・・・」

あたしは、声が震えてしまった。
次の瞬間、思いつき彼に抱きついた。

「可愛いつ」

「・・・は？」

「どーしようっ、滅茶苦茶可愛いつ」

そう言つて胸元に額をグリグリ押しつける。

香取は呆気にとられた様に両腕を空中に浮かせ、あたしに抱かれるがまま立ちつくした。

「・・・俺は嬉しいかって聞いたんだけど・・・」

いきなり転校するって言ったり、やっぱりやめるって言ったり、
なんだか彼のお家の事情が絡んで見るみたいで複雑そうで、あたし
にはさっぱり分からないけど、

そもそもここに留まるのだから、あたしの為かどうかも分からな
いけれど、

滅茶苦茶嬉しいよ、決まってるじゃないっ。

あたしは思いつきり力を込めて、彼を抱きしめ続けた。

しがみついたあたしに呆れたのか、頭上で彼がクスツと笑った。

嬉しくって嬉しくって、天にも昇る気持ちできつとこういう事を言うんだ。

好きな人がいて、その人も自分を好きと言ってくれて、これから先も一緒に居られるなんて、なんて素敵な奇跡なのだろう。

彼以外は考えられない、と思える相手に出会えて、その人の一番になれて、ずっと傍にいられるなんて、なんて幸せなんだろう。

「……ぐふふふ」

「……気味の悪い喜び方をするな……」

香取が引いた様な声を出した。

残念な事に、ここで嬉しさのあまり涙が出る様な可愛い乙女ではないのよ、あたしは。ああ、ウキウキと心が躍り力がみなぎり、抑えようと思っても抑えられないこの笑い。まるで何かを企んでいる悪徳業者の様な笑顔になってしまうのは、性格のせいかしら？

あたしはガバツと顔を上げると、勢いよく彼に言った。

「よーし！ 今日はお祝いに食べまくるぞーっ。わたあめに焼きイカっ。でもね、一番の好物はフランクフルトなの。食べたいっ」

「フランクフルト？ 却下」

「……はあっ？ なんでっ？」

「俺が寝れなくなる」

綺麗な顔で、真顔で言われた。

あたしはキョトン、とした。

「・・・？ じゃあ焼きりんじ」

「却下」

「なんでよっ！」

「目の毒」

「毒う？ 着色料が悪いとか言わないでよ？ あ、じゃあチョコバナナ。あれにするからねっ」

「無理だっ」

いきなり香取が吠えた。

そしてうんざりした様な表情で、あたしを自分の胸からべりっと剥がした。

「おーまーえーはーっ。どーしてそう、エロいものばかり食べたがるんだっ」

「・・・は・・・？」

「焼きそばとかタコ焼きとか無難な物を口にして、射的でもやっつろっ」

顔を僅かに赤くして、あたしに向かって開き直ったように喚いている。

あたしはさっぱりついていけなかった。え？ この人、日本語喋ってる？

「エロいって何が？ フランクフルトと焼きリンゴとチョコバナナ

のどろがエロいの？ 全然分からない。香取って変態？」

「そうだ、俺は変態だ。あいつに釘刺されて我慢してんだから、少しはこっちの事情も理解しろ」

あいつ？ 釘を刺す？ 事情？

「……全く分からない……」

ポカンとして、彼をマジマジと見つめてしまった。

よくわからないけど彼はやっぱり16歳男児で、なんだか色々と事情があるらしい。

少し恥ずかしそうに、しばらく膨れてそっぽを向いていた香取は、不意にあたしに視線を戻した。

すごく優しく見つめてくる。

そして幸せそうに微笑み、あたしの右手を握りしめて、言った。

「行こうぜ」

あたしはやはり、満面の笑みで彼を見上げて、小さく頷いた。

うん。行こうか。

これから。どこへでも。

一緒に。だよな？

お楽しみは、これからだっ (前書き)

第三者視点です。

お楽しみは、これからだっ

「結局今日、帰っちゃうんだ」

真琴は膝を抱えながら、携帯電話を耳にあて、ベッドの上に座っていた。実家の自分の部屋は、そのままになっている。けれども埃も無く綺麗で、母親が彼女の帰りをいつでも待っている事が、無言で伝わってくる。

でも彼女は思う。あたしがこの部屋で暮らす事って、多分もう無いんだろう。

「・・・香取のやる事って、一体何？」

無意識に足の指をいじりながら、ふと床に置いてある浴衣に目をやった。昨日は実家に浴衣を置きたくて、その為に帰ってきた。そのまま、居心地良くつい泊ってしまった、今に至る。けれどもあの屋敷には勉強道具一式があり、受験生に夏休みは無い。丸一日勉強をサボってしまい、焦っていない自分に焦ってしまう。今日は水島屋敷に帰らなきゃ。

「・・・はるなちゃんがちょこつと言ってた。会社を継ぐ、とか言うヤツ？・・・ふーん？ 庶民には分からない話ね。・・・わあ、面白い」

面白い、と言った割には少し脹れっ面をした。

「香取って卒業したらどうするの？ 大学は？」

声のトーンが下がり、伏し目がちになる。勝気そうな大きな瞳に、睫毛が影を落とした。

「……一緒には進学しないんだ」

自分でも甘えているな、と思ってしまう。電話だからつい、面と向かっては恥ずかしくて言えない台詞や態度を、取ってしまった。こっちの気配を察知した相手が、彼らしい軽口を叩いてくる。真琴も僅かに口角を上げて、それに応戦した。甘い言葉も、切ない台詞も、きつい舌戦も、彼が相手だからこの上無く楽しい。それは分かっている。だから、早く帰ってきて欲しい。

「うん。気をつけてね。……エリザベス女王の似顔絵入りのパンツとか？ ……冗談だつてば。そこまで絶句しないでよ」

クスクスと真琴は微笑んだ。電話の向こうでの、呆れた顔が目に浮かぶようだ。

ところが相手は、あっさりと電話を切ろうとした。余韻の無い会話の終わらせ方に不意打ちを食らった真琴は、一瞬焦ってしまい、咄嗟に本音が口をついて出た。

「ね。・・・本当に帰って来るよね」

言ってしまったから益々切なくなり、見えない彼の胸にしがみつきたくなってしまった。こんな乙女な自分、我ながら恥ずかしい。だけどそれでも構わない。一日でも早く帰ってきて欲しい。2か月なんて長すぎる。

会えなくなってもしょうがない、なんて彼に発破をかけていた自分が、遠い昔に思えてくる。

彼が、電話口でくぐもった声を出した。含み笑いをしながら、何かを言ったらしい。

「え？ 香取？」

聞き返した時には、あっさりと別れの言葉を言われて電話が切られた。

「・・・切れちゃった」

呆然と、携帯電話を見つめる。こんなにサツサと切られるとは思ってもみなかったのだ。だってここ数日の彼は、真琴がビクリするほどベタベタと、彼女から離れなかったのだから。正直、一人で

飛行機に乗る気があるのかと疑ってしまったほどののに。

「なんて愛想の無いヤツ」

唇を突き出して、聞こえない相手に文句を言う。

そうしてしばらく画面を睨みつけていたが、不意にある事を思い出し、眉根を寄せた。

考えた末、考えてもしょうがない、とばかりにメモリーを開いて、友人の電話番号を捜す。真琴の頭の中には既に、電話を切った彼の事は半分以上消えかかっていた。

バタバタと階段を駆け降りる音がして、由美は炊事の手を止めた。廊下を覗くと、真琴は座りこんで靴を履いている。先程見かけた服装とは違っている。遠出をする気だ。

由美はにっこりと微笑んだ。

「まこちゃん、早いわね。もう、あちらに戻るの？」

「うん。その前にちよっと、唯と会ってくる」

「そう。唯ちゃんは元気かしら？」

「元気・・・とは流石に言えないけど、でも大丈夫だよ、きっと」

そう言っつて真琴は顔を上げると、後ろで立っている由美を見上げた。

「あの子、すごくいい子で、他人に対する思いやりとか気遣いとかはバツチりあるけど、なんて言うのかな・・・開き直る事の出来る子だから」

真琴は苦笑して見せるが、その目には、友人に対する信頼の色が見てとれる。彼女は軽く肩を竦めた。

「今、すごくいい感じで開き直ってる。だから、大丈夫だと思う」

「そう。それはいいわね。じゃあ、行ってらっしゃい」

「はい。行ってきまーす」

十代の輝きを連れて、真琴は玄関を出て行く。由美はそんな娘を眩しく見送った。

後ろに母親の気配を感じ、玄関を見つめたまま、彼女は言った。

「・・・あの子が本当に、あんな大役を背負っていくのかと思うと心配ね」

「・・・まだ、そうと決まった訳ではないけど・・・」

恵美子の口調は穏やかだ。真琴に対する芝居がかった話し方とは全然違う。それが母なりの、あの子に対するプレッシャーの与え方なのだ、と由美は知っている。同時に、恵美子自身の不安を隠すた

めのハツタリでもあるのだ、とも知っている。

「そうなんですよ？」

由美が真顔で振り向き母親を見つめると、恵美子は苦笑した。

「……まあ、ほぼ、そうだろうね」

「本当、心配だわ」

「だからそうとは言わずに、しばらく様子を見るんだよ。今から告げたら、プレッシャーで潰されかねないだろう？」

「……私が心配しているのは、真琴じゃなくて、世界の方」

片手を頬にあて悩ましげに首を振る娘に、恵美子は軽く絶句した。
由美は、さも不幸な様に仰々しく溜息をつく。

「あんな子に未来を託されるなんて、私達もあちらの方々も、運が悪いわね。大丈夫かしら？」

「……」

「私達は何があってもあの子を守るけど、後の事までは考えてられないものねえ」

「……まあ、そこらへんは、誰かがバランスを取るさね」

「あら。それもそうね」

そう言うてにっこりと笑う由美に、恵美子は呆れつつも内心舌を巻いた。

「・・・由美は本当に、余計な事を考えないというか、あっさりしてるねえ」

「そりゃあお母さんの娘で、真琴の母親ですもの」

彼女の悠然とした微笑みに、つられて恵美子も微笑む。お互い見つめ合い、開き直りと覚悟、両方を見て取った。

つまり、いつの世も、母は強し、である。

「寝ますかね、ふっ」

ヒトミは、広場にある腰の高さより僅かに低いポールに腰かけ、長い脚を投げ出した。パンツをはき、胸の開いたノースリーブを何枚か重ね着して、アクセサリーもいくつか付けているが、全体としてギリギリ、まだ男。よくいる、華奢な美男どまり。

空を仰いで軽く溜息をつくと、ぬるくなりかかって結露しているカフェモカのストローを啜えた。

その隣に薫が慌てて座り、彼女を覗き込むようにして弁解を始めた。

「最初は俺だって聴いてたんだ。すげーよかつたし感動したぞ？
だけどうしてクラシックっつーのは、あんなに長いんだ」

ヒトミより頭一つ分高い長身を丸め、落ち着かなく腰掛ける姿は傍から見ても、出来の悪いご機嫌取り。いつものキツイつり目も、その威力を発揮していない。

ヒトミはそんな彼を見もせず、コーヒーをすすった。

「気持ち良く満喫してましたね。睡眠を」

「あの椅子だつて悪いんだぞ？ あんな寝心地のいい椅子を提供したら、誰だつて寝るだろう、つか結構寝てるヤツいたぜ？」

「だから素人と一緒には行きたくないんだ。私の母親が出てくるんですよ？ 薫、思いつきり面が割れてるじゃないですか。無礼もそこまでくると立派な度胸だ、あっぱれ」

「んな怒んなよ。悪かつたつて」

「怒ってませんよ。感心しているんです」

「怒ってんじゃないか」

どつちが年上だか分からない台詞を吐かれ、ヒトミは再び溜息をついた。

そして、既に膨れかかっている隣の男を眺める。この脹れっ面、妹とそっくりじゃないか。あ、この場合、妹が兄貴にそっくりなのか。

「薫のおかげなんだから、怒る訳ないでしょう。一人じゃ絶対来ないし、他に付き合ってくれる人もいないし」

「おー。俺は消去法でノミネートか。充分充分。お前が向き合う決心が出来たんだつたら、残り物、万歳だ」

開き直りとも嫌味とも、或いは思いやりとも取れる台詞を言うと、薫は正面を向き、ニヤツと笑った。

その横顔を、ヒトミは無言で眺める。彼は、妹の面倒を見る事に徹してきた。宮地家も自分と同じで、女性にその能力が受け継がれる。能力の無い薫は、常に宮地家の縁の下だった。

自分とは真逆の立場だけど。彼はそれで、良かったんだろうか？

自分は、逃げたかった。

「……女だから。家系だから。当り前の事として期待されると、ね。やれと言われると、やりたくなくなるんです」

ヒトミが俯きクスツと笑うと、頭上から静かな声が聞こえた。

「……自分を、見て貰いたかったんだろ？ 東田ヒトミとして」

緩やかに顔を上げ、彼を見つめる。彼は真顔で彼女を見つめていた。

その台詞はひよつとしたら彼女に向けてではなく、彼自身の事を言ったのかもしれない。ヒトミはそう思った。

「そうだね。女である事を否定して、歌を否定したら、私に何が残るかなって。そしたら親は、こんな私にどこまで付き合えるのかな、って」

他にも色々考える事はあり、様々な要素が絡み合っているけど、シンプルに言えばつまり、こういう事なのだろう。彼女は自嘲気味に笑った。

「とんだ駄々っ子で。親も苦労しますよね」

「でもヒトミ、歌が好きなんだろ？俺も好きだぜ」

ふっと影が落ちる。

ヒトミが何気なく顔を上げたら、唇にその影が降ってきた。

彼はただ唇を重ね、最後に少し、それとは分からない程、軽く啄ばんだ。

ゆっくりと離れ、目を見開いている彼女を見ると、口角を上げた。

「素人、舐めんなよ？」

「……」

断りも無くこういう事をするとは、薰らしいし、薰らしくない。それでもこの不敵な微笑みは、自分の事を分かっているっていう、自信からくるんだろうか？ヒトミは彼をマジマジと観察した。

「いや、舐めてんのはむしろそっち」

「上手い！一枚！」

「・・・(オヤジくさ)・・・」

軽くクラッとくる。この独特のマイペースさ、兄妹に共通するよ。

周囲がこの二人を見て、明るい太陽の元、堂々と男の子同士がキスしていちゃついている、と盛り上がっている事は、もちろん当人達は確信的に無視している事である。

「出来るだけ早く、やる事やつちまいたいんだよ」

礼は空港内の椅子に座り、携帯電話を耳にあて、気だるく足を組み直した。

「あれもこれも？ 詰め込まれ最中なんだ。俺んち家族の跡取り、って色々厄介でさ。これでも頑張ってたんだ」

ゆっくりと煙草をふかす。彼女と出会って以来、少なくとも学校では煙草を吸う事を控えてきた。よからぬ事で大人から目をつけられて、それで彼女までとばっちりを食う事を避けたかったのだ。そうになると、色々と面倒だったから。

「会社なんて継げねーよ。んな事やってたら潰れるぜ。そんなんじゃない、損をしたくないんだよ」

久しぶりの煙草は上手い。正直、吸っていない時期は夢にまで出てきた。禁断症状って言うのはこういう事を言うんだろうな、クスリなんかには手は出せねえな、と思ったものだ。

「お前が庶民なら、世界中の人間がみんな空中を飛んでるな。．．．拗ねるなよ。なるべく早く帰ってくるから。10月に入る迄にはきつと戻れると思う」

電話の向こうの彼女はいつになく素直だ。目の前にいないから、意地を張らなくて済むのだろう。

「しばらくプー。羽を伸ばすよ。．．．．．年下だからね。宮地が二浪ぐらいするなら話は別だけど?．．．じゃ、俺の明晰な頭脳で追い付いてやるよ」

クスクスと笑いながら答える。自分がこんな甘い台詞を吐けるなんて、思ってもいなかった。

優しい言葉に女の子に様な顔、だけど礼の目つきは、まるで刃物の様に光っている。スレた表情で、彼は頭の片隅で感じていた。

彼女とは逆に、電話で話すと、俺は冷静になっていく。

「じゃあな。向こうに着いたら電話するから。．．ああ。土産に何

が欲しいか、調べとけよ」

すると電話の向こうでとんでもない返事が返ってきた。返答の仕様が無く、溜息すらつくのが勿体無い。煙草の灰まで落としそうになる。

「時間が無い。切るぞ」

生ぬるい目つきでそう言つと、彼女が珍しく、縋りついてきた。正確には、縋りつく一歩手前の声を出してきた。

今まで冷めていた彼の心に、急に鮮やかに、彼女の笑顔が蘇ってきた。

「・・・予定外だけど」

灰が床に落ちるのも気付かず、彼は柔らかに笑った。

「結構幸せかも」

本当に、予定外だった。相手も、自分の気持ちも。本音を言えば、このまま彼女を繋ぎとめておきたい。

ああ、俺って幸せなんだ。

「じゃな。また10月に」

電話を切つて、煙草を灰皿に潰しながら思った。

彼女は人情があるので友人としては最高だが、遠距離恋愛には向かないらしい。本人は気付いていないだろうが、2ヶ月はギリギリの限度だろう。何とかそれまでに、カタをつけたいところだな。

携帯に視線を落とすと、再び電話をかけた。

「ああ、俺。今から乗るんだけど。．．あつたよ、彼女の所に。戻つて来ていた。．．ああ。祖母がゴソゴソやってたけど、間違いないな。あの時だ。彼女のポケットから抜いていた。きっとそこにあつたんだ。予想通りだ」

今度の会話は、煙草片手に、といった姿勢では無い。

椅子に浅く腰かけ、膝に肘を乗せ、考え深げに言った。

「．．．彼女は、あの女とやり合っている時に、何度か我を忘れていた。その時にアレを呼び寄せて、なおかつ支配されかかっていたんだと思う。そういう目を、していた」

長い睫毛の瞳を、キュツと細める。

そこには先程の様な気だるさも、甘さも無かった。無機質なまで

の、硬質な瞳と雰囲気をもっている。

「さあ。そこまで彼女は知らされていないからな、まだ。……勿論、そのつもり。残りは何処にあるのか分かったのか? ……分かってるよ。じゃあ、そっちに着いた時に」

携帯を畳むと、しばらくそれを眺めた。

それから足元のポストンバックを手に取ると、礼は搭乗ゲートに向かつて行った。

おまけ。

リビングの机に突っ伏す義希と、向かいのソファで雑誌をめくっている智哉。

智哉は先ほどから義希がウザくて堪らず、イラついている。

「……(帰って来なかった……)」

「結局さ、よっちゃんはどうしたい訳?」

「……分からない……俺ってどうしたいの?」

「(バカだ) あんたは人との距離が近すぎんだよ。近すぎて、自分でもこんがらかってきてんじゃない? そういうのって絶対幸せに

なれないよ?」

「うおーっ! 幸せになりてえっ!」

「それ、毎回言うよね。不幸だよねえ、幸せ求めて、自ら色々泥沼作っちゃうんだから。見た目の可愛さだけじゃなくてさ、例えば、命かけてもいい女とか、人生捧げちゃってもいい女とか、そういう出会いや見方は出来ないの?」

「俺、惚れた女の子はみんな、命も人生も捧げちゃっていいと思っ
てんもん、毎回」

「(バカだ・・・そして不幸だ・・・)」

e n d

お楽しみは、これからだっ（後書き）

やっと終わりました。

こんなに長い話をお付き合い頂き、本当にありがとうございます。

このお話では、作者が色々と実験的な事をやってみました。凄く楽しかったですし、勉強になりました。

沢山の方々に読んでいただき、大変感謝しております。

ちよつとスッキリしない終わり方ですが、最後は礼クンのこのシーンで締めたかったです。（おまけは省く）

真琴達のお話はまだまだ先がありますが、機会があれば続きを書いてみたいと思います。

次回は、少しお休みを頂いて、中編を書いてみます。

皆さま、お暇な時に是非、遊びに来て下さい。

このお話が、皆さまのお暇つぶしに役立った事を願っております。

戸理 葵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151r/>

サイなあたし達

2011年7月1日01時40分発行